

令和 2 年 博士学位申請論文

上級日本語学習者の理解困難点に見られる
テキスト解釈過程の研究

一橋大学大学院
言語社会研究科

LD172004

藤原未雪

令和 2 年(2020 年)2 月

目次

第一部 概要と調査方法	8
第1章 序論	8
1.1. はじめに	8
1.2. 本研究で扱う課題	11
1.3. 論文の構成	14
第2章 文章理解	15
2.1. 先行研究に見る文章理解の考え方	15
2.1.1. 文章と文章論, 文章理解	15
2.1.2. テキスト言語学	17
2.1.3. 文章理解と表象	18
2.1.4. Kintsch の構築統合モデル	19
2.2. 本論文における文章理解の考え方	23
2.2.1. ミクロな理解	23
2.2.2. 本論文でミクロな理解を扱う意義	24
2.3. 読解における第二言語学習者の特徴	26
2.3.1. 認知資源の配分の難しさ	26
2.3.2. 単語認知処理	27
2.3.3. 習得研究からみた母語別の特徴	28
2.3.4. 母語転移と対照研究	33
第3章 語義の解釈と誤読に関する先行研究	36
3.1. 語義の解釈に関する先行研究	36
3.2. 文法の把握に関する先行研究	39
3.3. 誤読に関する先行研究	39
3.3.1. 母語話者の誤読に関する先行研究	39
3.3.2. 第二言語学習者の誤読に関する先行研究	41
3.4. 先行研究と本論文とのちがい	43
第4章 テクストのジャンル特性	45
4.1. 読みに影響する要因としてのジャンルの位置づけ	45
4.2. 説明文と物語文の違い	46
4.3. 小説と物語の違い	47
4.4. 視点	49

4.5.	学術論文と小説のテキスト特性	50
4.6.	小説の解釈	51
4.7.	解釈の多様性と正しい読みの関係	53
第5章	本研究で重要となる用語の定義	59
5.1.	文章理解	59
5.2.	ミクロな理解	59
5.3.	テキスト理解を決定する要因	59
5.4.	「正しい解釈」と「誤読」	60
5.5.	「解釈」と「理解」という用語の使い分け	60
第6章	研究方法	62
6.1.	発話思考法の理論的枠組み	62
6.1.1.	はじめに	62
6.1.2.	読解研究の上での利点	62
6.1.3.	発話プロトコルの収集方法	63
6.1.4.	発話プロトコル分析	64
6.1.5.	第二言語の読解研究におけるプロトコル分析	64
6.1.6.	注意点と活用方法	66
6.2.	本研究の調査手法	67
6.3.	調査の概要	68
6.3.1.	協力者	68
6.3.2.	材料文	69
第二部	学術論文の読解に関する研究	70
第7章	学術論文の読解における名詞の意味の誤った理解	70
7.1.	研究の目的	70
7.2.	調査方法	71
7.3.	先行研究	72
7.4.	名詞の意味の誤った理解	72
7.4.1.	固有名詞を普通名詞と取り違える	73
7.4.2.	複合名詞を要素に分けて解釈し、全体的な意味が合成できない	74
7.4.3.	多義的なカタカナ語(外来語)で文脈に合わない意味を選ぶ	75
7.4.4.	音形の類似からカタカナ語を別の語と取り違える	76
7.4.5.	漢語の略語の意味を誤って解釈する	77
7.4.6.	照応関係が把握できない	77
7.4.7.	誤った推測から正しい理解に落ち着く	78
7.5.	読解力をつけるために	79

7.5.1.	辞書や翻訳アプリなどのリソースの特性と使い方	79
7.5.2.	固有名詞か普通名詞かを判別する方法	79
7.5.3.	多義的なカタカナ語(外来語)の意味を特定する方法	80
7.6.	まとめ	81
第 8 章	1 人の読みに注目した語義の解釈過程	82
8.1.	研究の目的	82
8.2.	読解における語義の解釈とは	83
8.3.	調査	86
8.3.1.	調査概要	86
8.3.2.	調査結果	86
8.4.	読解における語義の解釈過程	87
8.4.1.	「距離」「遠い」の解釈—誤った解釈を修正できた例—	87
	学習者 A はなぜ解釈を誤ったか	87
	学習者 A はどのようにして語義の解釈を修正できたか	91
8.4.2.	「レコード」「ソフト」「レンタル」の解釈—誤った解釈を維持した例—	91
	学習者 B はなぜ解釈を誤ったか	91
	学習者 B はなぜ語義の誤った解釈を修正できなかったか	94
8.5.	考察	95
8.5.1.	文脈に合った語義の解釈を困難にする要因 1—語の意味的な特性—	95
8.5.2.	文脈に合った語義の解釈を困難にする要因 2—専門知識—	96
8.5.3.	語義の解釈の修正プロセスを重視した読解教育	96
8.6.	まとめ	96
第三部	小説テキストの読解に関する研究	98
第 9 章	材料文の分析	98
9.1.	材料文のテキストの基本情報	98
9.2.	英語・韓国語・中国語の小説の談話構成の違い	99
9.3.	英語・韓国語・中国語のテキストの対照	103
9.3.1.	分析方法	104
9.3.2.	読解に負担がかかると予想される文	106
9.3.2.1.	ゼロ代名詞を含む文	106
9.3.2.2.	非明示のノ格名詞句を含む文	108
9.3.2.3.	非明示となっている発話主を含む文	109
9.3.2.4.	事態の表現の仕方が大きく異なる文	111
9.3.3.	まとめ—翻訳テキストの対照から見える読解困難点—	112
第 10 章	パイロット研究—中国人民大学院生 4 人の調査—	114

10.1.	はじめに	114
10.2.	調査概要	115
10.2.1.	調査協力者	115
10.2.2.	材料文	115
10.2.3.	調査方法.....	115
10.3.	調査で使⽤した小説.....	115
10.3.1.	テキスト分析	115
10.3.2.	内容理解を確認する質問の例.....	116
10.4.	学習者の誤読	117
10.4.1.	動作主の把握で誤る	118
10.4.2.	発話主の把握で誤る	119
10.4.3.	人称詞の指示対象で誤る	119
10.4.4.	後方照応の把握を誤る.....	120
10.4.5.	未知語の意味の解釈を誤る	121
10.4.6.	多義語を含む文の意味を誤る	121
10.5.	2 編の内容を統合した結末の理解.....	122
10.6.	まとめ	123
第 11 章	日本語母語話者の小説テキストの読解	129
11.1.	はじめに	129
11.2.	研究方法の枠組み.....	130
11.3.	関連性理論に基づいた解釈の手順	131
11.4.	調査概要	132
11.5.	調査結果	133
11.5.1.	「ミモザ」はなぜ「カクテル(お酒)」と解釈されなかったか.....	135
11.5.2.	「三枚目風」はなぜ「かっこいい人」と解釈されたか.....	141
11.5.3.	「たった1 つきり」の中身はなぜズレるのか	142
11.6.	まとめ	144
第 12 章	日本語学習者の小説テキストの読解	146
12.1.	協力者の基本データ	146
12.2.	英語・韓国語・中国語母語話者の誤読の概要	147
12.3.	調査結果の一覧	164
12.3.1.	文法の誤読	169
12.3.2.	語義の誤読	170
第 13 章	誤った語義の解釈と文脈との整合性	173
13.1.	はじめに	173
13.2.	調査の概要.....	174

13.2.1.	調査対象者	174
13.2.2.	調査方法.....	174
13.3.	誤った語義解釈と文脈との整合性	174
13.4.	誤った語義解釈をつくる要因	181
13.5.	漢字の字形認識における誤り	181
13.6.	音韻情報の使用における誤り	182
13.7.	語の構成要素の分析における誤り	182
13.8.	多義的な表現の解釈における誤り	183
13.9.	まとめ	184
第 14 章	登場人物を指示する要素の読み誤り	185
14.1.	はじめに	185
14.1.1.	文章理解における文脈と指示の関係.....	185
14.1.2.	本章の目的	186
14.2.	調査概要	186
14.2.1.	調査対象者	186
14.2.2.	調査方法.....	186
14.3.	日本語の小説の談話構成と指示.....	187
14.3.1.	日・英・中・韓の談話構成	187
14.3.2.	日本語の指示と英・中・韓の指示の比較.....	187
14.3.3.	指示の理解を確認する質問	188
14.4.	結果と考察.....	190
14.4.1.	登場人物を指示する要素の誤読総数.....	190
14.4.2.	会話文で非明示となっている発話主の誤り	190
14.4.3.	ゼロ代名詞の指示対象の誤り	191
14.4.4.	非明示のノ格名詞句の誤り	193
14.4.5.	人称詞の指示対象の誤り	194
14.5.	まとめ	194
第 15 章	定量的な分析	198
15.1.	母語別の誤読の特徴.....	198
15.2.	結末の理解と誤読数の関係	200
15.3.	文法の誤読数と語義の誤読数	200
15.4.	小説の読書習慣と辞書使用回数の関係.....	206
第 16 章	日本語学習者の動的な読解過程	207
16.1.	小説の読み始めから終わりまでの読解過程.....	207
16.1.1.	英語母語話者 2 名の読解過程のタイムライン	207
	E11 の読解過程	207

E07 の読解過程	210
16.1.2. 韓国語母語話者 2 名の読解過程のタイムライン	213
K01 の読解過程	213
K06 の読解過程	216
16.1.3. 中国語母語話者 2 名の読解過程のタイムライン	219
C08 の読解過程	219
C10 の読解過程	223
16.2. 解釈の修正	226
16.2.1. 解釈の修正をもたらしたきっかけ	227
16.2.2. 読解教育への活用	231
16.3. 正しい理解に修正される過程	233
16.3.1. 主張	233
16.3.2. 調査概要	234
16.3.3. 文章中に明示されている要素の動的な解釈過程	234
16.3.4. 文章中に明示されていない要素の動的な解釈過程	242
16.3.5. まとめ	246
16.4. 誤読の連鎖	248
16.4.1. 「誤読の連鎖」の定義	248
16.4.2. 「誤読の連鎖」に関する先行研究	248
16.4.3. 誤読の連鎖の例	250
16.4.4. 誤読の連鎖についてのまとめ	265
16.4.5. ローカルな誤読とグローバルな誤読	265
16.4.6. その他の興味深い事例	268
16.5. フォローアップインタビュー	268
第 17 章 総合考察	270
17.1. 本研究の結論	270
17.2. 学習者の母語別に見た小説テキスト読解の特徴	275
17.2.1. 英語母語話者の読解の特徴	275
17.2.2. 韓国語母語話者の読解の特徴	276
17.2.3. 中国語母語話者の読解の特徴	277
17.2.4. 母語別の特徴のまとめ	277
17.3. 本研究の意義	281
17.4. 読解教育への示唆	282
17.4.1. 正確に文章を理解することの重要性	282
17.4.2. 解釈の修正プロセスを重視した読解教育	283
17.4.3. 小説を読むために必要な技術	283

17.4.4. 学習者の母語別の誤読からみた読解教育.....	285
17.5. 本研究の限界と今後の課題.....	286
本論文のもとになった既発表論文	289
参考文献	
付録資料	

第一部 概要と調査方法

第一部では、本論文の概要と調査方法を紹介する。第 1 章では、本研究の背景ならびに本研究で扱う課題について述べる。第 2 章では、本論文における文章理解の考え方について、先行研究を参照しながらまとめるとともに、本研究が対象とする、読解における第二言語学習者に特徴について示す。第 3 章では、第二言語習得研究における語義の解釈について先行研究を概観する。第 4 章では、本論文で扱う材料文と関連してテキストのジャンル特性について検討する。第 5 章では、本研究で重要となる用語の定義を明確にしておき、その後の章での本格的な議論に備える。第 6 章では、読み手の文章理解の過程を可視化するために本研究で採用した調査方法について述べる。

第1章 序論

1.1. はじめに

本研究は、上級日本語学習者の理解困難点に見られるテキスト解釈過程について明らかにすることを目的とする。テキストまたは文章とは、2 文以上からなり、それが文脈を持つことによって統合され、前後に文脈を持たず、それ自身全体をなしているもの(市川 1978)、全体で一つの意味的なまとまりをなす“coherence(結束性)”を持った話し言葉・書き言葉を含むすべての言語表現(Halliday & Hasan 1976)と定義されている。

読みに関する研究は、教育学、認知心理学、言語学、応用言語学、外国語教育、情報処理など、様々な分野で研究対象となっている。本研究は第二言語習得の読解研究の分野に位置するものである。なお、第二言語習得の分野ではテキスト(または文章)理解の現象に対して、読解¹という用語が用いられることが多い。本論文では、テキスト言語学の観点からも論じるため、テキストという用語を主に使う。

テキストを理解する過程とは、読み手が自分の既有知識を用いて、テキストに書かれていることについてまとまりのある心的表象(mental representation)を構成する過程であり、そこには読み手による意味の創造が含まれる(大村 2001:1)。

第二言語の読解を考えると、すでに母語が獲得されている上で、習得途上の外国語のテキストを理解することである。その処理は複雑で、母語の読解能力がどれぐらい影響するか、推論はどこで行われるかなど、まだ解明されていないことも多い。

また、テキスト理解は、一貫した表象を構築する言語構造の役割と、事態間の関係を同定しながら読み進める人間の理解的側面とが関わり、テキストと読み手の相互

¹ 心理学の分野では「文章理解」、第二言語習得や教育学では「読解」という用語が好まれているようであるが、指すものは同じである。

作用と言われる。読み手の理解活動なしにテキストの意味を考えることはできないが、両者は別々に論じられてきた。たとえば、テキスト自体の研究は言語学の分野でテキスト構造や結束性、接続表現などの言語的特徴の分析が行われ(cf. Halliday & Hasan 1976, 庵 1999, 庵 2007, 石黒 2008, 山崎 2017)てきた。一方、読み手のテキスト理解については、人間の理解過程を扱う心理学の分野で実証的データが蓄積された(cf. van Dijk & Kintsch 1983)。現実の言語運用に即したテキスト理解の解明には、テキスト研究と読み手の実証的な理解過程の研究という双方向のアプローチが待たれていた。さらに、近年、研究が進んできた第二言語習得の観点も取り入れる必要があるだろう。本研究はこれらを立体的、複眼的に考えるアプローチを試みる。言い換えると、テキスト理解という現象を様々な視点から見たり、考えたりしてその実態をとらえることを目的とする。

まず、テキスト理解の全体の見通しを得るために、テキスト理解を決定すると考えられている要因について整理しておく。本論文の筆者は、次に示す図 1-1 のように考えている。ここでは、テキスト理解を三角形の図に見立てているが、これは甲田(2009)の図を発展させたものである。甲田(2009 : 140)は、テキスト理解には次の三者が関わっていると述べている。

- ①テキスト要因²(文章属性)
- ②読み手要因
- ③読み方要因

テキスト要因とは、テキストのジャンル、長さ、難易度、話題などであり、読み手要因とは、読解のスキル、リーディングスパン、年齢、動機、文化的背景が存在するという。読み方要因としては、読みの目的、制限時間の有無、読むことにともなって実行される課題、読みを測る課題(調査方法)に区別されるという。これら三者が複雑にからみあって読解に影響している。データ収集の際には、それぞれの要因のうち、どの要因が理解のどの側面に影響を与えているのか、読みの理解モデルについての全体的な見通しを得ていく必要があると述べている。

第二言語学習者の場合には、さらに読み手要因として、読み手の母語、目標言語の習熟度、文化的背景などがある(研究社日本語教育事典 2012 : 114)が、上記の甲田(2009)ではこれらの観点はあまりふれられていない。また、読解研究での読み手要因は主に認知心理学の分野で研究の対象とされた。しかし、本論文が研究テーマとして扱うのは、日本語で書かれたテキストが日本語を第二言語とする学習者にどのように解釈されるかということである。よって、認知心理学に加え、第二言語習得や言語

² 甲田(2009) では文章要因と書いてあるが、ここでは本論文の用語に合わせてテキスト要因とした。

学の知見を取り入れた「第二言語読解における読み手要因」を意識して考える必要がある。第二言語読解における読み手要因とは、対照研究およびそのよりどころとなる母語転移に関するものである。読解における母語別の特徴は、そのまま母語別の日本語教育に生かされるべきである。母語転移を積極的に肯定し、母語別に日本語教育を考えていくという張(2007,2011)の主張には説得力がある。また、「外国語教育における学習上の問題点を解明する上で、対照研究がきわめて重要な方法である」(新版日本語教育事典 2005)という指摘も見逃せない。さらに、近年、母語別の単語認知処理についての知見(cf. 玉岡 2017,小森 2005)も蓄積されてきた。よって、本論文ではテキスト理解を決定する要因として、「第二言語(L2)読解要因」をテキスト要因と読み手要因の間に、4 つめとして加える。

④第二言語(L2)読解要因

本論文におけるテキスト理解を決定する要因の全体像を図 1-1 に示す。本研究はこれらを立体的(複眼的)に考えるアプローチを試みる。

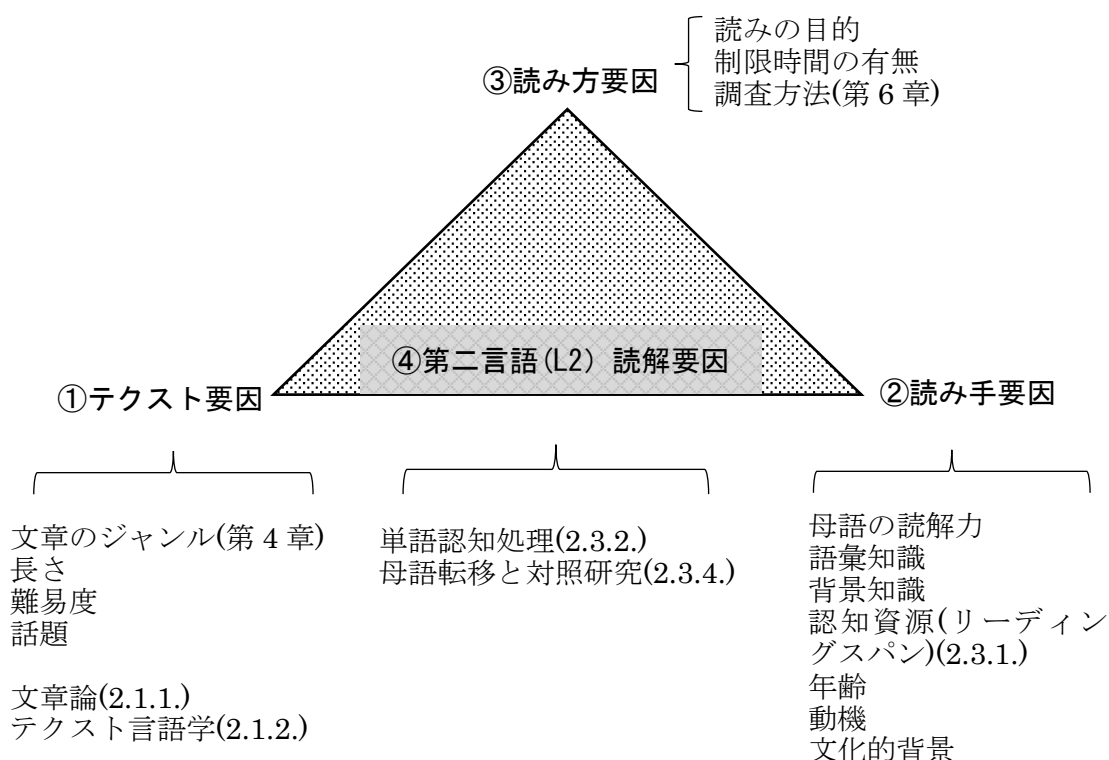


図 1-1 テキスト理解を決定する要因の全体像(()の数字は本論文の該当箇所)

これまでの研究を概観すると、テキスト理解に影響する個々の要因を一つずつ取り出していくような実証的な手法がとられることが多かった。しかし、そのような手法では鳥観図を得にくく、実態が見えにくかった。もちろん、一つずつ要因を取り出すことでしか明らかにならない知見もあり、それが読解研究を発展させたことは疑いがない。手法を否定しているわけではない。しかし、よく言われることであるが、部分の総和が全体像を必ずしも反映しているわけではない。特に、読解のような複雑な認知過程をとらえようとする場合、「木を見て森を見ず」とならないように、全体論的見地も忘れてはならないと考える。

このような論文筆者の哲学のもとに、調査はより実態に即した方法で行うべきであり、そうすることで実態に即したデータを集めることができると思う。

研究方法は次のとおりである。テキスト解釈過程はそのままと外から見えないものである。よって、読み手がテキストの表層的な言語形式からどのような推論や知識、ストラテジーを使用し、テキスト情報をどのように読みとり、解釈に至るかを知らねば、テキストを実際に読んでもらい、その過程を観察する必要がある。そこで、学習者の読解中の内省報告とテキスト分析を合わせて理解過程を明らかにする。

人間の情報処理を可視化し、読解過程のモデルを精緻化することが求められるのは、本研究が自然言語処理の分野と隣接し、人工知能や自動翻訳などへの応用的発展にも貢献すると考えられるからである。

1.2. 本研究で扱う課題

本研究は言語学と心理学の学際的立場から論じる。テキストには様々なジャンルがあるが、テキスト理解は言語形式の読み取りであることを考えると、ジャンルが異なっても本質的には共通する部分も多いと考える。そこで、まずは学術論文の読解過程を調査し、その理解困難点や語義の解釈過程を把握し、そこから発展させて小説のテキスト理解を調査するという手順をとる。その理由として、テキストの特性から次のように説明する。学術論文はその性質上、ある事柄に関する知識・情報を間違いなく、正確に、しかもわかりやすく人に伝え、知らせようとする文章(田近 1984)であり、誤解のないように書かれているものである。読み手も個人の経験などを挟まず、先入観を持たずに読もうとする。そのようなテキストの解釈過程を調査することで、学習者が抱える基本的な理解困難点を明らかにできると考えた。次に、学術論文の調査で得られた知見を応用し、小説という、エピソード的知識を伝える文章(岸 2004)で調査をする。小説では、人物、場面、感情がからみ、自伝的記憶を利用してテキスト理解をしている(福田 2012: 148)とも言われ、様々な文章技巧が用いられている点でも学術論文とは異なる特性を持つ。さらに、視点(文章の発信者が文章内容を見る角度、文章内容を語る立場)という要素はとりわけ小説では重要とされる。第二言語習得の観点から言えば、この視点の運用は、日本語と英語、中国語などの間では異な

るとされ、そのようなテキストを日本語を第二言語とする学習者が読んだ場合、どのような困難点があるかを明らかにできる可能性がある。以上をまとめると、学術論文の読解の延長線上に小説読解があると考ええる。

本研究で扱う課題は次のとおりである。

【研究課題】

1. テキスト中の語義の解釈はどのようになされ、それがテキストや読み手の母語とどのような関係があるのか。(第7章, 第8章, 第10章, 第13章)
2. 小説テキストの読解で見られる誤読(読み誤り)にはどのようなものがあり、それがテキストや読み手の母語とどのような関係があるのか。(第10章, 第13章, 第14章)
3. 読み手特性と誤読の間に定量的に有意な関係が見られるか。(第12章, 第15章)
4. 上級日本語学習者と日本語母語話者の読解過程を比較すると、共通の特徴や学習者独自の特徴があるか。また、一般にうまく読める人と誤読する人の読み方に違いはあるか。(第16章)

上記の課題を扱う理由は、学習者の読解過程に関する先行研究には次のような未解決の課題があるからである。

【先行研究および未解決の課題】

- [1] 研究対象そのものである。第一に、理解についての研究が産出についての研究よりも立ち遅れている。第二に、英語テキストを扱った研究はある程度進んでいるが(cf. Kintsch & van Dijk 1978)、日本語での研究自体はいまだに少ない。とくに、小説を扱った研究や、同じ材料文を母語が異なる学習者に読んでもらって比較した研究は非常に少ない。テキストの言語形式のどのような点が理解困難点になりやすく、それをどのように解釈しているかという素朴な疑問に十分に答えていない。
- [2] これまでの読解研究はおもに言語学ではなく、心理学の分野で進められてきた。心理学における読解研究では意味に重点が置かれ、言語形式の解読は軽視されてきた。材料文として長い文章を扱っていても、再生課題で再現されるアイディアユニットの分析などいわゆる内容重視で、言語形式と対応させた考察は数が限られている。読み手は言語形式から意味を見出す以上、言語形式とそこから作り出される意味の対応を明らかにすることは欠かせない。
- [3] 統合的に分析した研究が少ない。語句や文の意味の推測に焦点をあてた山方

(2008)や Horiba(1996), ストラテジーに着目した舘岡(2001)などがあるが, これらは読解に影響する個別要因を取り出しているにすぎず, 読解過程の鳥瞰図を得にくい。統合的な分析が必要である。

- [4] 語彙の意味類推やテキスト理解の研究では, 実験文は一文レベルや語句レベルであることが多く(cf. 石黒(他)2020), 一文を超えた理解を研究対象としたものはごく限られている。テキスト理解を研究対象とするなら, テキストを一編すべて読んだときに, どのような解釈をするかを調査する必要がある。
- [5] 調査方法である。従来よく用いられてきた発話思考法で集められるデータは学習者が自発的に語ったことに限られ, 読解過程のすべてがわかるわけではない。解釈の手がかりに使ったものを知るためには, 別の方法が必要である。

【本研究の特色】

本論文の研究の特色と分析の観点は以下のとおりである。

- [1] 発話データとテキスト分析の双方向アプローチ：読解中の学習者の内省報告とテキスト分析の双方向アプローチで読解過程を統合的に可視化する。
- [2] 先行研究と異なる調査法：発話思考法に加え, 読解中に調査者が推論や解釈の根拠を読み手に確認することで, 従来アクセスできなかった情報を得る。
- [3] 小説を使った研究：これまで小説テキストの読解過程についての研究は見当たらない。一文レベルではなく, 一編すべてを読んだときの解釈を扱う。
- [4] 母語別の視点：第二言語習得やそのよりどころとなる対照研究の視点を十分に盛り込む。学習者の母語別にみた読解の特徴を明らかにする。
- [5] 学習者と母語話者の読解の比較：上級学習者に読解中の内省を意識的に語ってもらうことで, 母語話者では自動化されている処理も見えてくる。母語話者の理解と比較しながら, 両者の共通点や相違点を論じる。
- [6] 母語別の日本語教育：テキストの言語形式と母語別の読解の困難点を明らかにし, 母語別の日本語教育に応用する。

【本研究の目的】

- [1] 人間の理解的側面に注目し, 英語, 韓国語, 中国語をそれぞれ母語とする学習者からは, 日本語で書かれたテキストがどのように解釈されるのかについて明らかにする。テキストジャンルとして説明文と小説を用いる。
- [2] 理解困難点や誤読について, なぜそれが起こるのか, それが起こるとどうなるのかについて明らかにする。
- [3] 読解過程は雑多なものであると考えられているが, どのように雑多であるのか, 雑多の中身をできるだけ明らかにする。

〔4〕同じテキストを読んで、どのあたりまでが共通理解とされ、また、どこからが誤読とみなされるのかについて明らかにし、テキストと人間の関係性の限界を示す。

1.3. 論文の構成

本論文は、第一部「概要と調査方法」、第二部「学術論文の読解に関する研究」、第三部「小説テキストの読解に関する研究」の三部構成となっている。その詳細は次のとおりである。次の第 2 章では、文章理解の理論を紹介し、本研究における文章理解の考え方を述べる。第 3 章では、読解における語義の解釈に関する先行研究と、誤読に関する先行研究を概観し、そこでの問題点を整理する。続く第 4 章では、テキストのジャンル特性について整理する。第 5 章で本研究における用語の定義を行い、第 6 章で研究方法について述べる。第二部の第 7 章と第 8 章では、学術論文の読解に関する研究として、名詞の意味の誤った理解と、1 人の読みに注目した語義の解釈過程について論じる。第三部の第 9 章では、小説テキストの材料文の分析を行い、第 10 章では、パイロット研究について述べる。第 11 章では、日本語母語話者の調査結果について論じる。第 12 章では、英語・韓国語・中国語母語話者を対象として行った小説テキストの読解についての調査結果の概要を示したあと、第 13 章では、誤った語義の解釈と文脈との整合性について、第 14 章では、登場人物を指示する要素の誤読を文脈理解と関係づけて論じる。第 15 章では、定量的な分析を行い、母語別の誤読の特徴を明らかにする。第 16 章では、日本語学習者の動的な読解過程に注目し、解釈の修正や誤読の連鎖といった現象について論じる。最後に、第 17 章で総合考察を行う。

第2章 文章理解

本章では、まず先行研究における文章理解の考え方を概観した後、本研究における文章理解の考え方を述べる。本研究で主に扱う文章理解はミクロな理解である。本研究でいうミクロな理解とは、語や文の意味の解釈、指示対象の特定といった言語形式の理解である。本研究でミクロな理解を扱う意義は、第二言語の読解教育支援に研究の知見を生かすため、学習者がテキストを読むときにどのような言語形式が理解困難になるか具体的なデータを収集するためである。また、調査方法の点からも、ミクロな理解を扱う意義が認められることについて述べておく。さらに、読解における第二言語学習者の特徴を習得研究の点からまとめる。

2.1. 先行研究に見る文章理解の考え方

2.1.1. 文章と文章論、文章理解

文章理解とは何かを考えるために、まず文章と文章論、文章理解の関係について述べておく。

文章・談話は語や文の上位に位置づけられた言語活動の単位である。その認定において客観的な指標が見出しにくい単位ではあるが、その内部には法則が存在する。書き言葉を扱う文章論は、文章の性質や内部構造を解明することを目的とし、それが持つ意味内容の伝達という機能をダイナミックに探っていく研究である(高崎・立川 2010)。文章論は文章を言語学の立場から明らかにすることを目的とする学問分野といえる。

次に、文章を定義する。日本における文章論研究の創始者である時枝誠記は、文章とは、その前後に文脈の連続を想定することのできない、それ自身で完結し統一した表現であると規定した。そして文章表現は「時間的・継続的・線条的」な性格を持ち、その構造は「展開的」なものだと考えた(国語学会編 1980)。この時枝に続く文章論研究の担い手である、市川孝と永野賢は、それぞれ文章を次のように考えている。両者の最大の共通点はテキストの構造を「言語形式という形態的指標」に基づいて究明しようとする点にある(庵 2007:209)。

市川(1978)

- ・通常、二文以上から成り、それらが文脈をもつことによって統合されている。
- ・その前後に文脈を持たず、それ自身全体をなしている。

永野(1972)

- ・原則として文の連続によって成り立ち、内部に文脈を保ちつつ統一し完結した言

語形式を備え、前後に文脈を持たぬもの。

・文章が言語表現上、一つの単位である以上、文と同様に、内部的には意味の統一性を、外部的には形態の完結性をもたなければならない。

時枝が述べた「文章表現は「時間的・継続的・線条的」な性格を持ち、その構造は「展開的」なものである」という指摘は、文章の動的理解に注目したものであるが、その視点はその後主流になることはなかった。長い間言語学は、文章そのものだけを研究対象としてきたため、読み手の立場に立った言語の線条性や読み手の理解過程について関心を払わず、読解の実態とはかけ離れて長い時間をかけて文章を分析してきた。その結果、文章は「実時間」的な存在であるという観点が欠落していた。「実時間」とは、現実には言語が処理される短い時間を指す庵(1999)の用語である。庵(1999)は、文章論のかわりにテキスト³言語学という用語を用いて、上記の点を端的に指摘した。庵(1999)は、テキスト言語学を「実時間という制限された条件下で人間が行っているテキスト処理の過程の解明を主目的とする学問分野である」と規定する。そのため、「文文法は時間の制約と独立に研究してもよいが、テキスト言語学においてはそれだけでは不十分で、極めて短時間で言語処理が行われるのはなぜかという問いに答える必要がある」と述べている。

その後、石黒(cf. 1996, 2005, 2008)の一連の研究が文章論と文章理解の関係を大きく変えた。石黒は文章理解研究に欠かせない観点を次のように端的に言い表した。

石黒(2008:10)

「文章」の持つ実時間的性格は「理解」を考慮に入れて初めてその重要性がはっきりする。文の有機的連続体である文章は文そのものと違い、一目で理解できるようなものではなく、1文1文の理解の積み重ねによってその全体像が明らかになるものである。そこでは、理解主体⁴が文章を理解する過程、すなわち理解過程が問題になる。文章論を考える場合、文章の構造だけでなく、理解の動的過程を考慮する必要がある。

石黒(2008)は、理解主体が日本語の文章を理解するさいに行っている予測という活動に注目し、多数の文連続からなる文章をなぜ短時間で正確に理解できるのかという問いについて、言語学の立場から明らかにした。この研究は、それまで長らく静態的な分析にとどまっていた伝統的な文章論に、予測というあらたな熱源を加えて、動的な文章論を復活させた。

³ “text”についての日本語の表記として「テキスト」と「テクスト」の両方があり、ゆれている。

⁴ 石黒(2008)では、聞き手・読み手をあわせたものを理解主体とよんでいる。

石黒(2008)と同じ観点をとるのが甲田(2001)である。甲田(2001:4)は、「結束性の源を、談話・テキストを理解する読み手に求めるという方向と、談話・テキストの構造の特性に求めるという二つの方向を採りたい。談話・テキストの理解には、一貫した表象を構築する言語構造の役割と、事態間の関係を同定しながら読み進める人間の理解的側面が関わっている」と述べ、構造と理解という 2 つのアプローチを提案している。

2.1.2. テキスト⁵言語学

先述したテキスト言語学という概念も本論文の議論に大きく関わるため、詳細に紹介する。庵(1999)は、テキスト言語学を「実時間という制限された条件下で人間が行っているテキスト処理の過程の解明を主目的とする学問分野である」と規定した。庵(2007: 205)によると、テキストとは「意味的に一まとまりをなす文(連続)」のことであり、テキスト言語学(text linguistics)とは「テキストに関わる現象を言語に関する視点から分析することを目的とする研究分野」である。この分野はコンピュータ一言語学や音声学、音韻論、心理学、社会学など多くの隣接分野がある。伝統的な言語学研究における考察上の最大単位は長らく文であったが、ヨーロッパでは早くからそれに対するアンチテーゼとして談話・テキストの構造を研究対象とするテキスト言語学の必要性が唱えられ、その研究が盛んに行われてきた(cf. de Beaugrande & Dressler 1981, Givon 1983, Halliday & Hasan 1976)。庵(1999)は、言語学が「テキスト」を避けてきたのは、テキストにおける不適格性が文までのレベルにおけるようには明確に定義できないと考えられてきたためではないかと述べている。

テキスト文法(text grammar)は次のように定義されている。

庵(2007)

テキスト文法はテキストレベルでしか解決できない文法現象を取り扱う分野であり、テキスト言語学の中心的位置を占める。ここで言う「文法」は「母語話者が持つ一般化が可能な規則の総体」を意味し、「適切な言語運用のために必要とされる原理の総体」を扱う「運用論」とは区別される(cf. Leech 1983)。

上記の定義中の下線部は文文法の上にテキスト文法を想定しなければならないことの根拠である。テキストとは意味的に一まとまりをなす文連続である。庵(2007)は、文連続がテキストを構成するときに生じる「つながり」には、文法的依存関係による「結束性」と、推論による「一貫性」があることを指摘したうえで、テキスト文

⁵ この節では庵(1999,2007) を引用するため、"text"の訳語として、庵(1999,2007) にない「テキスト」と表記する。

法は「結束性」レベルの問題だけを対象とするものであるのに対し、テキスト言語学は「結束性(cohesion)」「一貫性(coherence)」のどちらにも関わるものであると明確に区別する。この 2 つのうち、庵は文法的に予測可能である「結束性」の記述のみを対象としたが、その理由として、一貫性の研究が不要であるという意味ではなく、これまでの文法の方法論をある程度利用しながらできる結束性の研究を行った後に、より動的な一貫性に関わる部分の研究を行うという方法論であると、その優先順位を明らかにしている。

結束性と一貫性についてその具体例を庵(2007:211)から引用して示す。まず、結束性について説明する。たとえば、(1)で 2 文がまとまりをなしていることを A,B 以外の第三者が理解できるのは、B の発話文において構造上の必須要素であるガ格名詞句が文中に現れていないためである。B のガ格名詞句(動作主)は「太郎」であるが、これは、「行く」という動詞が動作主と行き先を必須項としてとるという「文法知識」のみによって理解が可能である。

(1) A : 太郎は朝 6 時に起きたよ。

B : 釣りに行ったのかい？

これに対し、(2)がテキストをなすということを理解するには文法知識だけでは不十分であり、A,B 間での共有知識や世界知識を参照する必要がある。たとえば、「滅多に早起きしない人間が早起きをすると雨が降る」といった日本にある俗信を知らなければ、A(および第三者)はこの 2 文がテキストをなすことを理解できない。この意味でこうしたタイプの文連続の理解には運用論(または語用論,pragmatics)的推論が必要であると考えられる。推論に基づくつながりを「一貫性」とよぶ。

(2) A : 太郎は朝 6 時に起きたよ。

B : 今日雨が降らなきゃいいけど。

このように、テキストの分析には「結束性」と「一貫性」という二つの異なるレベルでの適格性を問題とするべきであることがわかる。両者の関係については、de Beaugrande & Dressler(1981)は「結束性」を文法的ネットワーク、「一貫性」を意味的ネットワークという、同一物の二側面としてとらえている。また、庵(2007)は一貫性を結束性の上位概念としてとらえており、結束的なテキストはすべて一貫性を持つとしている。

2.1.3. 文章理解と表象

心理学や情報処理の分野では、文章理解のメカニズムについて次のような知見が

得られている。まず、読み手は視覚情報から文字を識別し、語の意味を心内辞書から同定する。次に、統語知識を使って語と語のつながりを判断し、さらに意味的に整合性のある命題をつくる。それから、テキストにない情報を読み手の知識の中から推論によって選び、テキスト内の情報と相互作用し、整合性⁶のある意味のまとまりである表象(representation)を形成し理解が成立する(van Dijk & Kintsch 1983, Kintsch 1994, Graesser, Singer & Trabasso 1994)。表象とは、認知心理学の分野では、心の中での処理の結果として得られ、記憶に保持される情報のことである。読解で得られた意味情報も表象であり、文章を読んで理解した程度を決定するのは、読解の結果、構築された表象の質である。岸(1994)によると、表象の質は組み込まれた情報の豊富さ、表象全体の整合性、原文内容との対応の程度、表象の汎用性(表象からの推論可能性)などで特徴づけられるものである。また、文章は単なる文の集合ではなく、複数の文が相互に意味的な関係をもってまとまったものである(阿部・桃内・金子・李 1994)。その文章を構成する情報は、意味を相互に関係づけた構造によって成り立つ。このように、文章のそれぞれの情報を孤立させることなく、互いの意味を論理的に関係づけた状態を整合性のある表象という。そして、整合性のある表象を構築することを目指すのが読解である(van den Broek & Gustafson 1999)。

2.1.4. Kintsch の構築統合モデル

文章理解の証左としての読み手の心的表象には、次の 3 つの水準が想定されている。

第 1 は、単語の意味と文法が解析され、言語形式が保持された文章の表象の記憶表象である「表層的記憶(surface memory)」

第 2 は、言語形式ではなく命題の意味が保持され、文章に基づいた表象である「命題テキストベース(propositional text base)」

第 3 は、最も深い水準で、文章と読み手の既有知識を交え、文章に明示されていない情報を推論し、より精緻化された表象である「状況モデル(situational model)」(Kintsch 1994,1998)

西本(2001:174)はこの 3 つの水準について次のように説明する。まず、文レベルの例として次の(3)から(5)について考える。

(3) The frog ate the bug.

(4) The bug was eaten by the frog.

(5) The frog had the bug for breakfast.

Fletcher(1994:589)

⁶ 一貫性という用語を使うこともある。

(3)の表層形式、命題テキストベース、状況モデルは図 2-1 のそれぞれ A,B,C と考えられる。また、(3)と(4)は表層形式は異なるものの、同一の命題テキストベースが(図 2-1 B)が形成され、(3)(4)(5)からは同一の状況モデル(図 2-1 C)が生成される Fletcher(1994:590)。

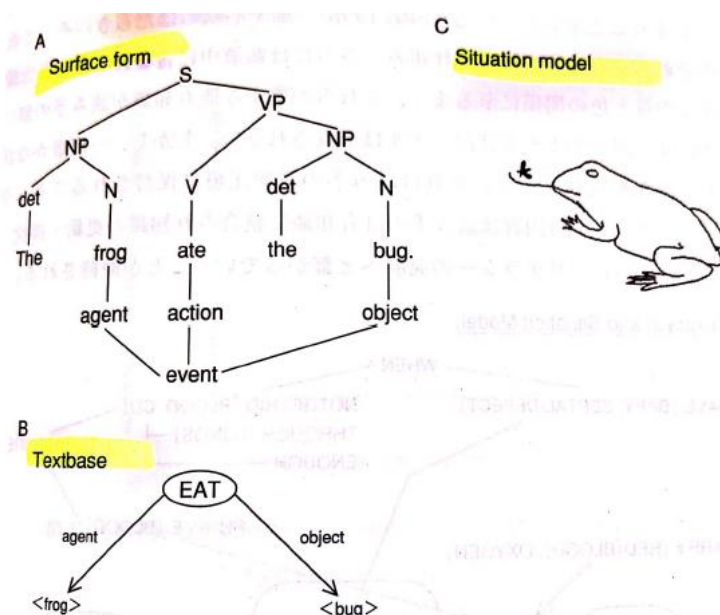


図 2-1 The frog ate the bug. の表層形式・命題テキストベース・状況モデル

次に文章レベルの例を挙げる。

(6) When a baby has a septal defect, the blood cannot get rid of enough carbon dioxide through the lungs. Therefore, it looks purple. (Kintsch 1994:245; Kintsch 1998:294)

(6)の命題テキストベースと状況モデルは図 2-2 のようになる。ここで重要なのは、命題テキストベースはテキストそのものについて忠実に構成された表象であるが、状況モデルはテキストの内容を読み手の広い知識の状況や文脈のなかに位置付けて構築される表象だということである。肺や心臓の働き、そして血液のそれらを介しての循環の仕組み、血液中に含まれる酸素と二酸化炭素の量と色の関係に至るまで、これらの豊かな既有知識が読み手の側になれば、図 2-2 のような状況モデルは形成されない。しかし、一度豊かな状況モデルが形成されると、読み手の長期記憶に保持されることになる。

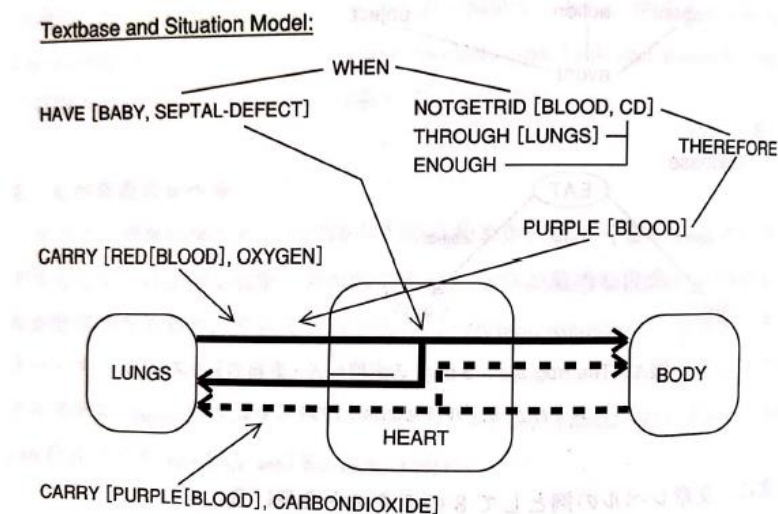


図 2-2 Kintsch(1984:294) の命題テキストベース, 状況モデル(Kintsch 1998)

このように, 読み手の心的表象は単語認知や統語解析にもとづく言語的な表層表現に対する記憶表象から, 文章の意味内容を命題と呼ばれる概念単位に分析し, 全体的な命題間の連合ネットワーク(命題テキストベース)へ, さらに読み手の既有知識や語用論的知識, 実世界に関する知識と結びついた当該テキストの状況に対する読み手の総体的認識そのものの表象(状況モデル)へと, 順次豊かさと深まりを増すとされる。読解研究において, この Kintsch(1994,1998)の構築統合モデル(Construction-Integration Model)が第 1 言語, 第 2 言語に関わらず広く受け入れられている。

これまで述べてきた心的表象の生成は当該テキストの構造と大きく関係している。Van Dijk & Kintsch(1983)はテキストの構造を, マクロ構造(macrostructure)とミクロ構造(microstructure)からなる階層的構造ととらえている(図 2-3)。

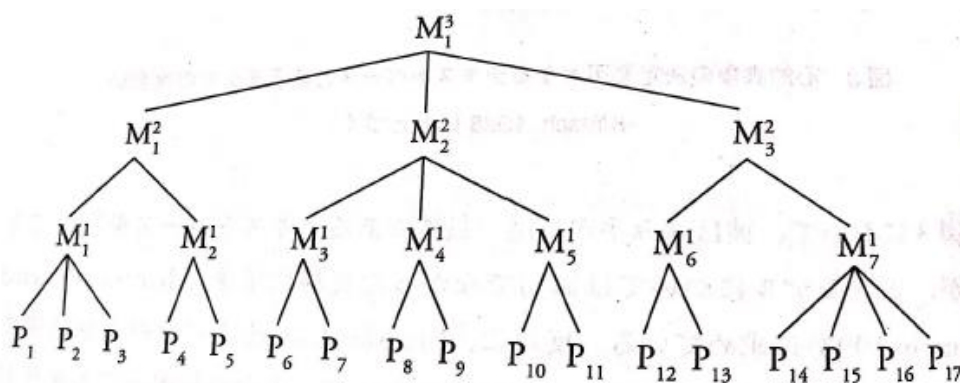


図 2-3 マクロ構造とテキストベースの階層的構造(van Dijk & Kintsch 1983 に基づく)

図 2-3 において最下部層に位置する $P_1, P_2, \dots$ は命題(proposition)のリスト群であり, 視覚的入力情報による単語認知→句または文としての統合的認知→意味を付与された文章という一連のボトムアップ処理を経て形成される。このようにテキストの表層構造から得られ, テキスト構造の基底をつくる命題リスト群はマイクロ構造と呼ばれる。マイクロ構造はテキストの局所的な一つ一つの文に対応した意味構造であると考えられる。一方, テキストに忠実な心的表象であるテキストベースはこのマイクロ構造がお互いに関係づけられ, 一貫性のある構造を備えた表象とされる。

次にテキスト全体の意味をとらえるために, マクロ構造(M)が想定される。マクロ構造はマイクロ構造を構成する命題をさらに分析することによって得られ, テキスト全体の骨子や要約を扱う上で不可欠な概念であり, $M^2 \rightarrow M^1$ とマクロ構造も階層構造をなす。マイクロ構造からマクロ構造の生成には以下のマクロルールが適用されるとしている。

マクロルール

- a. 省略(一連の命題から他の命題の解釈に不要な命題を削除する)
- b. 一般化(一連の命題をより一般的な命題表現へと置き換える)
- c. 構成(複数の命題を結合させて新しい命題を構成する)(谷口 1999:40)

柴崎(2006)は Kintsch の理論について丁寧にまとめている。Kintsch(1998)のテキストベースと状況モデルについて, 柴崎(2006:60)を引用しながら以下に示す。

①テキスト内要素に直接結びつく心内表象の要素, またはリンクがテキストベースを形成する。そのためには, 統語的, 意味論的, 語用論的知識が必要とされる。

②テキストは現実的想像の状況を表すものである。読み手がテキストと先行知識や体験を基に構築する状況表現を状況モデルと呼ぶ。

③完全に明示的なテキストであれば, そこには完全な状況モデルが記述されているのであって, この場合, テキストベースと状況モデルは同一のものである。しかし, 大抵のテキストは不完全なものであり, 足りない部分は読み手によって補われる。その場合, 読み手が生成する状況モデルはテキスト駆動要素と知識駆動要素の両方がある。この二要素のバランスが取れて, それなりのテキストベース, 状況モデルができる。また, テキストベースは形成されないが, 状況モデルはある場合もあり, 逆によいテキストベースができて, 状況モデルが構築されない場合もある。

④マイクロ構造とマクロ構造の違いは, そのままテキストベースと状況モデルの違いを反映する。マイクロ構造はテキストの小さい要素に, マクロ構造はテキスト全体をあらわすもので, テキストに直接結びつくか, または読み手の知識を基に構築される。

⑤テキストベースの質がよくないのは、テキストの書き方がよくないか、読み手が上手に符号化ができないからである。状況モデルの質がよくないのは、読み手に知識がない、または知識を使うことができないからである。質のよくないテキストベースから、質のよくない状況モデルをつくる場合も、質のよい状況モデルをつくる場合もある。

⑥テキストに直接書かれている情報についてテストするなら、それはテキストベースの理解を測っている。再生テストは意味論的知識を含むとはいえ、測定できるものはテキストベースである。テキストに書かれていないが、内容として含まれていることをテストするなら、状況モデルを測定しているといえる。推論問題やソートのタスクなどでテストできる。

Kintsch の理論は読みによる理解をテキストベースと状況モデルの二次元でとらえたことに大きな貢献があると考えられている。また、第二言語習得の観点から見ると、あるテキストの心的表象は第一言語読解と第二言語読解では基本的には変わるところはないと考えられるものの、2000年の時点では、第二言語読解における複数のレベルの心的表象の形成についてはデータが少なく、さらなる研究が期待されていた(堀場 2000)。

2.2. 本論文における文章理解の考え方

2.2.1. ミクロな理解

本論文では文章理解におけるミクロな理解を主に扱う。本論文でいうミクロな理解とは語や文の意味の解釈、指示対象の特定である。言い換えれば言語形式の理解である。一方、マクロな理解とは、言語形式よりも大きな単位である場面や出来事、文脈、結末の理解に関するものとする。本論文でミクロな理解を扱う理由は、どのような言語形式が読解困難点になるかを明らかにするために、言語形式と読み手の理解の対応関係を明確にするためである。

本論文でいうミクロな理解と Kintsch の理論との関係を見てみる。2.1.4 で示した Kintsch の理論④「ミクロ構造とマクロ構造の違いは、そのままテキストベースと状況モデルの違いを反映する。ミクロ構造はテキストの小さい要素に、マクロ構造はテキスト全体をあらわすもので、テキストに直接結びつくか、または読み手の知識を基に構築される」という記述を参照すると、本論文のミクロな理解は Kintsch のミクロ構造、一方、マクロな理解はマクロ構造に近似すると考えられる。さらに、ミクロな理解には、ミクロ構造のもととなる、単語の意味と文法が解析され、言語形式が保持された文章の表象の記憶表象である「表層的記憶」も含まれると考えられる(表 2-1)。

表 2-1 本論文におけるミクロな理解と Kintsch の理論との対応

本論文	Kintsch の理論
ミクロな理解 (語や文の意味の解釈, 指示対象の特定。言語形式の理解。)	表層的記憶 ミクロ構造(テキストベース)
マクロな理解 (言語形式よりも大きな単位である場面や出来事, 文脈, 結末の理解に関する理解。)	マクロ構造(状況モデル)

ミクロな理解とマクロな理解について、Kintsch の構築統合モデルを参照しながらさらに説明を加える。Kintsch の構築統合モデルにおける構築過程では、知識ベースを利用して、言語入力(文章の表層的表現)からテキストベースを構築する。その手続きは次のように説明されている。

- 1) 言語入力に直接対応する概念と命題をつくる。
- 2) それらの要素を、関連する知識ベース中の要素と結び付けて精緻化する。
- 3) 橋渡し推論やマクロ命題の推論といった、より目標指向的な推論を行い、附随する命題を推論する。
- 4) つくり出されたすべての要素のペアに、結合強度を割り当てる。

こうして構築された命題テキストベースは、文脈についての考慮がなされていないため、一貫性がなく矛盾を含んだものである場合がある。それで統合過程では、このテキストベースから矛盾する要素を取り除き、一貫性のあるテキストベースをつくり出すように処理される(河原 2001:98)。このモデルからわかるのは、1)の言語入力に直接対応するようなミクロな理解が、その後 2)～4)の処理を経てマクロな理解に至ることから、ミクロの表象を単純に足しあげたものとマクロの表象とが同等ではないということである。よって、たとえ読み手がミクロな誤読をしていても、マクロなレベルである文脈の大筋が追えたり、結末を適切に理解できたりする。これは本研究を考える上で重要になる。

2.2.2. 本論文でミクロな理解を扱う意義

文章理解においてミクロな理解を扱う意義について、調査方法(読み方要因)との関係から述べる。読み手の表象の特徴を明らかにするには、文章を読んだ後、なんらかの課題が行われ、その結果を分析するという方法が採られる。その際、多くの研究では Kintsch(1994,1998)の表象のレベルを参照している。テキストベースの表象の測

定では、再生における情報量や情報の種類、文章に明示的に記された内容に関する多肢選択課題や正誤判断課題の成績などが指標となる。再生とは、覚えていることをできる限り思い出して筆記、あるいは口頭で産出する方法のことである。より多くの命題表現が再生されることは表象が豊かであると解釈される。一方、状況モデルの表象の測定は、再生における文章中に明記されていない推論情報の生成数や、推論を要する質問、文章内容の法則や原理を応用して回答する応用問題の正答数などが指標となる。また、文章の事象(event)をどう関係づけているか再認課題の反応時間及び正答数、動詞の分類課題で測定することもある。

しかし、再生課題には次のような2つの問題点もある。1つは、再生率が高ければ表象が豊かであるとは限らないということである。たとえば、高橋(2014)は、中国語を母語とする上級日本語学習者10名と、日本語母語話者の大学生・大学院生14名を対象とし、新聞のコラム欄を材料文として使用し、読解後の筆記再生課題に見られる日本語学習者の読みの特徴を調査した。その結果、学習者のほうが母語話者よりも多く、テキストの詳細情報に当たる具体例部分を多く再生していたことを明らかにした。その理由として、学習者は1つ1つの具体例をそのまま再生していたが、母語話者は具体例を重要ではない情報であると判断し、主に上位層の情報を再生したとためであると述べた。つまり、母語話者の低い再生率は、情報間の重みづけをした結果、重要ではないと判断したため、低くなったとするものである。van Dijk & Kintsch(1978)によれば、読み手の記憶に長く残るのはミクロ構造よりもマクロ構造のほうで、読みの理解を助けるとされる。母語話者の場合、読解中あるいは読解後に内容の再構築が行われ、再生されたが、その際、2.1.4.に挙げた3つのマクロルールが適用されたのではないかと結論づけた。また、母語話者の再生にはテキスト内容そのものではなく、各自の既有知識と結びつけた再生も見られたという。つまり、テキストに書いてあるそのままの表現ではなく、抽象化されたより高次のレベルでの言い換えもあったとことになる。このような高次のレベルでの言い換えがあった場合、テキストの言語形式と読み手の解釈がどのように対応しているか読み取れないという問題が出てくる。

2つめの問題点として、読解後の再生課題に現れる表象の特徴は、読解中や直後の表象が再構築されたものであることに留意が必要であるということである。つまり、読解中に生成される解釈と同質ではない。そう考えると、人間の文章理解の実態に即した、文章を一文ずつ読んでいるときの理解過程の情報を得るには、読みながら口頭で翻訳してもらったり、学習者に理解が曖昧に感じられる点については調査者から質問して確認したりしない限りわからない。確かに、読解中に読み手に質問に答えてもらうことについては、言語化の前に様々な媒介過程や推論過程が介在するため、読解過程を直接反映するとは考えられない(高橋,1995)という意見もある。しかし、このような方法を用いることで、従来見えなかった読解過程の情報にアクセスできる

利点のほうが大きいと考える。

さらに本論文の研究目的の1つは、得られた知見を日本語教育に応用することである。教授実践を考えた場合、具体的に文章中にある言語形式のどこが学習者にとって理解困難点となるかをはっきり示せないと、学習者の読解能力を向上させるための指導につながらない。たとえば、文章中に未知語がある場合、意味推測を成功させた文脈が何であったかを特定することは一般に難しい。一文中に未知語を提示したMori(2003), Mori & Nagy (1999)では、未知語の構成要素に関する知識と文脈情報を統合することによって意味推測が可能になることを示しているが、一文中のどの情報が未知語の意味推測に貢献したのか、という点については言及がなく不明である。第二言語の読解支援を目的とするならば、学習者がテキストを読むときにどのような言語形式が理解困難点になるかという具体的なデータが必要となる。

以上の理由から、本論文では文章理解におけるミクロな理解を主に扱う。

2.3. 読解における第二言語学習者の特徴

2.3.1. 認知資源の配分の難しさ

これまでの研究によると、第二言語読解の大きな特徴は、第一言語読解よりも低い処理効率であり、そのために、第二言語の読み手は読解の中間段階における産物を記憶にとどめておくことが難しく、高次の処理を行う余裕がないとされている。たとえば、第二言語では語の意味が想起される速度は第一言語よりも遅く、いったん想起されたイメージが劣化するのも早い(cf. Segalowitz & Hebert 1990)こと、熟達度の低い読み手は、正書法レベルなどの低次の局面に注意を集中するあまり、より高次の意味解釈や推測などの処理が犠牲になってしまうという研究もある。第二言語読解におけるこれらの現象を、低次の処理効率のひとつの指標としてワーキングメモリ(working memory)の概念で説明しようという試みがある。

読解過程では、新しく読まれた情報を既に読まれた情報と関連づけるために複雑な処理が行われる。その処理を行うためには情報を保持する必要がある。文章を構成する情報と情報を関連づけていく処理と、処理を行うために情報を一時的に記憶保持しておく作業はワーキングメモリで行われる。このワーキングメモリには容量の制限があるとされ、容量理論(capacity theory)と呼ばれる(Just & Carpenter 1992)。ワーキングメモリでは、情報の保持と処理がトレードオフ(trade-off)の関係にある。そのため、保持と処理のどちらかにワーキングメモリの容量を超えて認知資源を費やすと、もう一方が影響を受ける。その場合は単語認知や1文の文法解析などの言語処理が保持よりも優先される(Just & Carpenter 1992)と言われており、情報は忘却、あるいは長期記憶に送られる。

読解において、文の最後にたどりついた時点で、文の最初の部分の心的表象がワーキングメモリになれば全体の意味を構築することができない。さらに、テキストの

後半を読んでいるときに、前半の内容がワーキングメモリから脱落しては、テキスト全体のメッセージを読みとり損なう。第二言語読解の特徴としてしばしば指摘される、「ひとつひとつの文は理解しても文章全体として何を言っているかわからない」という状況は、語の意味や文法的解析などに認知資源を費やしてしまう結果、一度にワーキングメモリに貯蔵しておける心的表象の量が第一言語の読み手に比べて極端に小さくなっているためと説明されている。母語でテキストを読む場合、自動化されている言語処理が多いため、より多くの認知資源をワーキングメモリでの保持と文章処理に費やすことが可能である。そのため一貫性のあるテキストベースの表象が構築されやすい。一方、第二言語読解では単語認知、文法解析など言語処理の負担が母語と比べて大きく、ワーキングメモリでの文章の処理と保持に費やせる認知資源は母語の読解よりも圧倒的に小さくなる(Koda 2005)。そうするとテキストベースの表象を構築することさえ難しくなる。このように、第二言語読解において言語処理の制約は大きく、文章の処理に認知資源を配分することは難しいことがわかる。

2.3.2. 単語認知処理

テキスト理解は視覚から文字情報を取りこむ処理であるため、単語認知処理が重要な意味を持つ。母語の正書法の特徴が第二言語の単語認知処理に際してどのような影響があるか先行研究を概観する。第二言語としての日本語の場合、第一言語において漢字という正書法を用いる漢字圏学習者は、それ以外の学習者に比べて、漢語語彙の書字形態から意味へのアクセスが容易であるため、読解における内容理解の優位性が指摘される(Matsunaga 1999)。

日本語の書字体系を見ると、漢字とかなを用いるという表意文字と表音文字を併用している。こうした異なる2種類の文字体系を併用する言語は、世界にもあまり例がなく、単語の認知処理過程は、認知心理学の分野において1970年代後半から盛んに研究されてきた。かなで書かれた語の認識は視覚情報から音韻情報へと変換されて意味にアクセスされるのに対し、漢字で書かれた語は、視覚情報から音韻情報を経て意味にアクセスされるルートと、視覚情報から音韻情報を介さずに意味にアクセスされるルートがあり、その両方の情報処理が競合的に行われるとされる。これまでの知見から、漢字処理においては、書字処理の後に音韻符号化を経ずに意味処理されることがあること、かなに比べて意味表象へのアクセスが迅速であることが広く受け入れられている。よって、日本語母語話者の場合は、漢字の意味処理において、書字表象に依存しやすく、音韻符号化にはあまり依存しないという認知方略をとると考えられている。

一方、アルファベットなどの表音文字を第一言語で用いる学習者の場合は、一文字一文字が音素と対応しているため、音韻符号化に依存した認知方略をとっていると考えられる。このように第一言語における正書法が、表語文字であるか、表音文字で

あるかによって、単語認知方略が方向づけられると考えられる。

第一言語における単語認知方略が第二言語に転移される可能性を示唆した研究は、第二言語としての日本語においても、いくつか存在する。たとえば、Chikamatsu(1996)は、英語を母語とする日本語学習者と、中国語を母語とする日本語学習者の単語認知方略を調査した。その結果、英語母語話者は音韻情報に依存した単語認知処理を行っているのに対して、中国語母語話者は視覚情報依存型であることを明らかにした。このように第一言語における正書法の違いが、第二言語の単語認知方略にも影響を及ぼす可能性が示唆された。Mori(1998)は、米国の大学で日本語を学ぶ初級学習者に疑似漢字を使った短期記憶テストを行い、英語話者は音韻情報に依存した文字処理を行うのに対し、中国語母語話者と韓国語母語話者は視覚情報に依存した文字処理を行うことを示唆する結果を得た。しかし、この研究では韓国語母語話者を中国語母語話者同様に漢字圏学習者として分類しているが、中国語母語話者とは同列に扱えないことに注意を払う必要がある。確かに、韓国では、中学・高校で漢字教育が施されており、韓国語の語彙の中に漢語が多数認められる⁷。そのため、視覚呈示された語を処理する際には、書字から意味へのアクセスの過程で、音韻情報だけでなく、視覚表象の活性化も促進されていると考えられる。しかし、第一言語における正書法の基本が表音文字であるハングル文字であることを考慮すると、中国語母語話者とは同列には扱えない。

2.3.3. 習得研究からみた母語別の特徴

第一言語の特性が第二言語としての日本語の語彙習得や単語認知に強く影響することが広く議論されている。この節では関連する先行研究を概観していく。以下、第一言語を L1、第二言語を L2 として示す。

同根語促進効果

わかりやすい例として中国語を母語とする日本語学習者による日本語の漢字語の理解を挙げる。母語の中国語で漢字が使われているため、L2 日本語の漢字習得でも、母語の漢字や漢字語の知識が活用できる。51,962 の見出し語からなる国語辞典のうち、2 字からなる漢字語の割合は約 70%である(Yokosawa & Umeda 1988)ため、中国人日本語学習者の漢字知識は日本語の語彙習得に大いに活用されていると予想される。

玉岡(2017)によると、国際交流基金・日本国際教育協会(2007)の『日本語能力試験出題基準』(2007 改訂版)に掲載された 4 級から 2 級までの 2 字漢字語は 2,058 語で

⁷ 曹(1994:6)によると、韓国の辞書の見出し語における語種調査では、全語彙に占める漢語が 5 割を超えており、基本語彙の中にも多くの漢語が存在するという。

ある。その中で、図 2-4 に示したように、「学校」「科学」のような中国語と同形の語は 1,507 語あり、73.23%を占める。さらに、書字と意味が同じかまたは極めて類似する語、いわゆる同形同義語は 1,163 語あり、56.51%も占めている。これが、同根語(cognate)と呼ばれる語彙である。さらに、同形語から同形同義語を引いた同形異義あるいはやや意味が類似した語彙は 344 語で、16.72%である。残りの非同形語は 551 語で、26.77%に過ぎない(朴・熊・玉岡 2014)。このように多くの語彙が日中の書字および意味で類似しているかを示した。

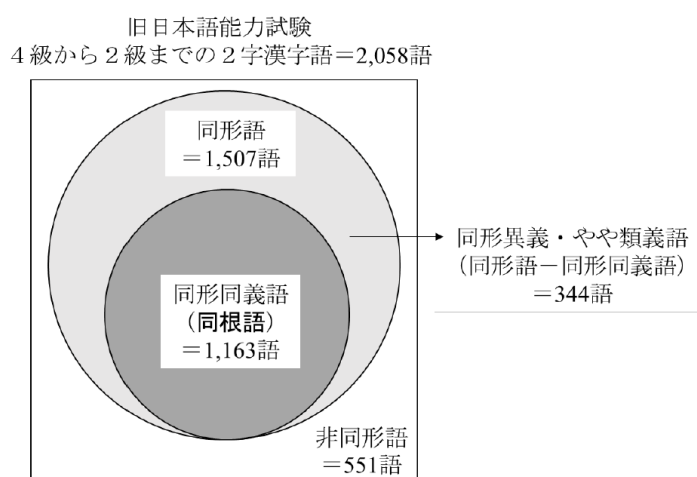


図 2-4 旧日本語能力試験の 2 字漢字語の書字と意味の日中の類似性による分類 (玉岡 2017)

玉岡(2017)は同根語の処理についての研究も紹介している。語彙性判断課題の実験では、同根語が非同根語よりも迅速に処理されることが報告されており、同根語促進効果(cognate facilitation effect)と呼ばれている。欧米言語のバイリンガルを対象とした L1 スペイン語と L2 英語などで、この効果が報告されている。日本語と中国語は類似した漢字で表記される。そのため、中国語を母語とする日本語学習者の場合は、両言語の漢字の書字的表象が密接に結合していると思われる。玉岡・宮岡・松下(2002)は、語彙性判断課題を使って、「青春」や「援助」など中日両言語に存在する漢字語は、「食事」や「承知」などの日本語に存在するが中国語にはない漢字語よりも迅速に処理されることを実証した。目標言語 L2 の語彙処理で観察される同根語促進効果は、非目標言語の L1 の情報も同時に活性化されることを示した。外国人日本語学習者が日本語の語彙を習得するということは、母語の L1 に加えて、日本語の L2 のメンタルレキシコンを脳内に構築する過程であると言い換えることができる。その過程で、新しく構築される L2 のメンタルレキシコンの表象群は、既存の母語の L1 の形態・音韻・意味・統語の表象群と結合する。その結果、両言語の語彙の表象群が無意識のうちに同時に活性化あるいは想起されると考えられる。この語彙処理のプ

ロセスは、L1 と L2 の 2 言語間で非選択的に起こるので、言語非選択的活性化 (language non-selective activation) と呼ばれている。この仮説によると、L2 の日本語の語彙を理解しようとする、無意識に L1 の語彙も想起されるという。

文字表記の類似性効果

文字表記については類似性効果についても議論されている。同根語でなくても、L1 と L2 の言語で同じ文字表記が使われる場合には、L1 の書字的な処理機能がそのまま L2 に適用され、書字のおよび音韻的に迅速かつ正確に処理される傾向がある。たとえ語彙がまったく異なっている、文字表記が同じであれば、L1 の書字的な処理機能が、L2 にも適用され、L2 の語彙処理が効率的に行えるようになる。これは、表記類似性効果 (script similarity effect) や表記親近性効果 (script familiarity effect) と呼ばれる (cf. 大和・玉岡 2009)。L1 と L2 の文字表記が一致する場合、書字的な処理において促進的に影響する。日本語能力が同じ条件で比較すると、日本語能力が同じ条件で比較すると、L1 中国語話者は、L1 英語話者および L1 韓国語話者に比べて、L2 日本語の漢字語の書字的な処理が迅速かつ正確に行えることになる。

玉岡(2017)は韓国語の文字表記についても概観している。ここではそれを引用する。『日本語能力試験出題基準』(2007, 改訂版)に掲載された 4 級から 2 級までの 2 字漢字語は 2,058 語であるが、うち日本語と韓国語で書字的に類似した 2 字漢字語は 1,872 語で、90.96% を占める (朴・熊・玉岡 2014)。ただし、この数値は、あくまで韓国語で漢字表記した場合である。現代韓国語は、漢字で表記されることがほとんどなく、ハングルと呼ばれる表音文字で表記される。この文字は、世宗大王が、広く一般民衆にも読める文字として、学者達に命じて作らせ、1446 年に『訓民正音』として公布された。その後、ハングルの使用については、賛否両論が展開されたが、朴正熙大統領が 1970 年に漢字廃止を宣言して、漢字教育を全廃しようとした。この政策は、1972 年に一旦撤回されたが、その後、漢字教育は選択制となり、漢字が読めない人々が増加し、ついには新聞でも漢字の使用が制限された。現在では、韓国語の文書はほぼハングルで書かれている。そのため、若い世代の韓国語母語話者は漢字をほとんど知らない。L1 韓国語のハングルと L2 日本語の漢字では、表記がまったく異なるので、たとえ両言語で同じ起源の漢字語が多数を占めていても、漢字処理における表記類似性効果は生じないとされる。

中国語母語話者・韓国語母語話者・英語母語話者の単語認知処理

玉岡(2017)は漢字語の処理についても次のように母語別に知見をまとめている。L1 中国語話者と L1 英語話者が L2 日本語の漢字語を処理する条件での比較研究 (玉岡 1997) がある。これは、カナダの大学に在籍し、同じカリキュラムで同じ期間だけ日本語を学習した中国語母語話者と英語母語話者を比較したところ、漢字語の処理

が極めて迅速であったことを示し、その理由として表記類似性効果を挙げている。また、高頻度の簡単な漢字語では画数の影響が見られなかったものの、画数が多いと処理が難しくなったことも明らかにした。これまで述べたのはすべて語彙性判断テストの結果、つまり単語レベルの認知処理についての研究である。しかし、表記類似性効果は読解においても証明されている。自己制御読み(self-paced reading)という実験手法による研究である。この方法は、長いテキストを句ごとにコンピュータのモニターに提示して、読み時間をミリ秒単位で測定する方法である。スペースキーを押すと前の句が消えて次の句が出るようにしておき、各スペースキーを押す間の時間を各句の読み時間とする。大和・玉岡(2013)は、語彙知識と文法知識を統制した L1 韓国語話者 20 名と L1 中国語話者 20 名に対して、自己制御読みによるオンラインでのテキストの読み時間を測定した。全体のテキストを読み終わってから読解問題を提示して、テキストの理解度を測定した。その結果、L1 中国語話者と L1 韓国語話者で、漢字語が含まれる句の読み時間に大きな差が観察された。特に、漢字が 5 つ続く「社会生活上の」ような句や、「露呈」という低使用頻度の漢字語が含まれる述部では、その差が著しかった。その理由として、現代韓国語では、ハングルが使用されているため、若い世代では、漢字の読み書きがほとんどできない。そのため、漢字語の処理において、漢字知識が活用できず、表記類似性効果が見られなかったと結論づけた。一方、使用頻度の高い語句(cf. 「様々な」「問題が」)では、両群に差がみられなかった。したがって、L1 韓国語話者であっても、ある程度頻繁に使用する漢字語であれば、処理時間が L1 中国語話者のように速くなることも示された。

ほかに L2 日本語を対象とした研究として Horiba(2012)がある。Horiba(2012)は中上級レベルの中国語、韓国語を母語とする日本語学習者を対象に、語彙知識とテキスト理解の関係を調べた。テキスト理解は再生テストと要約テストで測定し、語彙知識(語彙の広さと深さ)との関係を調べた。その結果、中国語母語話者も韓国語母語話者も語彙知識の広さと深さはともにテキスト理解と有意な相関関係があることがわかった。これは EFL(English as a Foreign Language)学習者を対象とした先行研究の結果を支持するものであった。しかし、語彙知識の深さとテキスト理解の関係については母語によって特徴が現れた。それはシンタグマティック(syntagmatic)の連想とテキスト理解との相関である。中国語母語話者はシンタグマティックの連想だけがテキスト理解の間に有意な相関があり、反対に、韓国語母語話者はシンタグマティックの連想だけは有意ではなかった。両者の相違について母語の影響による痕跡が現れているのではないかと推察している。まず、中国語は孤立語で SVO 型の語順を持つ言語であり、膠着語で SOV 型の語順を持つ日本語とは大きく異なる。したがって、中国語母語話者は日本語の文を処理する際に、母語に基づく統語知識が有効ではなく、語と語の間のシンタグマティックな関係についての知識の習得が遅れる(堀場 2015)。また、中国語母語話者の場合、日本語のテキストを読む際に、漢字で表記さ

れた内容語から意味を抽出するために書記形態素処理に依存し、統語処理にあまり積極的に重視しない傾向がある(Horiba 2012)。そのような処理が結果として、シンタグマティックの連想の知識の低い発達度につながったと説明している。

それに対して、韓国語母語話者の場合、韓国語は膠着語で SOV 型の語順を持つ、統語的に日本語に近い言語である。したがって、日本語のテキストを読む際にも語順や文構造の情報を積極的に利用する。そのような積極的な統語処理が、L2 日本語においてシンタグマティックの連想の知識の習得に影響し、その知識がテキスト処理において使用されたと考えられる。別の言い方をすれば、L1 を基盤とする要因が L2 テキスト理解に及ぼす影響が現れている(堀場 2015, Horiba 2012)。このことは L1 背景と L2 読解の関係について、今後直接的に研究される必要性があることを示唆している。

韓国語母語話者の単語認知については小森(2005)の研究がある。小森(2005)は、読解と聴解における単語認知と文章の内容理解を測定する実験を行った。その結果、聴解課題のほうが正答率が高いことから、意味表象へのアクセスは、視覚入力よりも聴覚入力は促進されやすい可能性を示唆した。それを説明するものとして、学習者の L1 の単語認知方略の転移の存在に求めた。韓国語母語話者は、L1 において表音文字であるハングルを使用しており、音声に対して敏感で、音韻表象への依存が書字表象に比べて高く、このような L1 の処理方略が L2 の日本語にも転移したというものである。これは同根語であっても非同根語であっても音韻表象から意味へのアクセスが強いという。また、中国語母語話者については、視覚情報に依存した情報処理を行っており、音韻情報への依存度が低いという結果を示した。これは先行研究の結果を支持するものである。

邱(2002)は、中国語 L1 と韓国語 L1 の日本語学習者の日本語の漢字語彙の処理方略を検討した。その結果、母語において漢字を用いる中国語 L1 と韓国語 L1 の学習者では、漢字語彙を処理する際に、書字から意味へ直接アクセスしているか、または、L1 の音韻符号化を経て意味にアクセスしていた。つまり、日本語の音韻符号化は行われていない可能性が示唆された。特に、中国語 L1 の場合、中国語と日本語とで書字と意味が同一である同根語の処理の際に、書字から中国語の音韻符号化が起こっていると考えられた。

以上見てきたように単語認知や読解における L1 の L2 に対する影響は母語転移であり、この現象は言語心理学や認知心理学で認められてきた(表 2-2)。母語転移という現象が認められた心理学と隣接している日本語教育を考えた場合、読解における母語別の特徴は、そのまま母語別の日本語教育に生かされるべきである。母語転移を積極的に肯定し、母語別に日本語教育を考えていくという立場を主張してきたのが張(2007,2011)である。次の節で張氏の主張を紹介する。

表 2-2 日本語テキスト読解における母語別の特徴

	中国語	韓国語	英語
認知資源	語の意味が想起される速度は第一言語よりも遅く、いったん想起されたイメージが劣化するのも早い。熟達度の低い読み手は、正書法レベルなどの低次の局面に注意を集中するあまり、より高次の意味解釈や推測などの処理が犠牲になる。		
単語認知	視覚情報依存型 (Chikamatsu 1996, Mori 1998) 同形同義の同根語が多く、漢字知識は日本語の語彙習得に大いに活用されている。同根語は非同根語よりも迅速に処理される。L2 の日本語の語彙を理解しようとする、無意識のうちに L1 の語彙も想起される。(玉岡 2017) 表記類似性効果があり、英語、韓国語母語話者よりも日本語の漢字語の書字的な処理が迅速かつ正確に行える。(玉岡・大和 2009) 漢字で表記された内容語から意味を抽出するために書記形態素処理に依存し、統語処理にあまり積極的に重視しない傾向がある (Horiba 2012) 漢字語彙を処理する際に、書字から意味へ直接アクセスしているか、または、L1 の音韻符号化を経て意味にアクセスする。(邱 2002)	L1 韓国語のハングルと L2 日本語の漢字では、表記がまったく異なるので、両言語で同じ起源の漢字語が多数を占めていても、漢字処理における表記類似性効果は生じない。(玉岡 2017) 中国語母語話者に比べ漢字語が含まれる句の読み時間が長い。漢字が 5 つ続く「社会生活上の」ような句や低使用頻度の漢字語が含まれる述部でその差が著しい。(大和・玉岡 2013) 統語的に日本語に近い言語であるため、日本語のテキストを読む際にも語順や文構造の情報を積極的に利用する。(Horiba 2012) 意味表象へのアクセスは、視覚入力よりも聴覚入力が促進されやすい可能性。(小森 2005) 漢字語彙を処理する際に、書字から意味へ直接アクセスするか、または、L1 の音韻符号化を経て意味にアクセスする。(邱 2002b)	音韻情報に依存した単語認知処理 (Chikamatsu 1996, Mori 1998) 画数が多いと処理が困難(玉岡 1997)

2.3.4. 母語転移と対照研究

張麟声氏は「言語教育のための習得研究」の必要性を主張し、そのためには①母語と目標言語の体系の異同を正確に把握し、ズレが生じている箇所を特定して誤用が現れる可能性を予測する(対照研究)、② ①の予測を学習者コーパスを用いて検証する(誤用観察)、③ ①と②で得られた結果を調査で確認する(習得研究)という 3 つの手法を合わせた調査が必要であると、これを「三位一体の習得研究」と呼んだ(張

2007,2011)。庵(2017)もこの考え方を敷衍し、母語の知識を生かした日本語教育の研究を進めている。

張氏の主張を紹介する前に、母語転移と対照研究の時代変遷について張(2007)を引用しながら以下に簡単にまとめておく。対照研究は 1940～1960 年に栄えていたが、1960 年代の終わりごろから 1970 年代にかけて、対照研究およびそのよりどころとなる母語転移が理論と実証の両面から批判を浴び、人々から見放されるようになった。その後 1980 年代に入ってから、ようやくバランスの取れた母語転移の考え方が成立するにいたった。母語転移が新たに日の目を見るようになったのは、音声面だけではなく、文法や語彙に関しても母語転移の痕跡が存在していたからであった。また、正の転移の「発見」も後押しした。第一言語は、いわば「学習者の内部からのインプット」とみなされ、その意味で、転移は「干渉」ではなく、認知プロセスである(Rod Ellis 1997)とされた。

日本語教育界における対照研究は、2000 年代に入ってその役割と意義について論じられるようになってきた。日本語教育学会編(2005)『新版 日本語教育事典』の記述の一項目として、「対照研究と日本語教育」をたて、「外国語教育における学習上の問題点を解明する上で、対照研究がきわめて重要な方法であることは疑いない(p.697)と記述されている。

母語転移について学界で本格的に取り上げたのは、野田尚史、迫田久美子、渋谷勝巳、小林典子(2001)『日本語学習者の文法習得』であった。ここでは「学習者の母語の影響」という一章を立てて解説している。そこから母語転移は複雑な現象で、様々な形で起こっていると考えられた。認知的な枠組みでは、第一言語は一種の「学習者の内部からのインプット」だとみなされ、したがって、第二言語学習者が、インプットに含まれる情報を利用して第二言語規則を構築するときには、おのずと第一言語の知識をも利用していく。つまり、構築した第二言語の規則には不可避免的に第一言語の要素が入っていくと考えられている。

張はこれまでの対照研究のあり方や母語転移のとらえ方をふまえて、母語転移を生かしたり防いだりするための習得・対照・類義表現研究という三位一体の研究構想を主張している。対照研究は言語研究の立場に立って進められたものが多く、言語教育のための対照研究があまり見られないのが現状であると述べている。

張は新しい研究のスタイルを提案している。それは習得のプロセスにおいて、母語の知識が「論理的」にどのように活用されうるかを検討し、それに対応する方策を考えるという研究である。

そのためには習得プロセスのモデルが必要となるが、これを学習(知識の獲得)、記憶(知識の保持)、応用(知識の利用)の 3 段階からなるものと仮定する。この応用については、理解と表出の 2 つの側面に分けて考える必要がある。理解の側面とは、学習者が目標言語の音声や文字に向き合ったときに、その音声や文字を通して意味を

理解することであり、理解するときは、記憶に保持されている知識を動員し、場面的な要素をも手がかりに、もっている知識だけではわからない音声形式や文字形式の部分の意味・機能を推測して理解に努める。一方、表出の側面とは、学習者が必要に迫られて、目標言語の音声や文字を使って何かを伝えていくことである。

読解で重要となる表記のレベルを考えると、母語と表記と目標言語の表記が同じまたは類似している場合、母語の知識が介入する。中国語母語話者の場合、表記の角度から母語知識が利用されることがあるので、正の母語転移も負の母語転移も起こる。よって、表記レベルでの対照研究をはじめとする様々な研究を行う必要がある。文法や音声においても転移は考えられるものの、圧倒的に多いのが語彙である。母語転移が正用につながり、誤用につながらないようにするには、対照研究を通して、母語形式と目標言語形式の間の意味・用法の異同を明らかにし、明示的知識として学習者に与える必要がある。

母語転移という事実は目の目を見るようになったが、それに対応するために積極的に対照研究を行おうという声はそれほど強くない。その理由として、母語と目標言語の形式の意味・用法がずれていても、誤用を起こす場合とそうではない場合があるからだろうと推測している。しかし、両者が完全に一致し、かつ、学習者にそれに関する知識があれば、誤用は起こりにくいと考えられる。よって、まずはしっかり対照分析を行い、母語との目標言語の形式の性格な対応の仕方を明示的な知識として学習者に与える必要がある。つまり、対照研究は、明示的な知識として学習者に与える段階でその成果が求められている。

張氏は学習者が実際に表出した中間言語についての研究、具体的には中間言語における誤用の傾向を中心に見る研究を意図している。ここでは誤用を中心に見るものの、正用の部分を一切見ないということではない。習得研究では両方を見る必要があるが、まずは誤用を重点的に見ると主張する。なぜなら、よく間違えられる形式だからこそ、いかに工夫してそれを教えるかということを考えなければならないからであると述べている。それは研究が記述に終わるのではなく、教育の改善に役立つものでなければならないという考えに基づいている。

理解の研究である読解においても、同じことが言える。「読むための文法」「読むための語彙」が、L1と目標言語である日本語とどのような異同があるかそのずれを明らかにする必要がある。そして、それを明示的知識として教育に生かす必要があると考える。

第3章 語義の解釈と誤読に関する先行研究

文章理解で重要なのは、文章を構成する語の意味、つまり語義がわかることである。語義の解釈にはテキストの文脈や文法から妥当であると考えられる正しい解釈もあれば、そうではない誤った解釈、いわゆる誤読もある。本章では、まず第二言語習得研究の分野における語義の解釈についての先行研究を概観する。具体的には、未知語の意味推測に関する研究について述べる。次に、誤読に関する先行研究を、母語話者と第二言語学習者の場合に分けて述べる。

3.1. 語義の解釈に関する先行研究

未知語の意味推測を扱った研究は、欧米語を対象に数多く行われてきた。文章内の未知語に対して、どのようなストラテジーや知識源が用いられているかという研究(cf. de Bot, Paribakht & Wesche 1997, Nassaji 2003)、一文内に含まれる情報の違いが、未知語の意味推測にどのような影響を与えるかという研究(cf. Mondria & Wit-de Boer 1991)に分けられる。

前者の例として Nassaji(2003)は、中級英語学習者の意味推測ストラテジーと意味推測に用いる知識源を、発話プロトコル法によって観察した。その結果、音韻的類似性からの類推、推測した意味と文脈情報との照合語の構成要素からの推測など、学習者は多様な意味推測ストラテジーを用いていることがわかった。また、意味推測に用いる知識源として、世界知識、形態素の知識、文法知識、談話知識、母語知識の5種類が報告されている。

後者の例として Mondria & Wit-de Boer (1991)は、フランス語学習者に対して「主語(subject) + 動詞(verb) + 未知語(targetword) + 未知語の機能(function of the targetword)」を基本単位とする文における情報の有無と意味推測の成功の関係を調査した。未知語の機能とは、未知語の指示対象物の使用の目的や用途を指す。たとえば「じょうろ」の場合、主語は「庭師」、動詞は「満たす」、未知語の機能は「植物に水を与えるために」である。Mondria & Wit-de Boer (1991)はこれらの情報の中で特に未知語の機能の有無が最も意味推測に影響することを報告している。

日本語の場合、未知語の意味推測に関する実証的研究は数が限られ(Kondo-Brown 2006, Mori 2003, Mori & Nagy 1999, 山方 2008, 崔娉 2017)、ほとんどが漢字熟語を対象としていた。

Kondo-Brown(2006)は、英語を母語とする学習者を対象に、文章に含まれる未知の漢字熟語の意味推測について検討した。その結果、漢字熟語を単独で提示されるよりも、文章で提示された方が正確な意味推測ができるが、文章で提示されても成功に至らない推測も多いこと、日本語能力が高い方が正確な意味推測ができること、未知

の漢字熟語でも、漢字熟語の読みがある程度わかれば、意味推測の成功に繋がることを明らかにした。

Mori(2003)と Mori & Nagy(1999)の研究も、英語を母語とする学習者を対象に、漢字熟語の意味推測を検討した。①対象の漢字熟語を単独で示し漢字熟語の構成要素のみから意味推測を行う、②対象の漢字熟語が入る部分を空欄にした一文を提示し、一文の情報のみから空欄に入る意味を推測する、③対象の漢字熟語を含む一文を提示し、漢字熟語の構成要素と一文の両方を利用して意味推測を行うの三条件における意味推測を比較した。その結果、漢字熟語の構成要素と文脈情報の両方を利用できる条件が、より正確な意味推測が可能になること、文脈情報を意味推測に活用できるか否かは日本語能力と相関があるが、漢字熟語の構成要素からの意味推測は日本語能力とは相関がないことを示した。

山方(2008)は、韓国語を母語とする学習者、中国語を母語とする学習者を対象に、文章の中に含まれる未知語の意味推測と意味推測に用いる知識源、日本語能力、文章の内容理解、母語背景との関係を検討した。その結果、日本語能力が高い者は正確な意味推測ができ、文章の内容を理解している学習者ほど意味推測が正確であること、母語背景によって意味推測や意味推測に用いる知識源が異なることを示した。なお、調査は読後に行われ、オフラインの理解を調べていることとなる。山方はオンラインでの調査が今後は望まれると述べている。

崔娉(2017)は、中国語を母語とする日本語学習者の読解において、未知漢字語彙の意味推測の実態を調査した。その方法は、文章を読みながら、文章に出現する漢字語彙の意味を推測し、そのように推測した理由を報告するというものである。その結果、日中同形同義の漢字語彙の意味推測が最も簡単で、推測に必要な手がかりも最も少ないということを明らかにした。なお、この研究では文全体の意味の報告は求めず、ターゲット語の意味だけを調べている。

2018年以降、石黒(2018)、蒙(2018)を皮切りに、烏・Dang(2020)、劉・Nguyen(2020)、蒙・Nguyen(2020)、布施・Dang(2020)などの研究が出てきた。これらはすべて中国人、ベトナム人学習者の「読むための語彙力」の実態を明らかにすることを目的として行われた一連の研究である。調査対象者は日本語を学習している中国語母語話者80名、ベトナム語母語話者80名、日本語母語話者20名という大規模なものである。その特徴として、母語を用いた文章理解プロセスの可視化が挙げられる。その実現のために、対象となる日本語の文⁸を調査対象者に母語で翻訳してもらい、当該文中に含まれる、問題となる多義語の意味を把握するという手法を用いた。その後、なぜそのような意味になると理解したのかも母語で説明してもらい、これによって多義語の意味の限定や推測の方法を知るという手続きがとられた。多義語の意味の推

⁸ 調査例文はすべて石黒圭氏が作成した。

測にあたり、注目したのが手がかりの活用であり、学習者が用いた語義推測の手がかりを仔細に観察し、「語彙の手がかり」「構造的手がかり」「内容的手がかり」「環境の手がかり」という 4 種 13 種に分けて整理をしている。この手がかりについては英語教育の知見が活用された(cf. Nassaji 2003)。

烏・Dang(2020)は、日本語学習者にとって理解が難しいとされる基本動詞に注目し、多義的な和語動詞の語義把握の方法について調査した。その結果、和語多義動詞の意味の絞り込みに影響を与える要素として、①ターゲット語が漢字で書かれているか否か、②ターゲット語が基本義を表しているか派生義を表しているか、③ターゲット語と直前の項との連語的組み合わせが典型的なものか否か、が影響することを明らかにした。

劉・Nguyen(2020)は、外来語の語義把握が読み誤りやすいという先行研究を出発点とし、外来語の語義把握の方法について調査した。その結果、外来語の語義理解は母語・日本語能力・滞日経験に比例しているものの、推測能力は必ずしもそうではないことを明らかにした。

蒙・Nguyen(2020)は、日本語学習者は会社名や人名などの固有名詞を固有名詞と考えず、普通名詞ととらえる傾向があるという藤原(2016)に基づいて、固有名詞の語義把握の方法について調査した。その結果、日本語学習者は、①固有名詞の語義知識は母語・日本語能力・滞日経験に比例しているが、推測能力は必ずしもそうではないこと、②固有名詞の語義把握における 4 種類の手がかりのうち、「構造的手がかり」が最も効果的であることを明らかにした。

布施・Dang(2020)は、学習者は既習語であっても、空間や数量を表す語の語義理解について、日本語との認知の差があることに注目し、これらの語の語義理解過程について調査した。その結果、語義知識は学年や留学経験によって高まるが、個人差が大きいことが明らかになった。また、複数の手がかりを同時に利用する学習者は未知語の推測に成功しやすいが、語彙を正確に覚えていない、もしくは母語や母語文化の影響を強く受けている学習者は既知語でも語義理解に失敗したことを示した。

これら一連の研究によって、日本語学習者と日本語母語話者が多義語の意味の限定や推測をどのように行っているかが詳しく可視化され、未知語の意味類推の研究分野に大きく貢献した。

ただし、この一連の研究における調査は、1 つのケーススタディ(赫楊 2020)を除き 1 文での質問であるため、語義の解釈はあくまでも 1 文内での話である。つまり、文のレベルを超えていないという点に留意が必要である。テキストとは、意味的に一まとまりをなす文連続である(庵 2007)こと、テキストは 1 文からなることもあるが、多くの場合 2 文以上から構成される(Halliday & Hasan 1976:1)という定義に鑑みると、2 文以上の文連続から構成されるテキストを読んだときの語義の解釈には踏み込んでいない。よって、本論文では、これまで研究されていなかった、文連続から構

成されるテキストにおける語義の解釈を明らかにする。

3.2. 文法の把握に関する先行研究

石黒(2020)が概観するように、日本語の文法研究は早くから日本語研究の中心であり、語彙研究よりもはるかに蓄積がある。しかし、その多くは文法の記述的研究が中心であり、日本語の運用に関する研究は多くない。文章を理解するときに重要な文法の一つは、長く入り組んだ構造をした文を理解する能力であるが、そのような「読むための文法」(野田 2019)のような文章理解に特化した文法研究は限られている。このような状況に一石を投じたのが、前述した石黒(他)(2020)の研究である。石黒(他)(2020)は一連の研究の中で学習者の語彙力だけでなく、「読むための文法力」の実態を明らかにするための研究も行った。そこで対象とした文法項目は、接続詞、指示語、連体修飾節である。調査対象者は「読むための語彙力」調査と同じである。以下、この一連の研究について説明を加える。

井伊・宮内(2020)は、接続詞による後続文脈の絞り込みの過程を調査した。

田中・宮内(2020)は、文脈指示を理解する際の困難点を明らかにする調査を行った。その結果、日本語学習者は、指示語に近いところから指示対象を探していたり、語彙の知識が活用できていなかったりするために文脈情報が活用できておらず、指示対象を読み誤ることを明らかにした。また、指示対象が指示語の前にあるという認識があるため、後方照応が理解できなかつたり、誤った指示対象の解釈に合わせて前後の文脈を理解しようとしたりしてしまうという問題があることを指摘した。

張(2020)は、複雑な連体修飾構造が含まれる長い文を理解する際のプロセスを調査した。その結果、連体修飾節の範囲の把握、文の主述構造の把握が困難点であることを明らかにした。

3.3. 誤読に関する先行研究

3.3.1. 母語話者の誤読に関する先行研究

誤読は学習者に限ったものではなく、母語話者にも見られる現象である。日本語母語話者の文章理解について研究をしている西林(2005:95-97)は、子どもに頻繁に見られる誤読は大学生にも見られるという事実を指摘している。88人の大学生に小学校6年生の国語の教科書に掲載されている長文(「正倉院とシルクロード」)を読ませ、読了後に内容について確認する質問に答えてもらったところ、たとえば、「この文章の中で仏教と正倉院の関係はどのように書かれていたと思いますか」という問いに対し、正しく「書かれていない」と回答した人はわずか9%に過ぎず、残りの約50%が「無回答」「わからない」「覚えていない」と回答し、残りの41%は何らかの関係を記述した結果となった。西林は、正倉院が軸になった文章であるため、「何らかの記述があつたに違いない」という文章における「全体の雰囲気」が「部分の記述」から、

「全体の雰囲気」に都合のよい「意味を引き出し」てしまうと考察した。「雰囲気」とは読み手が読み取った「文脈」にほかならないとも述べている。他の多くの質問においては、部分の記述が、「ああ、あれだな」と思われるようだと、かなりの「読み飛ばし」が起こり、その結果、その空白に、そのとき読み手が使っている文脈が侵入し、文脈に適合する「都合のいい意味」を部分に与えてしまうという。全体の大雑把な文脈を打ち破るほどには、部分がしっかりと読まれていないため、間違っただけの状態が維持されており、つまり、部分の読みが不十分だったり間違ったりしているため、「間違っただけのわかったつもり」が成立すると結論づけた。さらに、「間違っただけの読み」をもたらす不備が「部分の読み」にあると考える一方で、「部分を読むという過程は、字句通りに読んで間違いが侵入する余地が少ないと考えられがちである」という両者のギャップを強調している。

麻柄(1994)は文学作品の読み誤りと修正について調査し、読み手があらかじめ持っていた「スキーマ」が読み誤りに影響したことを示した。スキーマとは、読み手がすでに持っている、あることがらに関するひとまとまりの知識である。180人の大学生に木下順二の『夕鶴』を読ませ、いくつかの質問とともに作品のテーマについて答えてもらっている。『夕鶴』は過去に小学校4年生の教科書に採用されたことがある程度の難易度である。この作品で、つうがよひょうのもとにやってきて布を織った理由を、助けてもらったことへの「恩返し」として読むことは正しくない。なぜなら、作品中には「そのよひょうの親切がうれしくて、つるは「つう」という女になって、よひょうの所へおよめに来たのでした」「つうの願いはお金でも都でもなく、ただ、よひょうと、二人で楽しく働きながら、いつまでもいつまでもいっしょにいらしたい、ということだけだったのです」とあるからである。これらの叙述に基づけば、つうの行為の動機が「恩返し」であるという読みは否定され、これに対して「愛」であるという読み取りは保持されるとしている。しかし、調査では、『夕鶴』を実際に読んだにもかかわらず、1回目の質問では極めて多くの協力者が「恩返し」的な読み取りを示した。そしてそのほぼ全員が『鶴の恩返し』という民話を知っていた。このことから、読み誤りの原因として、『夕鶴』は助けられた者が助けた者に利益をもたらすというパターンであることに加えて、主人公の動物が『鶴の恩返し』と同じ「鶴」であるので、多くの読み手はこの物語を、過去の経験から形成していた「恩返しスキーマ」に誤って取り入れたと結論づけた。その結果、つうの行動の動機や意味を考える際に、あるいは作品のテーマを考える際に、このスキーマの中で処理が行われるため、読み手は誤った解釈を持つことになったと考察した。このスキーマによって、文章記述の「部分」が読み飛ばされたと考えられる。

以上のことから、西林(2005)が言う「全体の雰囲気」や、麻柄(1994)が言う「スキーマ」はいずれも間違っただけの「わかったつもり」や不十分な「わかったつもり」をつくり出してしまふことを示唆している。

3.3.2. 第二言語学習者の誤読に関する先行研究

第二言語学習者の誤読の研究は、文や文章構成についてその困難点を考察した深尾(1994)や山本(1995)にその萌芽が見てとれる。しかし、本研究が扱うような語句や文の意味など言語形式の解釈に焦点をあてたミクロな誤読に関する研究は、緒に付いたばかりである。一方、内容の予測や結末の理解といったマクロな誤読に関連した研究はこれまでも進められていた。たとえば、読みにおける予測(大隅 2005)や文章構造(舘岡 1996)、自問自答の範囲(舘岡 2001)による読みの変化についての研究である。

大隅(2005)は、非漢字圏の日本語学習者に宮澤賢治の「注文の多い料理店」を 11 分割して読ませ、各部分の読みが終了した時点で次の部分についての予測を書かせるという調査をした。その結果、一部の学習者は「ここは料理店である」という初発の理解にしがみつき、最後まで「人間が食べられる料理店である」という結末が理解できなかったことを示した。これについて著者の大隅は、文字情報を正確に処理できる日本語能力を持っていたとしても、文字情報が先行した理解と矛盾する場合、それを超えて読みを修正することは難しいと述べている。

舘岡(1996)は、英語を母語とする日本語学習者を対象に起承転結型の文章を使って理解過程を調査したところ、「転」とその後ろの部分で誤って理解し、論理関係を誤解するケースが多いことを示した。

また、舘岡(2001)では、英語を母語とする日本語学習者を対象に、過去の調査で主語省略や主語変化、擬人法、未知語の理解で困難になることがわかっている論説文を材料に、発話思考法によって読解過程を調査した。読解力の高い読み手と低い読み手の読解過程における自問自答を比較検討した結果、前者は後者に比べて、よりグローバルな自問をし、その解決過程(自答)では疑問点とテキスト情報、既有知識を交流させながら、情報を統合し文章理解に努めていることを示した。舘岡(2001)においてグローバルな自問とは単語の辞書的知識を必要とするような階層の下位にあるローカルな問いに比べて、既有知識を動員して推論を必要とするようなより上位の階層にある問いを指す。

上記の研究で見られる誤読は、実際の読みにおける具体的な表れではあるが、本研究が主に分析の対象とするミクロな視点にとぼしく、テキスト中の言語形式と誤読の関連が体系的には論じられていない。誤読をミクロな視点でかつ体系的に扱った研究としては、学術論文で調査をした野田(2014)や野田・花田・藤原(2017)、POKROVSKA(2017)がある。野田(2014)は、中国語を母語とする上級日本語学習者である大学院生に、それぞれの専門分野の学術論文を読んでもらい、日本語でその内容を話してもらう調査をした。その結果、(1a) 句の不適切な推測、(2a) 文の構造の不適切な捉え方、(3a) 既有知識に基づく不適切な理解が問題点として指摘され、それぞれに対して、(1b) 文脈との関係を考えながら知らない語句の意味を適切に推測

する方法、(2b)「読むための文法」を活かして複雑な文構造を適切に捉える方法、(3b)論文に書かれている内容を推測する際に、背景知識を使う方法、の3点を日本語教育に取り入れる提案がなされている。(1b)の具体的な例としては、読み飛ばしてよい未知語と、辞書などで意味を確認すべき未知語を見分ける技術や、ある語の語釈が辞書に複数記載されている場合に文脈に合わせて選び取る技術を挙げている。しかし、このような技術を可能にする具体的な導入方法については言及がなく、提案の域を出ていない。また、野田(2014)は、意味の理解を正確に知るためには学習者の母語を使った調査の必要性を指摘した。その流れをついで、母語を使った調査が次に述べる野田・花田・藤原(2017)である。

野田・花田・藤原(2017)は、同じく中国語を母語とする上級日本語学習者である大学院生に、それぞれの専門分野の学術論文を読んでもらい、母語である中国語でその内容を話してもらう調査をした。その結果、次のような読み誤り⁹を明らかにした。(i)語の意味理解に関する読み誤り：個々の漢字の意味から語の意味を不適切に推測したり、辞書に載っている複数の語義から不適切な語義を選んだりする。(ii)文構造の捉え方に関する読み誤り：文のどの部分がどの部分を修飾しているか、文のどの部分が並列されているかということを適切に捉えられない。(iii)文脈との関連づけに関する読み誤り：省略されている語句を文脈から適切に特定できなかつたり、照応先の語句を文脈から適切に特定できなかつたりする。(iv)背景知識との関連づけに関する読み誤り：論文の文章構成や記述内容に関して、自分の背景知識と本文との関連づけが適切にできない。

野田(2014)と野田ほか(2017)はいずれも漢字圏である中国語母語話者を対象にした研究であったが、非漢字圏の学習者を扱った研究として POKROVSKA(2017)がある。POKROVSKA(2017)は、ロシア語・ウクライナ語を母語とする中級日本語学習者に短い意見文と物語文を読んでもらい、その文章理解における誤読を質的に分析した。誤読のきっかけとなりやすい要素を明らかにしたうえで、誤読が生じる過程を可視化し、次のことを明らかにした。「文字認識レベルにおける読み誤り：語彙活性化のきっかけとカタカナの問題」「文字列処理における誤り：分節上の課題」「語彙レベルにおける読み誤り：キーワードの読み誤りが文章理解に及ぼす影響」「文法レベルにおける読み誤り：「語り手」を示す一人称の省略復元プロセス」「談話のレベルにおける読み誤り：接続表現が表す論理関係を読み取る際の問題」である。

ポクロフスカ(2019)では、自身の誤読の研究を概説しており、そこでは誤読について次のようにまとめている。ここでは抜粋して紹介する。

⁹ 野田(2014)や野田・花田・藤原(2017)では「誤読」ではなく「読み誤り」という用語を使っているが、両者が指す現象は同じである。

誤読は、ボトムアップ処理上の失敗をうまく修正できないときに発生する。学習者の読み手としてのリソースも限ら得ており、処理に優先順位をつける過程で読み飛ばされた部分も誤読のきっかけとなる。誤読には、文字列の誤読(文字の誤読と文字列の誤文節)、語彙レベルの誤読、文法レベルでの誤読がある。一つの誤読が文章全体の理解を崩していくこともある。また、文法要素は処理されず読み飛ばされがちである。文章理解においては漢字や語彙、意味を担う要素の処理が優先される。文が長く負担が大きい語彙が多いほど、それらの処理で認知容量がいっぱいとなり、文末形式や文型までをしっかりと解読する余裕がなくなる。理解できた部分を忘れる前に、それらを背景知識などでつなぎあわせようとする。文法レベルでの誤読の多くは読み飛ばしや、語彙の意味に無理やり合わせた解釈によるものである。学習者の場合、意味を担う要素の処理も不完全であるため、それらをなんとか結びつけようとしたときには無理のある解釈が生まれやすい。(ポクロフスカ 2019:22-23)

3.4. 先行研究と本論文とのちがい

これまで概観したように、第二言語学習者の語義の解釈や誤読についての研究は2014年あたりから進んできたものの、現状では依然としてその数は限られている。これは理解レベルの研究の立ち遅れ(庵 2017)といえる。また、先行研究での調査対象者は中国語母語話者とベトナム語母語話者、ロシア語・ウクライナ語母語話者であり、日本語学習者の多くを占める韓国語母語話者や英語母語話者についての研究は少ない。また、同じ材料文を使って英語、韓国語、中国語母語話者、そして日本語母語話者を対象者として、母語による調査をした研究は管見の限り見あたらない。さらに、調査で用いる材料文も学術論文や論説文が中心で、物語文が少ないというように文章のジャンルも偏っている。

語義の解釈の研究においては、先に述べたように石黒(他)(2020)はその解釈過程を多角的に明らかにし、多義語の意味類推の研究を大きく押し進めた。しかし、この一連の研究における調査は、1つのケーススタディを除き1文での質問であるため、語義の解釈はあくまでも1文内での話であり、文のレベルを超えていないという点に留意しなければならない。また、調査で使用した実験文はすべて作例であった。論文筆者が例文を実際に読んでみたところ、例文によっては情報が物足りなく、状況がわかりにくいものや判断に迷うものもあった。これは、1文のみの文脈を使って語義の解釈を調査するという点において、分析の際にぶれを生じにくくするという正確さを担保したかわりに、一文のみで文脈をあらわすことの限界を示していると考えられる。その意味で、作例ではなく生の素材であるオーセンティックなテキストの理解とは同等には扱えない。

また、野田(2014)と野田ほか(2017)では誤読の種類が網羅的に示されているが、調

査対象者はそれぞれ別の材料文を読んでいるため、調査で見られた誤読が学習者に共通して見られるものなのか、または、個別なものなのか判断がつかないという問題点もある。

そこで、本研究では、同じ材料文を英語、韓国語、中国語母語話者に読んでもらい、そのテキスト解釈の過程を明らかにする。母語にかかわらず共通に見られる誤読があれば、問題を誘発する要因がテキスト側にあることになる。また、母語別の誤読の特徴を見い出せれば、読解指導における母語別の留意点も明らかにできる。日本語教育への応用を考えた場合、上記の視点を生かして指導すればよい。テキストを対照言語学の観点からも十分に分析したうえで、テキストと学習者の発話データを統合的に見ていくことで、上記のことが初めて可能になる。これは張(2011)のいう「三位一体の習得研究」とつながっている。

第4章 テクストのジャンル特性

テキストには様々なジャンルがある。ジャンルとは、簡単に言えば文章の種類や様式である。代表的なものとして、説明文や物語文がある。テキストのジャンルはテキスト理解に影響を及ぼすと考えられている。本章では、説明文と物語文をとりあげ、そのジャンル特性が読解にどのような影響を与えるか考察する。本研究で材料文として用いた学術論文は説明文に、また、短編小説は物語文というジャンルにそれぞれ対応する。学術論文と小説のテキスト特性を見ると、語彙、文形式、視点において両者は区別されることがわかる。

4.1. 読みに影響する要因としてのジャンルの位置づけ

本章では、読みの対象となるテキストのジャンルの違いによって読解にどのような影響があるかについて焦点をあてる。

ジャンルに関わらず文章全般を理解する過程については、van Dijke & Kintsch(1983), Kintsch(1994)などによる状況モデル、さらに Kintsch(1998)による構築統合モデルによって、理解の流れと理解のためのシステムを中心に解明が続いている。これらのモデルは、文章全般に対して説明が可能、つまり総論的には有用であるが、各論、つまり特定の目的を持った理解や学習指導における理解などへの説明にあたっては、様々な理解場面に対応した知見が必要となってくる。テキストジャンルの検討はまさにこの枠組みで行われる研究である。Kintsch の構築統合モデルを構成する多様なパラメーターの中でジャンルが変わるとパラメーターの値がどのように変化するかという観点から見ていく。

テキストのジャンル分けは、その着目点によって様々な分類が可能である。一般的なジャンル論ではその内容的特徴から文章の類別を行うことが多い。たとえば、内容展開の方式という視点からは、時間的展開を持つ「文学的文章」と論理的展開を持つ「説明・論説的文章」の二種類に大きく分けることができる。文章論研究では、市川(1978)のように「文章の用途や目的」といった機能に基づいたジャンル分けが中心であり、表現者の意図や機能によって、大きく「実用的文章(手紙、日記、報告、論説など)」と「非実用的文章(小説、随筆など)」に分けられることが多い。

このように見ていくと、われわれが日常的に接する文章は、大きく説明文と物語文に分けて考えることができる。国語教育においても、両者を分けて捉えることが一般的である。これは、説明文と物語文の読解からそれぞれ異なる技能が修得されると考えられているためであろう。教育心理学や認知心理学の研究でも、国語教育の説明文と物語文という区分に則った理解のモデル化や、教育実践への適用が行われている。このように両者を分けて捉えることが広く受け入れられている(表 4-1)。本研究では材料文として学術論文と小説を使用している。両者のジャンルはそれぞれ説明文と

物語文に対応すると考えられる。

表 4-1 説明的な文章と文学的な文章の構成内容(岸 2019)

説明的な文章	説明文(expository text) ⇒あるもの・ことに関する知識・情報を間違いなく(正確に), しかもわかりやすく人に伝え, 知らせようとする文章(田近 1984)	宣言的説明文(declarative text)⇒文章内容が宣言的知識すなわち概念や事実を説明する文章(岸 2004)
		手続き的説明文(procedural text)⇒文章が手続き的知識すなわち操作方法や手順などを説明する文章(岸 2004)
	論説文(editorial article) ⇒特定の事柄についての意見が書かれた文章(犬塚 2013)	
	評論文(critical essay) ⇒筆者独自の価値判断を論理的な方法によって読者を説得する文章(篠崎 2014)	
文学的な文章	物語文(story) ⇒小説・日記・生活文など。エピソード的知識を伝える文章(岸 2004)	

4.2. 説明文と物語文の違い

説明文と物語文の違いについては, Graesser & Goodman(1985)による 8 つのまとめがよく知られている。岸(2019)はこの知見を中心にすえつつ, その他の関連する知見を加えてまとめた。本節では, 説明文と物語文の違いについて, 岸(2019)を参照し, それを本論文の内容に関連づけて一部改変してまとめる。

表 4-2 Graesser & Goodman(1985)による説明文と物語文の違い(岸 2019)

特徴	説明文	物語文
記述されている情報の真偽に対する疑念	読み手は記述内容を真であると仮定して読む。	読み手は真偽の疑念を持たずに読む。
時間的・空間的枠組み	一般的な枠組みで述べられる。 時間・空間・対人の情報が含まれるが, その存在は必須ではない(井関・川崎 2006)。	エピソードは特定の時間や空間の中で起こっている。 物語文読解から状況モデルを形成するという観点では空間性の次元が果たす効果は小さい(井関・川崎 2006)。
書き言葉と日常のことば	日常のことば(話しことば)で語られることは少なく, 教科書や文書にみられる文体で書かれる。	日常のことばで語られる。
概念構造	説明文は記述的な概念化がされており, 内的状態, 物理的状态, 状態間の特性を示す表現などが多く	物語文は目標指向的な概念化がなされ, 時間的, 因果関係に従って記述される場合が多い。

	みられる。	
推論の数		Graesser(1981)によれば物語文では説明文の約 3~4 倍の推論が必要である。
文章の伝達機能	説明文は真実を伝えようとする。	物語文は読み手を楽しませる目的で書かれる。
修辞上の特徴	説明文ではピラミッド型に話が展開し、話題の全要素を提示した後に、各要素について段落単位で説明を加えていくパターンが多い。	読者の興味をひくために様々な修辞上の工夫がなされ、サスペンスや驚きの要素を盛り込んだり、話の順序の変更などが見られる。
接続詞、つなぎのことば、関係を示す方法	これらのことばの表現は、論理の流れを正確に追うために不可欠であり、文章内容の理解に大きく関与する。	これらのことばは説明文に比べて重要性が低い。 論文や専門教科書と文学作品とでは接続語句・助詞相当句の使用傾向が異なるため、これらはテキストジャンルを識別できる(村田 2000)。

(注)岸(2019)を改変

また、甲田(2008:591)はジャンル別のテキスト構成の違いについて、次のように簡潔にまとめている。説明文では、普遍的心理が現在の視点から説かれる。一方、物語文は物語文法(Thorndyke 1977)に代表されるように、「設定」「テーマ」「プロット¹⁰」「解決」が物語の構成要素である。プロットはいくつかのエピソードのつながりからなり、「下位目標」「試み」「結果」で構成される。時間の流れとともに事件の開始から終結である解決に向かうという。

これまで見てきたように、ジャンルが変わると読解に関する様々なパラメーターが変化することから、それぞれのテキスト理解の仕方にも違いがあると考えられている。

4.3. 小説と物語の違い

本論文では材料文として学術論文と小説を用いた。学術論文の定義についてはゆれが小さいと考えられる。一方、書き言葉の物語と小説の違いについてはしばしば議論になるため、以下に両者の違いを簡単に整理しておく。

¹⁰戯曲や小説で、展開するさまざまな事件を統合し芸術的效果をつくりだす筋の仕組み。E.M.フォースターの定義(『小説の諸相』1927)によれば、物語や寓話の出来事が時間の順序どおりに並べられているのに対して「因果関係を意識して出来事を組立てている」ものとされる。(ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説)

ものがたり【物語】

文学形態の一つ。広義には、散文による創作文学のうち、自照文学¹¹を除くものの総称。すなわち、作者が人物・事件などについて他人に語る形で記述した散文の文学作品。特に、人物描写に主眼のある小説に対して、事件の叙述を主とするものをさすことが多い。狭義には、日本の古典文学で、「竹取物語」「伊勢物語」に始まり、「宇津保物語」「源氏物語」で頂点に達し、鎌倉時代の擬古物語に至るまでのものをさす。歴史物語・説話物語・軍記物語を含めることもある。(出典：三省堂大辞林 第三版)

しょうせつ【小説】

小説は詩や劇文学と違って、形態、内容ともに極度に自由な文学様式で、正確な定義を下すことは不可能である。しかしふつうにこれは小説らしい小説だとか、風変りな小説だとかいうとき、そこには漠然とした小説の概念が基準となっていることも事実で、それはだいたい西欧の 19 世紀に完成したリアリズム小説の概念にもとづいている。この標準的な小説概念によると、小説とは散文による相当な長さの虚構物語(フィクション)で一定のまとまりと構造をもち、現実生活に即した人物と事件を扱うものをいう。(出典：平凡社 世界大百科事典 第2版)

しょうせつ【小説】

小説(novel)は「新しい話」の意である、イタリア語の novella より。novella は元来、ボッカッチョ『デカメロン』(1353 年)のような短い話を寄せ集めたものを指した。今日的意味での小説は、市民階級の勃興と歩調を合わせて、18 世紀イギリスで成立。以後、たちまち世界中に広がり、近現代の最もよく流通した文学ジャンルとなった。しばしば、荒唐無稽な想像力の産物であるロマンスと対比させて、人間や社会を写實的に描いた散文ジャンル、のように定義される。形式、長さ、テーマ設定、叙述法も自由かつ融通無碍(むげ)で、あらゆる内容を盛り込むことができる。それゆえ小説は発生以来、常に小説とは何かを問いながら、映画などの隣接する表現形式と相互に影響し合いつつ、展開してきた。西欧近代社会において、小説は劇、詩、エッセイと並び、文芸の主要 4 ジャンルを形成する。日本では、明治初期に導入された西洋近代小説の理念と方法は、たちまち他の 3 ジャンルを圧して王座に君臨、今日に至っている。なお物語(narrative)とは、小説、自伝から民話、伝承に至る、文字通り、物語られるもの全般、を指す。物語の構造・機能の分析・研究を、物語論(narratology)と呼ぶ。(井上健 東京大学大学院総合文化研究科教授／2007 年)(出典：朝日新聞出版「知恵蔵」)

¹¹ 日記・随筆などのように、自己反省・自己観察の精神から生活体験を主観的に叙述した文学。

物語と小説の違いについて、藤井(1984)の説明がわかりやいため、以下に紹介する。藤井(1984)は、基本的には、物語は「出来事の連鎖」によって成り立つものを指し、聞き手の「それからどうした、それからどうした」という欲求を満たしていく性質を持つものだ述べている。一方、小説の概念は近代以降のもので、単に出来事の連鎖に止まらず、出来事と出来事の間に相関的な意味のつながり(因果関係)が存在するように書かれた物だと両者の違いを簡潔に述べている。ただし、物語の中にも近代の小説的要素を持つ場合があり(源氏物語)、小説の中にも物語的な要素を持つものがある(谷崎潤一郎の「細雪」)として、厳密な定義は難しいことにもふれている。

4.4. 視点

日本語の文章談話を考えるうえで最も重要な要素の一つが視点であると言われる。視点とは、文章談話の発信者(書き手・話し手)が文章内容を見る角度であり、また文章内容を語る立場である。一般的には、「言語行為(Speech Act)において話し手(あるいは書き手)がある出来事を描写しようとする時に話し手(あるいは書き手)自身が占めている空間的(spatial)、時間的(temporal)、心理的(psychological)な位置(澤田1993)」と規定されている。森田(2002:13)は「日本語の日本語らしい表現の文法は、多かれ少なかれ表現者の視点に裏打ちされている」と指摘しており、日本語の文章談話を考える上で、視点は極めて重要な要素の一つであるとされている。また、言語学的な文法研究においては久野(1978)が代表的である。久野(1978)は文法研究における視点とは「カメラ・アングル」と規定し、「話し手がどこにカメラを置いて、この出来事を描写しているか」ととらえている。「視点」と並んで「視座」という用語も使われているが、「視座」はほぼ視点と同意と見てよさそうであるが、語り手が立つ位置と語ろうとする対象との距離や関係などを特に強調する場合に用いられる。

このように、テキストのジャンルと書き手が選択する視点とが強く相関関係を持っている。たとえば、説明文や論説文では客観性を高める文体を意図して、文章内容の外側に立った視点で表現が行われる。物語や小説のジャンルでは、登場人物などテキストの内部に視点を置く場合と、外側から全知の存在として視点を据える場合とがあり、さらに一つの作品内でこれらが混在することもある。このように視点の位置はジャンル特性の大きな特徴である(高崎・立川 2010:198)。その視点を示す具体的な言語表現として、指示語や授受表現、移動動詞の選択といった語彙レベルや、受動文と能動文の選択や引用の方法という文レベルなど様々に渡る。文章談話の構成においても、どのような順序で出来事が語られるかという内容展開は視点に大きく影響する。上記のすべての要素が絡み合って視点が提示される。このことから、日本語のテキスト読解においては、とりわけ視点の正しい読み取りが重要となることがわかる。特に、文学的文章(小説、物語)のジャンルにおいて視点は極めて重要な要素になるため、それに関する研究も盛んである。

4.5. 学術論文と小説のテキスト特性

日本語で書かれた学術論文と小説のテキスト特性について、主に言語形式の面から比較してみる。

表 4-3 学術論文と小説のテキスト特性の比較

	学術論文	小説
語彙	・専門の研究者を対象に書かれた文章であるため漢語が多い。副詞や接続詞なども日常会話ではあまり聞かれない、漢語の多い文のレベルにあったものが使われる(「しかしながら」「かつ」「要するに」など)。 ・助詞相当句(「～に関する」「～における」)も多く、名詞の並列に使われる助詞「と」などは「,」で置き換えられ、そのために文の構造がわかりにくくなっている場合がある。 ・専門分野によっては外来語が多く使われる。辞書にもなく、言語を想像しにくいものが多い。専門の人たちだけが日常的に使っている造語も専門雑誌に現れる(「コヒーレントな」「シフトする」「オフする」)。 ・専門用語ではない語彙も本来の日本語にはない、専門分野独自の使い方がされる(「電子のふるまい」「与えられた条件」「十分に長い」)。 (深尾 1993)	・文芸では一万語レベルまでは会話語彙と重なる。(松下 2016) ・文学の語彙的結束性は法律や白書などに比べて低い。文学に会話文が多く、その会話が 1 段落と認定されているというデータの特徴の現われである。(山崎 2017 : 212)
文の形式	・書き手の言語行動を説明する形式(述べる、定義する、考察する、など)が多用される。 ・漢語が多く使われているため品詞がわかりにくくなる。(「技術が進歩した今日(副詞), ~」「今日(名詞)の基盤をなしたものは~」) ・不自然な表現や長い修飾句がついた名詞が一文中に 2 つ以上あるような複雑な文がある。翻訳調の日本語。(深尾 1993)	・地の文といわれる語りの文章に対して、異質な文章が投げ込まれる。その代表が作中人物による会話文である。語り手の言葉に対して、他者の話し言葉のように見せられた文章ともいえる。 ・複雑な形容や比喩が用いられる点で日常の文章と異なる。 ・語り口の個性がある。(紅野・清水 2012) ・小説の会話文とは、登場人物たちの言動の描写というよりは、様々の理由によって会話の形をとっている、地の文の延長

		であると考えた方がよさそうである。(高崎 1981) ・小説の会話文は自然談話と違って、発話箇所や話者情報などの認定が難しい部分がある。(山崎 2018)
視点	・客観性を高める文体を意図して、文章内容の外側に立った視点表現が行われる。受動文の多用により、自発の意味を含むことでテキスト内容の信憑性が自明であることや、客観的立場に立った結論が提示されているという効果を上げようとする書き手の意図に基づく。(高崎・立川 2010: 198)	・1 人称で書かれることが多い。 ・語り手が人物 A の内面に入りこんで自分のことのように語ったり、外側から客観的に語ったりと様々なパターンがある。(紅野・清水 2012) ・物語文では視点が登場人物に置かれるため、「一郎は母の死が<u>悲しい</u>」のように人称表現の使用制限の解除が見られる。

4.6. 小説の解釈

文学作品について「正しい読み」と「誤った読み」という区別を立てうるかという問題について、本研究の基本的な立場を明らかにしておく。筆者は、以下の西林(1991)の主張に基本的に同意する。西林は、文章から読み取ったと読み手が思うものには、文章に即して是非を確認できるものと、確認できないものの2種類があると述べる。そして、①文章で確認できればその読みは当面保持されてもよい、②逆に文章で否認されればそれは読み取ってはいけない、③文章で確認も否認もできないすなわち文章にその読みに関する記述がなければ、それは文章から読み取れることではなくて、文章から「感じる」ことであるので、それは合っているとも合っていないともいえないものとする。現実には、西林の明快な分類にもかかわらず、上記のことがあいまいに判断されている。また、ある読み取りに関する直接的な記述は文章にないものの、間接的な記述があり、その間接の程度が様々であるという事態は考えられるため、場合によっては③と①②の区分が困難になることもあるだろう。しかしここではその問題には深入りしない。この問題を詳細に論じつくすのは本研究の目的ではなく、本研究で扱うのは微妙な読み取りの違いではないからである。本研究で「正しい読み(解釈)」とは西林の①を、「誤った読み(誤読)」とは西林の②を意味する。これが本研究の立場である。

さらに西林(2005:194-195)は、解釈の自由と制約について次のように明確に述べている。

解釈が妥当であるかどうかを「正しさ」に求めるのではなくて、周辺の記述や

他の部分の記述との「整合性」だけに求めたい。このように考えることは、次のことを意味する。

①整合性である限りにおいて、複数の想像・仮定、すなわち「解釈」を認めることになる。間違っていない限り、また間違いが露わになるまで、その解釈は保持されてよい。

②ある解釈が、整合性を示しているからといって、それが唯一正しい解釈と考えることはできない。

③しかし、ある解釈が周辺の記述や他の部分の記述と不整合である場合には、その解釈は破棄されなければならない。

このような制約条件のもので、想像を逞しうして、部分間の緊密性を高める想像・仮定を構築しては壊し、また構築していく。これが「よりよく読む」という過程の内実でなければならないと結論づけた。そこから発展させて、国語教育に対する提案も次のように述べている。西林は、現在の国語教育に違和感を持っている学生は決して少なくないことを挙げ、その原因として、文章の解釈は自由であっていい、と先生に言われながら、実際の授業や試験では、ただ 1 つのものが正答とされたことに対する違和感であると断じている。その風潮を受けてか、学生たちにアンケートをとってみると、圧倒的大多数は文章の解釈は各人の自由であってよいと答えることを指摘している。国語教育に対する違和感の説明をするために、大学入試センター試験の問題を挙げ、その選択肢が「その説明として最も適切なものを、次の①ー⑤から選べ」という設問形式にあることを論じている。著者の西林が問題を検証したところ、整合性のある解釈には複数の存在が可能であり、したがって、唯一絶対正しいという解釈は存在しない。しかし、ある解釈を「整合性がない」という観点から否定することは論理的にも実際にも可能で、しかも簡単である。よって、「正しい」と「間違っている」という判定は、対称性をなすものではない。後者は明確に判定できるが、前者は「整合性はある」とか「間違っているとは言えない」という判定しかできないという。このような非対称性をベースにしていることと、多くの人が持つ国語教育に対する違和感を考慮すれば、「最も適切なものを選べ」という説明は避けるべきだと述べている。それに代わるものとして、「次のような解釈があるとする。このうち可能なものはどれか。可能でないものはどれか。」といった設問形式がよい(206-207)と提案している。

4.7. 解釈の多様性と正しい読みの関係

テキストの解釈の多様性と正しい読みの関係については、これまでもよく議論されてきた。この節では、文学、日本語学、心理学、第二言語習得の立場からの意見を紹介したうえで、本論文の立場をまとめる。

まず、学校教育と言語教育における現象について、甲田(2009:142)を参照しながらまとめる。甲田(2009)は、学校教育や言語教育における読解の指導では、語彙や文法の習得など、言葉に注意が向けられ、その結果、丁寧に教材を読むように指導されるとしている。文章理解の目標として、「正しく」筆者の意図を理解することが求められるのに対し、学校教育以外では、丁寧に読み一律の理解が求められることはない。娯楽のために本を読む場合にも、正しい理解が評価されることは通常ない。そう考えると、学校教育とは連続していない面が多いと考えられる。「正しい」理解が一様に、すべての読み手に共通したものであるという信念は非常に強いものであると述べている。一方、文章と読み手の相互作用を考慮するなら、テキスト属性のみを見ていては見落としてしまう点が多くある。もちろん、テキストの構造を読みとったり、テキスト中の重要箇所を区別する能力は必要である。しかし、テキスト理解にテキスト属性だけではなく、読み手と読み方が影響していることを唱えることは、このようなテキスト属性の存在を否定することではない。テキスト理解に読み手が果たす役割を考慮することは、読解に多様性を認めることであるとまとめている。

以下に各分野の立場の意見を抜粋して紹介する。特に、論文筆者が注目した箇所に下線を附す。

文学研究の立場から

(石原千秋(2002)『大学受験のための小説講義』ちくま新書)

「試験場で読む小説はどうも苦手だ」と思ったとしたら、だぶんそれにはわけがある。受験小説では、普通に趣味で読むのとは違って、「小説を読むこと」は「書いていないこと」を読むことだからである。すなわち、「行間を読むこと」が「小説を読むこと」なのだ。だって、書いてあることならわざわざ設問で聞く必要がないのだから。(p.14)

小説の言葉はもともと断片的で隙間だらけのものだということだ。小説の言葉が世の中のことを余すところなく書くことができるのなら、たとえ受験の小説でももう問うことは残されてはいないはずだ。しかし、もともと小説の言葉にはそういうことは出来はしないのだ。(p.15)

もっと率直な言葉で言えば、自分自身も新たな読みを「発見」したいという研究者としての野心が、僕に漱石の小説を読み続けさせるのである。少なくとも、僕には漱石の小説が近代文学のなかで最も新しい読みの可能性を持っているように思われるし、多くの宝物を隠しているようにも感じられる。僕自身は、いまでも、「小説は作

者のものではなく、読者のものだ」とか、「作者よりも読者の方が頭がいい」などと生意気なことを言う研究者だが、実は本音では「作者の才能というものを認めないわけにはいかないな」という謙虚な気持ちももっているのだ。(p.20)

こうして、川端康成の掘っておいた穴が一つ、読者の解釈によってほぼ完全に埋められた。ふつうの言い方をすれば、川端が省略して書かなかったことが、解釈によって補われたのである。(p.23)

ほどよい省略、ほどよい謎かけ、これがすぐれた小説の条件だ。(p.25)

受験小説で圧倒的に問われるのが「気持ち」である。それは、「気持ち」が書いてあるからではない。多くの場合「気持ち」を読むことは「行間を読む」ことを意味するからである。そして、「気持ち」は個人差が大きいので、モノよりもさらに多くの読者の読みを試すことができるからである。(p.29)

小説はどのように読んでもかまわないというジャンルに属している。別の言い方をすれば、読み手は小説からどんな物語を取り出してもかまわないということになる。(p.52)

研究者の場合、ほどよい問いで満足していたのでは、一般の読者と同じレベルの読み込みしかできない。研究者にとっては「まったく答えようのない問い」に出来るだけ近づいた「なかなか答えられない問い」が最も優れた問いだといえる。それはほとんど「誤読」に近いが、「誤読」に少しでも触れる冒険を経験しないような読みは、研究者にとっては読みの名に値しない。研究者はたとえてみればテストパイロットのようなもので、テキストの可能性を限界まで引き出すのが仕事の一つだからだ。それがトリッキーとを感じるようでは、研究者の資格はない。(p.177)

日本語学の立場から

(はんざわかんいち¹²(2013)「感情の論理と表現に違和」『日本語学』32-4)

今年度のセンター入試の国語でも小説の問題が出された。六問中、漢字と表現を別にすれば、残りはすべて心情に関する問いだった。これについては批判がいろいろとある。福島隆史『国語が子どもをダメにする』(中公新書ラクレ 2012年8月)はきわめて手厳しく、その理由を次のように挙げる。

評論読解と小説読解の決定的な違いは、「書かれていることを問うているか否か」である。小説は、書かれていることを問うても簡単すぎるから、書かれていないことを問おうとする。その結果、解釈と解答が揺らぐ」(p.198)(中略)

「論理」が単に物事の筋道であるとすれば、感情には感情なりに「論理」があるは

¹² 半澤幹一

ずである。(中略) この感情の論理を言語化するのが、実はレトリックである。レトリックの起源である弁論術において、正しさというのは、ことばによって相手に勝つことである。当事者を離れて、あるいはことばを離れて、正しさが存在することはない。(中略)「心情の説明として最も適当なもの」とは、あくまでもことばから推測される、相対的に蓋然性が高い心情ということである。他から画然と区別される、所与として唯一絶対にある心情のことではない。そもそもそういうことはまったく想定されていない。(中略) 文章中に明示はされないが、ことばという手がかりはある。(中略) 明示・明快を旨とする法律の条文でさえ、それがことばで表現されるかぎり、解釈のある程度の揺れは避けがたい。これは程度問題なのではなく、ことばの本質である。違うのは、表現に対する解釈の志向・態度である。(中略)

文学が言語芸術であるのは言うまでもあるまい。にもかかわらず、この「言語」というメディアに対する関心がなおざりにされ、「書かれていない」内容本位の読みが行われて、唯一の正解が求められ、そのいっぽうで、どんな読みも自由という通念がまかり通っている。これが事実とすれば、文学教育なるものは、「教育」という名に値しない。教える必要もないし、教えることもできないからである。

立ち帰るべきところは、ことばしかないのではないか。そして、教えるべきことは、文学教材における、それぞれのことばの選択と配列(つまりレトリック)から導き出される感情の論理を見出す手続きである。

この手続きというのは、特定の読みの理論に基づくものではない。それ以前に、日本語によるコミュニケーションに根差した、その表現自体のルールから帰納しようとする基本的な方法のことである。

「国語」教育は、日本語ネイティブがその運用能力を高めるものを目的とするものであり、そのためには日本語そのものに対する理解を深める必要がある。文学教材は、日本語の多様で自由な運用法の実践例であり、その点において教材としてきわめて重要な意味を持つ。他の実用的なジャンルの文章に比べて、より高度なリテラシーが追求されるからである。(中略)

国語教育に携わる、おそらく多くの教師が大学で日本文学を学び、卒業論文としたのではないだろうか。その点、日本語教育の指導者が、日本語そのものを学習・研究の対象としたうえで資格を得るのとは、決定的に違うところである。文法は苦手と公言してはばからない国語教師がすくなくいる。ことは文法にとどまらず、日本語に対する関心・認識の低さにも通じる。その状態でも「教育」しようとするれば、拠るべきことばからの説明もできずに、「書かれていない」ようにしか見えないことを、あたかも規範として押し付けるばかりになるのは、必然であろう。

国語の教職課程の授業を担当していて痛感するのは、文学教材を扱う際、その内容を論じるのに、表現を根拠とする、あるいは表現と結び付けるという意識がいちじるしく希薄なことである。(中略) これは当の学生たちに限ったことなく、免許更

新講習を受けに来た現役の教員にさえ見られる。つまりは、文学教材の読解のための基礎的な言語的スキルのトレーニングが今も昔も、どの段階においても行われていないということである。(中略)

そもそも言語化するとは、何となくということを論理化するということである。問題は、その論理というものを、感情と対立した、知的な領域に制限しようとする、ごく狭い捉え方にあったのではないか。そのような捉え方をするかぎり、文学が埒もなく役に立たないものとして扱われてしまうのも、無理ない。(中略)

文学が国語の教材として有益であるのは、それが国語としての日本語の高度な運用例だからである。にもかかわらず、その運用のありようを示すことができないのであれば、教材としての意味がない。

それを示すことに必要なのは、あらかじめ読みの構えを作る理論でもなければ、「書かれていない」ことを察知する勘でもない。愚直なまでに表現そのものにこだわり、そこから感情の論理を読み取ることだけである。(後略)

心理学の立場から

(村田夏子(2001)「13章 文学を味わう」大村彰道 監修・秋田喜代美・久野雅樹 編集『文章理解の心理学』)

van Dijk & Kintsch (1983), van Dijk(1987)によれば、読解において読み手は2種類のモデルを構成する。読み手はまず単語の意味や文法に関する知識などを使って、テキストの論理的な意味内容についての解釈を構成し、テキストベースとよばれる命題的な意味表象を作る。さらに、テキストが述べているのは具体的にはどのような状況であるかを想像し、関連する領域知識を用いて現実世界についての表象である状況モデルを構成する。テキストベースはテキストの内容に即して作られた表象であるが、状況モデルはテキストの内容を含む、より広く具体的な状況についての表象である。テキストベースは、テキストのどこを重視するかによる違いはあるとしても、論理的に導かれるはずのものであり、文学の鑑賞においても正確なテキストベースを構成することは前提となるべきであろう。

外山¹³(1961)は、文学の理解には、「作者(作品)の意味(M1)と読者の意味(M2)とがあって、両者の合力によって生ずる M3 が求められる文学の意味」であり、M2 にほぼ無限の多様性があるので M3 はそれに対応するだけのバリエーションが出てくると述べている。このモデルにおいても、読み手の自由度というのは M2 およびそれに立脚した M3 にある。外山は、ことばの解釈という作業は結局 M3 を求めることに尽きるとしているのだが、これは作者の前提としている意味と読者の前提とする意味との断絶を超えた統合によって生じるものであり、M1 と M2 の 2 つの意味が

¹³ 外山滋比古(1969)『近代読者論』みすず書房

止揚¹⁴されてできる弁証法的な第三の意味であると述べている。この過程については、読み手の熟達に関する研究に実証的裏づけを見ることができる。テキストを正確に読み取り、かつテキスト情報と自らの知識によって弁証法的に新しい意味を創造していく力は熟達によるのである。(p.193)

Scardamalia & Bereiter (1991)によると、テキストベースと状況モデルの関係は熟達者ほど柔軟であり、熟達者はテキストベースと状況モデルを弁証法的に往復し、双方を変容させながら、テキストについての一貫した理解に到達し、かつ領域知識を修正することができる。これに対して、非熟達者のテキストベースは推論に必要な含意的な命題をつかみそこなった表面的なもので、状況モデルと矛盾する情報は見落としてしまう傾向がある(Scardamalia & Bereiter 1989)。誤読し、自己満足的に自由な想像をするのは非熟達者の読みなのである。(中略)状況モデルを作ることによって、読み手はテキストの内容を既有知識に取り込み、応用することができるようになる。すなわち状況モデルは動的なモデルであり、熟達者の作る豊かな状況モデルにおいては、たとえば登場人物ならテキスト内では語られなかった新たな場面でも動かすことができるほどの一貫した性格を備えた明確な像となっていると考えられる。(中略)読解能力の熟達とは、作品の細部まで気を配ると同時に、関連する自分の知識も上手に利用して解釈を構成し、さらに解釈と知識の両方を吟味し直せる余裕も持ち得るようになっていくことなのである。(中略) (p.194)

文学を読むということについて心理学の立場から答えるならば、何かを文学と見なし、文学的な意味を抽出する主役はやはり読み手といえるだろう。テキストが何であれ、それをきっかけにして読み手が主体となって自分にとって意味のある解釈を創り上げていくことは可能なのである。(p.196)

第二言語習得の立場から

(門田修平(2001)「ワーキングメモリと第二言語の読解」門田修平・野呂忠司 編著『英語リーディングの認知メカニズム』くろしお出版)

第二言語の読み手は低次処理の効率の悪さ、またその結果としての小さい記憶容量がボトルネックとなつてうまく読めないのではないか、という指摘はたびたびなされてきた。(中略) 実際多くの研究が、第二言語読解の大きな特徴は、第一言語読解よりも低い処理効率である、そのために、第二言語の読み手は読解の中間段階における産物を記憶にとどめておくことが難しく、高次の処理を行う余裕がないと示唆している。例えば、第二言語では語の意味が想起される速度はより遅く、かついった

¹⁴ ヘーゲル哲学の用語。弁証法的観点から、事物の発展は矛盾対立によって行われるが、その場合一つの要素はほかを否定しはするがまったく捨てられるのではなく、保存されてより高い次元に上げられ、一新されて全体のなかに組込まれる。このような働きを止揚という。(出典:ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典)

ん想起されたイメージが劣化するのも早いし(cf. Segalowitz & Hebert 1990), また熟達度の低い読み手は, 正書法レベルなどの低次の局面に注意を集中するあまり, より高次の意味解釈や推測などの処理が犠牲になってしまう。(p.137-138)(中略)

第二言語の読解は, 母語での読解と比べて低次処理に認知資源の多くを費やさなければならないため, どのくらい高次読解作業に従事できるかは, ワーキングメモリ運用能力だけでなく対象言語の熟達度のレベルによっても決まると考えられる。Yoshida(2000)の研究では, 日本人学習者の英文読解のストラテジーを観察したところ, リーディングスパンが狭い学習者は読み返しや日本語への翻訳といった符号化作業に従事するのが多いのに対して, スパンが広い学習者は活発に推論ストラテジーを使用していた。しかしながら, そのストラテジー使用を効率よく行い, 正しいテキスト理解に結び付けることができるかどうかを決定するのは, ワーキングメモリではなく, 第二言語熟達度であった。(p.146)

以上, テクストの解釈の多様性と正しい読みの関係について, 各分野の意見を概観してきた。論文筆者は, 日本語学の立場から述べられた半澤氏の意見と同じである。それは, 「書かれていない」内容本位の読みが行われて, 唯一の正解が求められ, そのいっぽうで, どんな読みも自由という通念がまかり通っている。これが事実とすれば, 文学教育なるものは, 「教育」という名に値しない。教える必要もないし, 教えることもできないからである。教えるべきことは, 文学教材における, それぞれのことばの選択と配列から導き出される感情の論理を見出す手続きである。その表現自体のルールから帰納しようとする基本的な方法のことである。」という氏の意見である。石原氏の「小説はどのように読んでもかまわないというジャンルに属している。別の言い方をすれば, 読み手は小説からどんな物語を取り出してもかまわないということになる」という意見は大雑把すぎるように思われる。また, 心理学の研究で紹介された, 外山氏が言う「作者(作品)の意味(M1)と読者の意味(M2)とがあって, 両者の合力によって生じる M3 が求められる文学の意味」からも, 作者(作品)の意味(M1)は重視されなければならないと考える。

特に L2 読解では, L1 での読解と異なり, 低次処理に認知資源の多くを費やさなければならないため, 推論などの高次読解作業が困難になるという指摘がある。まずはテキストベースに基づいた正しい表象をつくることが重要であり, それは言語形式に基づく論理的な解釈でなければならないと考える。筆者は, そのスキルは文学教材の言語スキルのトレーニングとして具体的に捉えらえるものという立場をとる。4.6.で紹介した西林(1991)も, 「解釈が妥当であるかどうかを「正しさ」に求めるのではなくて, 周辺の記述や他の部分の記述との「整合性」だけに求めたい」と述べている。この「記述」というのは言語形式に他ならず, テクストの意味の整合性は, 言語的スキルで解決できるものであると考える。

第5章 本研究で重要となる用語の定義

本章では、本格的な議論に入る前に、本研究で重要となるいくつかの用語の定義を明確にしておく。これにより本研究の立場も同時に明確になると考える。

5.1. 文章理解

本研究における文章理解(テキスト理解)は、文字認識や単語認知などの小さな言語単位の認識を集積して、さらに大きな言語単位の理解へと段階的に処理が進むとされるボトムアップの読み方を重視したものを想定している。よって、読み手がテキストを読み飛ばすことなく、隅々まで読んだときに得られる心的表象を扱う。実際の人間の読解活動では、効率よくテキスト内容を把握するために、読み飛ばすこともあり、必ずしもテキストの隅から隅まですべてを処理するわけではない。また、未知語や理解の困難点があった場合、その部分に無理やり何らかの解釈をあてはめようとせず、何も処理せず「空白」のまま読み進めることもあるだろう。これは限られた時間と労力で効率よく情報を得ようとする人間の自然な姿である。このようにいかに効率的に情報を得るかという「よき読み手」を対象にした研究も価値のあるものである。しかし、本研究ではそれを対象としない。本研究が目的とするのは、テキストのどのような箇所が理解困難であったり、誤読を生んだりするのかを具体的に明らかにすることである。その知見を読解指導に役立てたいと考えるからである。その目的のために、読み手のミクロな理解を扱う。これが本研究の立場である。

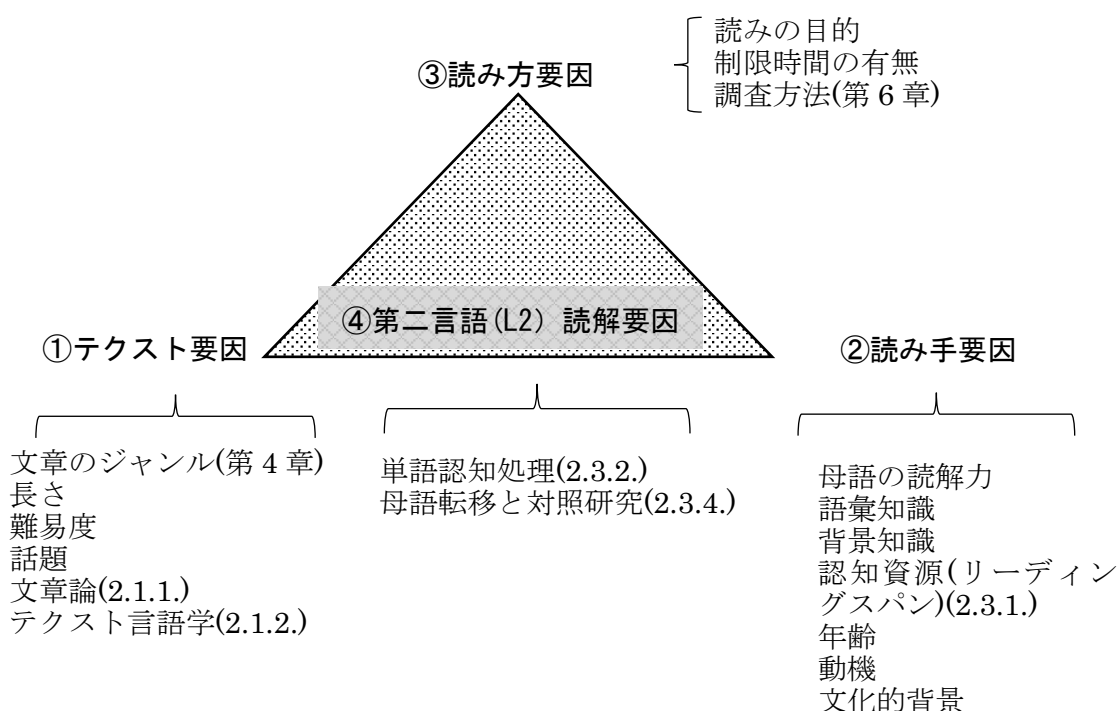
5.2. ミクロな理解

本研究では文章理解におけるミクロな理解を主に扱う。本研究でいうミクロな理解とは語や文の意味の解釈、指示対象の特定である。言い換えれば言語形式の理解である。一方、マクロな理解とは、言語形式よりも大きな単位である場面や出来事、文脈、結末の理解に関するものとする。本研究でミクロな理解を扱う理由は、どのような言語形式が読解困難点になるかを明らかにするために、言語形式と読み手の理解の対応関係を明確にするためである。

本研究でいうミクロな理解と Kintsch の理論との関係を見てみると、本研究のミクロな理解は Kintsch のミクロ構造(テキストベース)、一方、マクロな理解はマクロ構造(状況モデル)に近似すると考えられる。

5.3. テキスト理解を決定する要因

本研究は、テキスト理解を決定する要因を次のようにとらえている。その全体像は次の通りである。本研究はこれらを立体的(複眼的)に考えるアプローチを試みる。



5.4. 「正しい解釈」と「誤読」

本研究において、「正しい解釈」とは、テキストの文脈や文法、辞書的な意味から判断して妥当と考えられるものとする。そうではないものを「誤読」とする。

ポクロフスカ(2019)は誤読を「テキスト情報とずれている解釈」と定義している。誤読には様々なタイプがあるが、わかりやすい例として「トレイ」と「トイレ」と読み間違えるものを挙げている。両者は視覚的に類似しているが、「トレイ」は確実に「トレイ(tray)」であり、「トレイ(tray)に戻した」と「トイレ(toilet)に戻した」とでは「戻した」の意味まで変わってしまう。このような、テキストに書かれている情報と矛盾しているものを誤読とする。

また、本研究が扱う小説では、しばしば解釈の多様性と正しい読みの関係について議論がある。それについて、西林(1991)は「解釈が妥当であるかどうかを「正しさ」に求めるのではなくて、周辺の記述や他の部分の記述との「整合性」だけに求めたい」と述べている。本論文ではこの考えと同じである。また、この「記述」というのは言語形式に他ならず、テキストの意味の整合性は、言語的スキルで解決できるものであると考える。

5.5. 「解釈」と「理解」という用語の使い分け

両者は概念が類似しているが、本論文ではできる限り次のように分けて使う。

「解釈」とは、テキストの意味を読み手の視点でとらえることである。同じ対象を

扱っていても、読み手によってその意味が違うことがあることを含意する。その人なりの考えが多く入るものである。

一方、「理解」とは、辞書（三省堂 大辞林 第三版）における語釈が「物事のしくみや状況、また、その意味するところなどを論理によって判断しわかること。納得すること。「内容を正しくーする」とあるように、正しさが求められる活動である。よって、テキストの意味を正しく捉えることとする。

第6章 研究方法

本章では、読み手の文章理解の過程を可視化するために本研究で採用した調査方法について述べる。本研究では、学習者がテキストを読んで理解した内容を収集するために発話思考法を基本とし、調査者からも質問を行う方法をとった。まず、発話思考法(think aloud method)の理論的枠組みについて紹介してから、本研究で採用した調査方法について説明し、その意義について述べておく。

6.1. 発話思考法の理論的枠組み

6.1.1. はじめに

読む・書くなどの活動を行う際、研究者が外から観察できるのは、理解のレベルや書いた作文などそれらの行為の結果である。そのため、どのような心的プロセスを経てその行為の結果が生まれたのかを知ることはできない。それを知るために、読み手や書き手に言語タスク遂行中に何を考えているのかという心的プロセスを、内観(introspection)によって語ってもらうという研究方法がある。内的プロセスを知ることにより、言語タスクを行う際の困難点がわかったり、どのような情報やストラテジーを使ってその行為を行っているかが分かる。

研究方法としての内観は、心理学の分野で長い歴史を持ち、それが真に人間の内的プロセスを反映するのかについては、疑問視された時代もあった。しかし、現在では支持者も多く、自分の内的プロセスを報告することが遂行中の認知プロセスを変えることはないという研究報告もある(Leow & Morgan-Short 2004)。第二言語習得研究の分野では、たとえば、文章を読みながら、そのプロセスをすべて報告してもらうという方法がとられている。この方法は思考発話¹⁵(think-aloud)と呼ばれ、その結果得られるデータは発話プロトコル(verbal protocol)と呼ばれる。発話プロトコルの収集は普通一人ずつ個別に行われる。言語タスクを遂行してもらいながら内的プロセスを語ってもらうときの発話を録音し、その録音を書き起こしてプロセスを分析する。データ収集も分析も時間のかかる作業であるため、発話プロトコルを用いる研究は、少ないサンプルから取られたデータを研究目的に応じて詳細に分析していくのが一般的である。

6.1.2. 読解研究の上での利点

館岡(2005)は読解研究におけるプロトコル分析の利点を次のようにまとめた。

第 1 に、学習者の読解過程での問題点を明らかにすることができる。読み手の頭の中が見ない教師にとって、何が理解を妨げているのかその細部を知ることが読解

¹⁵ 発話思考法、思考発話法などいくつか言い回しがあるが、指すものは同じである。

学習の支援に役立つ。

第 2 に、読み手の問題解決の方略を知ることができる。たとえば、読解力の高い読み手と低い読み手を比較する中で、優れた読み手の問題解決方略から、有効な方略を学ぶことができる。

第 3 に、問題解決方略とともに、理解の過程や理解の結果、知識がどのように変革されるか、という知識獲得の過程を観察することができる。読み手は既有知識を利用して再認的な理解をするとともに、創造的な理解もする。読み手が既有知識をどのように利用するのか、また、既有知識がどのように修正されるのかがわかれば、自律的かつ創造的な読み手育成のための読解教育への示唆が得られる。

このようにプロトコル分析は、読み手の文章理解の過程を可視化するという科学的な側面にとどまらず、そこから発展させた読解教育の支援にも恩恵をもたらす方法であると言える。

6.1.3. 発話プロトコルの収集方法

内的プロセスの言語化は対象となる言語タスクとその報告の間に入る時間の長さにより、大きく 2 つに分類できる。タスクと報告がほぼ同時に行われる同時的言語化と、タスク終了後に行われる回顧的言語化である。データとしての発話プロトコルの妥当性を情報処理理論の観点から論じた Ericsson & Simon(1993)によると、短期記憶内の情報を取り出すことのできる同時的言語化が、最も的確に内的プロセス映し出すデータを提供する方法だという。回顧的になればなるほど記憶が薄れるだけでなく、タスク遂行時には考えていなかったような説明を後から付け加える可能性もある。しかし、読みのプロセスを思考発話によって調べた多くの研究を概観した Pressley & Aftlerbach(1995)は、研究の中で必ずしも同時的言語化が使われているわけではなく、同時的言語化、回顧的言語化を取り混ぜて様々な方法が使用されていることを指摘している。一般に、タスク遂行と同時に思考プロセスを発話するのは簡単ではないため、タスクをある程度遂行した時点やタスク終了時に言語化が行われる場合も多い。守るべき原則は、タスク遂行と思考発話の間に極力時間を開けないことである。思考プロセスの同時的言語化は十分に認知能力の発達した大人にとっても決して簡単ではない。そのため、データ収集の前には必ず思考発話の訓練が必要である。Ericsson & Simon(1993)は、簡単な算術計算を思考発話しながらやってもらう方法を提案している。データを集める研究者自らが思考発話を行い、それを 1 つのモデルとして見てもらうのも良い方法である。ただし、あまり長く見せると、モデルと同じように発話しなくてはいけないと思われ、自然な発話ができなくなる恐れがあるため、モデル提示は短めにし、簡単な算術計算や、対象となるタスク自体を簡略化した訓練をいくつか繰り返す方がよいとされる。データ収集は研究者と思考発話する人が 1 対 1 で行うため、友好的な関係を築き、訓練時に肯定的で勇気づける

言葉を返し(「それでいいですよ」「上手ですね」など), 安心して発話思考してもらう環境をつくるのも良いデータをとる 1 つの条件である。思考発話が得意でない場合には, 必要以上に時間をかけない, 「私はできない」という意識を持たせない, などの配慮をすることが必要であるとされる。

6.1.4. 発話プロトコル分析

発話プロトコルの分析は, それを何らかの分析単位に分け, その単位をカテゴリー化して, カテゴリー間や, 異なる対象グループ間で比較することが一般的である。発話プロトコルは, 繰り返し, 沈黙, 言い直し, 言い間違い, 不明瞭な終わり方など発話特有の現象を含む。それらの現象が分析を難しくすることもあるが, 研究目的に照らし合わせて, それらの現象をどのように扱うかを決める必要がある。

分析単位が決まったら, 次にそれをカテゴリーに分けてコード化していく。明確な理論的基盤がない場合, ある程度試行錯誤しながら, 自分の持つデータが最もよく分類できる枠組みを決めなくてはいけない。先行研究で使われている枠組みがあれば, まず使ってみるのが良いだろう。しかし, それで分類しきれないプロトコルは, 自分なりにカテゴリーを加えていく必要がある。ボトムアップ的にデータからカテゴリーを作っていくと, カテゴリーの種類が多くなってしまふことが多い。あまりにカテゴリーが多いと分析や結果の解釈が困難になるため, さらに上位の枠組みが必要になることもある。また, コード化の信頼性を示すため判定者間信頼性を示すことが必要である。

6.1.5. 第二言語の読解研究におけるプロトコル分析

思考過程を知りたいと考える第二言語の研究分野でもプロトコル分析は注目を集め, 80 年代以降多用されるようになった。すでに母語における読解過程の研究でも用いられ始めたプロトコル分析を, 第二言語の読解研究に用いたのは Block(1986,1992)である。Block(1986)は, 大学の読書矯正クラスに参加している英語母語話者および第二言語として英語の話者を対象に, 英語で書かれた大学の教科書を材料とし, プロトコル分析を用いて読解ストラテジーを調べた。読み手がテキストにアプローチする方法として, 内向モード(the reflexive mode)と外向モード(the extensive mode)という 2 つのモードを設定した。前者は個人的, 感情的で, 情報そのものよちもテキストから離れ自分自身に関わらせた反応を示すもので, 後者は自分自身に関わらせるというより第三者的立場から筆者の意図に対して客観的に反応するというものである。分析の結果, 読み手には 2 つのタイプが存在するという。1 つのタイプは, 外向モードのみを使用し, 情報の統合や文構造に気づき自分の読みをモニターし, 理解できないときには読み進め, テキストの中から手がかりを探すというものである。別のタイプは, テキスト理解に個人的経験を利用し, 内向モードを多

用し、また、情報を結合しようとはしないものであった。

また、Block(1992)は、指示詞と未知語の 2 点の解決について、プロトコル分析を用いて読解のプロセスを明らかにしようとした。25 人の大学 1 年生のプロトコルを集めて分析したところ、次のような 3 つのフェイズと 6 つのステップが示された。

(1)理解の評価のフェイズ(evaluation of comprehension)

①problem recognition：理解に支障をきたしたことを認める。

②source identification：混乱したり問題に感じたりしている理由を認める。

(2)実行のフェイズ(action)

③plan：使った(またはこれから使う)ストラテジーの使用計画を述べる。

④action/solution：問題を解決しようとする。

(3)検討のフェイズ(the checking of action)

⑤check solution：行動の結果をチェックする。

⑥revise the hypothesis：必要があれば仮説を修正し、適当なストラテジーを用い、解決する。

上記のステップに関して、指示語の場合、問題が明示されたとき①～⑥の最も完璧なモニタリングが現れたが、未知語の場合はその一部だったという。この 6 つのステップがうまくコントロールできるか否かは、使用する言語ではなく、読解能力による部分が大きいという。優れた読み手は母語でも第二言語でもこのプロセスを示した一方、未熟な読み手は母語で読んでも第二言語で読んでも問題があることに十分気づかず、問題を解決しようとするリソースが欠如していたと結論づけた。

Block の研究の流れを受けて、読解研究の分野では日本語学習者を協力者としてプロトコル分析を行った研究も進み、代表的な研究として舘岡(1995)や Horiba(1996)、森(2000)などがある。

舘岡(1995)は読み手の持つフォーマル・スキーマとテキストの文章構造の違いからくる読解上の問題点に注目した研究である。フォーマル・スキーマとは読み手が持っている文章構造に関する一連の知識のことである(Carrell,1988)。英語を母語とする日本語学習者が起承転結型で書かれた表論文を読む場合、読解の過程で文章の展開をどのように感じ、どのような点に問題を持ったり、躓いたりするのかを調査した。その結果、読みの過程では、文レベルでは「主語変化」したときに違和感を持った者が多かった。また、文章レベルでは話題が転じたとき、つまり起承転結の転に当たるところで、さらに違和感が大きくなり、転の前の部分との関連や全体の中での位置づけが把握できない者が多かった。主語省略、他の語句での言い換え、擬人法などによる困難点と、上記に述べた文のつながりに違和感を持った箇所とが重なっているところで、理解が難しくなっていることが示された。

Horiba(1996)は英語を母語とする日本語学習者の読解研究である。因果関係の結束性の有無に違いがある 2 種類のテキストを用意し、日本語母語話者と日本語学習

者、さらに後者の場合は上級と中級の学習者の発話プロトコルの比較を行った。その結果、日本語母語話者は、推論、知識の連合などの高次の処理を多く行い、結束性の異なる 2 種類のテキストを異なる方法で処理した。また因果関係の推論を多く行った。一方、日本語学習者は、語彙や文理解などの低次の処理に多くの注意を払い、結束性の異なる 2 種類のテキストに関しては処理の仕方の違いはなかった。また、中級の学習者に比べて上級の学習者は推論が多かったが、日本語母語話者のように因果関係に基づくものではなかった。ここから、日本語学習者はテキストの因果関係の結束性にあまり注意を払っておらず、それは低次の処理に追われてしまうからではないかと述べている。

森(2000)は、日本語母語話者と中級および上級の日本語学習者の 3 人の日本語テキストの読解過程を、Think-aloud 法を用いて解釈的に調査した。その結果、日本語母語話者の読解は、社会的、感情的次元において作者の対話する形で進められていた。中級学習者の場合、語句の解読(decoding)や翻訳などボトムアップストラテジーが中心で、自己の理解度をチェックしたり、読解の仕方に言及したりするメタ認知ストラテジーも多く見られたが、テキストの内容はあまり理解していないことがわかった。上級学習者の場合、未知語はかなりあったものの、要約や内容に対する疑問など、トップダウンストラテジーを多く用いることで、未知語の意味の推測に部分的に成功した。また、文の意味もほぼ正確に理解していた。しかし、上級学習者の読解はあくまでテキストの正解に限定されており、日本語母語話者のような社会的・感情的次元での読みとは質的に異なっていることを示した。この事実は第二言語の読解の限界性を示唆していると結論づけた。

6.1.6. 注意点と活用方法

発話プロトコル分析の注意点について述べる。第二言語習得研究に限らず、発話プロトコル収集で注意すべきことは、同時的言語化を行うことは容易ではないということである。訓練により、豊富なデータを提供できる調査協力者もいるが、これには個人差がある。文法テストの解答プロセスを発話プロトコルにより調べた Koizumi, Sakai, Ido, Ota, Hayama, Sato & Nemoto(2011)は、この研究のために理想的な研究対象である中高生は思考発話を行うのが困難であったため、大学生を対象としたと報告している。これには認知的な発達も関係していることが考えられた。また、言語化というのは意識的なプロセスであるため、意識にのぼらないプロセスは発話プロトコルには含まれない。その典型例は自動化されたプロセスである。たとえば、文の意味をいろいろ考えるプロセスが初級者で報告され、上級者で報告されなかった場合がある。その解釈は、上級者が文の意味を考えなかったとするより、上級者はさっと読むだけで文の意味がわかり、あれこれ考える必要がないため意識に上らず、報告されなかったとする方が妥当である。発話プロトコルで取り出せるのは、調

査協力者が言語的に報告できる意識的なストラテジーに限られる。

さらに、発話プロトコルの収集や分析は時間のかかる作業であるため、小規模な研究になる傾向がある。

発話プロトコルに基づく研究は、詳細な分析で思考プロセスに光を当てることができる反面、結果の一般化が行いにくいという難しさもある。どのようなデータにも長所と短所があるが、発話プロトコルのデータがどのレベルの情報を提供しているかという認識を持って慎重に分析したり、自分の研究に適したデータ収集法の工夫をしたり、複数の種類のデータを用いて研究課題の追求を行うなどの工夫が大切である。第二言語研究に特有の注意点としては、どの言語で発話してもらうかという問題がある。当然、調査協力者が発話しやすい言語の方がいいデータが取れるので、研究者は調査協力者の言語を理解できる環境を整えることが必要となる。

以上のように、思考発話は、外から観察されない内的プロセスを学習者自身の言葉により表面化できる研究方法として、第二言語習得研究やテストの妥当性検討方法の1つとして一定の評価を得ている。

6.2. 本研究の調査手法

本研究の調査方法は次のとおりである。

- ①テキストを読みながら、母語で理解した内容や理解できない点、推測したこと、また、解釈の変更などについて話してもらう。よって、第二言語の日本語学習者が協力者の場合は、一文ずつ翻訳することが主な発話内容となる。
- ②協力者の理解した内容や解釈の手がかりとしたものを明らかにするために、調査者から質問し、それにこたえてもらう。

このような方法をとった理由を述べる。従来、読解過程の調査方法として前節で述べたような発話思考法が広く用いられ、読解研究を前進させてきた。しかし、発話思考法で語られることは学習者が意識化できることに限られるため、読解過程の全貌を把握できるとは言い難い。さらに、学習者が読んでいるその場で、そのように理解した理由を聞いてはじめて、その理解過程を詳しく知ることができる。しかし、先行研究ではそのような手法がとられていない。

また、日本語の小説を材料文とした場合、母語による翻訳を話してもらうだけでは、発話主や動作主を学習者がどのように理解しているか把握できないことが多く、それを質問で確認する必要がある。このように、学習者から自発的に現れない文章の処理過程も可視化するには、調査者から質問をして学習者に語ってもらうことが欠かせない。

確かに、読解中に質問に答えてもらうことについては、言語化の前に様々な媒介過程や推論過程が介在するため、読解過程を直接反映するとは考えられない(高

橋,1995)という意見もある。しかし、本手法を用いることで、従来見えなかった読解過程の情報にアクセスできる利点のほうが大きいと考えた。

本論文の全体にわたる調査方法は上記を基準としている。具体的な手順などの詳細は、研究課題によって調整しているため、各研究の章で示す。

6.3. 調査の概要

本研究では、上級日本語学習者の理解困難点に見られるテキスト解釈過程について明らかにすることを目的とする。

本研究は大きく 2 つの研究からなる。1 つは学術論文を使用してその読解過程を分析したものである。もう 1 つは小説を使用してその読解過程を分析したものである。各研究で分析対象としたデータは、研究課題に応じて異なるため、各研究の章において、分析対象や分析方法を説明することとする。

6.3.1. 協力者

協力者は、日本国内に滞在する日本語学習者である。学習者のレベルは上級である。上級学習者は、日本の大学・大学院などの高等教育機関に在籍し、旧日本語能力試験¹⁶ 1 級、または日本語能力試験 N1 に合格していることを目安とした。しかし、協力者の中には、十分に高い日本語能力を持ちながらも上記の試験が未受験であることもあった。そこで、協力者の相対的な日本語能力を確認するために SPOT テスト¹⁷も可能な限り実施し、学習状況などもあわせて協力者の日本語レベルを判断した。

協力者の母語は、それぞれ英語、韓国語、中国語である。また、日本語母語話者の読解過程に関するデータを収集するために、日本語を母語とする大学生にも調査を行った。すべての協力者は自由意思で調査に参加し、謝礼が支払われた。また、参加にあたっては、事前に調査参加についての文書を用いて説明を受けるなど、研究倫理について配慮が十分になされた。

¹⁶ 日本語能力試験は、日本語を母語としない人の日本語能力を測定して認定する試験である。この試験は国際交流基金と日本国際教育支援協会によって実施されている。2010 年に改定が行われ、2009 年 m では 1 級～4 級、2010 年からは N1～N5 というレベルによって判定されるようになった。このレベルの中で 1 級および N1 が最も高いレベルで上級を指す。<https://www.jlpt.jp/>

¹⁷ SPOT(Simple Performance-Oriented Test)は筑波大学留学生センターで開発され、学習者の総合的な日本語能力を短時間で測定するテストとして利用されている。テスト形式はオンラインで音声を聞きながら、空欄にひらがな 1 字を選択式で入力する。所要時間は 10～15 分である。90 問で 90 点満点である。56～80 は中級(N2,N3) ,81～90 は上級(N1) とされる。<http://ttbj-tsukuba.org/p1.html#SPOT>

表 6-1 研究内容と材料文，協力者

章	研究内容	材料文	協力者
第 7 章	学術論文の読解における 名詞の解釈	協力者の専門分野 の学術論文	中国人大学院生 11 名
第 8 章	学術論文の読解における 語義の解釈過程		中国人大学院生 2 名 (全 15 名の調査結果か らの抜粋)
第 10 章	(パイロット研究)小説テ クストの読解にみられる 誤読	短編小説：森絵都 (2005)「彼女の彼 の特別な日」「彼の 彼女の特別な日」	中国人大学院生 4 名
第 12 章	日本語母語話者の小説テ クストの読解		日本人大学生 17 名
第 13 章	小説テキスト読解にみら れる語義の解釈		英語母語話者 13 名 韓国語母語話者 13 名 中国語母語話者 13 名
第 14 章	小説テキスト読解にみら れる登場人物を指示する 要素の誤読		*いずれも大学または 大学院生

6.3.2. 材料文

学術論文の読解過程を明らかにする調査(第 7 章，第 8 章)では，協力者に自身の専門分野の学術論文の中から読みたいものを事前に選んでもらった。協力者が選んだ論文の分野は，言語学，人文地理学，教育学，経済学，社会学，観光学，看護学である。

小説テキストの読解過程を明らかにする調査(第 10 章，第 12 章，第 13 章，第 14 章，第 16 章)で使用した材料文は，森絵都氏が 2005 年に発表した短編小説「彼女の彼の特別な日」「彼の彼女の特別な日」である。この材料文は 2 編で 1 つの話を構成し，全 103 文である。選定理由は，分量が 103 文と短く，完結した形で扱える短編小説であること，森氏は直木賞作家であり小説の完成度が高いこと，現代小説で話の内容も親しみが持てること，2 編を読んではじめて結末がわかる構成になっているため，読後の理解を確認できることである。全文を付録資料に載せる。この小説の登場人物は，元恋人の結婚式の帰りに一人でバーに行った「彼女」と，祖母の四十九日の帰りに寄ったバーで，若き日の祖母似の彼女を見つけて声をかけた「彼」である。彼は「互いに願いを叶え合いませんか」と持ちかけ，彼女の電話番号を知りたいと言う。一方，彼女は元恋人に言えなかった祝福の言葉を伝えるために，二時間前に戻してほしいと言う。彼女は彼に当初興味がなかったが次第に好奇心が芽生える。2 編を通読すると，彼の願いは実はすでに叶えられているという結末が推測できる。

この小説のテキスト分析の詳細は第 9 章で述べる。

第二部 学術論文の読解に関する研究

第二部では、学術論文の読解過程に焦点をあてる。第 7 章では、学術論文の読解における名詞の解釈についてまとめ、外来語の多義語の問題に加え、固有名詞を普通名詞と取り違える誤読を指摘する。第 8 章では、個別の読みの過程に注目し、学術論文の読解における語義の解釈過程について述べる。ここでは、「レコード」「ソフト」といった外来語が多義語であるがゆえに、当該の文脈との擦り合わせがうまくいかず、誤読が生じた例を追跡する。いずれも中国語を母語とする大学院生を対象とした研究である。

第7章 学術論文の読解における名詞の意味の誤った理解

本章では、中国語を母語とする上級日本語学習者が学術論文を読むときの読解過程を調査した。そこでの名詞の誤った理解に焦点をあて、論文読解時に生じる誤読について考察した。

7.1. 研究の目的

日本の大学院で研究する上級日本語学習者が、日本語で書かれた専門分野の学術論文を読むとき、不適切な理解に至る箇所は多い。一方、中国語を母語とする学習者の場合、単語の意味を理解するにあたって、漢字の知識が参照され、それが読解の助けになることも事実である。学習者自身からも日本語の読解はあまり難しくないという話をよく聞く。では、実際のところ、学習者はどのように論文の内容を理解しているのだろうか。

野田(2014)は、上級学習者に読解過程を話してもらうだけでなく、質問にも答えてもらう調査を日本語で行った。そして、学術論文を読むときに、語句の意味の不適切な推測、文の構造の不適切な捉え方、既有知識に基づく不適切な理解をすることを明らかにした。しかし、上級学習者による学術論文の読解過程については研究自体がまだ少なく、わからないことが多い。読解にあたってどのような知識やストラテジーが利用され、情報を読みとる上でどのような困難点があるかを具体的に知るには、学習者に日本語で書かれた論文を実際に読んでもらい、その過程を観察する必要がある。

本研究では、上級学習者が学術論文を読むときの、名詞の誤った理解に焦点をあて、論文読解時に生じる誤読について考察する。調査では実際に名詞の誤った理解が多く見られ、テキストの解釈に重要な役割を担う名詞を誤読することが、全体の解釈に大きな影響を与えられと考えられるからである。

研究方法として次の手順に従う。読解中の学習者の発話だけでなく、辞書などで語

句の意味をどのように調べ、どのように理解するかをあわせて分析し、誤った理解に至る過程を明らかにする。

ここでは、日本の大学院に在籍する上級学習者の多くを占める、中国語を母語とする学習者を調査対象とする。彼らは日本語を学ぶ以前から漢字の知識があり、中国語以外を母語とする学習者とは文字を通して利用できる知識が異なるはずである。両者を区別して調査するのはこのためである。

7.2. 調査方法

上級日本語学習者が学術論文の内容をどのように理解したかについて、次の(1)から(5)の方法で調査を行った。

- (1)調査協力者に研究上必要な学術論文を選んでもらう。この際、まだ読んだことがないもので、タイトルや要旨だけを読んでもらい、かつ、学会誌や大学紀要に掲載されている査読を経た論文の中から選んでもらう。
- (2)普段どおりに辞書やパソコンを使って論文を黙読し、読みながら考えたことや理解できないところなどを調査協力者の母語で話してもらう。
- (3)調査協力者に内容理解を確認する質問を行う。必要に応じて、専門分野についての既有知識の有無などを確認する。
- (4)上述の調査協力者の発話と調査者とのやりとりについては中国語の通訳者を依頼し、同時通訳に近い形で通訳してもらう。それらをすべて IC レコーダーで録音し、調査終了後に文字化する。
- (5)辞書やパソコンを使ってどのように調べ、どのような意味が出てきたかについて、メモまたは写真をとって記録する。

調査協力者は日本の大学に在籍する大学院生 11 名である。全員、日本語能力試験 N1 を取得しており、中国語が母語である。

調査協力者が選んだ論文は 7 つの分野にわたる。人文地理学、経済学、経営学、社会学、心理学、教育学、観光学である。詳細は表 7-1 のとおりで、そこに示す論文番号は後述の例文に対応する。調査は 2014 年 6 月から 2015 年 9 月にかけて行った。

表 7-1 調査で使用した論文

論文番号	論文名	分野
1	香川勝俊「小都市における大型点立地の地域商業への影響」『人文地理』39-3,1987	人文地理学
2	山形与志樹・水田秀行「京都議定書・国際排出量取引のエージェントベースシミュレーション」『オペレーションズ・リサーチ』10,2001	経済学
3	森谷智子・青木圭介「サブプライム危機と金融規制」『嘉悦大学研究論集』	経済学

	54-2,2012	
4	下村博史「共同物流事業の成長メカニズム」『日本物流学会誌』15,2007	経営学
5	森健・白田佳子「企業と銀行の距離はリレーションシップを説明するか」『年報経営分析研究』26,2010	経営学
6	小松史朗「トヨタ生産方式と改善—能力形成と「参画」の過程—」『日本経営学会誌』18,2006	経営学
7	丸山雅祥・山下悠「フランチャイズ方式による海外進出：実証研究の展望」『国民経済雑誌』205-2,2012	経営学
8	松野良一「インターネットが「視聴者⇒テレビ」のフィードバック過程に及ぼしている影響についての一考察—TBSのWEBサイトの機能分析を中心として」『マス・コミュニケーション研究』61,2002	社会学
9	池田文人「錯視とその情報処理モデル」『情報処理』50-1,2009	心理学
10	丸山英樹「ユネスコスクール・ネットワークに見られる持続可能性：バルト海プロジェクトと大阪 ASPnet を事例に」『国立教育政策研究所紀要』143, 2014	教育学
11	山崎良夫「スポーツツーリズムと旅行ビジネス：旅行産業におけるスポーツツーリズムの可能性」『日本国際観光学会論文集』21, 2014	観光学

7.3. 先行研究

日本語学習者の読解については、様々な観点から研究が行われてきた。読解過程の研究には舘岡(1996)や谷口(1991)などがある。それぞれ、学習者に要約文を書いてももらったり、話してもらったりして、その読解過程を分析している。一方、専門日本語の読解研究には深尾(1994)や山本(1995)などがあり、独特の語彙や複雑な構文などが読解の障害になることが指摘されている。

しかし、上述の読解過程の研究では、調査に使用された文章は調査者が与えたものであり、学習者の興味とは関係がない。これでは現実の読解活動を反映しているとは言えないだろう。また、学習者が読んでいるその場で、そのように理解した理由を聞いてはじめて、学習者の読解過程を詳しく知ることができるが、従来の研究ではそのような方法が採られていない。一方、上述の専門日本語の読解研究では、学習者の読解過程については言及がない。また、野田(2014)は意味の理解を正確に知るためには母語を使った調査が必要だと述べている。

これら先行研究と比較すると、本研究は次の(6)から(8)のような点に特色がある。

- (6)上級日本語学習者に読む必要がある専門分野の論文を読んでもらう。
- (7)読解過程を話してもらうだけでなく、質問にも応えてもらう。
- (8)日本語ではなく、学習者の母語により内省を語ってもらう。

7.4. 名詞の意味の誤った理解

調査では、文構造の捉え方の誤りなど、様々な読解困難点が見られた。ここでは、名詞の意味を誤って理解することに焦点を絞る。内容語である名詞を誤って理解することは、その単語を含む文の意味も誤ることになり、テキスト全体の解釈を別の方向に導いてしまう。

最初に、名詞の意味を誤って理解する例について、その性質の違いから次の 6 類型に分けて述べる。①固有名詞を普通名詞と取り違える、②複合名詞を要素に分けて解釈し、全体の意味が合成できない、③多義的なカタカナ語で文脈に合わない意味を選ぶ、④音形の類似からカタカナ語を別の語と取り違える、⑤漢語の略語の意味を誤って解釈する、⑥照応関係が把握できない、である。各例を次の 7.4.1 から 7.4.6 で説明する。また、7.4.7 では誤った推測から正しい理解に落ち着く例を紹介する。

7.4.1. 固有名詞を普通名詞と取り違える

学習者は会社名や人名などの固有名詞を固有名詞と考えず、普通名詞と捉える傾向がある。こうして辞書で意味を調べ、記載された語釈から推測を始める。

次の(9)は、「プラネット物流」が会社名を示す固有名詞とは捉えられず、辞書に記載された語釈から、原著者が意図しない意味まで付加した例である。以下、もとの論文から引用する場合は“ ”を使うこととする。また、例文の下線部は筆者によるものである。

(9)阿保は、日用品業界の共同物流を運営する「プラネット物流」を題材に深い考察を行っている。(経営学・論文番号 4)

この例で“共同物流を運営する「プラネット物流」”とあることから、「プラネット物流」をその運営主体つまり会社名と考えるのが正しい。しかし、学習者は「プラネット物流」を共同物流の会社名と考えず、翻訳アプリ〈Google 翻訳〉で「プラネット」の意味を調べ、「惑星」と理解し、「プラネット物流」の意味を次の(10)のように言う。

(10)「地球物流」つまり「地球全体が繋がるような(システムを持つ)物流」

さらに、後続の“経営資源を連結して新しいサービスを創造する”という部分を読み、「先程の私の予想と同じ。地球全体を連結するという意味」と話す。このように、(10)の誤った解釈から誤読をベースにした一貫性が強固に補強される。「プラネット」と次にあげる「国領」は固有名詞と普通名詞が一つの単語に共存する例だが、辞書に記載がある場合、固有名詞だと認識されにくい。

また、次の(11)も同様に前述の論文からの例である。「国領」が著者名とわからず、辞書で調べ、「中世における公領」と理解したため、「彼」＝「国領」の照応関係が理解されない。以下、もとの論文の一部を筆者が省略する場合は「……」を使う。

(11)このことを国領は「プラットフォーム」という概念で説明している。彼はプラットフォームを「……」と定義している。(経営学・論文番号 4)

この例で“国領は「……」で説明している。彼は「……」と定義している”とある。つまり、「国領」が人名であり、先行研究の著者名と理解されなければいけない。しかし、学習者は「国領」の漢字からその意味を「国境」と推測し、その後〈Google 翻訳〉で「国領」と入力したところ、中国語で「国領」という単語がそのまま出てきた。学習者は意味を十分に確認できなかったため、インターネットで「国領」と入力したところ、「中世において諸国が支配した公領」という説明を見つける。そこから、最終的に「国領」の意味を次の(12)のように言う。

(12)国領：それぞれの国が支配している場所

「国領」が出てくる 1 ページ前で、(10)に示すように、「プラネット物流」という名詞を「地球全体が繋がるような物流」と解釈し、その話題の類似性から、「国領」を「国境」の類義語と理解したようだ。それで、学習者は「国領」を先行研究の著者名と受け取らない。(11)の 2 文目の“定義している”主体は誰かと調査者が確認したところ、この論文を書いた原著者の下村氏だと答え、2 文目以降の内容はすべて下村氏の考えであると誤読する。この種の誤りは先行研究の記述を正確に読む必要がある学術論文の読解では致命的である。

以上、「プラネット」は述語相当の機能を持つ修飾要素「運営する」の情報が、また、「国領」は述語の情報が利用されないことでもたらされる誤読といえる。

7.4.2. 複合名詞を要素に分けて解釈し、全体的な意味が合成できない

学習者は複合名詞の意味を、語の要素の組み合わせから解釈する傾向があり、全体的な意味を合成できない。

複合名詞の全体的な意味について、石井(2006)は「ひとまとまり的な意味」として説明する。複合名詞の意味には、複合語を構成する要素の組み合わせから無理なく引き出すことのできる「字面どおりの意味」と、組み合わせから引き出すことのできない「字面以上の意味」があり、後者は複合名詞の「ひとまとまり的(非分析的)な性質」だという。また、多くの複合語は、組み合わせの意味のみを表す臨時一語に由来するようなものと、ひとまとまりの意味のみを表す単純語に近いものの間にあると述べている。

次の(13)では、「キャリア・パス(career pass)」は「ある職位に就くのに必要な一連の業務経験」という全体的な意味があるが、語の要素の組み合わせから「キャリアを目の前で見送る」と解釈し、そのように発話する。

- (13)そして、肉体労働領域から精神労働領域へと拡大するキャリア・パスは、「分離」された構想と実行を限定的にはあるが「再統合」する可能性を持つ。
(経営学・論文番号 6)

ほかに、「Web マスター」(経営学・論文番号 8)は「ウェブサイトの管理者」という専門的な意味があるが、語の要素の組み合わせから「インターネットに詳しい人」と解釈して発話する。また、「トップダウン」(経営学・論文番号 6)は「組織の上層部が意思決定をし、その実行を下部組織に指示する管理方式」という意味だが、「会社で上位から下位まですべての人」と解釈して発話する。

このように、語の要素の組み合わせの意味からたどり着けない複合名詞の全体的な意味は読解の困難点となりやすい。

7.4.3. 多義的なカタカナ語(外来語)で文脈に合わない意味を選ぶ

「点火器(lighter)」と「作家(writer)」は日本語ではどちらも「ライター」と表記される。一方、「ソフトウェア」が「ソフト」と表記され、略語として語形が短くなれば多義性は増大する。学術用語はカタカナ表記の外来語で定着し、調査で使った学術論文にもカタカナ語が多用される。

次の(14)は、論文中のセクション表題に現れる「レコード」の意味がわからず、文脈に合わない別の意味に理解する例である。(14)の「日本レコードセンター」は論文中で(15)のように説明されている。

(14)4. 日本レコードセンターの成長過程

- (15)音楽 CD や DVD などの音楽ソフトメーカーの共同出資によって設立された共同物流の運営会社(経営学・論文番号 4)

学習者はまず、翻訳アプリ〈Google 翻訳〉で「レコードセンター」を調べ、「記録センター」という対訳を見るが、この意味ではないと考えた。次に、インターネットの google の検索窓に「レコードセンターとは」と入力したところ、Microsoft の「レコードセンター」の説明が出てきた。そこには、「法的文書など、組織のすべてのレコードを格納、管理できる集中レポジトリとして機能する」と書いてあった。その説明から、「レコード」の意味を正確に知りたくなり、今度は〈Google 翻訳〉で「レコード」と入力したところ、「記録」という対訳が出てきた。さらに、次の(16)を読み、多義的な外来語「ソフト」を含む「音楽ソフト」をここでの意味の「音楽 CD」ではなく、「パソコンのアプリケーションソフト」のことだと言う。

(16)日本レコードセンター(NRC)は音楽ソフトメーカーの共同出資によって設立された共同物流の運営会社である。(経営学・論文番号 4)

そこから最終的に、「日本レコードセンター」はパソコンに関係がある会社であるという解釈に至り、そのように発話する。

ちなみに、「ソフト」について、『岩波国語辞典 第7版 新版』(2011)の語釈は次の(17)のとおりである。語釈は適宜、割愛して示す。

(17)ソフト：①やわらかいこと、②「ソフト帽」「ソフトフェア」などの略。ソフトウェア(コンピューターを働かせるためのプログラム)、ソフトクリーム(やわらかいアイスクリーム)、ソフトドリンク(アルコール分を含まない飲料)、ソフト帽(フェルトなどでつくった、やわらかい中折帽子)、ソフトボール(大型のやわらかいボール。それを使った野球に似た競技)

ここでは、「ソフト帽」や「ソフトウェア」などいくつかの単語が同じ「ソフト」として記載されることから、「ソフト」は多義的だとわかる。また、この論文での意味である「市販の音楽 CD」の用法は、「ソフト」「ソフトウェア」いずれの語釈にもなく、「音楽ソフト」という単語を知らないかぎり理解できない。

また、学習者は「レコード」がいわゆるレコード盤、音盤を指すことを知らないため、音楽ソフトとレコード盤とを結びつけられない。「日本レコードセンター」は論文での出現回数が3回、その省略形「NRC」は16回で、両者を合わせると19回もある。キーワードである名詞の意味の解釈を誤ることは、論文全体の理解に支障をきたす。

上述してきたように、カタカナ語の多義性は読解の困難点となりやすいと考えられる。次の7.4.4.もカタカナ語に関する誤読だが、多義性に由来するものではなく、音形の類似による点で7.4.3.とは異なる。

7.4.4. 音形の類似からカタカナ語を別の語と取り違える

学習者はカタカナ表記の未知語の意味を推測するとき、音形の類似から別の語と取り違えて理解することがある。

次の(18)では、カタカナ語の「ホノルルマラソン」という名詞を実際に発音し、その音形の類似から、「ホノルル」は「whole(全部)」のことだと言う。このように取り違えた結果、「ホノルルマラソン」は「フルマラソン」のことだという解釈に至り、それを発話する。

(18)日ごろのジョギングの先にある「非日常」としてのホノルルマラソンやニュー

ヨークマラソンへの参加, [……。]。(観光学・論文番号 11)

ほかに、「コンベンション(convention)」(観光学・論文番号 11)を「コンビネーション(combination)」と捉え、「コンベンション事業」を「連携事業」と解釈し、また、「サプライチェーン」(経営学・論文番号 7)を「メインではなく、サブのチェーン」と解釈して発話するのも同様の例である。学習者は音形を手がかりに未知語の意味を推測しようと試みるが失敗に終わることが多い。

7.4.5. 漢語の略語の意味を誤って解釈する

学習者は漢語の略語を見ても、略語と捉えず、意味を推測するとき、漢字の知識や周辺の単語との共起関係を参照して、誤って理解することがある。

次の(19)では、「民間放送」の略語である「民放」を、漢字の知識から「民間の人に向けた放送」と解釈し、そのように発話する。

(19) 民放によるインターネットビジネスに関する報告は別の機会に譲り、本論文では「テレビ局—視聴者間関係」に関する分析、考察に絞る。(社会学・論文番号 8)

また、次の(20)は「大手企業」の略語である「大手」に「に」がついた語句を副詞として誤読し、「積極的に」と解釈する例である。

(20) 運賃改定により格安航空券が正規化され、新興勢力だった HIS が大手に価格競争を挑み台頭した。(観光学・論文番号 11)

学習者は「大手企業」の意味は知っていたが、この例にある「大手」がその略語とは考えなかった。そこで、「大手」の意味を推測するのに、周辺の単語との共起関係を参照したところ、「積極的に価格競争を挑む」という一連の表現が文章でよく使用されることを思い出したと発話し、「大手に」は「積極的に」という意味の副詞であると言う。その解釈の結果、意味だけでなく、品詞も誤ってしまう。

学習者にとって、ある単語が略語かそうでないかを判断する手がかりは乏しく、略語の知識がないかぎり正しく理解することは難しい。

7.4.6. 照応関係が把握できない

次の(21)は、「パッケージ」という単語が先行文脈と照応関係にあることがわからず、自分がよく知っている意味に理解する例である。(21)で指示詞(____線部)とその後要素(□部)、先行文脈(.....線部)をそれぞれ示す。

(21) いま一つの特徴は、小売店からの発注、在庫引当て、出荷、配送、荷受確認、請求までの一連の業務を、システム化していることである。この一貫したシステムの利用によって、小売店とメーカー双方が業務プロセスを効率化するというメリットを提供している。[……] これほど幅広い業務プロセスを事業領域に持つことから、NRC は自社の経営コンセプトを「小売店、メーカー、消費者を信頼でつなぐパッケージ物流サービスの提供者」と表現している。(経営学・論文番号 4)

(21) を分析すると、1 文目の“小売店からの発注、在庫引当て、出荷、配送、荷受確認、請求までの一連の業務”は、2 文目で“この一貫したシステム”という指示語句で捉え直され、さらに 3 文目で“これほど幅広い業務プロセス”と名づけられ、最終的に“パッケージ物流サービス”という複合名詞で言い換えられている。

高崎(1988)によると、名づけとは前の叙述を指示語句で捉え直すとき、後要素に臨時一語をつくり、それによって前の叙述を名づけるもので、「書き手の把握の個性の打ち出された、新しいものの見方の指示」であるという。(21) の例で「パッケージ物流サービス」の「パッケージ」は「一括する」という意味で、この複合名詞は 1 文目の「小売店からの発注、在庫引当て、出荷、配送、荷受確認、請求までの一連の業務」という先行文脈を言い換えた語として照応関係にある。しかし、学習者はそれに気づかず、よく知っている意味から、(22) のように「包装する物流サービス」と解釈し、そのように発話する。

(22) NRC は自社の経営コンセプトを「小売店、メーカー、消費者を信頼でつなぐ包装する物流サービスの提供者」と表現している。

前の叙述が別の語で捉えなおされて文章が展開していくのを正確に読み解くのが読解の適切な手順だが、これは上級学習者にも難しい作業のようである。

以上、名詞の意味を誤って理解する例について、6 類型に分けて述べてきた。次の 7.4.7. では誤った推測から正しい理解に落ち着く例を取り上げる。

7.4.7. 誤った推測から正しい理解に落ち着く

学習者は未知語の意味を推測する場合、誤った推測から出発しても正しい理解に落ち着くこともある。

次の (23) では、「右肩上がり」を「軍人は右肩に勲章をつけている」という背景知識を使って、「非常にいい発展をする」と解釈し、そのように発話する。推測の方法は誤っていたものの、たまたま結果的に正しい理解に落ち着く。

(23) [……] 旅行産業は急激な右肩上がりとなって成長した。(観光学・論文番号 11)

学習者は様々な知識やストラテジーを使って未知語の意味を推測する。しかし、誤った推測が必ずしも誤った理解に至るとは限らない。

次の 7.5. ではこれまでの知見を考察し、読解力をつける方法を論じる。

7.5. 読解力をつけるために

本研究では、上級学習者は様々な要因から名詞の意味を誤って理解するということがわかった。学習者に辞書的な語彙力があっても、それがなかなか読解力に結びつかない。辞書には多くの場合、意味が複数列举されているが、そこから文脈に合う意味を瞬時に選ぶのは決してやさしくはない。

宮谷(2005)によると「読む」のに必要なのは、単語や文の情報から選択可能な意味を頭の中にリストアップし、用法の範囲を絞り込み、他の可能性を排除する能力である。また、村木(2002)が述べるように、個々の単語の意味は文という構造の中で、はじめてある特定の意味を持ち、多義的な語の意味は文の中で一義化されて特定される。

では、読解力をつけるためには今後どのようなことを読解教育に取り入れればよいだろうか。それについて 7.5.1 から 7.5.3 で述べる。

7.5.1. 辞書や翻訳アプリなどのリソースの特性と使い方

経営学論文(論文番号 4)を読んだ学習者が使用した翻訳アプリ〈Google 翻訳〉は単語の対訳が 1 つしか出ず例文もないため、対訳が文脈に合わなくても気づきにくい。学習者にとって例文の出る辞書やアプリの使用は必須である。

さらに、学習者の多くは単語の意味の調べ方を体系的に教わった経験に乏しく、独自の方法で調べる傾向がある。そのため、辞書や翻訳アプリの特性を理解しないまま使い、誤った検索結果に終わることもある。最近は翻訳アプリなど新しいリソースも増えている。現状では学習者に任せっきりとなっている辞書などの調べ方を教育すべきである。具体的には、同じ単語を調べても、辞書やアプリ、ウェブサイトによって検索結果が異なること、様々なリソースを組み合わせ補完しあって検索することの重要性、専門用語の辞書の有効性を実感させることである。

7.5.2. 固有名詞か普通名詞かを判別する方法

学習者が固有名詞か普通名詞かを判別することに困難をおぼえることについて言しよう。学習者は会社名や人名などの固有名詞を固有名詞と考えず、普通名詞と捉

える。こうして辞書を引き、その語釈に従い、「プラネット物流」という物流会社名を「地球全体が繋がるようなシステムを持つ物流」と解釈するように、原著者が意図しない意味を付加して理解することはすでに述べた。

固有名詞か普通名詞かを判別する手がかりは述語情報に注目することである。以下、経営学論文(論文番号 4)の例で説明する。“阿保は、日用品業界の共同物流を運営する「プラネット物流」を題材に深い考察を行っている”という文において、「運営する」という述語相当の機能を持つ修飾要素の統語情報を使えば、「プラネット物流」が共同物流を運営する主体であることがわかり、そこから会社名と推測できるはずである。また“[……] 国領は [……] と説明している。彼はプラットフォームを [……] と定義している”という文章において、「説明する」「定義する」という述語の意味的な情報を使えば、主体は人であると推測できる。統語情報だけでは名詞の意味が特定できない場合、述語や述語相当の語句の意味的特性を積極的に利用する必要がある。そして、前後文脈との関係を検討し、固有名詞か普通名詞かを判別する意識を活性化させることが重要である。

7.5.3. 多義的なカタカナ語(外来語)の意味を特定する方法

近年、多義的なカタカナ語が増加し、同じカタカナ語でも専門分野によって意味はまったく違う。このことが文中で名詞の意味を特定するのを困難にする。

たとえば、経営学の論文(論文番号 8)に出てくる「プラットフォーム」の意味を辞書で調べると、「駅のプラットフォーム」「コンピューターを動かすための OS やハードウェアなどの基本的な環境」という記載はあるが、この論文での意味である「共同物流の共同インフラ」は一般的な辞書には載っておらず、専門用語辞典にあたる必要がある。

多義的なカタカナ語を解釈する場合、文脈に合うように意味を特定したり、別の可能性を考えたりする必要がある。その習慣を身につけるには、たとえば次のような練習問題が有効だろう。

(24)IT 業界の A 社が開発したソフトは今年売上を伸ばした。

ソフトの意味は(a.ソフトウェア b.ソフトボール c.やわらかい)

中山(2008)は日本語教育では「カタカナ語」はついでにしか教えられていないことが問題だという。専門的な学術論文ではカタカナ語が頻出するため、読解困難に陥りやすい。多義性を持ち頻度の高い専門用語のカタカナ語を意識した教育が必要である。

7.6. まとめ

本章では、学習者が学術論文を読むときの、名詞の誤った理解に焦点をあて、その誤読について考察し、次の①から⑥について述べた。①固有名詞を普通名詞と取り違える、②複合名詞の全体の意味が合成できない、③多義的なカタカナ語で文脈に合わない意味を選ぶ、④音形の類似からカタカナ語を別の語と取り違える、⑤漢語の略語の意味を誤って解釈する、⑥照応関係が把握できない、である。

現代日本語において新語は外来語、固有名詞、複合名詞の形で増え続けるが、これらはいずれも今回学習者が誤った理解をしたものである。しかし、これらの教育は従来重視されておらず、習得は学習者に委ねられてきた。また、読むときのリソースとなる辞書などの使い方も学習者に任せっきりとなっている現状は改めなければならない。

日本語の語彙を全体として眺めた時に、将来的には漢語が減り、代わって外来語が増加するという見方がある(樺島 2004)、特に専門分野の新しい概念を取り入れる必要がある学術論文においてはその傾向は顕著であると言えよう。このような日本語の現状を考えると日本語教育における外来語の扱いは、現状に見合った改訂が必要である。外来語の習得にこれまで以上の時間を割くだけでなく、学習する外来語を効果的に選択する視点も持ち合わせるべきだろう。

最後に今後の課題を述べる。名詞は分野ごとに多様なため、外来語の多義性には解説を加えることが欠かせない。そして固有名詞の判別には、述語または述語相当の機能を持つ語句の統語情報や意味的特性を徹底して利用することが重要である。これ以外に有効な手段はなさそうである。

第8章 1 人の読みに注目した語義の解釈過程

本章では、1 人の読解過程を時間の流れに沿って追跡する。中国語を母語とする上級日本語学習者が学術論文を読むときの語義の解釈と修正過程を質的に明らかにする。そして、文脈に合った語義の解釈を困難にする要因として、語の意味的な特性や、専門知識という背景知識が影響したことを示す。

8.1. 研究の目的

本章は、上級日本語学習者(以下、上級学習者)の文章理解における語義の解釈と修正過程を質的に明らかにすることを目的としている。

文章理解とは読んだテキストに関する心的表象をつくり上げることである(大村 2001:8)。卯城(2010 : 45)は、読解過程において文字情報は内容のすべてではなく単なるヒントにすぎず、読み手はテキスト情報をたよりに自身が持っている知識を活用しながら頭の中で意味を構築していくと述べている。舘岡(2005 : 7-9)は読解過程についての先行研究を概観し、読解とは、読み手が書き手の意図をテキストから解読するボトムアップと、読み手の予測を中心とするトップダウンとの相互作用であると述べている。

上級学習者を対象とした文章理解の研究では、上級学習者が自分の専門分野の学術論文を読む場合、様々な読み誤りをすることが指摘されている。野田(2014)は、学習者は語句の意味の不適切な推測や文構造の不適切な捉え方、既有知識に基づく不適切な理解をすることを明らかにしている。藤原(2016)は論文読解時に生じる、名詞の意味の誤った理解に焦点をあて、固有名詞を普通名詞と取り違える、複合名詞の全体的な意味が合成できないなどの誤読の類型を見出した。

上述の研究は複数の学習者に共通して見られる誤読の類型を明らかにしたもので、誤読の共通性を見る上では意義がある。一方、1 人の読解過程を時間の流れに沿って追跡することも読解研究のもう 1 つの重要な側面であるが、これについては研究が十分ではない。

そこで本章では学習者の読解過程を時系列で追跡する。15 名の学習者を対象に、文章を読みながら、理解した内容を母語で語ってもらい調査をしたところ、様々な誤読が観察された。特に筆者が注目するのは、語の認識や文の構造という言語形式を正しく把握し、語の辞書的な意味を正しく理解しても、当該の文脈に合った、適切な語義の解釈が正しくできずに誤読する例である。これは次に述べる中級学習者の誤読の特徴とは異なり、上級学習者の誤読を特徴づけるものであると考えられる。中級学習者の読解では、たとえば、学習者はカタカナで表記された「モノ(物, もの)」という語を、その語形の類似性から「メモ(memo)」や「メモリー(memory)」と誤って認識し、つじつまが合うように誤った文脈をつくり上げることがある(ポクロフスカ

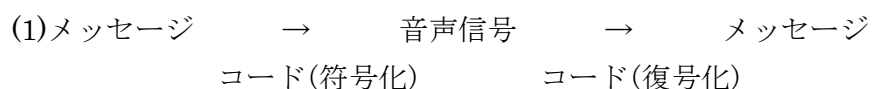
2016)。このように上級学習者と中級学習者では誤読の特徴が異なることが示唆される。

本章では、読み手が言語形式や語の辞書的な意味を正しく理解しても、当該の文脈に合った、適切な解釈にたどり着けない場合、文の構成要素である語の意味(語義)はどのように解釈され、また修正されているかその過程を明らかにする。具体的には、文章に頻出する語(キーワード)の意味解釈で誤読が見られた 2 名の学習者の例をとりあげ、語義の解釈の際、学習者がどのようなコンテキスト(想定)を使ったかに注目する。「語」という単位に注目したのは、「文」と異なり分析単位が具体的で明確であることから、意味解釈やその修正過程の議論がしやすいと考えるからである。たとえば、調査で学習者に文の意味をどのように理解したかを確認する際、文の単位だと統語的な分析もからみ、その意味解釈は複雑になり、不確実な要素を排除しきれない。しかし、語の意味ならそうした要素を排除し、一定の確実さを担保できると考える。同時に、語の意味解釈の過程を追うことは、その語から構成される文の意味解釈の過程にも繋がる。よって語義の解釈を時系列的に追跡することで読解過程の一端が明らかになるだろう。なお、本章が扱うのはあくまでも語レベルの意味解釈の過程であり、語の意味解釈が論文全体の内容理解にどのように影響を与えるのかについては稿を改めて論じる。

8.2. 読解における語義の解釈とは

この章の主要テーマである「読解において語義を解釈する」というのはどういうことだろうか。それについて、話し手と聞き手の間で行われる語の概念化の関係について概説した岡田(2007)や、スペルベル&ウィルソンが提唱した関連性理論の解題を行う今井(2001)を引用しながら整理しておく。

岡田(2007)によると、たとえば、「犬」という言葉は特定の種の動物を表す記号であり、「歩く」は特定の行為を表す記号であると言えるという。これらの記号と、記号を組み合わせる規則を一緒にしたものを符号(コード)と呼ぶと、日本語も英語もコードであり、コードモデルによれば、これらのコードによって自動的にメッセージが相手に伝えられる。



話し手は相手に伝えたいメッセージをコードにしたがい、語の結びつきに変換し、音声信号で発する。次に聞き手はその音声信号をコードにしたがって解読し、メッセージが理解される仕組みである。このモデルでは、コンテキストや話し手の意図は考慮されず、コードによってのみ意味が決定され、それが「文の意味」となる。したが

って、話し手の意図やコンテキストが深く関わる「話し手の意味」とは大きな隔たりが生じると説明されている。読解においては、「話し手」は「書き手」、「聞き手」は「読み手」、「音声信号」は「文字」と置き換えられるだろう。

岡田(2007)は(2)のような用例をあげて、コードモデルが扱う文の意味には不確定な要素が多く含まれ、意味的に不完全であるため、以下に述べる語用論的プロセス(a)(b)(c)に頼らないと文の命題¹⁸を復元できないことを論じている。

(2)A：本、買ってきた？

B：C先生の本、かなり高くてお金が足りなかった。

まず「C先生の本」には、C先生が書いた本、C先生が訳した本、C先生が持っていた本など様々な解釈が可能である。そのため、(a)多義的な語(句)の一義化が必要である。また、「高くて」という表現についても、「値段が高い」のように何が高いのかを明らかにしなくては「高い」の意味を確定できない。つまり、(b)直示的表現¹⁹の対象同定が必要である。さらに、「足りなかった」についても、「C先生が書いた本を買うのに十分なお金がなかった」のように、何に対して足りないのかという内容も明らかにしないとBの意図を理解できない。ここでは(c)傍点部の内容を決定する手順などを含む飽和(saturation)が必要である。このように(a)(b)(c)のような語用論的プロセスがなければ命題の復元ができない。上述の例は語用論で話し手の明示的な意味を扱うものである。なお、話し手の意味には非明示的な意味(暗意)も含まれるが、これは本稿で扱わないため説明を割愛する。

また、今井(2001:216)は(3)のような用例をあげながら語義の解釈について説明する。

(3)This steak is raw.

(3)ではステーキとして供されている肉が文字通り「一切加熱されていない」はずがないことが(タルタル・ステーキを別にして)聞き手には判っているので、**raw**を「生」ではなく「生焼け」に拡張した解釈が行われる。このように語義は常に「ad hocな」(その都度決まる)ものであると結論づけている。

さらに、今井(2001:12)は、読解の際の解釈の手助けとなるのは読み手の頭の中から取り出された記憶や一般常識であり、これらを想定と言い、読み手が自分の頭の中

¹⁸ 今井(2001:60)によると、命題とはそれが表す内容が真であるか偽であるかを確かめることのできる言語形式であり、内容が真であるか偽であるかを確かめることのできる言語形式は命題である。

¹⁹ (2)の用例の場合、現場依存性が高いゼロ代名詞と言える。本章では、岡田(2007)の用語をそのまま引用して説明した。

から取り出した想定をコンテキストと呼ぶ。今井はコンテキストを次のように定義する。

- (4)コンテキスト：発話／書かれたものの解釈にあたって、発話／書かれたものの解説的意味と共に推論の前提として使われる想定である。

以下本稿でコンテキストという場合は(4)の定義に従う。ウィルスン&ウォートン(2009:30)によると、想定をつくるのは具体的には次のようなことである。

- (5)①雑談か公式の討議の場合かというように発話が行われる物理的環境，②先行する文章の解釈，③文化的知識や科学的知識などの世界知識，④読み手がその場で思い出すことができる読み手独特の情報

ここまでの議論を整理し、筆者の見解を述べる。筆者は読解における語義の解釈は辞書的な意味にとどまらず、当該の文脈を解説する過程で文の解釈とともに一義化されると考える。その意味で語義は文と連動した存在であると言える。

次に、実際の読解指導の観点から語義を「どこまで」深く読む必要があるかについて、日本人の英文読解を研究対象としている卯城(2010:55-56)を引用しながら述べていく。

(6)The **man** planned the house.

(7)The **man** bought the house.

(6)と(7)の **man** は、訳読式の指導では「その男は」「その人は」と日本語に直せばよい。しかし、この2つの **man** は、読解プロセスを重視した指導では、語義としてどのようなデフォルトを置くのかが重要だと言う。つまり、(7)の **man** は誰でもよいが、それはどんな人でも家を買えるからである。しかし(6)では **architect**(建築家、設計士)がイメージされなければならない。もちろん、新築する際に購入者が家の間取りを考えると可能性も排除できないが、ただ単に「その男は」と横に書いてある英文を機械的に縦の日本語に直すだけでは、「読めたつもり」になっているにすぎないという。注目すべき点として、学習者の理解内容を確認する際、和訳をしてもらうだけでは、横文字を縦文字に機械的に置き換えて安心する「習慣訳」が多く存在すると指摘されていることである。学習者は読解で「文を訳すことはできるが、内容理解ができない」と言うことがある(卯城 2009:10)が、「習慣訳」がその感覚を説明できる。この時の学習者の訳は、岡田(2007)の説明にある、コードモデルが扱う「意味的に不完全な文の意味」に相当するのではないだろうか。本稿の調査では、学習者の読

解過程を明らかにするために学習者に読みながら理解した内容を話してもらったが、そこでも「習慣訳」と考えられるものがあった。

以上をまとめると、読解において語義を解釈する場合、①書き手が伝達しようとしている文の意味の中で、語義はその文脈に合った形で正しく解釈される必要があること、②解釈の手助けとなるのは読み手の頭の中から取り出された記憶や一般常識であり、これらをコンテキストと呼ぶこと、③学習者には文を機械的に母語に置き換えて「読めたつもり」になっている「習慣訳」が多く存在することを確認した。以下、本稿で学習者の理解過程を分析する際、これらの観点を参考にする。

8.3. 調査

8.3.1. 調査概要

上級学習者が学術論文の内容をどのように理解したかについて、次の(8)から(12)の手順で調査を行った。

- (8)学習者に研究上必要な学術論文を選んでもらう。
- (9)普段どおりに辞書などを使って論文を黙読し、読みながら考えたことや理解できないところなどを学習者の母語で話してもらう。
- (10)学習者に内容理解を確認する質問を行う。必要に応じて、専門分野についての既有知識の有無などを確認する。
- (11)解釈の際、どのようなコンテキストを使ったかをできるだけ明らかにするために、調査者から積極的に質問を行う。
- (12)上述のやりとりについては中国語の通訳者を依頼し、同時通訳に近い形で通訳してもらう。それらを IC レコーダーで録音し、調査終了後に文字化する。

調査対象者は日本の大学に在籍する大学院生 15 名で、全員、日本語能力試験 N1 を取得し、中国語が母語である。学習者が選んだ論文の分野は、言語学、人文地理学、教育学、経済学、経営学、社会学、観光学、看護学である。調査は 2014 年 6 月から 2016 年 4 月にかけて行った。

8.3.2. 調査結果

15 名の読解調査では様々な読み誤りが観察され、それぞれ「語の識別、語形の類似に関する誤り」「未知語の意味の推測の誤り」「当該の文脈に合った、適切な語義の解釈ができない誤り」「文構造や活用形に関する誤り」「テキストの結束性(照応関係、省略要素の復元)に関する誤り」の 5 つに大別された。最も多く見られた「未知語の意味の推測の誤り」については、名詞だけをとりあげて藤原(2016)で論じられている。他の読み誤りについては稿を改めて論じる予定である。本稿で取り上げるのは、語の

認識や文の構造という言語形式を正しく把握し、語の辞書的な意味を正しく理解しても、「当該の文脈に合った、適切な語義の解釈ができない誤り」である。

8.4. 読解における語義の解釈過程

本節では、「当該の文脈に合った、適切な語義の解釈ができない誤り」があった学習者 A と学習者 B の理解過程を質的に分析し、その解釈過程について考察する。この 2 名を選んだのは、論文のキーワードにおいて語義の誤った解釈が観察されたからである。なお、キーワードとは文章全体で繰り返し出現する語で、その正確な理解が文章全体の理解に大きな影響を与える語を指す。キーワードがどのように解釈されるかを時系列的に追跡することで、読解過程の一端が明らかになるだろう。本稿では、論文のキーワードである「距離」「遠い」「レコード」「ソフト」「レンタル」が学習者にどのように解釈されるかを追跡する。

調査では学習者に文の意味をどのように理解したかを母語で話してもらった。注したいのは学習者が日本語を中国語に翻訳する際、8.2.で述べたように、英文和訳で横文字を縦文字に機械的に置き換えて安心する「習慣訳」が多く存在する可能性があることである。そこで、学習者の解釈過程をまとめた表 8-1 と表 8-2 において学習者の発話で習慣訳と考えられる場合に(習慣訳)と記し、複数の解釈の可能性がある場合はそれらを併記する。また、キーワードが初出した文の番号を 1 とし、そこから 1 文ずつ順に番号を振った。学習者が誤読をした文の番号には*をつける。表中の下線は筆者による。

8.4.1. 「距離」「遠い」の解釈—誤った解釈を修正できた例—

8.4.1 では語義の誤った解釈を修正できた例、8.4.2 では語義を誤った解釈のまま読み続けた例を紹介する。

学習者 A はなぜ解釈を誤ったか

学習者 A が読んだのは、リレーションシップ・バンキングをテーマにした経営学の論文(森健・白田佳子(2010)「企業と銀行の距離はリレーションシップを説明するか」『年報経営分析研究』26)である。リレーションシップ・バンキングとは、金融機関が借り手である顧客企業との間で親密な関係を維持することで、通常入手しにくい借り手の信用情報を入手し、その情報を基に貸し出し等の金融サービスを提供するビジネスモデルである²⁰。この論文では、銀行と融資先の企業が地理的に遠いほど企業は倒産や破産に繋がる傾向があり、地理的距離は銀行が得ることのできる企業の信用情報量と相関すると結論づけている。つまり、この論文で使われている「距

²⁰知恵蔵 2015 の解説「コトバンク」〈<https://kotobank.jp/>〉 2017 年 4 月 22 日閲覧

離」は「銀行と融資先の企業が地理的にどのくらい離れているか」を意味し、「遠い」は「その地理的な遠さ」を意味する。しかし学習者は、論文著者の意図したそれらの意味に解釈せず、「距離」は「銀行と企業の親密度、両者が互いに持っている情報量」であるという誤った解釈を持ちながら読み進め、「距離」という語が論文中で 18 回目に現れた時点でようやく正しい理解に至った。

学習者 A が誤った解釈に至る過程とその解釈を修正する過程は、発話データと論文のテキスト分析から次のように考えられる。以下()に表で参照する文番号を記す。

[1]論文タイトルの解釈から誤読する。「企業と銀行の距離はリレーションシップを説明するか」を「企業と銀行の距離は関係(リレーションシップ)によって説明できる」と誤読した。その理由として、「説明する」の主語は「距離」のような抽象的な名詞よりも人などの具象物が来るのが一般に多いため、「距離はリレーションシップを説明する」より「距離はリレーションシップによって説明される」と解釈しやすかったと考えられる(文 1)。

[2]文 9 で「遠い企業」の意味を「企業と銀行の両者の関係が遠いこと。両者の間に取引関係がないこと」と誤読する。「遠い」を「地理的な遠さ」ではなく、借り手の信用情報を基に金融サービスを提供するビジネスモデルである「リレーションシップ・バンキング」という専門知識をコンテキストとして使い、「企業と銀行の親密度、銀行が企業について持っている情報量」と解釈する。

[3]文 11 でも引き続き「遠い中小企業」を「メインバンクとして企業と銀行の両者の間に十分な相互理解がないこと」と誤読する。そして、文意を「企業と銀行の関係が希薄なため、企業は銀行からの支援を得られず破産する」と解釈する。「遠い」を「地理的な遠さ」ではなく、「両者の関係性や銀行が企業について持っている情報量」とであると解釈する。

[4]さらに、文 11 の「かくして遠い中小企業は」において、副詞の「かくして」を動詞の「隠して」とであると発話した。そして、「(情報量を)隠している中小企業は」と解釈したが、その際「(距離が)遠い」を「地理的な遠さ」ではなく、互いの「情報量が少ない」と誤読していたことがきっかけとなった。企業が情報を「隠して」いるため、銀行が企業について持っている「情報量が少ない」と考えたからである。最終的に「銀行は顧客である企業について把握している情報量が実は少ないことに気づいていない」と誤読する。このように「距離」「遠い」の誤読が「かくして」の誤読を誘発した。

[5]文 14 で「距離」を「互いの親密度／情報量」と置き換えても「企業と銀行が相互に把握している情報量が少ないほど企業の破産に繋がる」と意味が通るため解釈の修正は起こらない。結局、この誤った解釈は文 30 を読むまで維持される。

[6]文 24 に「距離をアンケートで計測している」とあるが、アンケートという手法は地理的な距離の測定よりむしろ心理的な親密度や関係性の測定になじむことが、「距離＝親密度、関係性」という解釈を一層補強した可能性がある。

[7]文 26 で引き続き「距離」を「企業と銀行が互いに把握している情報量のこと」と発話する。文中に「距離を地理情報システムで客観的に計測した」という記述があるにも関わらず、この言語情報を文章理解で使っていない。

[8]文 30 で「企業銀行距離を自動車での移動走行を前提とした地理情報システムにて計測した」と具体的な記述が出てきたところでようやく解釈の修正が行われ、「距離」とは「親密度」ではなく「地理的な遠さ」とであると発話する。

[9]文 30 以降は「距離が遠い」を「地理上の距離が遠い」と正しく理解して発話する。文 41 で再度「距離が遠い」の意味を確認された際も正しく答える。

表 8-1 学習者 A の「距離」「遠い」の解釈過程

文	テキスト	学習者 A の「距離」「遠い」の解釈
*1	[論文タイトル] 企業と銀行の距離はリレーションシップを説明するか—倒産企業の実証分析—	「企業と銀行の距離は関係によって説明できる」と解釈。タイトルから誤読する。
2	[要旨] 本研究は企業と銀行の距離と、倒産および倒産態様の関係を分析した。	距離(習慣訳)
3	[要旨] その結果、距離が大きいほど倒産や破産に繋がる傾向があること、この傾向の強さはメインバンクの業態により異なることが明らかになった。	距離(習慣訳)
4	[要旨] 企業と銀行の距離が遠くなればリレーションシップが希薄となる可能性は否定できない。	距離が遠い(習慣訳)
5	[要旨] 昨今の銀行合併や経営合理化に伴う店舗の減少が企業とメインバンクの距離増大を通じ中小企業の不利益に繋がっている可能性がある。	距離(習慣訳)
6	本研究は企業とメインバンクの距離に着眼し、両者のリレーションシップ(関係性)を明らかにするものである。	距離(習慣訳)

8	本研究は <u>距離</u> という客観的計測可能な要因に着目し、 <u>距離</u> が倒産ないし破産という事	距離(習慣訳)
*9	銀行は貸出先の倒産を避ける動機がある(ダイヤモンド 1994)が、 <u>遠い</u> 企業の救済には移動コストがかかる。	「遠い企業」とは「関係が遠い、メインバンクではなく、両者間取引関係がないこと」と解釈。
*11	かくして <u>遠い</u> 中小企業は銀行とのリレーションシップが薄まり、支援を十分得られず倒産や破産に至ると考えられる。	「遠い中小企業」とは「企業と銀行の間に十分な相互理解がないこと」と解釈。文意は「関係が希薄なため、企業は銀行からの支援を得られず破産する」。ここで「(距離が)遠い」を「地理的な遠さ」ではなく、「情報量が少ない」と理解したために、「(情報量を)隠している中小企業は」と解釈し、それと整合性がとれるように、副詞の「かくして」を「隠して」と理解するような誤読を誘発した。最終的に「銀行は顧客である企業について把握している情報量が実は少ないことに気づいていない」と解釈。
*12	本研究は企業とメインバンクの <u>距離</u> をリレーションシップの代替変数と想定し、 <u>距離</u> と倒産有無の関係、及び <u>距離</u> と倒産様態(再生か破産か)の関係を分析した。	「距離」とは「企業と銀行が相互に把握している情報量のこと」と解釈。「代替変数」はよく理解できないと言及。
14	分析結果は <u>距離</u> が遠いほど倒産や破産に繋がる傾向があることを示している。	「企業と銀行が相互に把握している情報量が少ないほど企業は破産に繋がる」という解釈も整合性があり、「距離が遠い」の解釈修正は起こらない。
15	つまり、企業と銀行の <u>距離</u> はリレーションシップの代替変数でないとは言えない。	距離(習慣訳／相互に把握している情報量)
23	一方、企業と銀行 <u>距離</u> に関し、貸出可否(ペターセン・ラジャン(2002))等の研究は見られるが、 <u>距離</u> とリレーションシップの関連を探る研究は筆者の知る限り見られない。	距離(習慣訳／相互に把握している情報量)
*24	多くの先行研究は <u>距離</u> をアンケートで計測している。	距離(習慣訳／相互に把握している情報量)、「先行研究は今も測定しているところである」と解釈。「アンケート」という記述が心理的な調査である「親密度や関係性」を連想させた可能性あり。
25	本研究は銀行が経営支援を通じ倒産や破産を防止するという先行研究の指摘を出発点に、 <u>距離</u> をリレーションシップの代替変数として捉える新たな試みである。	距離(習慣訳／相互に把握している情報量)

*26	距離を地理情報システムで客観的に計測した手法も本研究の特徴である。	「距離」は「企業と銀行が互いに把握している情報量」とであると解釈。解釈の際、「地理情報システムで客観的に計測」という言語情報が使えていない。
30	取引銀行情報から日本金融名鑑を用い住所を特定、企業銀行距離(以下、本稿では企業とそのメインバンクの取引支店との間の距離を企業銀行距離と呼ぶこととする)、及び銀行本支店距離(以下、本稿では企業のメインバンクの本部と取引支店との間の距離を銀行本支店距離と呼ぶこととする)を、自動車での移動走行を前提とし地理情報システムにて計測した。	初めて「距離」を「地理的な遠さ」とであると正しく理解する。「自動車での移動走行を前提とし地理情報システムにて計測」と具体的な記述が出てきたことが解釈修正を導いた。
33-40	(文番号 33,34,39,40 に「距離」「遠い」あり)	文番号 30 以降「距離が遠い」を「地理上の距離が遠い」と正しく理解。
41	企業銀行距離が遠い、つまり表 2 で右に行くほど倒産企業の遠さが目立つ。	「距離」の意味を再度確認したところ、「企業と取引先銀行の支店を自動車で移動することを前提として計測した地理的距離」と正しく理解。

学習者 A はどのようにして語義の解釈を修正できたか

文 30 で「企業銀行距離を自動車での移動走行を前提とした地理情報システムにて計測した」と具体的な記述が出てきたことが再解釈をするきっかけとなり、学習者は「距離」が「地理的な遠さ」を意味することに気がついた。

8.4.2. 「レコード」「ソフト」「レンタル」の解釈—誤った解釈を維持した例—

学習者 B はなぜ解釈を誤ったか

一方、学習者 B は語義の誤った解釈を修正できなかった。学習者 B が読んだのは共同物流がテーマである経営学の論文(下村博史(2007)「共同物流事業の成長メカニズム」『日本物流学会誌』15)である。共同物流とは、コスト削減のために複数の荷主が同じ倉庫に共同して商品を保管し、共同で荷役を行い、共同で商品を配送することである²¹。この論文は、音楽レコード(音盤)や CD, DVD を扱う共同物流会社「日本レコードセンター」を取り上げている。つまり、この論文のキーワードである「レコード」は「音楽レコード(音盤)」、「ソフト」は「市販の CD や DVD」、そして「レンタル」は「CD や DVD のレンタル事業」を意味する。しかし学習者は、その意味には捉えず、「レコード」も「ソフト」も「パソコンに関係がある」と発話し、そこか

²¹ 「物流用語辞典」〈<http://www.e-logit.com/words/kyodo-butsumyuu.php>〉 2017 年 4 月 22 日閲覧

ら「日本レコードセンター」は「パソコンに関係がある会社」であり、「ソフト」は「パソコンのアプリケーションソフト」とであると解釈した。そのため、後続して出現する「レンタル事業」を「CD や DVD のレンタル事業」と捉えずに、この論文のテーマと自分の専門分野の知識を使って「自社物流をレンタルする」と解釈した。これらの誤読は最後まで維持され修正されなかった。

学習者 B が誤った解釈に至る過程は次のように考えられる。

[1]学習者は翻訳アプリ〈Google 翻訳〉で「レコードセンター」を調べ、「記録センター」という対訳を見るが、この意味ではないと考える。次に、ウェブサイトの Google の検索窓に「レコードセンターとは」と入力したところ、Microsoft の「レコードセンター」の説明が出てきて、「法的文書などのレコードを格納、管理できる集中レポジトリ」と書いてあった。その説明から、「レコード」の意味を正確に知りたくなり、〈Google 翻訳〉で「レコード」と入力したところ、「記録」という対訳が出てきた。この時点で「レコードセンター」はパソコンと関係がありそうだと一旦解釈する(文 1)。

[2]学習者は文 2 から文 18 まで「レコード」と「ソフト」の習慣訳を発話するが、この間ずっと「日本レコードセンターはパソコンに関係があり、パソコンのアプリケーションソフトをつくる会社」とであると解釈していることが後述の[3]から読み取れる。

[3]文 19 で NRC の意味を質問された際、「日本レコードセンターはパソコンに関係があり、パソコンのアプリケーションソフトをつくる会社。ここまで読んで全部その話になっている」と発話する。文 19 以降もこの解釈は維持される。

[4]「ソフト」は多義語で辞書に「やわらかいこと／ソフトウェア／ソフトクリーム／ソフトドリンク」など複数の語が同じ「ソフト」として記載されている。そのため、「ソフト」の意味の不確実性が高くなる。また、この論文での「ソフト」の意味である「市販の音楽 CD」の用法は語釈にない(文 3,6,7,8)。

[5]論文中で「レコード」と「ソフト」は同じ文中で隣接して出現することが多く、それが一層文の意味の不確実性を増長し、同時に語義の一義化も困難にさせた(文 6,7,8,21,22)。

[6]文 23 から 30 について、学習者は「重要ではない」と判断して読み飛ばす。実はここに、「レコード」「ソフト」「レンタル」の語義を決定づける手がかりとなる「音

楽ソフトの媒体がレコードから CD へと変化した」「CD や DVD のレンタル事業が急成長」という重要な記述がある。

[7]文 62 で「レンタル事業」の内容を質問された際、「NRC(日本レコードセンター)は自社物流を他人にレンタルする」と発話した。学習者は文 23 から 30 を読みとばしたため、レコードと音楽ソフトの繋がりがわからず、後続の「レンタル事業」が「音楽 CD や DVD のレンタル事業」を指すこともわからない。その結果、「レンタル」を解釈するのに他のコンテキストが必要となり、自分の専門分野から「共同物流」という世界知識を使った。

表 8-2 学習者 B の「レコード」「ソフト」「レンタル」の解釈過程

文	テキスト	学習者 B の「レコード」「ソフト」「レンタル」の解釈
*1	[セクションタイトル] 日本 <u>レコード</u> センターの成長過程	翻訳ソフトで調べて「記録センター」の意味を見るが納得しない。ウェブで「レコードセンターとは」と入力して検索すると、Microsoft の「レコードセンター」が出る。その後、「レコード」だけで検索したところ「記録」と出たため、パソコンと関係があると解釈する。
2	本節では、共同物流を運営する事業者会社の中で、もっとも長い社歴を持つ企業の一つである、日本 <u>レコード</u> センター体制の成長過程を分析する。	レコード(習慣訳／パソコンと関係がある)
3	同社を事例分析の対象に選択した理由は、業界全体の取り組みとして共同物流を事業展開している事例としては、音楽・映像ソフト業界が最も典型的な業界であると考えたからである。	ソフト(習慣訳／パソコンと関係がある)
5	[セクションタイトル] 日本 <u>レコード</u> センターの概要	レコード(習慣訳／パソコンと関係がある)
6	日本 <u>レコード</u> センター(株)[以下、NRC と略称]は、音楽 <u>ソフト</u> メーカーの共同出資によって設立された、共同物流の運営会社である。	レコード、ソフト(習慣訳／パソコンと関係がある)
7	現在、同社は約 80 社のメーカーの音楽ソフトや映像ソフトを全国の小売店などに供給している[図 1]。	ソフト(習慣訳／パソコンと関係がある)

8	なお、音楽ソフト業界では、 <u>NRC</u> の他に[株]ジャパン・ディストリビューションシステムが同様の共同物流サービスを提供している。	ソフト、レコード(習慣訳/パソコンと関係がある)
14	このような標準化は、 <u>NRC</u> を利用するメーカー同士・小売店同士の「水平的な協調関係」の成果である。	レコード(習慣訳/パソコンと関係がある)
18	このように <u>NRC</u> は共同物流を中核に、小売店同士・メーカー同士の水平的協調関係と、メーカー・小売店間の垂直的協調関係を実現している。	レコード(習慣訳/パソコンと関係がある)
*19	これほど幅広い業務プロセスを事業領域に持つことから、 <u>NRC</u> は自社の経営コンセプトを「小売店、メーカー、消費者を信頼でつなぐ「パッケージ物流サービスの提供者」と表現している。	<u>NRC</u> の意味を再度確認すると「パソコンのゲームなどのソフトをつくる会社。ここまで読んで全部その話になっている」と言う。
20	今日の <u>NRC</u> の共同物流事業を取り巻く外部環境を図 2 に示す。	レコード(習慣訳/パソコンと関係がある)
21	これによれば、音楽ソフト業界におけるあらゆる外部環境変化が、同社の経営に影響を及ぼす可能性のあることが理解できる。	ソフト(習慣訳/パソコンと関係がある)
22	同社が音楽ソフト業界を代表する共同物流を運営しているが故に、この業界のあらゆる競争圧力に晒されているのである。	ソフト(習慣訳/パソコンと関係がある)
23 -30	「音楽ソフトの媒体がレコードから CD へ変化した」「CD や DVD のレンタル事業が急成長し、消費者の利用形態も、商品を購入するのではなく、レンタル店で借りて利用する形態へと、徐々に変化した」と記述あり。	*学習者 B はこの部分は重要ではないと考え、読み飛ばす。
*62	<u>NRC</u> の事例でいえば、 <u>NRC</u> が商品を供給する小売店が大型チェーンへと成長し、また、レンタル事業も現れるなどして、新たな小売店のニーズが把握される。	「レンタル」事業の解釈を、「NRC は「自社物流」があるため自社物流を他人に貸すこと」であると言う。

学習者 B はなぜ語義の誤った解釈を修正できなかったか

学習者 B が語義の誤った解釈を修正できなかったのは複数の要因が重なったためであると考えられる。まず、「レコード」「ソフト」は多義語であり、文中で意味を一義化しなければならないが、辞書に記載されている語釈が不十分なこともあり、複数の意味の候補から文脈に合うものを選ぶのは困難であった。さらに、実時間という制約の中で効率的に読む行為は自然なため、重要ではないと判断した箇所は読まない

ことも多い。実際調査では学習者 B が読み飛ばした箇所に「音楽ソフトの媒体がレコードから CD へと変化した」「CD や DVD のレンタル事業が急成長」という記述がある。もし、学習者 B がここを読んでいれば、レコードは音盤、ソフトは市販の音楽 CD や DVD を指すことがわかった可能性が高い。しかし、読み手にとって「レコードもソフトもパソコンに関係がある」という解釈が一旦固定されると、新しい手がかりがない限り修正されない。自分の解釈に疑問がない読み手は、読みとばした部分に重要な手がかりがあるとは考えず、読み直すストラテジーは発動されない。

結局、学習者 B は上述のような読みとばしをしたことで、レコードと音楽ソフトの繋がりがわからず、後続する「レンタル事業」が「音楽 CD や DVD のレンタル事業」を意味するとは考えない。その結果、「レンタル」の意味を解釈するのに他のコンテキストが必要となった。そこで、自分の専門分野から「共同物流」という世界知識をコンテキストとして使い、「レンタルするものは自社物流のシステム」であると解釈した(文 62)。読み手に接近した情報である専門分野の知識をコンテキストとして使った解釈は、学習者にとって自然であり修正されなかった。本例は、まず、「レコード」と「ソフト」の解釈で誤り、それが修正できないことで「レンタル」の解釈にまで影響が及んだものと言える。

学習者 B は調査後のインタビューで、「この論文は簡単だ。なぜわかりきったことをだだら書くのかわからない」と話し、誤読していたという認識はない。学習者 B は最後まで誤った解釈を維持したが、文章を読み進める上で違和感がなかったようである。

8.5. 考察

8.5.1. 文脈に合った語義の解釈を困難にする要因 1—語の意味的な特性—

読解とは書き手が伝達しようとしている意味を、文字情報をたよりに読み手が解読する活動である。しかし、言語形式は万能ではなく、意味確定度に不十分性があるため、読み手が書き手の伝達しようとしている意味を解読するのに語用論的プロセスが必要なのは 8.2. で述べたとおりである。調査で観察された語義の誤読の潜在的要因を考えると、「距離」「遠い」は基本語で意味が広いことに加え、定義が難しい語であり、辞書的な記述は難しいと言える。また、「距離」が「遠い」を「両者の親密度」「互いに把握している情報量が少ない」と比喩的に解釈するのも十分に可能であり、辞書の「遠い」の語釈にも「人間関係でへだたりがある、親密さを欠く」とある(岩波国語辞典 第 7 版 新版: 2011)。一方、「レコード」「ソフト」は多義語であるため、複数の意味の候補の中から文脈で意味を一義化し、確定しなくてはならない。これらの要因は文の意味の不確実性を高めることとなり、同時に語義の解釈も困難にさせた。

8.5.2. 文脈に合った語義の解釈を困難にする要因 2—専門知識—

調査で読んだ論文は学習者の専門分野であったため、解釈の際に使うコンテキストとして専門分野に関する知識が学習者にとって接近していて使いやすかったと考えられる。読み手の期待通りに関連性があり、少ない処理コストで最初に思いつく解釈が読み手の選ぶ解釈となる(ウィルスン&ウォートン 2009:90)。「距離」「遠い」の解釈では学習者 A にとって、借り手の信用情報を基に金融サービスを提供するビジネスモデルである「リレーションシップ・バンキング」という専門知識がコンテキストとして使いやすく、そこから導かれた「銀行が持っている情報量が少ない企業は、十分に支援を得られず倒産する」という解釈も理にかなうものであった。一方、「レンタル」の解釈では、学習者 B はこの論文の主要概念である「共同物流」という専門知識をコンテキストとして使い、「日本レコードセンターは自社物流を持っているため自社物流を他社に貸す」と結論づけた。卯城(2009)は、第二言語読解では文章に書かれていない内容を背景知識によって連想したり、背景知識と矛盾するテキスト情報を理解する際に背景知識が優先され、誤った解釈をしたりすることがあると述べる。これは背景知識が文章理解を阻害することを示すものだが、学習者 A と学習者 B の事例も同様である。

8.5.3. 語義の解釈の修正プロセスを重視した読解教育

卯城(2010:54)は読解が不得意な読み手ほど当初の解釈に固執することを示し、解釈を柔軟に修正できることが読解能力の高さに繋がると述べる。筆者も読解調査の経験からこの考えに強く同意する。解釈に対する柔軟性こそが読解の鍵であり、意識的なトレーニングで養うべき能力ではないだろうか。

卯城(2010:57)は解釈の修正プロセスを重視した読解教育として次のように提案する。1 つは、読解過程での漸次的な内容確認の目的で、ペアを組ませて 1 文 1 文読ませながら、どのように理解が変化していくかを発話プロトコル法で口頭報告させる方法である。2 つめは、教師の発問は学習者の読解プロセスを形成するという考えに基づき、fact finding, inference, generalization など読み手を育てる質問をバランスよく与える方法である。筆者はこれらが経験できる教授法や教材をつくることが重要だと考える。このスキルは、実際に解釈の修正プロセスの経験を積むことでしか意識化されないと考えるからである。しかし、このスキルは従来明示的に教育されてきたとは言い難く、これこそが上級学習者が読解で身に付けるべき重要なものだろう。

8.6. まとめ

本章では、語の認識や文の構造を正しく把握し、語の辞書的な意味を正しく理解しても、当該の文脈に合った、適切な語義の解釈ができずに誤読する学習者の理解過程

を分析し、語義の解釈過程を明らかにした。誤読の要因として、語の意味的な特性や学習者の専門知識が考えられた。また、読解では一旦つくられた解釈にとらわれずに柔軟に修正できることが重要で、読解スキルとして意識的に教育される必要があることも示唆された。今後は語より上位の言語単位である文やテキストの結束性に注目し、これらが学習者にどのように解釈されるかを統合的に分析し、読解中に頭の中で行われる処理を可視化したい。

第三部 小説テキストの読解に関する研究

ここまでは、読み手に情報を正確にわかりやすく伝えるように厳密さをもって書かれたテキストである学術論文の読解について述べてきた。第三部では、エピソード的知識を伝え、人物や場面、感情がからむ小説テキストの読解過程に焦点をあてる。第9章では、本研究で用いた材料文(小説)の分析について述べる。第10章では、中国人大学院生4名を対象としたパイロット研究の結果を示す。このパイロット研究で得られた知見に基づいて発展させたのが第11章の日本語母語話者を対象にした調査と、第12章以降で論じる英語・韓国語・中国語母語話者を対象にした調査である。第12章では日本語学習者の調査結果の全体像を示した後、第13章では語義の解釈、第14章では登場人物を指示する要素の誤読について論じる。第15章では、調査データ全体について定量的な考察を加える。第16章では、解釈の修正や誤読の連鎖といった、読解時に見られた動的な読解過程について述べる。第17章で総合考察を行う。

第9章 材料文の分析

本章では、本研究で用いた材料文の分析について述べる。まず、材料文のテキストの基本情報について述べる。次に、英語・韓国語・中国語と日本語の談話構成について先行研究を概観したうえで、英語・韓国語・中国語の翻訳テキストと日本語テキストを対照することにより学習者の母語別の読解上の困難点を予測する。

9.1. 材料文のテキストの基本情報

本研究で用いた材料文は、森絵都氏が2005年に発表した短編小説「彼女の彼の特別な日」「彼の彼女の特別な日」である。登場人物は「彼女」と「彼」である。元恋人の結婚式の帰りに傷心をなぐさめるべく一人でバーへ立ち寄った「彼女」と、祖母の四十九日の帰りに寄ったバーで若き日の祖母にそっくりの彼女を見つけて思わず声をかけた「彼」の物語である。この小説は、彼女の視点から語られる1人称小説「彼女の彼の特別な日」と、彼の視点から語られる一人称小説「彼の彼女の特別な日」の2編で1つの話を構成し、両編を読んで初めて全体像がわかる仕組みである。

テキストは、カッコで括られた会話文と、語り手による解説や描写からなる地の文にわかれ、全103文である。「彼女の彼の特別な日」は51文、「彼の彼女の特別な日」は52文とほぼ同数の文からなる。なお、カッコで括られた会話文は句点の数にかかわらず、カッコ内を一文とした。日本語文章難易度判別システム(<http://jreadability.net/>)での文章難易度は中級前半・ふつう(リーダビリティ・スコア4.0)と判定された。

以下本論文で「彼女の彼の特別な日」を引用する場合は、文番号の前に(彼女)、「彼の彼女の特別な日」を引用する場合は(彼)と記す。文番号は冒頭からの順番である。

表 9-1 材料文の基本情報

小説	「彼女の彼の特別な日」	「彼の彼女の特別な日」
文の数	51	52
文字数	1,414	1,423
設定	元恋人の結婚式の帰りに、傷心をなぐさめるべくバーに立ち寄る「彼女」	祖母の四十九日の帰りに、祖母への未練を残してバーに立ち寄る「彼」
語り手	彼女	彼
小説の人称	1 人称	1 人称
書式	文庫本サイズ 8 ページ・縦書き	
文章難易度	中級前半・ふつう(リーダビリティ・スコア 4.0)	
特徴	2 編を通読すると結末がわかる	

あらすじは次のとおりである。彼は彼女の気をひくため、「互いに願いを叶え合いませんか」と持ちかけ、彼は彼女の電話番号を知りたいと伝える。一方、彼女は元恋人の結婚式で元恋人に言えなかった祝福の言葉を伝えるために式に出席していた「二時間前に戻してほしい」と言う。彼は結局、彼女の願いを叶えることはできない。しかし、彼女が元恋人に伝えたかった祝福の言葉を、彼女の代わりに伝えるため、元恋人の新郎に電話をすると約束し、彼女に新郎の電話番号を尋ねる。そして、新郎から彼女の電話番号を聞き出したいと考える。一方、彼女は彼に当初興味を示さなかったが、彼の言動から誠実さを感じ、次第に好奇心が芽生える。彼に元恋人の電話番号を聞かれたとき、元恋人の電話番号ではなく彼女自身の電話番号を書いて渡す。2 編を読むと、「彼女の電話番号を知りたい」という彼の願いは叶えられるという結末がわかる。材料文の全文は付録資料に載せた。

9.2. 英語・韓国語・中国語の小説の談話構成の違い

日本語では事態の把握や言語化をする際、話し手は現場で自分の目が捉えたことを見えたまま文にし、観察者である「私」は言語表現上に現れない(姫野 2012)。観察者の視点が統一されることで、直示動詞(行く、もらう等)や敬語の意味から動作主や目的語は暗示され、明示されないことも多い。

日本語と英語、中国語、韓国語の文法と談話構成を比較してみる。まず、韓国語は、語順や文法構造だけではなく、「私」を言語化しないなど、ある要素を言語化するか否かについても日本語と共通点が多い(生越 2012)。一方、英語と中国語の語順や文

法構造は日本語と大きく異なる。また、話者の談話構成は、話し手と聞き手という抽象化された役割に基づき、人称代名詞を用いて対話する(姫野 2012)。つまり、英語と中国では言語主体を逐一言語化する点でも日本語とは異なる。このように言語毎の特徴がある。

本論文が扱う小説(物語文)の談話構造に注目しよう。小説では登場人物がしたり、見たり、感じたりしたことが語られる。日本語の小説では、談話全体を通じて語り手の視点を固定させることが知られている。言語学で久野(1978)は「視点」を「話し手がどこにカメラをおいて、この出来事を描写しているか」という概念を設定して説明する。そして、視点の制約が働く際に、能動文・受動文の選択、人称詞の選択、授受表現の使用、主観表現など多くの文法現象が説明されるという。日本語の主語や目的語などの省略は、文全体の視点が統一されて初めて可能となるものである。

久野(1978)は視点の制約は汎言語的に適応するとしたが、その後の研究では反論もある。加藤(2016)は、日中対訳の小説を使って、日本語の受動表現と中国語との対応を量的に考察し、その対応が約 60%にとどまること、2 人称と 3 人称が 1 人称よりも主語として優先される場合があることを示した。そして、中国語は視点の一貫性が保ちにくいことをあげ、その理由として、中国語の主語が省略しにくいこと、長く複雑な修飾節が使いにくいことを述べている。下地(2004)も用例の内省から、中国語は「誰がどうした」「何がどうなった」という 1 つ 1 つの事象に重点を置き、個々の事象を現実の時系列に沿って忠実に配置する傾向が強いと述べている。

韓国語の視点制約では、鄭(2002)は韓日両言語で書かれた現代小説を分析し、日本語より韓国語の方で人称詞が多用されるとした。その要因として、韓国語の授受表現は日本語と違い「～てやる」と「～てくれる」の区別がなく、動作の方向に関わる人物は文の表面に明示されることをあげた。

一方、認知言語学の立場では、「話者」(主体)が発話に先立って言語化の対象とする「事態」(客体)に課す認知的な営みを「事態把握」と呼び、それが「主客合一」の構図をとる場合を「主観的把握」(subjective construal)、「主客対立」の構図をとる場合を「客観的把握」(objective construal)と区別している(池上 2011)。

以下、池上(2011)を引用しながらまとめる。

「主観的把握」：話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の直接の当事者として体験的に事態把握をする。実際には問題の事態に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする。

「客観的把握」：話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は(自分の分身をその事態の中に残したまま)自らはその事態から抜け出し、事態の外に身を置いて、傍観者ないし観察者として客観的に(自己を含む)事態を把握する。

日本語話者は「主観的把握」のスタンスに傾く。自分の知覚することを体験者的に言語化する。話者にとって自分自身は知覚の対象として客体化されることはないため、自分自身は言語化されない。

他方、英語話者は「客観的把握」に傾く。自分の知覚することを傍観者的に言語化する。自分の分身は自分にとって知覚の対象として客体化されるため、言語化される。英語母語話者にとって、「主観的把握」は限られた場合の特殊な事態把握のスタンスであるとされる。

よって、同じ事態を言語化しているはずだが、日本語話者と英語話者とで事態の把握のスタンスが異なるために、対照的に異なる言い回しになっている場合が見られる。

(1) a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

b. The train came out of the long tunnel into the snow country.

(E. Seidensticker(1957)訳：汽車は長いトンネルから出て雪国へ入ってきた)

(1a)も(1b)も、言語化されている「事態」は同じである。同じ「事態」を言語化していながら、「汽車」は(1b)でしか言語化されていない。これは日本語の原文とその英語訳との間で「事態把握」の仕方が異なるためであると説明されている。すなわち、(1a)は「主観的把握」のスタンスでの言語化、(1b)は「客観的把握」のスタンスでの言語化である。(1a)は、「主人公」が問題の「事態」に臨場するという「主客合一」の構造であり、汽車に乗っている主人公にとって汽車は見えの対象にならないため、言語化されない。他方(1b)は、翻訳者は問題の「事態」の外に身を置き、「主人公」を乗せた汽車がトンネルから出てくるのを離れたところから眺めて言語化するという「主客対立」の構図になっている。

中国語訳は十数編存在するということで、「汽車」を訳出するものと訳出していないものが混在している。また、機械的に原文の日本語を直訳したと思われるものや、英語訳を参照にしているらしいものなども含まれるという。しかし、信頼できる中国語話者に意見を求めたところ、冒頭の文であることもあって「汽車」を言語化しない訳では落ち着きが悪いということであった。

韓国語訳も複数存在するが、「汽車」を言語化しない訳に対する違和感は中国語話者の場合ほどではないという印象を受けるとのことである。

このように同じ事態であっても、言語によってその言語化の仕方が違う、つまり、その背後には、話者による事態把握の仕方に違いがあると言える。

また、メイナード(2019)は、翻訳テキスト分析から見た日本語の本質について論じている。ここでは、メイナード(2019)を引用し、本研究に関連する先行研究をあわせて、日本語・韓国語・英語・中国語の談話構成の違いについて表 9-2 にまとめる。

表 9-2 日本語・韓国語・英語・中国語の談話構成の違い

	日本語	韓国語	英語	中国語
事態の把握・視点	話し手が現場で自分の目が捉えたことを見えたまま文にし、観察者の「私」は言語表現上に現れない。(姫野 2012) 視点が一貫性を保つことで、動作主や目的語が暗示され、明示されないことも多い。(久野 1978)	「私」を言語化しないなど、ある要素を言語がするか否かについて日本語と共通点が多い。(生越 2012)	話し手と聞き手という抽象化された役割に基づき、人称代名詞をつかって対話する。言語主体を逐一言語化する。(姫野 2012)	誰がどうした、何がどうなったという 1 つ 1 つの事象に重点を置き、個々の事象を時系列に沿って配置する。(下地 2004) 視点の一貫性が保ちににくい。
人称詞	西欧語の定義でいう 1 人称、2 人称代名詞はあまり用いられず、固有名詞や、親族名称、職業名、肩書などがよく用いられる。(鈴木 1973)	西欧言語での人称代名詞という概念と違い、親族名称や職名などが人称詞として多用される。動作の方向に関わる人物は文の表面に明示されるため、日本語より人称詞が多用される。(鄭 2002)	指示表現では、人称表現による繰り返しで、登場人物の存在が鮮明に規定される。日本語では表層化されず潜在的なトピックとして維持される。(メイナード 2019) “I” を避ける表現を選ぶことはできても、文法上の制限から日本語のように 1 人称を回避することは困難。(中村 1991, メイナード 2019) 話者を前提とした出来事の描き方は、固有名詞と頻繁に用いられる代名詞によって明示され、日本語のように潜在的な話者の存在を味わうことができない。(メイナード 2019)	2 人称と 3 人称が 1 人称よりも主語として優先される場合がある。主語を省略しにくく、長く雑な修飾節が使いにくいのである。(加藤 2016)

²² 本研究で人称詞とは人を表す言葉を指し、人称代名詞はもちろん、固有名詞と普段呼称として用いられる親族名称や職業名、肩書などを含めたものである。西欧語では人を表すことばに「人称代名詞」という用語を設け、それを「一人称代名詞」「二人称代名詞」「三人称代名詞」と分けている。しかし、日本語においてこのような用語が適切ではないということは、鈴木孝夫(1973) や田窪行則(1997) などで行われているとおりである。

ゼロ照応	話者は、前景化する必要がなければ表層化せずゼロ記号となる。(メイナード 2019) 授受表現と発達した敬語表現等を持つ構文上の特性により、ゼロ主語の指示対象を確定できるため、ゼロ照応化しやすい。 登場人物を指示する主語の省略が頻繁に行われるため、特定の登場人物の視点が支配しているのか、語り手の視点が支配しているのか曖昧な場合がある。(山岡 2001)	文中での主語の明示が必要不可欠である英語などに比べると、韓国語は主語や目的語の省略が可能であるという面でも日本語に似ている。(鄭 2002)	1 人称小説であっても、「私」は文法上の必要性により、省略されない。(メイナード 2019)	日本語のゼロ照応の使用は中国語より多い。(小川 1997)²³ 中国語で新しい文が始まる場所では主語は明示される必要があり、文を超えて省略する場合が少ない。(王鳳莉 2009)²⁴
-------------	---	---	---	--

日本語教育における視点の固定性は産出研究で扱われている。渡邊(1996)は、中国語、韓国語、ドイツ語を母語とする 3 グループの学習者に口頭で漫画を描写させた結果、日本語母語話者は終始視点を固定させるのに対し、学習者の談話には複数の人に視点を移動して描写する「移動注視点」が見られ、母語の影響によると指摘する。また、金(2001)も韓国語母語話者の談話構成は動作主主体になっており、日本語ほど受身表現は多用されないと述べる。

このように日本語と韓国語・中国語・英語とでは、小説を書くときも、また、出来事の詳細を口頭で産出するときも、談話構造が異なっていると考えられる。それが理解活動である読解においても影響することが十分予想される。このことを踏まえて、次の節では、材料文について日本語のテキストと英語、韓国語、中国語の翻訳テキストを対照し、読解の困難点を予測する。母語との言語構造的な違いが原因となり、読解に支障をきたすことが予測されるからである。

9.3. 英語・韓国語・中国語のテキストの対照

本研究で使用する材料文の「彼女の彼の特別な日」「彼の彼女の特別な日」について、日本語テキストと英語、韓国語、中国語の翻訳テキストを対照し、事態の述べ方

²³

²⁴ 中国語のゼロ照応の記述については、次の文献の記述を参照した。譚昕(2017)「結束性の視点からみる日中両言語におけるゼロ照応の相違：二つの小説を材料として」『日中言語対照研究論集』(19), 46-63

の差異について検討した。具体的には次のような検討を行った。

- (1) 翻訳した場合、文のどの要素が義務的に言語化されるか、または、言語化されるのが妥当であるかに注目する。
- (2) ある事柄をどのような表現で述べるのが妥当であるかを検討する。

各言語で見られる上記の特徴を検討することには次のような意義がある。学習者の母語では義務的に表示される要素が日本語で表示されない場合や、文の構造や表現方法が大きく異なる場合、読解の際に負担がかかることが予想される。このようなテキストの対照から、学習者の母語の側から見た、日本語のテキスト読解における文法や語彙に関する読解困難点が予測できると考える。これは 2.3.4 で紹介した張氏のいう「三位一体の習得研究」に通じる。張（2011）は、①母語と目標言語の体系の異同を正確に把握し、ズレが生じている箇所を特定して誤用が現れる可能性を予測する(対照研究)、② ①の予測を学習者コーパスを用いて検証する(誤用観察)、③ ①と②で得られた結果を調査で確認するという 3 つの手法をとっている。本章で行う言語ごとのテキスト分析は、①に相当する。

9.3.1. 分析方法

各言語につき 2 名ずつ、日本語と翻訳を担当する言語の能力が十分にあるバイリンガルに翻訳をしてもらった。翻訳は、中国語訳については日本語学・日本語教育学を専攻する大学院博士課程の学生に、韓国語訳と英語訳については通訳・翻訳を職業としている者に謝礼を依頼した。翻訳には謝礼が支払われた。翻訳のやりかたについては、次のように説明した。

翻訳のやりかた

- (i) 以下の 2 つの小説について、日本語と母語(ご担当の言語)の対応がわかるように、黄色部分の文章を「できる限り直訳で」翻訳してください。(付録資料を参照)
- (ii) 翻訳の仕方でいくつか候補がある場合、「想定される可能性が最も高い表現」を使ってください。
- (iii) 翻訳のときに、日本語では省略されている部分を書く必要があったり、補足説明が必要であれば、それを追加してください。追加した場合は、【 】で示してください。
- (iv) (i)で翻訳したものについて、語の下に、「日本語への逐語訳(一語一語の訳)」をつけてください。
- (v) 翻訳のときに行った特別な操作、たとえば、語を追加したり、補足情報を追

加したりなどした場合は、それを【 】で書いてください。

- (vi) 二つの意味がある言葉については、どちらの意味か【 】で補足説明を書いてください。(例：ミモザ【「花」ではなく「お酒」の意味】，文句【「不満」ではなく「文章」の意味】など)

9.3.2. 読解に負担がかかると予想される文

学習者の母語では義務的に表示される要素が日本語で表示されない場合や、文の構造や表現方法が大きく異なる場合、読解に負担がかかると予想される。以下に、分析の結果、読解に負担がかかると予想された文を抜粋して示す。すべての翻訳の結果と、読解に負担がかかると予想された文については付録資料に載せる。

9.3.2.1. ゼロ代名詞を含む文

次の文はゼロ代名詞を含むが、英語と中国語の翻訳ではその部分は義務的に表示されている。

- (1) 彼女は完全に僕を軽蔑した様子で無理難題を突きつけてきた。二年前に戻りたい。二日前に戻りたい。こうして僕をからかい、煙に巻いて逃げる気だ。(彼 8~11)

(1)で彼 8 の文での主題である「彼女は」が彼 11 の文まで継続している。よって、ゼロ代名詞となっている「煙に巻いて逃げる」の主体は「彼女」である。

(1)の各国語の翻訳は次のとおりである。韓国語訳の(2)と(3)を見ると、日本語と語順が同じであること、日本語と同様に「彼女は」が非明示であることがわかる。なお、この特徴は材料文を通して一貫していた。一方、英語訳の(4)と(5)を見ると、基本語順で対立するだけでなく、日本語では非明示になっている「私(I)」と「彼女(she)」が義務的に明示されている。中国語訳も英語訳同様に日本語と基本語順で対立し、日本語のゼロ代名詞については、(6)は「彼女(她)」を義務的に明示しているが、(7)では明示されていない。

- (2) 이렇게 나를 놀리고 현혹시키고 도망칠 생각일거야.
こうして 私をからかい 煙に巻いて 逃げる つもりだろう

- (3) 이렇게 나를 놀리고 현혹시켜 도망갈 생각이다.
こうして 僕を からかい 惑わせて 逃げる 気だ。

- (4) Making fun of me like this, 【I】 felt that 【she】 was escaping by creating a smokescreen.

- (5) 【She is】 teasing me like this so that she can throw me off the track and get away.

- (6) 【她】 想 就这样 嘲讽 我, 然后 故弄玄虚的走掉。
【彼女】たい このように からかう 私 そして 煙に巻く 去る

- (7) 就这样 嘲弄着 我, 一种 要卷烟逃走 的感觉。
こうして からかう 僕を, 煙に巻いて逃げる 気だ

また、次に述べる(8)の「だからこそ教えてやりたかった」では1文中にゼロ代名詞が2つある。

- (8) その男はきっと彼女が祝福の言葉を口にしなかったことなど気にしちゃいないだろう。なんせ自分の結婚式だ。朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、あぐらをかいていたはず。そして今頃は二次会か。シャンパンをがぶ飲みし、二人のなれそめクイズかなんかで盛りあがり、「キッス、キッス」なんて煽られてニヤついているんだ。だからこそ教えてやりたかった。この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。(彼 38~44)

彼 38 の文で主題である「その男」は、その後の文では非明示となっているが、彼 42 の文まで継続している。続く彼 43 の文「だからこそ教えてやりたかった」では「誰が」「誰に」が非明示となっているだけでなく、主題が前述の「その男」ではなく「僕」に変化している。よって、彼 43 の文は「「僕は」「新郎に」教えてやりたかった」となる。このように、1文中にゼロ代名詞が2つあることに加え、その主題が変化していることが、この文のゼロ代名詞の特定を難しくさせていることが予想される。

(8)の各国語の翻訳は次のとおりである。韓国語訳の(9)と(10)は日本語とほぼ同じである。一方、英語訳の(11)と(12)を見ると、日本語では非明示になっている「私(I)」と「彼(him)」が両方義務的に明示されている。中国語訳では、(13)は「私(我)」と「彼(他)」を両方義務的に明示しているが、(14)では「私」は明示されていない。

- (9) 그러니까 알려주고 싶었다.

だからこそ 教えて やりたかった。

- (10) 그래서 더욱더 알려주고 싶었다.

だから 余計に 教えてやりたかった。

- (11) That's why 【I】 wanted to let 【him】 know.

だからこそ、【僕は】【彼に】教えてやりたかった。

- (12) Especially because of that, 【I】 wanted to tell 【him】.

こそ だから 【僕が】やりたかった 教えて【彼に】

- (13) 所以 【我】才想 告诉 【他】。

だから【私】たい 教える 【彼】

- (14) 正因为如此 想 告诉 【他】。

だからこそ たい 教えてやる【彼に】

さらに、次に述べる(15)の「本当に電話するの？」でも「誰が」「誰に」が非明示になっている。

(15) とはいえ、彼女が本気でコースターに電話番号を書きだしたときはびっくりした。え、マジ？ほんとに電話するの？(彼 45～47)

彼 45 の「びっくりした」の主語は非明示であるが「僕」である。続く彼 47 の文「ほんとに電話するの？」では「誰が」「誰に」が非明示となっている。ここでは「僕は」「新郎に」電話するの？」となる。

(15)の各国語の翻訳は次のとおりである。韓国語訳の(16)と(17)は日本語と同じである。一方、英語訳の(18)を見ると、日本語では非明示になっている「僕(I)」と「彼(him)」が両方義務的に明示されている。中国語訳では、(19)も(20)もともに「僕(I)」と「彼(him)」は明示されておらず、義務的ではない。

(16) 정말 전화하는거야?

ほんとに 電話するの？

(17) 정말로 전화할거야?

ほんとに 電話するの？

(18) 【Am I】 really going to call 【him】? (*二人の翻訳者の翻訳は同一内容)

【僕が】ほんとに電話するの【彼に】?

(19) 真的 要打 电话 吗?

ほんとに かける 電話 か

(20) 真的 要打电话?

ほんとに 電話する

9.3.2.2. 非明示のノ格名詞句を含む文

日本語で明示されない要素の1つにノ格名詞句がある。(21)の「顔」という名詞は、「誰の」を示すノ格名詞句を特定する必要がある非飽和名詞²⁵(一項名詞)である。(23)は小説の語り手が「僕」であることが読み手に了解されているとし、「僕の顔が熱くなった」の「僕の」の部分は明示されていない。

²⁵ 西山(1990)は「優勝者」「建築者」のように「パラミター」の値が決まらない限り指示対象が決まらない名詞句を「非飽和名詞句」、そうでないものを「飽和名詞句」と呼んだ。「飽和名詞句」「非飽和名詞句」の区分は庵(2007)の「0項名詞」「1項名詞」の区分と重なることが多い。庵(2007)はこの概念を、仁田(1977)の「不定時を基準とする相対的時名詞」の概念に示唆を受けたと述べている。

- (21) 「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」
 ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。(彼 16,17)

(21)の各国語の翻訳は次のとおりである。韓国語訳の(22)と(23)は日本語同様に「誰の」(顔か)は非明示である。一方、英語訳の(24)と(25)を見ると、日本語で非明示になっている「僕の」(顔)が義務的に明示されている。また、「僕のほうを」(ふりむく)も明示される。中国語訳では、(26)では「僕の」(顔)が明示されないが、(27)では明示されている。

- (22) 돌아보는 그녀의 차가운 미소에 얼굴이 뜨거워졌다.
 ふりむいた 彼女の 冷笑に 顔が 熱くなった。
- (23) 고개를 돌린 그녀의 냉소에 얼굴이 뜨거워졌다.
 頭を回した 彼女の 冷笑に 顔が 熱くなった
- (24) 【She】 turned 【toward me】 with a sneer on her face, which made 【my】 face hot.
 【彼女は】【僕のほうを】ふりむき、冷笑とともに、それによって【僕の】顔が熱くなった。
- (25) 【My】 face became hot at her sneer as she turned toward 【me】 .
 【僕の】顔が なった 熱く に 彼女の冷笑 まま 彼女が ふりむいた【僕に】
- (26) 【我】【被】 她 的 甩头 冷笑 【弄得】脸【通红】
 【私】【される】彼女 の 振り向く 冷笑 【される】顔 赤い
 【追加】【解釈の置き換え】 【解釈の置き換え】
- (27) 因为 扭过头来的 她的冷笑, 【我的】 脸 开始发烫²⁶.
 に 振り向いた 彼女の冷笑, 【僕の】 顔が 熱くなった

9.3.2.3. 非明示となっている発話主を含む文

- (28) いや, 「君の幸せを心から願っています」と, 結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。(彼女 20)

この「君の幸せを心から願っています」は彼(元恋人)が話した内容であり、「君」は「私(彼女)」を指す。(28)では彼(元恋人)が話した内容の引用句となっている。発話が引用句となっていることに加え、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告

²⁶ 翻訳者による注釈：この中国語の直訳はやや不自然です。自然な言い方は、たとえば「她回头冷笑, 我的脸开始发烫」(彼女は振り向いて冷笑した。私の顔が熱くなった)

のメールに添えてよこした」彼，という長い連体修飾構造が捉えにくいこと，「添えてよこした」の動作の方向性を適切に理解していないと，読解が困難になると予想される。

(28)の各国語の翻訳は次のとおりである。韓国語訳の(29)と(30)は語順は日本語と同じである。一方，英語訳の(31)と(32)を見ると，いずれも1文では表現できず，2文で構成されている。さらに，「メールに添えてよこした」の翻訳で，動作の方向性を明示するように「(sent)me」となっている。他にも追加された要素が複数あることがわかる。このことから，(28)は英語と日本語の表現の仕方で大きく異なる文であると考えられる。中国語訳においては，(33)では追加された要素はないが，(34)では「願っている」の主語である「私」が明示されている。

(29) 아니, '당신의 행복을 진심으로 원합니다' 라고 결혼보고의 메일에 첨가하여 보내온 그가 망설일리가 없다.

いや，「君の幸せを心から願っています」と，結婚報告のメールに 加えて送った 彼が 迷うはずがない。

(30) 아니야, "당신의 행복을 진심으로 바랍니다" 라는 말을 결혼소식을 알리는 메일에 덧붙여 보내온 그사람이 망설일 리가 없다.

いや 「君の幸せを心から願います」という言葉を 結婚のことを 知らせる メールに 添えて送ってきた 彼が 迷うはずがない

(31) No. He would never. He is the one who [sent me] an email announcing his wedding, along with [a message,] 'Sincerely wishing for your happiness.'

いや，彼が迷うわけがない。結婚報告のメールを【私に送って】よこしたのは彼だ，「君の幸せを心から願っています」【というメッセージ】を添えて

(32) No, [he] added, " [I] sincerely hope [for] your happiness" in the email inform [ing] [me] [of] the wedding. [There's] no reason [to think] he's confused.

いいえ，【彼が】 添えてよこした 心から 願っています ために 君の幸せを メールに 報告【する】【について】 結婚 【ある】 わけがない 【考える】 彼が迷う

(33) 不， 在 通知 结婚 的 邮件 里 写了 “衷心 祝 你 幸福” 的 他 不会 犹豫。

いや で しらせる 結婚 の メール で 書いた 心から 願う 君 幸せ の 彼 しない 迷う

(34) 不， “【我】 从 心底 祝 你 幸福”， 在 发来的 结婚汇报的 邮

件 里 加上 【这一句的】 他 不可能 犹豫²⁷。
 いや, 「【私は】 から 心 願っている 君 幸せを」, に よこした 結婚
 報告の メール 添える 【この文を】 彼が わけがない 迷う

この(28)では, 日本語と英語の事態の述べ方の違いに起因する文構造の解釈が, 最終的に「君」の解釈に影響を与えた可能性がある。

9.3.2.4. 事態の表現の仕方が大きく異なる文

(35) 私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた(彼女 34)

この文は長い連体修飾構造が文の中間に挟まれており, 文の構造が把握しにくい。さらに「花嫁の手にしていたブーケ」とガ格がノ格になっていることも, 「花嫁の手」に「渡した」などと誤読を引き起こす可能性も考えられる。また, 「手にする」の「する」は実質的な意味を「手」にあずける機能動詞(村木 1991)であるため, 動詞の意味が希薄で, 「手にする」の語結合の意味を知らなければ意味が推測しにくい。

(35)の各国語の翻訳は次のとおりである。韓国語訳の(36)と(37)は語順は日本語と同じである。一方, 英語訳の(38)と(39)を見ると, まず基本語順で対立し, 日本語で文末にある「呟いた」が英語では2語めに位置する。さらに, 日本語では「手にしていた」と動詞で表現されるのが英語では「in the bride's hand」と名詞句で表現され, その位置も文末に来る。このことから, 特に英語と日本語の表現の仕方で大きく異なる文であると考えられる。

(36) 나는 신부의 손에 들려있던 부케 색깔과 닮은 미모사를 내려다 보면서 중얼거렸다.

私は 新婦の 手にしていた ブーケの色に似た ミモザを 見下ろしながら呟いた。

(37) 나는 신부가 손에 쥐고있던 부케와 비슷한 색깔의 미모사를 내려다보며 중얼거렸다.

私は 花嫁が 手に 持っていた ブーケと 似た 色の ミモザを 見下ろしながら 呟いた

(38) I muttered while looking down 【the glass of】 mimosa whose color was similar to that of the bouquet in the bride's hands.

²⁷ 翻訳者の注釈: 元の文が倒置文なので, 中国語訳に【这一句】を追加しました。

私は 呟いた、見下ろしながら、ミモザ【のグラス】を、 その色が似た、花嫁
の手にしていたブーケの色に

(39)【I】 grumbled while looking down at the mimosa 【that】 looked like the
color of the bouquet in the bride's hands.

【私が】 呟いた ながら 見下ろし ミモザを 【関係詞】似た ブーケの色に
花嫁の手にしていた

(40)我 望着 和 新娘 的 花束 颜色 很 相似 的 【鸡尾酒】
自言自语。

私 見下ろす と 花嫁 の ブーケ 色 とても 似ている の【カクテル】
呟く

(41)我 一边 低头看着 和 新娘手里的 捧花 颜色 相近的 鸡尾酒，一边
低声说道。

私は ながら 見下ろす に 花嫁の手にしていた ブーケの 色 似た ミモザ を
呟いた。

9.3.3. まとめ—翻訳テキストの対照から見える読解困難点—

「彼女の彼の特別な日」「彼の彼女の特別な日」の日本語テキストと英語、韓国語、中国語
の翻訳テキストを対照した結果、次のことがわかった。

(a) 日本語と韓国語は語順や文構造、非明示となる要素も同じであることが多
いと言われてきた。この小説の翻訳においてもそれが確認できた。

(b) 日本語で非明示となっているゼロ代名詞やノ格名詞句は、英語では義務的
に明示される(例:4,5,11,12,18,24,25)。一方、中国語でもゼロ代名詞やノ格
名詞句は義務的に明示されることが多いが(例:6,13,14,27)、必ずしも義務
的にはならず(例:26)、その頻度は英語より低い傾向にあった。

要素を明示することが多い言語の順位は次のようになると考えられる。

日本語⇄韓国語<中国語<英語

(c) 英語母語話者は、母語では義務的に明示される要素が日本語の文章では非
明示となっている場合、その特定に困難を覚える可能性がある。一方、韓
国語のように語順や非明示となる要素が日本語と同じ場合、韓国語母語話
者にとってその特定は特段困難を覚えるものではない可能性がある。中国
語母語話者はこの両者の中間に位置すると考えられる。

(d) 英語と日本語は基本語順で対立するだけでなく、日本語では「手にしてい

た」と動詞で表現されるのが英語では「in the bride's hands」と名詞句で表現されるなど、英語と日本語の表現の仕方で大きく違いがある(例:35,38)。特に連体修飾節を含む複雑な文になると、日本語では1文で表現されるものが、英語では1文で表現できず、2文で構成されることもある(例:31,32)。このような事態の表し方が大きく異なる文は読解の困難点となる可能性がある。

- (e) 佐々木(2011)は英語・日本語・中国語の関係節を比較し、次のようにまとめている。言語類型論からみると、基本語順の点では英語と中国語は **SVO** に分類され、日本語は **SOV** に分類されるという違いがある。しかし、関係節の位置を比較すると、英語は主要部名詞の後であるが、日本語と中国語は主要部名詞の前に来るという対比がある。また、関係節内の語順でも日本語と中国語の間で共通点がある。つまり、「主語+時の副詞+場所の副詞類+動詞」となる。このことから、中国語は英語と日本語の特徴を一部ずつ持ち合わせていると言えるという。よって、連体修飾を含む長い文は、中国語母語話者よりも特に英語母語話者にとって困難点となる可能性が高い。

第10章 パイロット研究—中国人大学院生 4 人の調査—

本章では、第三部で論じる小説テキストの読解に関する研究の基礎となったパイロット研究について述べる。パイロット研究として、中国語母語話者 4 人に小説を読んで母語でその内容を語ってもらい、その読解過程を明らかにした。具体的には、小説テキストのどのような箇所が読解の困難点となり、また、どのような誤読が見られたかを明らかにした。このパイロット研究で得られた知見と 9.3. で述べた英・韓・中の翻訳テキストの対照結果を参考にして、第 11 章以降で論じる研究において、テキストのどのような箇所で学習者に質問をするかを決めた。このように、本章で得られた知見を調査デザインに反映させた。

10.1. はじめに

筆者が日本の大学で担当する留学生対象の日本語授業のアンケートでは、「日本語で書かれた小説を読みたい」というニーズが高い。「小説を読むと日本語らしい日本語が学べる」と期待する声もある。しかし、小説を母語で読むなら難なく理解できても、第二言語で書かれた小説を読んで理解することは、言語的要因や背景知識の不足などが影響して難しいことが多いようだ。実際、「読んでいるうちに誰の台詞かわからなくなる」「ストーリーが掴めない」「最後まで読み続けられない」という学習者の声を聞く。

では、学習者が第二言語である日本語で書かれた小説を読む場合、どのように理解し、どのような困難点があるだろうか。それを知るには、学習者に日本語で書かれた小説を実際に読んでもらい、その過程を観察する必要がある。そうすることで初めてその実態が捉えられるが、これまでそのような研究はほとんど行われていない。

日本語学習者の読解過程に注目した研究では、本稿のように小説を題材にしたものは管見の限り見当たらないが、読解テキストとして日本の昔話の物語文を扱った Horiba(1996)や、高校の国語教科書にある意見文を扱った舘岡(2001)などがある。これらは発話思考法を用いてその読解過程の解明を試みているが、発話思考法の特性上、語られることは学習者が意識化できることに限られるため、読解過程の全貌を捉えているとは言い難い。

本章では、中国語を母語とする上級日本語学習者(以下、上級学習者)が小説を読む場合、どのように理解しているかを明らかにし、その誤読に注目する。ここでは、日本の大学院に在籍する上級学習者の多くを占める、中国語を母語とする学習者を調査対象とする。彼らは日本語を学ぶ前から漢字の知識があり、中国語以外を母語とする学習者とは文字を通して利用できる知識が異なるはずである。両者を区別して調査するのはこのためである。

10.2. 調査概要

10.2.1. 調査協力者

調査協力者は、日本の大学に在籍する大学院生 4 名で、全員、日本語能力試験 N1 を取得し、中国語が母語である。学習者と日本語母語話者の理解過程の比較のために、日本人大学生 5 名にも調査した。協力者は全員 20 代である。調査は 2016 年 4 月から 7 月に行った。

10.2.2. 材料文

材料文は、森絵都氏の短編小説「彼女の彼の特別な日」と「彼の彼女の特別な日」である。詳細は 9.1. で述べたとおりである。調査では日本語能力試験級外の漢字にルビをふったものを使用した。

10.2.3. 調査方法

調査協力者が小説の内容をどのように理解したかについて、次の(i)から(iv)の方法で調査を行った。

(i) 普段どおりに辞書などを使って小説を黙読し、読みながら考えたことや理解できないところなどを調査協力者の母語で話してもらう。読んでいるうちに、解釈の変更があった場合は、それも話してもらう。この発話方法に慣れるために、実際の調査に入るまえに、別のテキストで練習する。

(ii) 次のように教示した後、調査を始める。「これから小説を 2 つ読んでもらいます。1 つは A さんから見たストーリー、もう 1 つは B さんから見たストーリーです。2 つ合わせて小説の全体像がわかります」

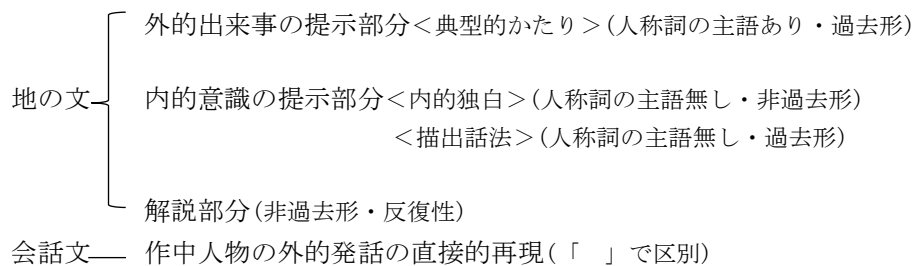
(iii) 調査者があらかじめ予測しておいた、小説で読解困難点となりそうな箇所について、調査協力者にその内容理解を確認する質問を行う(詳細は 10.3.2.)。

(iv) 上述の調査協力者の発話と調査者とのやりとりについては中国語の通訳者を依頼し、同時通訳に近い形で通訳してもらう。それらを IC レコーダーで録音し、調査終了後に文字化する。

10.3. 調査で使った小説

10.3.1. テキスト分析

「彼女の彼の特別な日」は 51 文、「彼の彼女の特別な日」は 52 文とほぼ同数の文からなる。なお、カッコで括られた会話文は句点の数にかかわらず、カッコ内を一文とした。文の種類はカッコで括られた会話文と、語り手による解説や描写からなる地の文に大きくわかれる。しかし、地の文の中は等質ではなく、作中人物の内的思考や発話内容を伝える部分が、地の文に入りこんでいることが多い。工藤(1995:192-195)は小説の構造と文の種類を次のように分類する。()は筆者が加筆した。



本稿では工藤(1995)に従って文の種類を分類した。本章の最後に分析結果を載せる。これを見ると、「私は」「男は」などの人称詞の主語の有無や文末が過去形か非過去形かによって、文の種類が変化し、時には複数の解釈を許すことがわかる。さらに動作主や発話主、地の文の語り手も明示されないことが多く、それを文脈から推測しなければならない。これは学習者にとって困難な課題だろう。このテキスト分析の結果を基に、学習者が小説を読む上で困難点になりそうな箇所をあらかじめ予測し、調査ではその内容理解を確認する質問をする。質問の詳細は次の 10.3.2 で述べる。

以下本章では、彼女の視点から語られる「彼女の彼の特別な日」を引用する場合は、文番号の前に(彼女)、一方、彼の視点から語られる「彼の彼女の特別な日」を引用する場合は(彼)と記す。文番号はテキストの冒頭からの順番である。

10.3.2. 内容理解を確認する質問の例

小説の内容を正しく理解しているかどうかを知るために、次の(a)から(f)を確認する質問を行った。質問の数はそれぞれ、「彼女の彼の特別な日」では 24, 「彼の彼女の特別な日」では 15, 2 編読み終わったあとの結末についてが 1 である。以下に質問例を抜粋し、すべての質問を稿末に本文とともに掲載する。以下、中略部分を[…]で示す。

(a) 明示されない動作主の把握

例：「だからこそ教えてやりたかった」(彼 43)では、誰が誰に教えてやりたかったのですか。

(b) 明示されない発話主の把握

例：「互いに一つずつ願いを叶え合いませんか」(彼女 6)と誰が言いましたか。

(c) 人称詞の指示対象の把握

例：「君の幸せを心から願っています」(彼女 20)の「君」は誰ですか。

(d) 後方照応の把握

例：「ううん、つらくなんてなかった。だって式の間中、私が考えていたのはたった一つきりだから。自分はちゃんと微笑んでいるか。彼の選んだ花嫁よりも綺麗で幸せな女に見えるか。[……]」(彼女 30)の「たった一つきり」とはどの

ようなことですか。

(e) 難しいと思われる語や表現の意味

例：「来てくれてありがとうって彼が声をかけてきたときも，元同僚として当然よ，なんて突っぱねてね」(彼女 30)の「突っぱねて」はどのような意味ですか。

(f) 文脈に合った多義語の意味

例：「私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた」(彼女 34)の「ミモザ」とは何ですか。

多義語とは，同一音形に意味的に何らかの関連を持つ二つ以上の意味が結びついている語である(國廣，1982：97)。「ミモザ」は花の名前とカクテルの名前の2つの意味が結びついている多義語である。当該文の「ミモザ」はカクテルを意味するが，協力者が文脈からそのように解釈できるかを確認する。

(g) 2編を読んだ後の結末の推測

例：彼の願いは叶えられましたか。結末がどうなったか説明してください。

「彼女の電話番号を知りたい」という彼の願いは叶えられるという結末が文章の形では書かれていないが，2編の内容を統合することで，十分に推測できる。そこで，読了後に結末を正しく推測できたかどうかを指標として，協力者の最終的な理解の度合いを確認できると考えた。

10.4. 学習者の誤読

調査では学習者が小説を読むときに，様々な誤りが観察された。その誤りの種類と頻度はすべて表 10-1 にまとめられる。また，読書経験についての質問と回答も載せる。本章の最後には質問の一覧とそれに対する調査協力者の回答の正誤結果を載せた。本調査の母語話者データも示唆に富むが，本章では学習者の理解過程との比較のために参照するにとどめ，詳細は第 11 章で論じる。

学習者の誤読の種類は大きく 2 つに分けられる。1 つはテキストの結束性に関わるものである。結束性とは，明示されない発話主や動作主をテキストの他の部分から推測しなければならないような，解釈上の依存関係があるもので文法的な概念(庵 2007:10-11)である。もう 1 つは，語や文の意味の解釈に関わるものである。

以下 10.4.1 から 10.4.6 で誤りの種類の各例を説明する。特に，学習者が共通して誤読したテキストの箇所を中心に取りあげる。

表 10-1 学習者が小説を読むときに見られる誤り

			学習者 A	学習者 B	学習者 C	学習者 D
誤りの種類	テキストの結束性	動作主の把握		2	2	1
		発話主の把握	1			3
		人称詞の指示対象把握		1		1
		後方照応の把握	1			1
	意味の解釈	未知語の意味の推測	4	3	4	3
		文の意味	1	3	2	9
2編の内容を統合し, 結末を正しく推測できたか			正しく推測	正しく推測	間違っ て推測	間違っ て推測
読書経験についての質問	母語で小説を読むか		時々	あまり	あまり	全然
	日本語で小説を読むか		あまり	全然	あまり	全然

*数値は誤りの異なり頻度を示す

10.4.1. 動作主の把握で誤る

次の例で、4人の学習者のうち3人が実線部の動作主や動作の受け手を誤読した。実線部の動作主は「彼(僕)」で、「彼が彼女の元恋人に教えてやりたかった」という意味である。しかし、2人の学習者は「彼女が彼(バーで会った男)に教えたかった」と言い、もう1人は「彼女は教えてほしかった」と答えた。

(1) (彼 38～44)

その男はきっと彼女が祝福の言葉を口にしなかったことなど気にしちやいないだろ。なんせ自分の結婚式だ。朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、あぐらをかいていたはず。そして今頃は二次会か。シャンパンをがぶ飲みし、二人のなれそめクイズなんかで盛り上がり、「キッス、キッス」なんて煽られてニヤついているんだ。だからこそ教えてやりたかった。この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。

この部分は＜彼視点＞の一人称小説であるため、主語が明示されなければ動作主は「彼(僕)」である。文の種類を見ると、点線で示すように、冒頭から文末が非過去形で彼の心の声とも言える「内的意識の提示」が続く。しかし、「だからこそ教えてやりたかった」という文だけは文末が過去形のため、その「内的独白」が薄まる。そのため、動作主が語り手の彼と感じられにくい。さらに、最後の文「彼女の呟いた

「おめでとう」の重みを」と倒置関係になっていることも誤読の要因となったのではないだろうか。

10.4.2. 発話主の把握で誤る

発話主の把握では、学習者によって誤読の箇所が異なる。次の(2)と(3)では、実線部の発話の主を、その発話の直前で話題になっている人物(破線部)と誤る。

(2) (彼 13~16)

僕は以前、得意先の係長に教わった「とっておきの殺し文句」で勝負に出た。

「互いに一つずつ願いを叶え合いませんか」

「願い？」

「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」

この小説では原則として発話主は「彼」か「彼女」のどちらかである。(2)の実線部は「僕は[……]勝負に出た」に続く発話であることから、その発話主は「彼(僕)」である。しかし、学習者は直前で話題になっている、「係長」だと誤読する。もう1つ同様の例を次に示す。

(3) (彼女 14~16)

つまらない意地の張り合いから彼を失ってしまう以前の自分に、戻れるものなら今すぐに戻してほしい。

「二年前か……。ちょっと難しいな」

「なら二日でもいい。二日前に戻して」

(3)の実線部は、その4文前にある「それなら、私は時間を二年前に戻したい」(文番号 11)への応答で、その発話主は、今、「彼女」と話している「バーで知り合った彼」だが、学習者は直前で話題になっている、彼女の元恋人の「彼」だと誤読する。

10.4.3. 人称詞の指示対象で誤る

人称詞の指示対象は、学習者によって誤読の箇所が異なるため、複合的な影響が見られる1例を示す。

(4)は実線部の人称詞「君」の指示対象を誤る例である。当該部分は彼女視点であるため、(彼女 18)の「私」は「彼女」であり、(彼女 19~20)の「彼」は彼女の元恋人を指す。その「彼」にとっての「君」は「彼女」である。

(4)(彼女 18~20)

結婚なんてやめて私とやりなおして。なりふりかまわずにそう頼んだら、彼は迷ってくれただろうか。

いや、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。

学習者は(彼女 20)の意味を(5)のように解釈した。【 】は学習者が解釈した指示対象ならびに動作主である。

- (5) 「君【元恋人】の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに【彼女が】返信したら、彼【元恋人】が困るわけではない。

(彼女 20)の文構造を見ると、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼、という長い連体修飾構造になっている。しかし、「」の引用後に「と、」があるため、この修飾構造が捉えにくいこと、「添えてよこした」の動作の方向性を適切に理解していないこと、「迷う」の意味を「迷」の中国語の意味である「迷惑」から「困る」と解釈したことなど、3つの要素が複合的に影響して、指示対象を誤読したと考えられる。

10.4.4. 後方照応の把握を誤る

次の例で、実線部の「たった一つきり」はその後続の波線部で示す「自分はちゃんと微笑んでいるか。彼の選んだ花嫁よりも綺麗で幸せな女に見えるか」と後方照応の関係にある。しかし、2人の学習者はその関係に気づかず、「きり」に注目して誤読をする。

(6)(彼女 30)

「ううん、つらくなんてなかった。だって式の間中、私が考えていたのはたった一つきりだから。自分はちゃんと微笑んでいるか。彼の選んだ花嫁よりも綺麗で幸せな女に見えるか。つまらないプライドの塊にみたいになって、全力で平静を装ってた。来てくれてありがとうって彼が声をかけてきたときも、元同僚として当然よ、なんて突っぱねてね」

誤読した2人のうち1人は、「一つきり」の「きり」の意味を辞書で調べて、「限度」という語釈を参照し、「終わり」と理解し、そこから「元恋人とのことは終わった。あきらめる」と解釈した。もう1人は、「きり」を「節目」と理解し、「一つの節目」と解釈した。そう解釈すると、いずれの場合も後続文と意味の繋がりが悪くなる

が、学習者は気にしないようである。

10.4.5. 未知語の意味の解釈を誤る

未知語の意味を推測する場合、漢字の知識を使って誤読することがある。次の例で、「突っぱねて」を学習者 4 人中 3 人が「突然そう言った」と誤読した。「突」という漢字から「突然」という意味に解釈したと考えられる。

(7)(彼女 30)

「[……] 来てくれてありがとうって彼が声をかけてきたときも、元同僚として当然よ、なんて突っぱねてね」

また、次の例は 1 人の学習者のユニークな誤読である。

(8)(彼女 44)

「降参です。時を戻せない僕にはあなたの願いを叶えることができない。よって、僕の願いであるあなたの電話番号を聞くわけにはいかない。[……]」

学習者は実線部を「私は降参という名前です」と解釈した。漢字熟語の「降参」を「降参する」(スル動詞)と捉えず、「です」の前に来るのが名詞か形容詞語幹であるという文法知識を使い、人名と解釈したと考えられる。

10.4.6. 多義語を含む文の意味を誤る

次の例では、「ミモザ」という語の意味と当該文の意味を 4 人の学習者全員が誤読した。

(9)(彼女 34)

私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。

「ミモザ」は多義語で 2 つの意味がある。1 つは花の名前、もう 1 つはこの花の色に似たカクテルの名前である。この例では彼女がバーで飲んでいる「カクテル」を指す。4 人全員にとって「ミモザ」は未知語だったため、その意味を推測した。その結果を表 10-2 に示す。たとえば、協力者 D は「花嫁の手にしていた」という表現と、結婚式に関する背景知識を使い、ミモザは「花」か「手袋」だと推測する。学習者は誰もカクテルとは考えない。

表 10-2 「ミモザ」 および当該文の解釈

	学習者 A	学習者 B	学習者 C	学習者 D
ミモザの解釈	花	花	手袋	花か手袋
解釈の理由	ブーケの色に似ているから。	辞書で「ミモザ」を調べ「花の一種」だと確認。	花嫁が手にしているものだから。	「花嫁が手にしていた」と書いてあるから。
当該文の解釈	花を軽蔑するように見て言った。	花を見下ろしながら呟いた。	花嫁の手を握り、その手を見下ろして言った。	花または手袋を見下ろしながら言った。

では、母語話者の場合はどのように理解するだろうか。日本人大学生の一人は、学習者同様、当初「ミモザ」が何を指すかわからず、「植物」のようなものと答える。しかし、次の文を読んで「お酒」と解釈を変更した。

(10) (彼女 39~40)

はずが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。酔っている。

この日本人大学生は、「彼女はバーにいて、視線を見下ろす先にあるものは飲み物。「涙が沈んだ」とあるのでミモザは液体で、次の文に「酔っている」とあるからお酒だと思う」と話した。このように(10)を読んだあとで解釈を変更し、正しい理解に至った日本語母語話者は 2 名いた。しかし、学習者 4 人全員はこの(10)を読んでもミモザは花または手袋であるという解釈を修正することなく維持した。

10.5. 2 編の内容を統合した結末の理解

この小説の結末は 2 編の内容を統合しないとわからない。そこで、内容を統合できたかどうかを確認するために、2 編の読了後に「彼の願いは叶えられましたか」「結末がどうなったか説明してください」と尋ねた。学習者の答えを表 10-1 に示す。

学習者 A・B は、「彼が電話をかけた相手は新郎ではなく実は彼女だった」という結末を正しく推測する。一方、学習者 C・D は、「彼は彼女の元恋人である新郎に電話をした。彼は新郎に彼女の電話番号をたぶん教えてもらえるでしょう」「彼は新郎に電話をした。彼女の電話番号を聞いたが、たぶん彼女の電話番号を教えてもらえなかった」とそれぞれ誤った結末を推測する。

表 10-1 で、正しく結末を推測した学習者 A・B の誤りの平均数は 8 であるのに対し、誤った結末を推測した学習者 D の誤りの数は 18 と際立って多い。学習者 D の場合、誤読の多さが誤った結末の解釈を導いた可能性が考えられる。しかし、同様に誤った結末を推測した学習者 C の場合、誤りの数は 8 で学習者 A・B の平均数と同数である。このことから、結末の推測が正しくできるかどうかは、誤読の数だけでは

なく、テキストのどの箇所で誤読するかも影響すると考えられ、今後調査人数を増やした精査が必要である。

10.6. まとめ

本稿では、中国語を母語とする上級学習者が日本語の小説を読む場合、どのように理解しているかを、学習者に母語で理解した内容や内省を語ってもらうことと、調査者からの質問に答えてもらうことで明らかにした。この発話データと小説のテキスト分析の双方からのアプローチで誤読の実態を明らかにした。その結果、学習者が小説を読む場合、その誤読の種類はテキストの結束性に関わるものと、語や文の意味の解釈に関わるものの2つに分けられた。前者は、明示されない動作主や発話主の把握、後方照応の把握など小説を正確に読み解く際に必ず直面するものである。後者は、本稿で取り上げた「ミモザ」のような未知語の意味を推測する際、文脈との整合性が要求されるものである。このように上級学習者でもテキスト内容の正確な読み取りの段階で押さえるべき点が多い。

ここで、そもそも学習者は母語で小説を読む場合、誤読をせずに、テキスト内容を正確に読み取れているかという点を考えたい。表 10-1 を見る限り、本研究の協力者は母語で小説を読む経験が豊かとは言い難いようだ。しかし、彼らは日本の国公立大学の大学院で研究をしている留学生で、母国でも高等教育を受けている。このような学習者が母語で小説を読む場合、今回観察されたような誤読をするとは考えにくい。

しかし、母語ではなく第二言語の読解では状況が異なる。日本語の読解を困難にし、誤読を誘発するものの一つに省略された要素の復元があることが以前から文法研究で示唆されている。日本語の小説では動作主や発話主、地の文の語り手も省略されることが多く、それを文脈から推測しなければならないのは前述のとおりである。学習者がテキストの省略要素をどのように復元するかを調査したものとして次のような研究がある。ポクロフスカ(2015)は中級学習者に日本語で書かれた随筆文を読んでもらう調査を行い、省略されている1人称主語の復元が学習者にとって困難であることを示した。また、フォード丹羽(2013)は、初中級から上級レベルの日本語学習者に主語が省略された文を含むテキストを読んでもらい、主語をどのように把握しているかを調査した。そして、日本語能力が低い学習者ほど主語の省略に気づかず、主語を把握できないと述べている。上記の研究は上級学習者に焦点をあてたものではないが、第二言語として日本語の文章を読むときの困難点を捉えている。本パイロット研究で対象とした上級学習者の読解においても、第二言語で読むことの困難点が明らかになったといえる。

資料 材料文のテキスト分析ならびに内容理解を確認する質問とその回答

文 番 号	テキスト「彼女の彼の特別な日」 ＜彼女視点＞	テキスト分析			内容理解確認の質問		調査協力者の回答									
		文 の 種 類	作 主 破 線 部 の 動	発 話 主 ／ 語	質問	困難が 予測さ れる理 由	学習者				日本人					
							A	B	C	D	E	F	G	H	I	
1	元恋人の結婚式の帰りに、初めて一人でバーへ立ち寄った。	外	女	女												
2	仄暗いカウンターの片隅で胸のざわめきを鎮めたかった。	外／内	女	女												
3	なのに隣席の男から声をかけられ、気がつくとも星座がどうの血液型がどうのと質問攻めにあっていた。	内	女	女												
4	お願いだから放っておいてほしい。	内	女	女												
5	私が席を立ちかけた瞬間、男は言った。	外	女	女												
6	「互いに一つずつ願いを叶え合いませんか」	会		男	誰の台詞か	発話主が非明示	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7	「願い？」	会		女	誰の台詞か	発話主が非明示	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8	「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」	会		男	誰の台詞か	発話主が非明示	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9	キザな文句。	内		女	「キザな」の意味	難しそう な語彙	●	?	?	?	○	○	○	●	○	
10	私は失笑して言った。	外		女												
11	「それなら、私は時間を二年前に戻したい」	会		女	誰の台詞か	発話主が非明示	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12	今日、別の女と晴れやかに笑っていた新郎がまだ私の恋人だった二年前。	外		女												
13	いつも隣で笑っていたのは私のはずだった。	外／内		女												
14	つまらない意地の張り合いから彼を失ってしまう以前の自分に、戻れるものなら今すぐに戻してほしい。	内	女	女												
15	「二年前か……。ちょっと難しいな」	会		男	誰の台詞か	発話主が非明示	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○
16	「なら二日でもいい。二日前に戻して」	会		女	誰の台詞か	発話主が非明示	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
17	彼がまだ完全に別の女のものになっていなかった二日前。	外		女												
18	結婚なんてやめて私とやりなおして。	内		女												
19	なりふりかまわずにそう頼んだら、彼は迷ってくれただろうか。	内		女	「彼」は誰か	非明示	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
20	いや、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。	内		女	「君」は誰か	非明示	○	●	○	○	○	○	○	○	●	○
21	「それも難しいな。せめて二時間くらいに負けてもらえませんか」	会		男	誰の台詞か	発話主が非明示	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○
22	私は言葉に詰まった。	外		女	「私」は誰か	人称詞の指示対象	○	○	○	●	○	○	○	○	●	○
23	二時間前。	内		女												
24	なるほど、その程度なら今からでも取り返しがつきそうだ。	内		女												

[illegible]

46	思ったよりも丸顔の <u>三枚目</u> だった。	外／内		女	「三枚目」の意味	難しそう な語彙	●	○	?	?	●	●	○	○	●
47	この人はキザなのかお人良しなのか。	内		女											
48	それともただの世話好きか。	内		女											
49	妙に胸を騒がせる疑念は、久々に芽生えた好奇心でもあった。	外／内		女											
50	この人のことをもう少し知ってみたい気がするー。	内	女	女											
51	彼の差し出したペンを受け取り、私は <u>コースター</u> に自分自身の電話番号を記した。	外	女	女	「コースター」の意味	難しそう な語彙	?	○	●	?	○	○	○	○	○

文番号	「彼の彼女の特別な日」＜彼視点＞	テキスト分析			内容理解確認の質問		調査協力者の回答								
		文の種類	動作主／破線部の	話し手／発話主	質問	困難が予測される理由	学習者				日本人				
							A	B	C	D	E	F	G	H	I
1	祖母の <u>四十九日</u> 、親戚一同との会食の帰りに、初めて一人でバーへ立ち寄った。	外	男	男	「四十九日」の意味	難しそう な語彙	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	皆の前では平静を装っていたものの、祖母の魂が今日を限りに昇天してしまうことを思うと、 <u>おばあちゃんっ子</u> の僕には並々ならない喪失感があった。	外／内		男	「おばあちゃんっ子」の意味	難しそう な語彙	○	○	○	●	○	○	○	○	○
3	行かないでくれ、おばあちゃん。	内		男											
4	そんな末練を引きずりながら酒を飲み、ふと横を見ると若き日の祖母の写真にそっくりの女性が一人で酒を飲んでいた。	外		男											
5	これはたぶん、いやきつと、祖母の魂が最後の力をふりしぼってセッティングしてくれた縁に違いない。	内		男											
6	僕は勇気をふりしぼり、生まれて初めて女性に声をかけた。	外		男											
7	「お一人ですか？」	会		男	誰の台詞か	発話主が非明示	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8	高鳴る鼓動。	内		男											
9	速まる脈拍。	内		男											
10	しかし、どうやら盛りあがっているのは僕だけで、彼女はこちらを見ようともしない。	内		男											
11	以前、会社の同僚から「 <u>星座と血液型の話をすれば女はいちころだ</u> 」と教わったのを思い出して実践してみたものの、 <u>いちころどころかますます彼女を白けさせて終わった</u> 。	外／内		男	実線部の意味	難しそう な文	○	○	?	●	○	○	○	○	○
12	こうなったら最後の手段。	内		男											
13	僕は以前、得意先の係長に教わった「 <u>とっておきの殺し文句</u> 」で勝負に出た。	外／内		男											
14	「互いに一つずつ願いを叶え合いませんか」	会		男	誰の台詞か	発話主が非明示	○	○	○	●	○	○	○	○	○

15	「願い？」	会		女	誰の台詞か	発話主が非明示	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
16	「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」	会		男	誰の台詞か	発話主が非明示	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
17	ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。	内	男	男															
18	おまえは人の言葉を鵜呑みにしすぎる。	会	男	祖母	「おまえ」は誰か	人称詞の指示対象	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
19	年中そうこぼしていた祖母の涙面が脳裏をかすめていく。	内	男	男															
20	「それなら、私の願いは……」	会		女															
21	彼女は完全に僕を軽蔑した様子で無理難題を突きつけてきた。	外		男															
22	二年前に戻りたい。	内	女	女															
23	二日前に戻りたい。	内	女	女															
24	こうして僕をからかい、煙に巻いて逃げる気だ。	内	女	男															
25	けれど二時間前の話になったところでふいに雲行きが変わった。	外		男															
26	「私、忘れられない人の結婚式にいたの」	会		女															
27	彼女は雨に打たれた彫像みたいな顔で語り始めた。	外		男															
28	唇に貼りついた人工的な笑みが痛ましく、寒々しい。	内		男															
29	二時間前に別の女性と結ばれたその男のことを本気で思っていたのだろう。	内		男															
30	ああ、この人はやっぱりおばあちゃんと違う。	内		男															
31	当たり前だが、ふいにそう思った。	内	男	男															
32	祖母の魂は今頃、またどこかに新しく生まれ変わるための準備体操でもしているのだろうが、今、目の前にいる彼女の魂は僕と同じこの世界で苦しみ、さまよっている。	内		男															
33	僕が初めて声をかけた女性。	内		男															
34	よく見ると昔の祖母よりも歯並びが良く、眉のラインも美しい。	内		男															
35	こんな女性を泣かせているのはどんな男だろう。	内		男															
36	結婚おめでとう。	会		女															
37	そう伝えなかったことを悔やんでいると彼女が言ったとき、僕はわけのわからない衝動に駆り立てられて、お節介にも新郎の電話番号を尋ねていた。	外／内		男															
38	その男はきっと彼女が祝福の言葉を口にできなかったことなど気にしちゃいないだろう。	内	新郎	男	「その男」とは誰か	人称詞の指示対象	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
39	なんせ自分の結婚式だ。	内		男	「自分」とは誰か	人称詞の指示対象	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
40	朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、 <u>あぐらをかいていた</u> はず。	内		男	「舞いあがって」の意味 「あぐらをかいて」の意味	難しそうな語彙 難しそうな語彙	●	○	?	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○
41	そして今頃は二次会か。	内		男															

42	シャンパンをがぶ飲みし、二人のなれそめクイズかなんかで盛り上がり、「キッス、キッス」なんて煽られてニヤついているんだ。	内	新郎	男	「二人」とは誰か	人称詞の指示対象の把握	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
43	だからこそ教えてやりたかった。	外／内	男	男	誰か誰かに教えるか	動作主と受け手が非明示	○	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○
44	この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。	外／内		男															
45	とはいえ、彼女が本気でコースターに電話番号を書きだしたときはびっくりした。	外／内	男	男	誰かびっくりしたか	動作主が非明示	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
46	え、マジ？	内		男															
47	ほんとに電話するの？	内	男	男	誰か誰かに電話するか	動作主が非明示	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	●	○	○
48	「おまえは嘘をつかない子だ。それだけが取り柄だが、それだけで十分だよ」	会		祖母															
49	祖母が残した言葉を思い出し、僕は深く覚悟する。	内		男															
50	よし、こうなったら心して新郎に電話しよう。	内	男	男															
51	彼女の「おめでとう」を全力で伝えよう。	内	男	男															
52	そして願わくば、その男から彼女の電話番号を聞きだしたい。	内	男	男															
					彼の願いは叶えられたか。結末はどうなったか	2編の内容を統合できたかどうか	○	○	●	●	○	○	○	○	○	○	●	○	○

凡例

○：正しい理解 ●：誤った理解 ?：わからないと回答

第11章 日本語母語話者の小説テキストの読解

本章では、日本語母語話者が小説を読んだときの読解について論じる。日本人大学生 17 人に小説を読んでもらいながら、語句や文の意味をどのように解釈し、その際にどのような手がかりを使ったかについて語ってもらう調査をした。その解釈について語用論から考察し、「筆者の意図」「テキスト」「読み手の解釈」の間に生じるズレに焦点をあてる。日本語母語話者であっても、筆者の意図と異なる解釈になるという「ぶれ」があり、そこにはテキストと人間理解の関係の限界性が示唆される。

11.1. はじめに

文章を理解するとは、読み手が特定の文章に含まれる各種情報を順次処理して、一貫した心的表象を形成することであるとされる。読解によって人は、文章に含まれる情報をひとつひとつの断片的な表象に置き換えていくだけではなく、個々の情報同士の関係性も反映した文章全体の心的表象を形成する。この文章の心的表象は、読み手の既有知識と十分に関連づけられることで、より安定して利用することが可能な表象となる(van Dijk & Kintsch 1983, Kintsch & van Dijk 1978, Kintsch 1998)。このような文章理解のモデルは Kintsch らの研究が広く受け入れられている。

文章理解、つまり、読解は、著者の意図によって構成されている文章記述を読み手が処理していく過程である。深谷(2005)は、この過程を著者の意図(第一層)、文章記述(第二層)、読み手の認知(第三層)(読解の結果として形成する心的表象)という三層構造で説明している(図 11-1)。この構造では、著者の意図(第一層)に基づいて文章記述(第二層)は作成され、読み手は文章記述²⁸(第二層)を読解して、記述の背後にある著者の意図を含めた意味内容を理解しているとする。しかしながら、実際の読解においては、第一層から第二層への変換や、第二層から第三層への移行がすべて円滑に、間違いなく行われるわけではない。これまでの文章産出および文章理解の心理学研究の知見からは、この三層は同値ではないことが示されている。たとえば、著者の意図(第一層)が文章記述(第二層)に十全に反映されとは限らず(Hayes and Flower 1980, Bereiter & Scardamalia 1987)、その文章記述(第二層)を読んで心的に再構成することで、読み手の認知(第三層)は形成される。よって、心的表象(第三層)は、実際に読解した文章と必ずしも同一構造ではない。

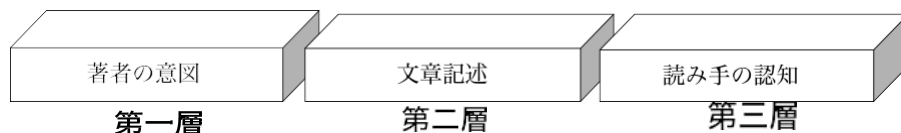


図11-1 文章読解における三層構造

²⁸ 本研究でいう「テキスト」と同じ意味である。

このことは語用論研究における推論モデルと重なる。語用論以外の意味論や語彙論においては、文脈で調整する必要なしに言葉の意味が決まる場合もある。一方、語用論では、文章に用いられた言語的意味は語用論的推論によって補われる必要があるとされる。文章では字義通りの意味は存在せず、読み手が書き手の意図に迫ろうとすべく、書き手の意味を読み手が調整して解釈する必要があるという主張である。語用論の推論モデルでは、読み手は言語情報という限られた情報から著者の意図を解釈する。この解釈は推論をベースになされるため、読み誤るという可能性も許容するものである。

本章では、日本語母語話者の小説読解における三層構造で見られる「ズレ」に焦点をあてる。具体的には、テキスト中の言語形式がどのような場合、読み手に著者の意図が伝わらず、誤読を生み、多様な解釈を許すことになるかを考察する。

11.2. 研究方法の枠組み

小説テキストの読解で想定される三層構造のうち、第一層は「著者の意図」であり、著者がどのような意図でその文章を書いたのかを表す。これは著者である森絵都氏に直接聞かないと確認できない。そこで、森氏に直接質問した。第二層は「文章記述」である。材料文として使った小説は言語学的な論理に従えば、どのように解釈されるかについて示す。第三層は「読み手の認知」、すなわち「解釈」である。日本語母語話者に実際に小説を読んでもらい、発話思考法を用いてその読解過程を明らかにする。その際、推論に使ったコンテキストも積極的に話してもらう。

ここでコンテキストという用語について簡単に定義しておく。読解の際の解釈の手助けとなるのは読み手の頭の中に保持されている記憶や一般常識であり、これらを想定と言い、読み手が自分の頭の中から取り出した想定をコンテキストと呼ぶ(今井 2001:12)。今井(2001:12)はコンテキストを次のように定義する。

- (1)コンテキスト：発話／書かれたものの解釈にあたって、発話／書かれたものの解読的意味と共に推論の前提として使われる想定である。

以下本章でコンテキストという場合は(1)の定義に従う。ウィルスン/ウォートン(2009:30)によると、想定をつくるのは具体的には次のようなことである。

- (2)a. 雑談か公式の討議の場合かというように発話が行われる物理的環境, b. 先行する文章の解釈, c. 文化的知識や科学的知識などの世界知識, d. 読み手がその場で思い出すことができる読み手独特の情報

本章では、読み手の解釈にどのくらい幅があるか明らかにする。以上をまとめると次のようになる。

第一層「著者の意図」：著者の森絵都氏に質問して確認した。

第二層「文章記述」：言語学の論理でどのような解釈が妥当か分析する。

第三層「読み手の解釈」：日本語母語話者に小説を読んでもらい、理解した内容や推論に使ったコンテキストを話してもらう。

11.3. 関連性理論に基づいた解釈の手順

この節では、11.5 の調査結果の考察で援用する、語用論および関連性理論についてまとめておく。

語用論の目的は、どのように読み手／聞き手が、書き手／話し手の意味を理解するか、また誤解するのかを説明することにある。語用論以前に考えられていたコードモデル(code model)では、同一のコードを持った送信者と受信者が正常に機能し、信号の伝達が妨げられない限りコミュニケーションは常に成功すると保証される。しかし、このモデルは人間のコミュニケーションのある側面しか説明できない。

これにかわって提唱されたグライス(Grice)の語用論は、推論に基づく解釈のモデルを提示したことで功績が大きかった。グライスの枠組みでは、発話解釈は複雑かつ意識的に行なわれる推論の過程であるとする。しかし、この枠組みでは、子どもは話せるようになるずっと前から推論に基づいてコミュニケーションを行っているが、それがどのように起こっているか解明できないという問題点が指摘された。そこで、その問題点を解決すべく Sperber & Wilson(1986,1995)は、グライスの考えを発展させ、認知的に妥当かつ、経験的に検証可能なコミュニケーション理論である関連性理論(Relevance Theory)を提唱した。関連性理論では、人間の頭の中には生まれながらに「関連性原理」が備わっているという仮説が立てられている。「関連性」とは、人間の認知システムは、自分にとって潜在的に関連性のある情報を取り出すように働く性質を持っているとするものである。

以下、関連性理論創設者の1人 D.ウィルスンと、その弟子の T.ウォートンがまとめたウィルスン/ウォートン(2009)を引用し、関連性理論を概観する。関連性理論は次のような想定に基づく。

関連性理論でのコミュニケーションに関する想定

- a. すべての発話には、複号化(decoding)された文の意味と矛盾しない、言語的に可能な解釈が数多くある。

- b. しかし、具体的な状況下では、これらすべての解釈が同等に接近可能な(等しく聞き手の頭に浮かぶ)わけではない。
- c. 聞き手はそれらの解釈の妥当性を評価し、話し手の意味の解釈として受け入れるか排除するかを決める、単一の非常に一般的な基準を持っている。
- d. この基準は1つの解釈を選び、それ以外の解釈を排除するほど十分に強いものである、聞き手はその基準に合致する最初に思い浮かんだ解釈こそが選ぶべき最終的な解釈であるとみなしてよい。

また、新情報がコンテキストと相互作用し、認知効果(あるコンテキストにおいて情報を処理することによって得られるもの)を持つ場合に、そのコンテキストにおいて関連性がある。読み手にとって認知効果が高ければ高いほど、関連性は増す。さらに、人間の認知システムを考慮し、処理コストという概念も取り込む必要がある。処理コストに影響を与える要因には次のようなものがある。

- e. 最近使われたかどうか。
- f. 頻繁に使われるかどうか。
- g. 言語的に複雑かどうか。
- h. 論理的に複雑かどうか。

よって、個人にとっての関連性は次のようにまとめられる。

- i. ほかの条件が同じ場合、認知効果が高ければ高いほど、関連性は増す。
- j. ほかの条件が同じ場合、処理コストが低ければ低いほど、関連性は増す。

以上のことから、関連性理論に基づく解釈プロセスは、次のようになる。

- k. 認知効果を計算するのに最小の労力を要するルートをとる。解釈の仮説(曖昧な表現の解釈、指示詞の解釈、推意)を試すには、アクセスしやすい順に行う。
- l. 関連性の期待が満たされたところで解釈を停止する。

このように、読み手の解釈は認知効果と処理コストのバランスで決まるとされる。

11.4. 調査概要

協力者は、日本の大学に在籍する日本人大学生(1年～4年生、19～22歳)17人である。調査は2016年6月から2017年8月にかけて行った。調査に用いた材料文は、森絵都氏の短編小説「彼女の彼の特別な日」「彼の彼女の特別な日」である。

読み手の読解過程を可視化するために、発話思考法を用い、材料文を読みながら解釈やコンテキストを語ってもらった。その際、読み手の読解中に、調査者は必要に応じて読み手の解釈の詳細を明らかにするための質問をした。

手順は次のとおりである。まず、発話方法に慣れるために別の材料文で練習を十分に行った。調査本番では、材料文の特徴を次のように伝えてから調査を開始した。「これから小説を 2 つ読んでもらいます。1 つは A さんから見たストーリー、もう 1 つは B さんから見たストーリーです。2 つ合わせて小説の全体像がわかります」

調査者からの質問は、中国人大学院生 4 人を対象とした第 10 章のパイロット研究の結果を参考にし、読解困難に陥りやすい箇所を想定して行った。調査時間は制限を設けなかったが、全調査は練習時間も合わせて 90 分の範囲に収まった。調査中の発話内容すべてを IC レコーダーで録音し、調査後に文字化した。

11.5. 調査結果

調査の結果、第二層の「文章記述」と第三層の「読み手の解釈」の間で、次の 3 つの表現、「ミモザ」「三枚目」「たった一つきり」の語義において解釈のズレがあった。そこで、これらの表現が実際にどのような意味で用いられたか、つまり、第一層の「著者の意図」を明らかにするために、この小説の著者である森絵都氏に連絡を取り、「ミモザ」の意味と「たった一つきり」が指す内容を確認した。なお、「三枚目」の意味は、辞書には「滑稽な役をする俳優、人」という語釈(デジタル大辞泉)のみで曖昧性がないと考えられたため、著者にその意味を確認しなかった。

解釈の構築について松井(2003)は次のように説明する。関連性理論では、発話の言語的意味は話し手の意図した解釈を得るための手掛かりにしか過ぎないという見方をとっており、聞き手はその手掛かりをもとに、推論、つまり語用論的操作を用いて解釈を構築する。この語用論的作業を加えられる以前の、青写真的な発話の言語構造を論理形式(logical form)と呼ぶ。一つの論理形式がどの程度の情報を語用論的操作によって補われるべきかは、発話によって程度差があるとされる。論理形式に語用論的操作が加えられ、話し手／書き手が伝達しようとしていた思考内容とほぼ内容を同じくするレベルに発展したものは表意(explicature)と呼ばれる。これに対して、暗に含みとして伝達された思考内容は暗意(implicature)と呼ばれる²⁹。

まとめると、関連性理論の発話解釈では次の 3 つのプロセスが想定されている。

²⁹ 発話の暗意は、表意(明意)とコンテキスト的想定を合わせて、次のように導かれる。

a. Alan: 今晚、私たちと一緒に夕飯はどうですか。

b. Lisa: いいえ、結構です。私はもう食べました。

b の発話「もう食べました」の符号化された文の意味を、c. 発話が行なわれた晩に、すでに Lisa は夕飯を食べていた。のように補強し、d. 人は普通一晩に夕飯を 2 回食べたいとは思わない。というコンテキスト的想定を組み合わせ、e. Lisa はその晩すでに夕飯を食べていたので、Alan と夕飯を食べたくない。という暗意が引き出せる。(ウィルソン/ウォートン 2009)。

- (i) 言語を媒介とした発話情報の論理形式を、曖昧性の除去、指示表現の同定、その他の語用論的意味の拡充を経て、表意レベルに発展させる。
- (ii) 話し手(書き手)の意図した文脈情報(推論的前提)を、発話の状況、既存知識などから取り出す。
- (iii) 話し手(書き手)の意図した認知効果(推論的結論)を決定する。

よって、本章で言う文章記述は「論理形式」、読み手の解釈は「表意レベル」にそれぞれ相当すると考えられる。三層構造で見られたズレについて表 11-1 にまとめた。なお、上記 3 つの表現以外には、2 編を通読した後にわかる結末の解釈でズレがあった。上記 3 つの表現は語句レベルの低次の処理であるのに対し、結末の解釈は 2 編それぞれのテキストを読んだ結果に得られたそれぞれの心的表象を、さらに統合するような高次の処理であると考えられる。本章では語義の解釈のレベルを考察対象とするため、結末の理解は扱わない。

表 11-1 本調査の三層構造の比較

調査で見られたズレ	著者の意図 (第一層)	文章記述 (第二層)	読み手の解釈 (第三層)
	森絵都氏の回答	論理形式	表意レベル
ミモザ(花とカクテルの 2 つの名称の可能性がある多義語)	カクテル	カクテル	花(5), カクテル(お酒)(7), アクセサリー(2), 服(1), クッション(1), 料理(1)
三枚目(滑稽な役をする人という意味)	[確認せず]	滑稽な役をする人	かっこいい人(9) カッコ悪い, 不細工な人(8)
「たった一つきり」が指す内容	自分自身がどう見えるか(新郎新婦が主役の結婚式という場で自意識の塊のようになっていたことに対する自己嫌悪と悔恨が彼女の中にあります)	照応と考えると、後続の 2 文を指す。一方、暗意と考えると推論が必要。	著者の意図通りの暗意(13), 後方照応(1), 著者の意図と異なる暗意(3)

()の数字は回答人数

以下、ズレが見られた 3 つの表現について、11.5.1 から 11.5.3 で関連性理論による発話解釈の過程を考察する。

11.5.1.「ミモザ」はなぜ「カクテル(お酒)」と解釈されなかったか

私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。

「どんなにつらくても、彼にちゃんと伝えたい」

「なんて？」

「結婚おめでとう」

無理をして微笑んだ。はすが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。酔っている。

「彼女の彼の特別な日」 p.30

「ミモザ」という語は文章記述で 2 回出現し、しかも、それらが近い位置であるため、1 回目の解釈が 2 回目で変化するか、また、その場合どのように変化するかが確認できる。

「ミモザ」は多義語で 2 つの名称の可能性がある。1 つは花の名前(写真左)、もう 1 つはこの花の色に似たカクテルの名前(写真右)である。



著者の森絵都氏に確認したところ、ミモザは、登場人物の彼女がバーで飲んでいるカクテルであった。著者の意図通りに最終的に「カクテル」と解釈したのは 17 人中 7 人で、残り 10 人は別の解釈をした。

表意レベルの解釈である「ミモザ」という多義語の意味の同定がどのようになされるか見ていく。以下の a.から e.において、読み手の 1 回目と 2 回目の解釈と、その解釈に使ったコンテキストとして読み手が語った内容を(1)から(4)に示す(以下、同様)。小説の文章記述は斜体で示し、協力者が小説の表現を引用した箇所は“ ”で示す。

協力者 17 人中 13 人にとってミモザは未知語であった。4 人はミモザを知っていたものの、そのうち 3 人は「花」の意味のみ、1 人は「カクテル」の意味のみを知っていた。本調査では、ミモザに「カクテル」と「花」の 2 つの意味があることを知っている協力者はいなかった

単語を知っているというのは、単語のすべての側面を知っていることから、ある側面しか知らないことまで幅があるものである。ミモザは 2 つの意味がある多義語であるが、どちらか片方の意味しか知らなくても読み手にとっては既知語となる。よって、本調査の協力者は、「カクテル」、または、「花」のどちらかを知っている者(ミモザは既知語)と、どちらの意味も知らない者(ミモザは未知語)に大きく分けられた。

このような条件の協力者がミモザの意味を解釈したルートは、次の a から e のようにまとめられる。以下、ルートごとに協力者の解釈の具体例を示す。

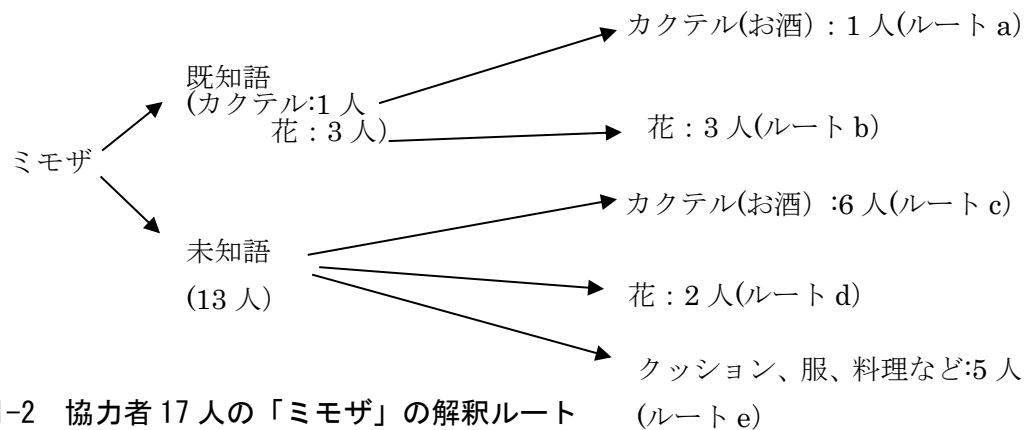


図 11-2 協力者 17 人の「ミモザ」の解釈ルート

ルート a. 「ミモザ」を「カクテル」と知っていた協力者の解釈(1 回目: カクテル→2 回目: カクテル)

私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(文章記述)

(1) 自分のアルバイト先で「ミモザ」というカクテルがある。(アクセスしやすい世界知識)

↓

(2) 「ミモザ」はカクテルかもしれない。【1 回目の解釈】(コンテクスト的想定)

↓

「どんなにつらくても、彼にちゃんと伝えたい」

「なんて？」

「結婚おめでとう」

無理をして微笑んだ。さすが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。酔っている。(文章記述)

(3) “一滴の涙が沈んでいた” から「ミモザ」は液体である。(コンテクスト的想定)

↓

(4) 「ミモザ」はカクテルである。【2 回目の解釈】((2)のコンテクスト的想定が確定化された)

(1)～(4)は協力者の発話内容(以下同様)。

ルート b. 「ミモザ」を「花の名前」と知っていた協力者の解釈(1回目：花→2回目：花)

私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(文章記述)

(1) 「ミモザ」は花を指す単語だった記憶がある。ミモザ色、という単語もあったような。
(アクセスしやすい世界知識)

↓

(2) 「ミモザ」は「花」かもしれない。【1回目の解釈】(コンテクスト的想定)

↓

「どんなにつらくても、彼にちゃんと伝えたい」

「なんて？」

「結婚おめでとう」

無理をして微笑んだ。はずが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。酔っている。(文章記述)

(3) “ブーケの色に似た”と言っているのでブーケそのものではない。(コンテクスト的想定)

一般に結婚式のあとで会場に飾ってあった花がもらえる(世界知識)から、彼女の近くにその花があるのは自然である。(コンテクスト的想定)

↓

(4) 「ミモザ」は「花」である。【2回目の解釈】((2)のコンテクスト的想定が確定化された)

ルート c-1. 「ミモザ」が未知語だった協力者の解釈(1回目：飲み物→2回目：お酒)

私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(文章記述)

(1) 主人公の彼女は今、バーにいて、一人で気持ちを鎮めている。(当該文より前に明示的に書いてある文章記述から得られたコンテクスト)

“ブーケの色に似た”と“見下ろした”から視線の先にあるもの。(明示的に書いてある文章記述と世界知識の相互作用)

↓

(2) 「ミモザ」は飲み物かもしれない【1回目の解釈】(コンテクスト的想定)

↓

「どんなにつらくても、彼にちゃんと伝えたい」

「なんて？」

「結婚おめでとう」

無理をして微笑んだ。はずが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。酔っている。(文章記述)

(3) “酔っている”から主人公はお酒を飲んでいる。(コンテクスト的想定)

↓

(4) 「ミモザ」は飲み物(お酒)である。【2回目の解釈】((2)のコンテクスト的想定が確定化された)

ルート c-2. 「ミモザ」が未知語だった協力者の解釈(1回目：花→2回目：お酒)

私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(文章記述)

(1) ブーケは花束で、その“ブーケの色に似た”もの。(明示的に書いてある文章記述と世界知識の相互作用。ブーケという語が直前に使われていて処理コストが小さい)

↓

(2) 「ミモザ」は「花」かもしれない【1回目の解釈】(コンテクスト的想定)

↓

「どんなにつらくても、彼にちゃんと伝えたい」

「なんて？」

「結婚おめでとう」

無理をして微笑んだ。はずが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。酔っている。(文章記述)

(3) 彼女は“バー”にいて、“一滴の涙が沈む”ので「ミモザ」はお酒の名前かもしれない。
(2)のコンテクスト的想定を棄却する)

“沈む”ということは涙が水の中に落ちた。ただ単に物の上に落ちたという意味で“沈む”を使っているのかちょっとわからない。

“酔っている”から主人公はお酒を飲んでいる。(コンテクスト的想定)

↓

(4) 「ミモザ」は「お酒」である。【2回目の解釈】

ルート d. 「ミモザ」が未知語だった協力者の解釈(1回目：花→2回目：花)

私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(文章記述)

(1) ブーケは花束だから、そこから連想して。(明示的に書いてある文章記述と世界知識の相互作用。ブーケという語が直前に使われていて処理コストが小さい)

↓

(2) 「ミモザ」は「花」である。【1回目の解釈】(コンテクスト的想定)

↓

「どんなにつらくても、彼にちゃんと伝えたい」

「なんて？」

「結婚おめでとう」

無理をして微笑んだ。はずが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。酔っている。(文章記述)

↓

(3) 「ミモザ」は「花」である。【2回目の解釈】(解釈の修正はなし)

ルート e-1. 「ミモザ」が未知語だった協力者の解釈(1回目：花→2回目：クッション)

私は花嫁の手に使っていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(文章記述)

- (1) “ブーケの色に似た”もの。花(の名前)はカタカナで表記する。(明示的に書いてある文章記述と世界知識の相互作用。ブーケは直前に使われていて処理コストが小さい)

↓

- (2) 「ミモザ」は「花」かもしれない【1回目の解釈】(コンテキスト的想定)

↓

「どんなにつらくても、彼にちゃんと伝えたい」

「なんて？」

「結婚おめでとう」

無理をして微笑んだ。はずが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。酔っている。(文章記述)

- (3) “一滴の涙が沈む”ので「ミモザ」は花ではないかもしれない。((2)のコンテキスト的想定を棄却した)

“沈む”だと布のイメージ。花なら「落ちて、流れる」から。

“見下ろしながら”とあるので「クッション」かもしれない。

* “酔っている”は主人公の状況描写であり、「ミモザ」とは無関係であるように読めた(フォローアップインタビューでの発言)。

↓

- (4) 「ミモザ」は「クッション」である。【2回目の解釈】

ルート e-2. 「ミモザ」が未知語だった協力者の解釈(1回目：服、カバン→2回目：服)

私は花嫁の手に使っていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(文章記述)

- (1) “見下ろしながら”だから自分が持っているもの(明示的に書いてある文章記述と世界知識の相互作用)

↓

- (2) 「ミモザ」は「服または、膝の上にあるカバン」かもしれない【1回目の解釈】(コンテキスト的想定)

↓

「どんなにつらくても、彼にちゃんと伝えたい」

「なんて？」

「結婚おめでとう」

無理をして微笑んだ。はずが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。酔っている。(文章記述)

- (3) “一滴の涙が沈む”ので服にしみていく感じがする。((2)のコンテキスト的想定を確定した)

↓

- (4) 「ミモザ」は「服」である。【2回目の解釈】

協力者にとって「ミモザ」がカクテルであるということを知らない限り、文脈や周辺の言語形式を手がかりにした推測では、著者の意図にたどり着けないことがある

ことが明らかになった。そして、その理由は 11.3. で述べた関連性理論における認知効果と処理コストで説明される。

「ミモザ」が既知語であった協力者は、その既知の意味が「カクテル」であれ「花」であれ、1 回目も 2 回目も解釈が変わらず、最初から自分の知っている意味を最終的な解釈とした(ルート a,b)。「ミモザ」がカクテルの名前であると知っていたのは 1 人だった。この協力者はすぐに「カクテル」と回答したが、それは自身のアルバイト先にミモザというカクテルがあるからだと話した。つまり、この協力者にとって「カクテル」はアクセスしやすい世界知識であった。また、「ミモザ」が花の名前であると知っていたのは 3 人で、最終的にも全員、「ミモザ」は花であると解釈した。彼らにとって「ミモザ」の語義を解釈する際に、既知の「花」という知識がアクセスしやすく、ブーケという語からも「花」は連想しやすいことから処理コストが低かった(b)。「花」という解釈は文脈と齟齬はなく、認知効果も十分得られることから、そこで読み手の解釈は打ち切られ、解釈は確定する。

一方、「ミモザ」が未知語であった協力者の場合、3 つの解釈のルートがあった。カクテル(ルート c)、花(ルート d)、クッションなど(ルート e)である。また、1 回目の解釈が 2 回目で修正される場合が多く見られた。

1 回目に出てくる「ミモザ」の語義を解釈する際に、「ブーケの色に似た」という文章記述と、「ブーケは花束のこと」という世界知識から、「花」は連想しやすいことから処理コストが低かった。そもそも、著者の意図である「カクテル」を主人公の彼女が飲んでいることは、文章記述のどこにも見当たらない。「主人公の彼女はバーにいる」「元恋人の結婚式の帰りで気持ちを鎮めたい」「ミモザを見下ろす」という推論的前提が合わさってはじめて「カクテル」という解釈が可能になることから、「カクテル」と解釈する処理コストは高いと考えられる。

しかし、「ミモザ」が 2 回目に出現した際、協力者によっては最初のコンテキストの想定を棄却し、「お酒」(c-2)や「服」(e-1)などと再解釈をした。その解釈に使われたのは、「一滴の涙が沈んだ」「酔っている」という文章記述から得られた新情報である。2 回目で「カクテル」と再解釈し、著者の意図にたどり着いたのは 5 人だった。

一方、「一滴の涙が沈んだ」「酔っている」という文章記述から得られる新情報を使っても、「花」のまま解釈を変えなかったり(d)、「服」「クッション」「料理」と解釈したりする(e-1,e-2)ことから、上述の文章記述は著者の意図である「カクテル」に必ず導くコンテキストではないことがわかる。また、推論に使われるコンテキストとして、「花の名前はカタカナで表記される」という世界知識が使われている(e-1)ことは興味深い。

以上見てきたように、たとえ読み手の解釈が著者の意図や文章記述から導かれる妥当な意味と異なっているとしても、関連性理論を使うことでその解釈に説明がつくことが明らかになった。

調査では協力者 17 人中 13 人にとってミモザは未知語であったため、そもそもミモザが多義語であるという認識はなく、あくまでも未知語としての推測であった。その場合、次に述べる「三枚目」の発話解釈の過程と実質的には変わらない。

11.5.2. 「三枚目風」はなぜ「かっこいい人」と解釈されたか

「三枚目」の意味は、辞書(デジタル大辞泉)には「滑稽な役をする俳優, 人」という語釈のみで多義語ではない。協力者 17 人中 13 人にとって「三枚目」は未知語であった。このことから「三枚目」という語については世代による親密度の違いがあると考えられた。小説の作者である森氏は 1968 年生まれであり、今回の協力者は 1995～1997 年生まれである。

調査では「三枚目」が既知語だった 4 人は全員正しく解釈した。未知語だった 13 人のうち、4 人は「おもしろい顔の人, カッコ悪い人, 不細工な人」というように「三枚目」の語釈と整合性がある解釈をした一方で、9 人が「かっこいい人」と本来の意味と正反対の解釈をした。

以下、三枚目が未知語だった協力者の解釈を示す。

f. 「三枚目」が未知語だった協力者の解釈(解釈：おもしろい顔の人)

私は初めて男を正面から捉えた。思ったよりも丸顔の三枚目風だった。「彼女の彼の特別な日」p.31(文章記述)

(1) “二枚目”はかっこいい人なので、三枚目はその反対だろう。(明示的に書いてある文章記述からの推測)

↓

(2) 「三枚目」は「おもしろい顔の人」かもしれない。【解釈】

g. 「三枚目」が未知語だった協力者の解釈(解釈：かっこいい人)

私は初めて男を正面から捉えた。思ったよりも丸顔の三枚目風だった。「彼女の彼の特別な日」p.31(文章記述)

(1) “二枚目”はかっこいい人なので、三枚目は標準レベルかかっこいいの真逆。(明示的に書いてある文章記述からの推測)

↓

(2) “思ったよりも”とあるので、基本的にはいいことが書いてあるかもしれない。(明示的に書いてある文章記述からの推測。(1)と相反する。)

↓

(3) “キザな文句”(p.28)と言うからかっこいいと思っていたのに、見たら不細工というのは、物語としては崩れてしまう。(「二枚目」からの推測を棄却し、「物語としては崩れる」というステレオタイプの情報が接近していて扱いやすい)

↓

(4) 「三枚目」は「一般的に言ってかっこいい人」かもしれない。【解釈】

fでは、「二枚目」はカッコいい人なので、「三枚目」はその反対だろうと、明示的に書いてある文章記述から推論し、「三枚目」は「おもしろい顔の人」という正しい解釈に至っている。一方、gでは、f同様に「二枚目」はカッコいい人なので、三枚目は標準レベルかカッコいいの正反対の意味であると推論をしつつも、「思ったよりも」とあるので、基本的にはいいことが書いてあるかもしれないと考えた。このようにどちらも明示的に書いてある文章記述からの推論であるが、(1)と(2)の両者の解釈が背反し、確定できない。そこで、(3)「“キザなセリフ”と言うからカッコいいと思っていたのに、見たら不細工というのでは物語としては崩れてしまう」というステレオタイプの情報であるコンテクスト的想定を優先させた。つまり、「二枚目」から推測した「カッコいいの真逆」というコンテクスト的想定を棄却し、「男が不細工なら物語の流れとしては崩れる」というステレオタイプの情報が接近していて扱いやすかったためと考えられる。そして、最終的に「一般的に言ってカッコいい人」かもしれないと解釈を確定した。

11.5.3. 「たった一つきり」の中身はなぜズレるのか

次の「たった一つきり」はどのように解釈されるだろうか。

「ううん、つらくなんてなかった。だって式の間中、私が考えていたのはたった一つきりだから。自分はちゃんと微笑んでいるか。彼の選んだ花嫁よりも綺麗で幸せな女に見えるか。...つまらないプライドの塊みたいになって、全力で平静を装ってた。来てくれてありがとうって彼が声をかけてきたときも、元同僚として当然よ、なんて突っぱねてね」「彼女の彼の特別な日」 p.29

この文章記述(第二層)における「たった一つきり」の中身を考えると、2つの解釈が可能ではないだろうか。1つめの解釈は、後方照応である。「たった一つきり」が指しているのは、破線で示した後続の2文「自分はちゃんと微笑んでいるか。彼の選んだ花嫁よりも綺麗で幸せな女に見えるか。」であるという解釈である。これは文章記述から言語学的に導かれる解釈と言える。この解釈は、11.5.で述べた関連性理論における表意レベルの解釈プロセスの「指示表現の同定」に相当する。

一方、2つめの解釈は、指している内容は論理形式としては現れていないが、暗に含みとして伝達された思考内容である暗意であるというものである。実際、著者である森絵都氏の回答は、「たった一つきり」が指しているのは「自分自身がどう見えるか」というものであった。これは文章記述に明記されていないため、暗意であると言える。この暗意は「たった一つきりだから」の後続の2文の内容(破線部)をまとめて抽象化し、高次の表現で言い換えたものと考えられ。そのことから、この2つの解釈(①後方照応、②暗意)は接近しているとも言える。

協力者 17 人中 13 人が「著者の意図通りの暗意」に解釈したと考えられた(h)。1 人は「後方照応」として解釈した(j)。また、3 人は著者の意図通りの暗意とも後方照応とも違う解釈をした(i)。

h. 「たった一つきり」が指す内容を、著者の意図通りの暗意と解釈した協力者の場合

- (1) “一つきり”と言いながらたくさんの思っていることが羅列してある。自分は平気だよと見せようとするのをゴールとして、そのゴールが 1 つだという意味で、“一つきり”と言っている。(文章記述からの推測)
- ↓
- (2) 「一つきり」は「彼に未練がないように元恋人として平静を装うこと」かもしれない【解釈】

i. 「たった一つきり」が指す内容を、著者の意図と異なる暗意と解釈した協力者の場合

- (1) “2 時間前だったら取り返しがつきそうだ” (p.29) とか、恋人だった “2 年前に戻りたい” (p.28) だとか、やっぱりもう一回彼との関係をやり直したいっていう、文章が何回も見受けられた。(コンテキストとして著者の意図しない文章記述を使って推論。)
- ↓
- (2) 「一つきり」は「彼を取り戻したい。彼を祝福できているかという心配ではなく、彼の結婚をやめさせたい」ということ。【誤った解釈】

j. 「たった一つきり」が指す内容を後方照応と解釈した協力者の場合

- (1) “私が考えていたのは”の後に“自分はちゃんと微笑んでいるのか” “彼の選んだ花嫁よりも綺麗で(中略)”と 2 つある。彼女が考えていたことが 2 つ書いてある。【解釈】
- ↓
- (2) “一つきり”が指すものがわからなくなった。【解釈の迷い】

h は「たった一つきり」が指す内容を暗意と解釈し、「彼に未練がないように元恋人として平静を装うこと」と、ほぼ著者の意図通りの解釈をした。17 人中 13 人はそれぞれ言い方は異なるものの、これと類似した解釈を述べた。一方、i は暗意と解釈したものの、解釈した際に使ったコンテキストが著者の意図と異なっているため、導かれた解釈が「彼を取り戻したい」となり、「自分自身がどう見えるか」という著者の意図と異なった。

また、j は「たった一つきり」が後続の 2 文と後方照応の関係であると解釈したが、

「考えていたことが2つ書いてあるので、“一つきり”が指すものがわからなくなった」と発話し、混乱する様子がわかる。

以上のことから、「たった一つきり」の解釈にはコストが余計に必要であることがわかる。まず、指示表現の同定にあたり、その解釈の候補として、後方照応と暗意の2つが論理的に可能であることがあげられる。後方照応と解釈した場合、その指示対象はテキスト中に明示的に書かれている後続文であると理解することはそれほど難しくないだろう。一方、暗意と解釈された場合、その解釈のためには多くの語用論的推論が必要になる。その際、著者の意図と異なる文章記述をコンテキストとして使うことで、著者の意図と異なる解釈に至ってしまう。このように「たった一つきり」については、読み手にとってコストのかかる解釈が要求される。

11.6. まとめ

本章では、著者の意図(第一層)、文章記述(第二層)、読み手の解釈(第三層)という三層構造を前提に、日本語母語話者の小説読解における三層構造に見られるズレに焦点をあてた。調査でその解釈にズレが観察された「ミモザ」「三枚目」の意味、「たった一つきり」が指す内容について、関連性理論の立場からその解釈の過程を考察した。その結果、たとえ読み手の解釈が、著者の意図や文章記述から導かれる妥当な意味と異なっているとしても、関連性理論を使うことでその解釈に説明がつく。このことは、読み手が解釈やコンテキストを語っているインタビューデータからもその妥当性が確認された。

たとえば、「ミモザ」が協力者にとって既知語であった場合、その意味が「カクテル」であっても「花」であっても、どちらの場合にも既有知識にアクセスしやすく処理コストが小さいため、初発の解釈が優先された。初発の解釈が文章記述に対して齟齬が生じなければ、解釈の修正は起こらず、初発の解釈が最終的な解釈となる。一方、未知語であった場合、文脈や表記、コンテキストを使って解釈するため処理コストが大きくなる。ミモザが未知語だった13人のうち、6人が「カクテル」と解釈し、7人が「花、クッション」などと解釈した。このことから、文章記述(第二層)から見る限り、「カクテル」も「花」も解釈が均等であると考えられる。今回の協力者の場合、ミモザの両方の意味を知っている人はいなかった。ちなみに、論文筆者はこの小説を読んだ際、両方の意味を知っていたが、「彼女はバーにいる」「ミモザに一滴の涙が沈んだ」「酔っている」という文章記述から、カクテルの名前であることに疑問を抱かなかった。しかし、同時に花の名前であることも知っていたため、もし、ここを花だと解釈しても全体の理解に齟齬がないのではないかと気が付いた。

他の例である「三枚目」が未知語であった場合、協力者は「二枚目」から推測した「カッコいいの真逆」というコンテキスト的想定よりも、「男が不細工なら物語の流れとしては崩れる」というステレオタイプの情報が接近していて扱いやすかったこ

とが考えられた。また、「たった一つきり」の解釈には、後方照応と暗意の2つが可能であるため、処理コストが余計に必要である。さらに、暗意と解釈された場合、その解釈のために推論が必要になるが、その際、著者の意図と異なるコンテキストが使われることで、著者の意図と異なる解釈に至る。

上記の現象は小説というジャンル特性によるところが大きいと考えられる。まず、読解時に要求される推論の多さである。Graesser(1981)によると、小説のような物語文では説明文の約3~4倍の推論が必要であるとされ、これが物語文を特徴づける。文間をすべて記述してしまえば、解釈は一義的に決まるが、それは物語文というより説明文の表現に近づいてしまい、興ざめになるだろう。次に、文章の伝達機能である。小説は読み手を楽しませる目的で書かれている。しかし、筆者の意図が文章記述の形で具現化され、紙媒体になってしまうと、対面の会話と異なり、伝達意図(情報意図をもっていることを相手に知らせたいという意図)は乏しく、情報意図(相手にある情報を知らせたいという意図)をその文章記述からしか読み取れないという特徴がある。また、会話であれば間違った解釈は聞き手からフィードバックが得られるが、読解ではそのような機会も得にくい。その結果、解釈の際に筆者の意図しないコンテキストが使われやすく、その結果誤った推論を導いてしまう。

文章理解の入口で処理される語句の意味や言語の構造も、たいてい解釈の可能性が複数ある。そのため、それを文脈に応じて一義化することや、省略されている要素を補うことをはじめとするいくつかの語用論的操作を経て、ようやく文章記述の言語情報が書き手の思考内容に近づく。文章全体から暗意を読みとる段階ではなく、文章理解の入口段階において語句や文の意味を解釈する際に、すでに関連性の原理に基づいた推論メカニズムが働く限り、解釈のズレはある程度避けられない。このように、語の意味や文を統語的に正しく解析できると考えられる成人の日本語母語話者であっても、筆者の意図と異なった解釈にいたるという「ぶれ」が出てくる。そこにはテキストと人間理解の関係の限界性が見てとれる。

最後に、小説の著者である森絵都氏が意図した「ミモザ」の意味を紹介して本章を終える。

「カクテルです。花やドレスという解釈があるとは、私自身はまるで思っていなかったのが驚きました。でもこれだけが正解というのでもないのです、皆さんそれぞれ想像の世界で楽しんでいただければと。」

第12章 日本語学習者の小説テキストの読解

本章では、英語・韓国語・中国語母語話者それぞれ 13 人、合計 39 人を対象に行った小説テキストの読解の調査結果について、その全体像を簡潔に述べる。詳細については第 13 章以降で論じる。本章では、まず、協力者の基本データを示した後で、母語別に誤読の概要を示す。

12.1. 協力者の基本データ

本研究で分析対象としたのは、英語母語話者 13 人、韓国語母語話者 13 人、中国語母語話者 13 人の合計 39 人である。協力者 39 人の基本データを表 12-1 に示す。協力者番号の冒頭のアルファベットについて、E は英語、K は韓国語、C は中国語母語話者にそれぞれ対応する。

表 12-1 の内容は次のとおりである。

(a) JLPT の取得級、(b) 日本留学生試験の日本語パートの点数、(c) SPOT90³⁰、(d) 母語および日本語における小説の読書習慣³¹(4 よく読む、3 時々読む、2 あまり読まない、1 全然読まない、の 4 件法)、(e) 調査中に辞書を使った回数、(f) 読後のフォローアップインタビューで聞いた自己申請の理解度³²(0-100%)、(g) 結末の理解の正誤

協力者の SPOT90 の点数は 69～88 で、母語別の平均点は E は 75.8、K は 81.2、C は 78.8 である。SPOT90 の点数や JLPT の取得状況から、E は K・C よりやや日本語能力が低い傾向を示すものの、全協力者の日本語能力はほぼ上級であり母語別の差も小さいと考えられた。

表 12-1 協力者の基本データ

協力者	JLPT・日留試	SPOT90	小説の読書習慣 (母語・日本語)		辞書使用 (回)	自己申請の理解度 (0-100%)	結末
E01	N2	69	2	3	23	n/a	正
E02	N2	74	3	3	35	n/a	正
E03	無	73	4	3	24	n/a	誤
E04	N1	88	3	3	41	n/a	正
E05	N2	69	3	1	40	n/a	正
E06	N1 受験予定	72	4	3	43	n/a	正
E07	無	70	4	3	10	75	正
E08	N1	73	4	2	0	90	正
E09	N2	81	3	2	45	90	誤
E10	無	78	4	3	42	80	正
E11	無	81	3	3	12	100	正

³⁰ 調査時間の関係で SPOT90 のデータがない協力者(n/a) もいる。

³¹ 読書習慣については、主観的に答えてもらった。この際、目安となる基準などは提示しなかった。

³² 協力者に 0～100%の間で主観的に答えてもらった。この際、目安となる基準などは提示しなかった。なお、この自己申請の理解度については、データがない協力者(n/a)もいる。

E12	N1	82	3	1	10	90	正
E13	N1	76	3	3	17	90	正
K01	N2	75	2	2	0	80	正
K02	無	81	2	2	24	90	正
K03	N1	81	4	3	42	100	正
K04	N1	86	4	4	9	95	誤
K05	N1	83	3	1	45	80	正
K06	N2・330	79	4	3	2	90	誤
K07	N1	84	3	2	0	80	正
K08	N1・340	81	2	1	31	90	誤
K09	N2	87	3	3	10	90	正
K10	N1・320	79	4	3	0	100	誤
K11	N1・312	n/a	2	2	21	n/a	誤
K12	N1	n/a	3	2	31	n/a	正
K13	N1	n/a	1	1	0	n/a	誤
C01	N1	76	3	3	2	n/a	正
C02	N1	82	3	2	0	n/a	誤
C03	N1	73	2	3	35	80	誤
C04	N1	74	4	3	33	95	正
C05	N1	84	4	3	26	75	正
C06	N1	87	4	4	19	100	正
C07	N1	76	4	1	1	80	誤
C08	N1 受験予定 N2・300	77	3	2	21	90	誤
C09	N1	81	3	4	4	90	正
C10	N1・324	76	3	3	42	90	誤
C11	N1	83	4	3	4	100	正
C12	N1・365	76	3	2	19	95	正
C15	N1	n/a	2	2	0	n/a	誤

12.2. 英語・韓国語・中国語母語話者の誤読の概要

協力者の母語別に誤読の概要を示す。小説テキストのどの箇所でも誤読が見られたか、協力者それぞれの結果を表に示す。調査で見られた誤読は、その種類から語義に関するもの(●)と文法に関するもの(■)の2つに分けられた。それぞれの内訳は、次の節の12.3で詳細に説明するため、ここでは簡単な説明にとどめる。

表12-2の見方を簡単に説明する。ここでは英語母語話者のE11の読解過程を例にあげて説明する。E11は番号4(彼女4)の文で、「放って」の語義を誤読した。この場合、誤読は語義に関するものなので、●と記し、その下に「放」と示した。また、同じ文では文法に関する誤読も見られる。ゼロ代名詞の特定で誤読した。この場合、誤読は文法に関するものなので、■と記し、その下に「ぜ」と示した。なお、文法に関する誤読は、次の12.3で説明するが、ゼロ代名詞の特定の誤読(表中で「ぜ」と示す)に加え、発話主の特定の誤読(表中で「発」と示す)、ノ格名詞句の特定の誤読(表中で「ノ」と示す)、人称詞の特定の誤読(表中で「人」と示す)、文構造の誤読(表中で「構」と示す)がある。この表を、縦に見ていった場合は、ある一人の読解過程を追跡して見ていることになり、一方、横に見た場合には、テキストのどの箇所でも、学習者に共通した誤読があるかがわかる。

表 12-2 英語母語話者の誤読

- ：語義に関する誤読
 ■：文法に関する誤読(発：発話主の特定，ノ：ノ格名詞句の特定，ゼ：ゼロ代名詞の特定，人：人称詞の特定，構：文構造の特定)

番号	「彼女の彼の特別な日」＜彼女視点＞	E 01	E 02	E 03	E 04	E 05	E 06	E 07	E 08	E 09	E 10	E 11	E 12	E 13
1	元恋人の結婚式の帰りに、初めて一人でバーへ立ち寄った。(彼女 1)													
2	仄暗いカウンターの片隅で胸のざわめきを鎮めたかった。(彼女 2)													
3	なのに隣席の男から声をかけられ、気がつくとも星座がどうの血液型がどうのと質問攻めにあっていた。(彼女 3)													
4	お願いだから放っておいてほしい。(彼女 4)								■ ゼ 放			● 放 ■ ゼ 放		
5	私が席を立ちかけた瞬間、男は言った。(彼女 5)													
6	「互いに一つずつ願いを叶え合いませんか」(彼女 6)													
7	「願い？」(彼女 7)													
8	「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」(彼女 8)									● さ		● さ		
9	キザな文句。(彼女 9)	● 文	● 文 ● キ				● 文	● 文	● 文	● 文	● 文			● 文
10	私は失笑して言った。(彼女 10)													
11	「それなら、私は時間を二年前に戻したい」(彼女 11)									● 戻				
12	今日、別の女と晴れやかに笑っていた新郎がまだ私の恋人だった二年前。(彼女 12)	● 新				● 新		■ 構		● 新	● 新	● 新		
13	いつも隣で笑っていたのは私のはずだった。(彼女 13)													
14	つまらない意地の張り合いから彼を失ってしまう以前の自分に、戻れるものなら今すぐに戻してほしい。(彼女 14)			● つ ■ ゼ 戻				● つ	● つ		● つ			
15	「三年前か……。ちょっと難しいな」(彼女 15)													
16	「なら二日でもいい。二日前に戻して」(彼女 16)													
17	彼がまだ完全に別の女のものになっていなかった二日前。(彼女 17)													
18	結婚なんてやめて私とやりなおして。(彼女 18)													
19	なりふりかまわずにそう頼んだら、彼は迷ってくれただろうか。(彼女 19)	■ ゼ 迷 ■ 人 彼	● な ● 迷 ■ ゼ 迷 ■ 人 彼											

20	いや、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。(彼女 20)	■	発					■	発								
21	「それも難しいな。(彼女 21)																
21	せめて二時間前くらいに負けてもらえませんか」			●	負												
22	私は言葉に詰まった。(彼女 22)																
23	二時間前。(彼女 23)																
24	なるほど、その程度なら今からでも取り返しがつきそうだ。(彼女 24)																
25	そして私はその二時間前に、確かに一番大事な何かを置き忘れてきたような気がしていた。(彼女 25)																
26	「わかったわ。二時間前で手を打ちましょう」と、私は言った。(彼女 26)																
27	「じつは私、その頃、忘れられない人の結婚式にいたの」(彼女 27)																
28	男は瞳を強ばらせ、とても素朴な困惑顔をしてみせた。(彼女 28)				■	ゼ	み										
29	「すみません。つらいことを思い出させてしまったようで」(彼女 29)																
30	「ううん、つらくなんてなかった。																
30	だって式の間中、私が考えていたのはたった一つきりだから。				●	一	●	語		●	一	●	一	●	一		
30	自分はちゃんと微笑んでいるか。																
30	彼の選んだ花嫁よりも綺麗で幸せな女に見えるか。																
30	つまらないプライドの塊みたいになって、全力で平静を装ってた。	●	塊	●	塊	●	全	●	塊	●	つ				●	塊	
30	来てくれてありがとうって彼が声をかけてきたときも、元同僚として当然よ、なんて突っぱねてね」																
31	見ず知らずの男に何を話しているんだか。(彼女 31)																
32	そう思いながらも口が止まらない。(彼女 32)																
33	「今は後悔の塊。(彼女 33)	●	塊													●	塊
33	彼との別れを後悔してる。																
33	意地ばかり張っていた日々を後悔してる。																
33	そして何より、彼の特別な日に自分のことばかり考えていたことを後悔してる。																
33	もしも二時間前に戻れたら……」																
34	私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(彼女 34)	■	構		■	構				●	ミ	■	構	●	呟	●	ミ
35	「どんなにつらくても、彼にちゃんと伝えたい」(彼女 35)																
36	「なんて？」(彼女 36)																

37	「結婚おめでとう」(彼女 37)													
38	無理をして微笑んだ。(彼女 38)		● 無											
39	はずが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。(彼女 39)						○ 33 ミ		● ミ					
40	酔っている。(彼女 40)													
41	みっともない。(彼女 41)													
42	隣の男はさぞかし呆れているだろう。(彼女 42)													
43	けれど男は驚くほど誠実な困惑顔を保ったまま、胸のポケットに挿していたペンに手を延ばした。(彼女 43)													
44	「降参です。(彼女 44)										● 降		● 降	
44	時を戻せない僕にはあなたの願いを叶えることができない。													
44	よって、僕の願いであるあなたの電話番号も聞くわけにいかない。													
44	でも、もしもその新郎の番号を教えてくれたら、あなたの伝えたかった言葉を代わりにお伝えすることはできますが……」	● 新				● 新				● 新	● 新			
45	私は初めて男を正面から捉えた。(彼女 45)					● 正			● 正					
46	思ったよりも丸顔の三枚目風だった。(彼女 46)						● 三					● 三		
47	この人はギザなのかお人良しなのか。(彼女 47)													
48	それともただの世話好きか。(彼女 48)			● 世							● 世			
49	妙に胸を騒がせる疑念は、徐々に芽生えた好奇心でもあった。(彼女 49)													
50	この人のことをもう少し知ってみたい気がする。(彼女 50)													
51	彼の差し出したペンを受けとり、私はコースターに自分自身の電話番号を記した。(彼女 51)													

番号	「彼の彼女の特別な日」＜彼視点＞	E 01	E 02	E 03	E 04	E 05	E 06	E 07	E 08	E 09	E 10	E 11	E 12	E 13
1	祖母の四十九日、親戚一同との会食の帰りに、初めて一人でバーへ立ち寄った。(彼 1)			● 親					● 寄					
2	皆の前では平静を装っていたものの、祖母の魂が今日を限りに昇天してしまうことを思うと、おばあちゃんっ子の僕には並々ならない喪失感があった。(彼 2)							●						
3	行かないでくれ、おばあちゃん。(彼 3)													
4	そんな未練を引きずりながら酒を飲み、ふと横を見ると若き日の祖母の写真にそっくりの女性が一人で酒を飲んでいた。(彼 4)													
5	これはたぶん、いやきっと、祖母の魂が最後の力をふりしぼってセッテ													

³³ ○ミとは「ミモザ」が2回目に出てきた場合に、正しく「お酒」と解釈したことを示す。

	イングしてくれた縁に違いない。 (彼 5)													
6	僕は勇気をふりしぼり、生まれて初めて女性に声をかけた。(彼 6)													
7	「お一人ですか？」(彼 7)													
8	高鳴る鼓動。(彼 8)													
9	速まる脈拍。(彼 9)													
10	しかし、どうやら盛りあがっているのは僕だけで、彼女はこちらを見ようとしな。い。(彼 10)													
11	以前、会社の同僚から「星座と血液型の話をすれば女はいちころだ」と教わったのを思い出して実践してみたものの、いちころどころかますます彼女を白けさせて終わった。(彼 11)							い			同	白		
12	こうなったら最後の手段。(彼 12)													
13	僕は以前、得意先の係長に教わった「とっておきの殺し文句」で勝負に出た。(彼 13)		得					得		文		得		得
14	「互いに一つずつ願いを叶え合いませんか」(彼 14)													
15	「願い？」(彼 15)													
16	「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」(彼 16)													
17	ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。(彼 17)	■ ノ 顔				■ ノ 顔	■ ノ 顔	■ ノ 顔	■ ノ 顔			■ ノ 顔		
18	おまえは人の言葉を鵜呑みにしすぎる。(彼 18)									■ 人 お				
19	年中そうこぼしていた祖母の洪面が脳裏をかすめていく。(彼 19)			● 年										
20	「それなら、私の願いは……」(彼 20)													
21	彼女は完全に僕を軽蔑した様子で無理難題を突きつけてきた。(彼 21)													
22	二年前に戻りたい。(彼 22)													
23	二日前に戻りたい。(彼 23)													
24	こうして僕をからかい、煙に巻いて逃げる気だ。(彼 24)	■ ゼ 逃	■ ゼ 逃					■ ゼ 逃	■ ゼ 逃	■ ゼ 逃		■ ゼ 逃	■ ゼ 逃	
25	けれど二時間前の話になったところでふいに雲行きが変わった。(彼 25)													
26	「私、忘れられない人の結婚式にいたの」(彼 26)													
27	彼女は雨に打たれた彫像みたいな顔で語り始めた。(彼 27)													
28	唇に貼りついた人工的な笑みが痛ましく、寒々しい。(彼 28)													
29	三時間前に別の女性と結ばれたその男のことを本気で思っていたのだろう。(彼 29)													
30	ああ、この人はやっぱりおばあちゃんと違う。(彼 30)													
31	当たり前だが、ふいにそう思った。(彼 31)			● ふ										
32	祖母の魂は今頃、まだどこかに新しく生まれ変わるための準備体操もしているのだろうが、今、目の前に													

	いる彼女の魂は僕と同じこの世界で 苦しみ、さまよっている。(彼 32)													
33	僕が初めて声をかけた女性。(彼 33)													
34	よく見ると昔の祖母よりも歯並びが 良く、眉のラインも美しい。(彼 34)	● 眉	● 眉						● 眉		● 眉		● 眉	
35	こんな女性を泣かせているのはどん な男だろう。(彼 35)										■ 男			
36	結婚おめでとう。(彼 36)													
37	そう伝えなかったことを悔やんでい ると彼女が言ったとき、僕はわけの わからない衝動に駆り立てられて、 お節介にも新郎の電話番号を尋ねて いた。(彼 37)	● 新				● 新			● 節		● 新	● 新		
38	その男はきっと彼女が祝福の言葉を 口にしなかったことなど気にしちゃ いないだろう。(彼 38)													
39	なんせ自分の結婚式だ。(彼 39)													
40	朝からバタバタと慌ただしくて、緊 張して、舞いあがって、シャワーのよ うに降りそそぐ祝福に慣れきって、 あぐらをかいていたはず。(彼 40)	● 舞					● 舞	● 舞	● 降	● 舞		● あ	● 舞	● あ
41	そして今頃は二次会か。(彼 41)													
42	シャンパンをがぶ飲みし、二人のな れそめクイズかなんかで盛りあが り、「キッス、キッス」なんて煽ら れてニヤついているんだ。(彼 42)													
43	だからこそ教えてやりたかった。 (彼 43)			■ ぜに	■ ぜに	■ ぜが	■ ぜが	■ ぜが	■ ぜが	■ ぜが	■ ぜが	■ ぜが	■ ぜが	■ ぜが
44	この薄暗いバーの片隅で、たった一 人で、うんと無理をして彼女の呟い た「おめでとう」の重みを。(彼 44)													
45	とはいえ、彼女が本気でコースター に電話番号を書きだしたときはびっ くりした。(彼 45)													
46	え、マジ?(彼 46)													
47	ほんとに電話するの?(彼 47)								■ ぜ					
48	「おまえは嘘をつかない子だ。(彼 48)										■ 発		■ 発	
48	それだけが取り柄だが、それだけで 十分だよ」													
49	祖母が残した言葉を思い出し、僕は 潔く覚悟する。(彼 49)													
50	よし、こうなったら心して新郎に電 話をしよう。(彼 50)													
51	彼女の「おめでとう」を全力で伝え よう。(彼 51)													
52	そして願わくば、その男から彼女の 電話番号を聞きだしたい。(彼 52)													

	Q 彼の願いは叶ったか			●						●				
--	-------------	--	--	---	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--

	Q 彼が電話をすると誰が出るか			●						●				
--	-----------------	--	--	---	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--

表 12-3 韓国語母語話者の誤読

番号	「彼女の彼の特別な日」＜彼女視点＞	K 01	K 02	K 03	K 04	K 05	K 06	K 07	K 08	K 09	K 10	K 11	K 12	K 13
1	元恋人の結婚式の帰りに、初めて一人でバーへ立ち寄った。(彼女 1)	● バ												
2	仄暗いカウンターの片隅で胸のざわめきを鎮めたかった。(彼女 2)													
3	なのに隣席の男から声をかけられ、気がつくとも星座がどうの血液型がどうのと質問攻めにあっていた。(彼女 3)													
4	お願いだから放っておいてほしい。(彼女 4)													
5	私が席を立ちかけた瞬間、男は言った。(彼女 5)													
6	「互いに一つずつ願いを叶え合いませんか」(彼女 6)								● 一	● 一				
7	「願い？」(彼女 7)													
8	「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」(彼女 8)													
9	キザな文句。(彼女 9)				● キザ				● キザ	● キザ				
10	私は失笑して言った。(彼女 10)													
11	「それなら、私は時間を二年前に戻したい」(彼女 11)													
12	今日、別の女と晴れやかに笑っていた新郎がまだ私の恋人だった二年前。(彼女 12)	● 新	● 新								● 新			● 新
13	いつも隣で笑っていたのは私のはずだった。(彼女 13)								● はず					
14	つまらない意地の張り合いから彼を失ってしまう以前の自分に、戻れるものなら今すぐに戻してほしい。(彼女 14)	● 意		● 意	● 意		● つま		● 意		● つま	● 意 ● つま		● 意 ■ ゼ戻れ
15	「二年前か.....。ちょっと難しいな」(彼女 15)								● 意					
16	「なら二日でもいい。二日前に戻して」(彼女 16)													
17	彼がまだ完全に別の女のものになっていなかった二日前。(彼女 17)													
18	結婚なんてやめて私とやりなおして。(彼女 18)													
19	なりふりかまわずにそう頼んだら、彼は迷ってくれたらどうか。(彼女 19)													
20	いや、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。(彼女 20)												● 迷	
21	「それも難しいな。(彼女 21)													
21	せめて二時間前くらいに負けてもらえませんか」													

22	私は言葉に詰まった。(彼女 22)		● 詰						● 詰				● 詰	
23	二時間前。(彼女 23)													
24	なるほど、その程度なら今からでも 取り返しがつきそうだ。(彼女 24)													
25	そして私はその二時間前に、確かに 一番大事な何かを置き忘れてきたよ うな気がしていた。(彼女 25)													
26	「わかったわ。二時間前で手を打ち ましょう」と、私は言った。(彼女 26)								● 手を打つ					
27	「じつは私、その頃、忘れられない 人の結婚式にいたの」(彼女 27)													
28	男は瞳を強ばらせ、とても素朴な困 惑顔をしてみせた。(彼女 28)			● 強										
29	「すみません。つらいことを思い出 させてしまったようで」(彼女 29)													
30	「ううん、つらくなんてなかった。													
30	だって式の間中、私が考えていたの はたった一つきりだから。	● 間	● 間	● 間			● 一				● 一	● 間		
30	自分はちゃんと微笑んでいるか。													
30	彼の選んだ花嫁よりも綺麗で幸せな 女に見えるか。	● 花								● 花				
30	つまらないプライドの塊みたいにな って、全力で平静を装ってた。			● 塊			● 塊 ● つま	● 塊 ● つま			● 塊	● 塊 ● つま	● 塊	
30	来てくれてありがとうって彼が声を かけてきたときも、元同僚として当 然よ、なんて突っぱねてね」	● 突					● 突							
31	見ず知らずの男に何を話しているん だか。(彼女 31)													
32	そう思いながらも口が止まらない。 (彼女 32)													
33	「今は後悔の塊。(彼女 33)			● 塊			● 塊	● 塊			● 塊	○ 塊	● 塊	
33	彼との別れを後悔してる。													
33	意地ばかり張っていた日々を後悔し てる。													
33	そして何より、彼の特別な日に自分 のことばかり考えていたことを後悔 してる。	● 日												
33	もしも二時間前に戻れたら……」													
34	私は花嫁の手にしていたブーケの色 に似たミモザを見下ろしながら呟い た。(彼女 34)	● ミ	● ミ	● ミ	● 呟 ● ミ		● ミ		● ミ		● ミ	● ミ	● 似 ミ	
35	「どんなにつらくても、彼にちゃん と伝えたい」(彼女 35)													
36	「なんて？」(彼女 36)													
37	「結婚おめでとう」(彼女 37)													
38	無理をして微笑んだ。(彼女 38)													

39	はずが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。(彼女 39)		● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ		● ミ はず			● ミ はず	● ミ	● ミ
40	酔っている。(彼女 40)						● 酔							
41	みっともない。(彼女 41)							● み						
42	隣の男はさぞかし呆れているだろう。(彼女 42)													● 呆
43	けれど男は驚くほど誠実な困惑顔を保ったまま、胸のポケットに挿していたペンに手を延ばした。(彼女 43)													
44	「降参です。(彼女 44)						● 降		● 降	● 降				● 降
44	時を戻せない僕にはあなたの願いを叶えることができない。													
44	よって、僕の願いであるあなたの電話番号も聞くわけにいかない。													
44	でも、もしもその新郎の番号を教えてくれたら、あなたの伝えたかった言葉を代わりにお伝えすることはできますが……」	● 新	● 新											● 新
45	私は初めて男を正面から捉えた。(彼女 45)	● 捉												
46	思ったよりも丸顔の三枚目風だった。(彼女 46)				● 三		● 三		● 三	● 三	● 三			
47	この人はキザなのかお人良しなのか。(彼女 47)				● キザ									
48	それともただの世話好きか。(彼女 48)	● 世						● 世	● 世	● 世			● 世	
49	妙に胸を騒がせる疑念は、久々に芽生えた好奇心でもあった。(彼女 49)								● 好			● 妙		
50	この人のことをもう少し知ってみたい気がするー。(彼女 50)													
51	彼の差し出したペンを受けとり、私はコースターに自分自身の電話番号を記した。(彼女 51)	● コ										● コ		

番号	「彼の彼女の特別な日」＜彼視点＞	K 01	K 02	K 03	K 04	K 05	K 06	K 07	K 08	K 09	K 10	K 11	K 12	K 13
1	祖母の四十九日，親戚一同との会食の帰りに，初めて一人でバーへ立ち寄った。(彼 1)	●バ												
2	皆の前では平静を装っていたものの，祖母の魂が今日を限りに昇天してしまうことを思うと，おばあちゃんっ子の僕には並々ならない喪失感があった。(彼 2)											●おば		
3	行かないでくれ，おばあちゃん。(彼 3)													
4	そんな未練を引きずりながら酒を飲み，ふと横を見ると若き日の祖母の写真にそっくりの女性が一人で酒を飲んでいた。(彼 4)													
5	これはたぶん，いやきつと，祖母の魂が最後の力をふりしぼってセッティングしてくれた縁に違いない。(彼 5)													
6	僕は勇気をふりしぼり，生まれて初めて女性に声をかけた。(彼 6)													
7	「お一人ですか？」(彼 7)													
8	高鳴る鼓動。(彼 8)													
9	速まる脈拍。(彼 9)													
10	しかし，どうやら盛りあがっているのは僕だけで，彼女はこちらを見ようとしめない。(彼 10)													
11	以前，会社の同僚から「星座と血液型の話をすれば女はいちころだ」と教わったのを思い出して実践してみたものの，いちころどころかますます彼女を白けさせて終わった。(彼 11)	●白												
12	こうなったら最後の手段。(彼 12)													
13	僕は以前，得意先の係長に教わった「とっておきの殺し文句」で勝負に出た。(彼 13)	●得						●得						
14	「互いに一つずつ願いを叶え合いませんか」(彼 14)													
15	「願い？」(彼 15)													
16	「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」(彼 16)													
17	ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。(彼 17)	■ノ顔	■ノ顔						●ふり					■ノ顔
18	おまえは人の言葉を鵜呑みにしすぎる。(彼 18)		●鵜				●鵜 ■人お	●鵜 ■人お	●鵜	●鵜		●鵜	●鵜 ■人お	
19	年中そうこぼしていた祖母の渋面が脳裏をかすめていく。(彼 19)	●こぼ		●渋			●渋	●渋	●脳 ●こぼ		●こぼ			
20	「それなら，私の願いは……」(彼 20)													
21	彼女は完全に僕を軽蔑した様子で無理難題を突きつけてきた。(彼 21)													

22	二年前に戻りたい。(彼 22)													
23	二日前に戻りたい。(彼 23)													
24	こうして僕をからかい、煙に巻いて逃げる気だ。(彼 24)							■	ぜ				■	ぜ
25	けれど二時間前の話になったところでふいに雲行きが変わった。(彼 25)													
26	「私、忘れられない人の結婚式にいたの」(彼 26)													
27	彼女は雨に打たれた彫像みたいな顔で語り始めた。(彼 27)							●	彫					
28	唇に貼りついた人工的な笑みが痛ましく、寒々しい。(彼 28)					●	唇			●	っ			
29	二時間前に別の女性と結ばれたその男のことを本気で思っていたのだろう。(彼 29)							■	人					
30	ああ、この人はやっぱりおばあちゃんと違う。(彼 30)													
31	当たり前だが、ふいにそう思った。(彼 31)													
32	祖母の魂は今頃、まだどこかに新しく生まれ変わるための準備体操でもしているのだろうが、今、目の前にいる彼女の魂は僕と同じこの世界で苦しみ、さまよっている。(彼 32)													
33	僕が初めて声をかけた女性。(彼 33)													
34	よく見ると昔の祖母よりも歯並びが良く、眉のラインも美しい。(彼 34)	●	眉	●	眉			●	眉					
35	こんな女性を泣かせているのはどんな男だろう。(彼 35)													
36	結婚おめでとう。(彼 36)													
37	そう伝えなかったことを悔やんでいると彼女が言ったとき、僕はわけのわからない衝動に駆り立てられて、お節介にも新郎の電話番号を尋ねていた。(彼 37)	●	新	●	新						●	新		●
38	その男はきつと彼女が祝福の言葉を口にしなかったことなど気にしちやいないだろう。(彼 38)													
39	なんせ自分の結婚式だ。(彼 39)													
40	朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、あぐらをかいていたはず。(彼 40)	●	か			●	舞		●	あ		●	か	
41	そして今頃は二次会か。(彼 41)													
42	シャンパンをがぶ飲みし、三人のなれそめクイズかなんかで盛りあがり、「キッス、キッス」なんて煽られてニヤついているんだ。(彼 42)									●	ニ			

									人 二 人					
43	だからこそ教えてやりたかった。 (彼 43)	■ ゼ に					■ ゼ に	■ ゼ を			■ ゼ に			
44	この薄暗いバーの片隅で、たった一 人で、うんと無理をして彼女の呟い た「おめでとう」の重みを。(彼 44)	● 重 み												
45	とはいえ、彼女が本気でコースター に電話番号を書きだしたときはびっ くりした。(彼 45)													
46	え、マジ？(彼 46)													
47	ほんとに電話するの？(彼 47)				■ ゼ に		■ ゼ に	■ ゼ に						■ ゼ に
48	「おまえは嘘をつかない子だ。(彼 48)							■ 発						
48	それだけが取り柄だが、それだけで 十分だよ」													
49	祖母が残した言葉を思い出し、僕は 潔く覚悟する。(彼 49)													
50	よし、こうなったら心して新郎に電 話をしよう。(彼 50)													
51	彼女の「おめでとう」を全力で伝え よう。(彼 51)													
52	そして願わくば、その男から彼女の 電話番号を聞きだしたい。(彼 52)													

	Q 彼の願いは叶ったか				●		●		●		●	●		●
	Q 彼が電話をすると誰が出るか				●		●		●		●	●		●

表 12-4 中国語母語話者の誤読

番 号	「彼女の彼の特別な日」＜彼女視点＞	C 01	C 02	C 03	C 04	C 05	C 06	C 07	C 08	C 09	C 10	C 11	C 12	C 15
1	元恋人の結婚式の帰りに、初めて一 人でバーへ立ち寄った。(彼女 1)							● バ	● バ					
2	仄暗いカウンターの片隅で胸のざわ めきを鎮めたかった。(彼女 2)													
3	なのに隣席の男から声をかけられ、 気がつくとも星座がどうの血液型がど うのと質問攻めにあっていた。(彼 女 3)													
4	お願いだから放っておいてほしい。 (彼女 4)													
5	私が席を立ちかけた瞬間、男は言っ た。(彼女 5)													
6	「互いに一つずつ願いを叶え合いま せんか」(彼女 6)													
7	「願い？」(彼女 7)													
8	「さしあたり僕は君の電話番号を知 りたい」(彼女 8)												■ 発	
9	キザな文句。(彼女 9)	● 文 句	● 文 句			● 文 句			● 文 句			● 文 句	● 文 句	
10	私は失笑して言った。(彼女 10)													

11	「それなら、私は時間を二年前に戻したい」(彼女 11)																		
12	今日、別の女と晴れやかに笑っていた新郎がまだ私の恋人だった二年前。(彼女 12)																		
13	いつも隣で笑っていたのは私のはずだった。(彼女 13)																		
14	つまらない意地の張り合いから彼を失ってしまう以前の自分に、戻れるものなら今すぐに戻してほしい。(彼女 14)							● つま											
15	「二年前か.....。ちょっと難しいな」(彼女 15)																		
16	「なら二日でもいい。二日前に戻して」(彼女 16)																		
17	彼がまだ完全に別の女ののものになっていなかった二日前。(彼女 17)																		
18	結婚なんてやめて私とやりなおして。(彼女 18)																		
19	なりふりかまわずにそう頼んだら、彼は迷ってくれたらどうか。(彼女 19)									● なり ふり かま								● 迷	
20	いや、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。(彼女 20)				■ 発				■ 発	■ 発	● 迷 ■ 発						■ 発		
21	「それも難しいな。(彼女 21)								■ 発				■ 発						
21	せめて二時間前くらいに負けてもらえませんか」																		
22	私は言葉に詰まった。(彼女 22)																		
23	二時間前。(彼女 23)																		
24	なるほど、その程度なら今からでも取り返しがつきそうだ。(彼女 24)							● つき		● つき									
25	そして私はその二時間前に、確かに一番大事な何かを置き忘れてきたような気がしていた。(彼女 25)																		
26	「わかったわ。二時間前で手を打ちましょう」と、私は言った。(彼女 26)			● 手を 打つ										■ 発					
27	「じつは私、その頃、忘れられない人の結婚式にいたの」(彼女 27)																		
28	男は瞳を強ばらせ、とても素朴な困惑顔をしてみせた。(彼女 28)																		
29	「すみません。つらいことを思い出させてしまったようで」(彼女 29)																		
30	「ううん、つらくなんてなかった。」																		
30	だって式の間中、私が考えていたのはたった一つきりだから。			● 間 ● 一つ きり		● 間	● 間			● 一つ きり			● 間						
30	自分はちゃんと微笑んでいるか。																		

30	彼の選んだ花嫁よりも綺麗で幸せな女に見えるか。																	
30	つまらないブライドの塊みたいになって、全力で平静を装ってた。																	● 塊
30	来てくれてありがとって彼が声をかけてきたときも、元同僚として当然よ、なんて突っぱねてね」											● なんて突		● 突				● 突
31	見ず知らずの男に何を話しているんだか。(彼女 31)																	
32	そう思いながらも口が止まらない。(彼女 32)																	
33	「今は後悔の塊 (彼女 33)																	
33	彼との別れを後悔してる。																	
33	意地ばかり張っていた日々を後悔してる。																	
33	そして何より、彼の特別な日に自分のことばかり考えていたことを後悔してる。																	
33	もしも二時間前に戻れたら……」																	
34	私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(彼女 34)	● ミ		● ミ	● ミ	● 呟	● ミ	● ブ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ
35	「どんなにつらくても、彼にちゃんと伝えたい」(彼女 35)							■ 構				■ 構						■ 構
36	「なんて？」(彼女 36)			● な	● な	● な												
37	「結婚おめでとう」(彼女 37)																	
38	無理をして微笑んだ。(彼女 38)																	
39	はずが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。(彼女 39)	○ ミ	○ ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ	● ミ
40	酔っている。(彼女 40)																	
41	みっともない。(彼女 41)													● み				
42	隣の男はさぞかし呆れているだろう。(彼女 42)																	
43	けれど男は驚くほど誠実な困惑顔を保ったまま、胸のポケットに挿していたペンに手を延ばした。(彼女 43)																	
44	「降参です。(彼女 44)							● 降										
44	時を戻せない僕にはあなたの願いを叶えることができない。																	
44	よって、僕の願いであるあなたの電話番号も聞くわけにいかない。																	
44	でも、もしもその新郎の番号を教えてくれたら、あなたの伝えたかった言葉を代わりにお伝えすることはできますが……」																	
45	私は初めて男を正面から捉えた。(彼女 45)			● 正面												■ 構		
46	思ったよりも丸顔の三枚目風だった。(彼女 46)			● 丸顔														
47	この人はキザなのかお人良しなのか。(彼女 47)							● キザ										
48	それともただの世話好きか。(彼女 48)									● 世					● 世			

49	妙に胸を騒がせる疑念は、久々に芽生えた好奇心でもあった。(彼女 49)													
50	この人のことをもう少し知ってみたい気がする。(彼女 50)													
51	彼の差しだしたペンを受けとり、私はコースターに自分自身の電話番号を記した。(彼女 51)				● コ			● コ		● コ				● コ

番号	「彼の彼女の特別な日」＜彼視点＞	C 01	C 02	C 03	C 04	C 05	C 06	C 07	C 08	C 09	C 10	C 11	C 12	C 15
1	祖母の四十九日、親戚一同との会食の帰りに、初めて一人でバーへ立ち寄った。(彼 1)								● バ					
2	皆の前では平静を装っていたものの、祖母の魂が今日を限りに昇天してしまうことを思うと、おばあちゃんっ子の僕には並々ならない喪失感があった。(彼 2)				● 並						● おば			
3	行かないでくれ、おばあちゃん。(彼 3)													
4	そんな未練を引きずりながら酒を飲み、ふと横を見ると若き日の祖母の写真にそっくりの女性が一人で酒を飲んでいた。(彼 4)													
5	これはたぶん、いやきっと、祖母の魂が最後の力をふりしぼってセッティングしてくれた縁に違いない。(彼 5)													
6	僕は勇気をふりしぼり、生まれて初めて女性に声をかけた。(彼 6)													
7	「お一人ですか？」(彼 7)													
8	高鳴る鼓動。(彼 8)													
9	速まる脈拍。(彼 9)													
10	しかし、どうやら盛りあがっているのは僕だけで、彼女はこちらを見ようともしない。(彼 10)													
11	以前、会社の同僚から「星座と血液型の話をすれば女はいちころだ」と教わったのを思い出して実践してみたものの、いちころどころかますます彼女を白けさせて終わった。(彼 11)													
12	こうなったら最後の手段。(彼 12)													
13	僕は以前、得意先の係長に教わった「とっておきの殺し文句」で勝負に出た。(彼 13)										● 得			
14	「互いに一つずつ願いを叶え合いませんか」(彼 14)													
15	「願い？」(彼 15)													
16	「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」(彼 16)													
17	ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。(彼 17)													■ 顔
18	おまえは人の言葉を鵜呑みにしすぎる。(彼 18)		● 鵜 ■ 人 お		● 鵜 ■ 人 お						● 鵜			
19	年中そうこぼしていた祖母の洪面が脳裏をかすめていく。(彼 19)				● こ ぼ									

20	「それなら、私の願いは……」(彼 20)													
21	彼女は完全に僕を軽蔑した様子で無理難題を突きつけてきた。(彼 21)													
22	二年前に戻りたい。(彼 22)													
23	二日前に戻りたい。(彼 23)													
24	こうして僕をからかい、煙に巻いて逃げる気だ。(彼 24)		■ ゼ 逃	■ ゼ 逃			■ ゼ 逃	■ ゼ 逃	■ ゼ 逃		■ ゼ 逃			
25	けれど二時間前の話になったところでふいに雲行きが変わった。(彼 25)													
26	「私、忘れられない人の結婚式にいたの」(彼 26)													
27	彼女は雨に打たれた彫像みたいな顔で語り始めた。(彼 27)													
28	唇に貼りついた人工的な笑みが痛ましく、寒々しい。(彼 28)													
29	二時間前に別の女性と結ばれたその男のことを本気で思っていたのだろう。(彼 29)													
30	ああ、この人はやっぱりおばあちゃんと思う。(彼 30)													
31	当たり前だが、ふいにそう思った。(彼 31)									● ふ				
32	祖母の魂は今頃、まだどこかに新しく生まれ変わるための準備体操でもしているのだろうが、今、目の前にいる彼女の魂は僕と同じこの世界で苦しみ、さまよっている。(彼 32)													
33	僕が初めて声をかけた女性。(彼 33)													
34	よく見ると昔の祖母よりも歯並びが良く、眉のラインも美しい。(彼 34)													
35	こんな女性を泣かせているのはどんな男だろう。(彼 35)													
36	結婚おめでとう。(彼 36)													
37	そう伝えなかったことを悔やんでいると彼女が言ったとき、僕はわけのわからない衝動に駆り立てられて、お節介にも新郎の電話番号を尋ねていた。(彼 37)													
38	その男はきっと彼女が祝福の言葉を口にしなかったことなど気にしじゃないだろう。(彼 38)													
39	なんせ自分の結婚式だ。(彼 39)							● な						
40	朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、あぐらをかいていたはず。(彼 40)					● 舞 ● あぐらをかく						● 舞		
41	そして今頃は二次会か。(彼 41)													
42	シャンパンをがぶ飲みし、三人のなれそめクイズかなんかで盛りあがり、「キッス、キッス」なんて煽られてニヤついているんだ。(彼 42)			■ ゼ ニ ヤ							■ 人 二 人		● ク イ ズ	
43	だからこそ教えてやりたかった。(彼 43)		■ ゼ に ■	■ ゼ が ■				■ ゼ に ■			■ ゼ が ■			■ ゼ が ■

			ゼを	ゼに ■ゼを					ゼを		ゼに ■ゼを			ゼに
44	この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。(彼 44)				●重				●重		●重			●呟
45	とはいえ、彼女が本気でコースターに電話番号を書きだしたときはびっくりした。(彼 45)			■構										
46	え、マジ?(彼 46)													
47	ほんとに電話するの?(彼 47)		■ゼが ■ゼに		■ゼが ■ゼに						■ゼに			■ゼに
48	「おまえは嘘をつかない子だ。(彼 48)			■発										
48	それだけが取り柄だが、それだけで十分だよ」													
49	祖母が残した言葉を思い出し、僕は潔く覚悟する。(彼 49)													
50	よし、こうなったら心して新郎に電話をしよう。(彼 50)													
51	彼女の「おめでとう」を全力で伝えよう。(彼 51)													
52	そして願わくば、その男から彼女の電話番号を聞きだしたい。(彼 52)								■構					

	Q 彼の願いは叶ったか		●	●				●	●					●
	Q 彼が電話をすると誰が出るか		●	●				●						●

12.3. 調査結果の一覧

調査で見られた誤読について、誤読が見られた言語形式や誤読を起こしたと考えられる要因に注目してカテゴリーをつくり、それに沿って分類したところ、すべての誤読と頻度は表 12-5 のようにまとめられた。また、誤読は文法に関するもの(1.~5.)と、語義に関するもの(6.~10.)に分けられた。

誤読の種類を大きく「文法に関するもの」と「語義に関するもの」に分けた理由として、文章理解に必要な能力とは語彙力と文法力である(cf. 石黒 2020)という見解が広く受け入れられていることがまず挙げられる。さらに、テキスト言語学の考え方とも関連する。2.1.2 で述べたテキスト言語学において、文連続がテキストを構成するときに生じる「つながり」には、文法的依存関係による「結束性」と、推論による「一貫性」があるとされ、テキスト言語学は「結束性」「一貫性」のどちらにも関わるものである(庵 2007)。これを考慮すると、調査で見られた誤読の種類のうち、1.~4.については文法的依存関係で解決できるものであり、すなわち、結束性に関わる誤読であると言える。結束性に関わる誤読に 5.の文構造の誤読を加えた 1.~5.を文法に関する誤読とした。一方、語義の解釈というのは、読み手にとって既知語であれ未知語であれ、文脈にあった意味を特定していく処理である。その際、文法のみでは解決できず推論が必要となることから、語義の解釈は一貫性に関わるものと言える。

以下、誤読のそれぞれの種類について例をあげながら説明する。

[文法に関する誤読]

1. 発話主の特定の誤読

例:「それも難しいな。せめて二時間前くらいに負けてもらえませんか」(彼女 21)
→【誤】この発話主は「バーの男」であるが、学習者は「彼女」と誤読した。

2. ノ格名詞句の特定の誤読

例: ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。(彼 16,17)
→【誤】「顔」という名詞は、「誰の」を示すノ格名詞句を特定する必要がある非飽和名詞である。「僕の顔が熱くなった」の「僕の」の部分は非明示である。学習者は「彼女の顔が熱くなった」と誤り、この文の意味を「彼女は当初、バーの男に興味はなかったが、次第に興味を持ち始めた」と解釈した。

3. ゼロ代名詞の特定の誤読

例: だからこそ教えてやりたかった。(彼 43)
→【誤】この文は「誰が」「誰に」がゼロ代名詞となっているため、それを特定する必要がある。この文は「バーの男が新郎に教えてやりたかった」という意味

であるが、学習者は「バーの男が彼女に教えてやりたかった」などと誤読した。

4. 人称詞の特定の誤読

例：いや、「君の幸せを願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。(彼女 20)→【誤】この「君の幸せを心から願っています」は彼(元恋人)が話した内容の引用句である。よって、「君」は「私(彼女)」を指す。しかし、学習者は「君」は「彼(元恋人)」を指し、「私(彼女)」が「彼(元恋人)の幸せを心から願っている」と彼(元恋人)に言ったと誤読した。

5. 文構造の誤読

例：私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(彼女 34)→【誤】「私はミモザ(お酒)を花嫁に渡しながら花嫁を見下ろしていた」のように格関係を誤読した。

[語義に関する誤読]

6. 字形認識の誤読

例 1 (漢字): 「今は後悔の塊。」(彼女 33)→【誤】「塊」という漢字を字形の類似から「鬼」または「魂」であると誤読した。

例 2 (ひらがな): 「なるほど、その程度なら今からでも取り返しがつきそうだ」(彼女 24)→【誤】「つきそう」を「きつそう」と認識し、文全体の意味を「取返しがつくのは難しい」と本来とは反対の意味に解釈した。

例 3 (語の区切り): 「元恋人の結婚式の帰りに、初めて一人でバーへ立ち寄った。」(彼女 1)→【誤】「バーへ(bahe と発音する)」はよくわからないが、カタカナなので「バーへ」という 1 語の固有名詞だと思うとコメントした。語を正しく区切れずに誤読した。

7. 音韻情報の使用における誤読

例 1 (漢字): つまらない意地の張り合いから彼を失ってしまう以前の自分に、戻れるものなら今すぐに戻してほしい。(彼女 14)→【誤】韓国語にない漢字語である「意地」의지(ういじ)の意味について音韻情報を使用して、同じ発音で韓国語にある「意志」의지(ういじ)であると誤って解釈した。

例 2 (ひらがな): 「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」(彼女 8)→【誤】「さしあたり」を音韻情報を使用して「指して」と解釈し、文の意味を「人を指して

言った」と誤読した。

例 3(ひらがな)：酔っている。みっともない。(彼女 40,41)→【誤】「みっともない」を「認めない」や「見たくもない」と誤読した。

8. 語の構成要素の分析における誤読

例：それとただの世話好きか。(彼女 48)→【誤】「世話をするのが好き」という意味である「世話好き」という複合名詞の意味を、語構成の分析を誤って「世の中の話が好き」と誤読した。

9. 多義的な表現の誤読

例：私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(彼女 34)→【誤】「ミモザ」は多義語で、花の名前、またはお酒の名前の 2 つの意味がある。ここでは「お酒の名前」を指すが、学習者は「花」や「ドレス」などと誤読した。

10. その他の誤読(当該語の情報を使わない)

例：当たり前だが、ふいにそう思った。(彼 31)→【誤】「ふいに」が未知語であったため意味を推測したが、その際、「ふいに」という当該語自身の情報は使わず、周辺の文脈などから「しばらくして」という意味であると推測して誤読した。

表 12-5(母語別の誤読)の見方を説明する。表 1 の「箇所」は小説で誤読が見られた箇所、異なり数である。「人数」は誤読した人数で異なり数である。「総数」は誤読総数で、誤読が見られた各箇所での誤読した人数を累計したものである。たとえば、表の一番上にある「1.発話主の特定の誤読 [5]」の場合、まずこの類型に分類された例が [5] 例あるという意味である。英語母語話者の場合、この類型での誤読が 2 箇所ある。そして、13 人中 4 人(異なり数)が誤読した。誤読が見られた 2 箇所での誤読した人数を累計すると 4 人という意味である。表の下部には、結末の理解で誤読が見られた人数と辞書をひいた語句数の平均値がある。英語母語話者の場合、2 人が結末の理解で誤読した。そして、1 人あたりの辞書を引いた語句数の平均、つまり回数は 26.3 である。

図 12-1 に母語別に見た誤読総数、図 12-2 に母語別に見た誤読人数のグラフを示す。詳細な議論は第 13 章以降で行うため、ここではおおまかな傾向を述べるにとどめておくが、発話主の特定や文構造の誤読で中国語母語話者が多いこと、文法全体では韓国語母語話者の誤読が少ないこと、語義全体では反対に韓国語母語話者の誤読が多いことなどが読み取れる。

表 12-5 母語別の誤読

誤読の種類 [のべ数]		英語 (N=13)			韓国 (N=13)			中国 (N=13)		
		箇所	人数	総数	箇所	人数	総数	箇所	人数	総数
文法	1. 発話主の特定の誤読 [5] 例: 「それも難しいや。せめて二時間前くらいに負けてもらえませんか」 → 【誤】 発話主は女性	2	4	4	1	1	1	5	7	10
	2. ノ格名詞句の特定の誤読 [1] 例: ふりむいた彼女の冷笑で顔が熱くなった。 → 【誤】 彼女の顔	1	6	6	1	3	3	1	1	1
	3. ゼロ代名詞の特定の誤読 [13] 例: だからこそ <u>教えて</u> やりたかった。 → 【誤】 ノーの男が彼女に	9	11	25	5	8	11	7	9	25
	4. 人称詞の特定の誤読 [5] 例: いや、「君の幸せを願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。 → 【誤】 「君」は新郎	3	4	4	3	4	5	2	3	3
	5. 文構造の誤読 [5] 例: 私は花嫁の手 ¹ にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。 → 【誤】 私はお酒を花嫁に渡しながら花嫁を見下ろしていた。	2	3	4	0	0	0	4	6	6
	1.-5. 文法全体の誤読 [29]	17	28	43	10	16	20	19	26	45
語義	6. 字形認識の誤読 [20] 例: 今は後悔の塊 → 【誤】 鬼、魂	9	11	23	14	12	29	7	6	8
	7. 音韻情報の使用における誤読 [11] 例: つまらない意地の張り合いから → 【誤】 韓国語でない漢字語である「意地」의지(ういじ)を、同じ発音で韓国語にある「意志」의지(ういじ)と解釈	2	3	3	6	8	13	4	5	6
	8. 語構成の分析における誤読 [26] 例: 世話好き → 【誤】 世の中の話が好き	15	11	24	17	11	37	9	9	17
	9. 多義的な表現の誤読 [13] 例: 私は花嫁の手 ¹ にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。 → 【誤】 花・ドレス	10	11	27	10	13	35	8	13	33
	10. その他の誤読(当該語の情報を使わない) [27] 例: ふいふそう思った。 → 【誤】 しばらくして	11	10	16	17	11	30	12	8	17
	6.-10. 語義全体の誤読 [97]	47	46	93	64	55	144	40	41	81
1.-10. 誤読全体		64	74	136	74	71	164	59	67	126
結末の理解の誤読		2			6			6		
辞書をひいた語句数の平均* *平均=総語句数/人数		26.3			16.5			15.8		

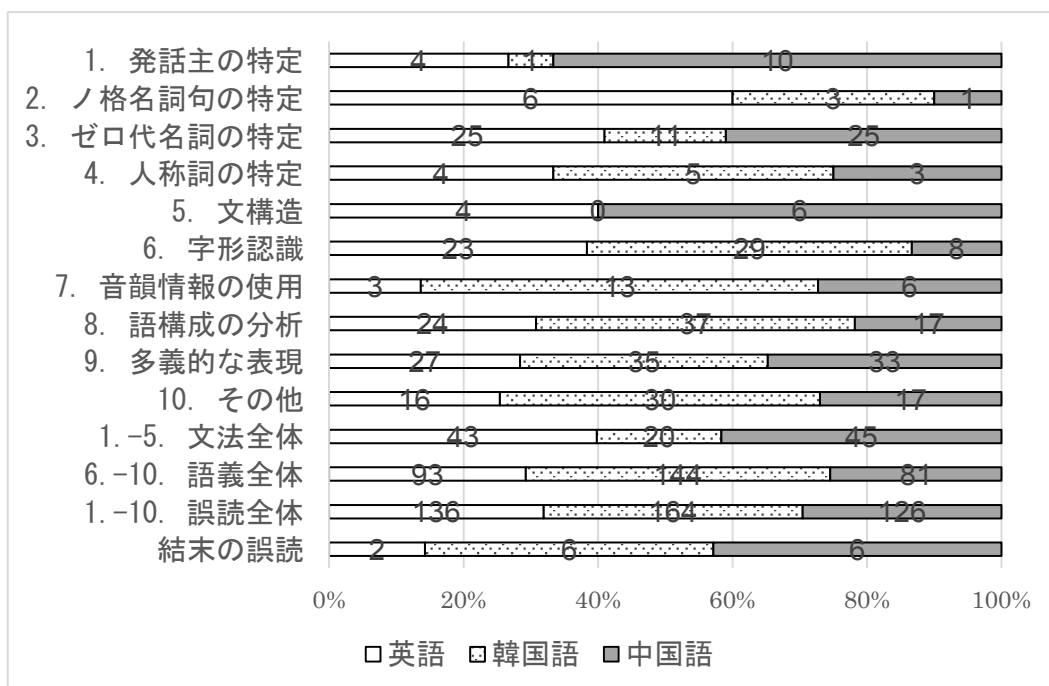


図 12-1 母語別に見た誤読総数

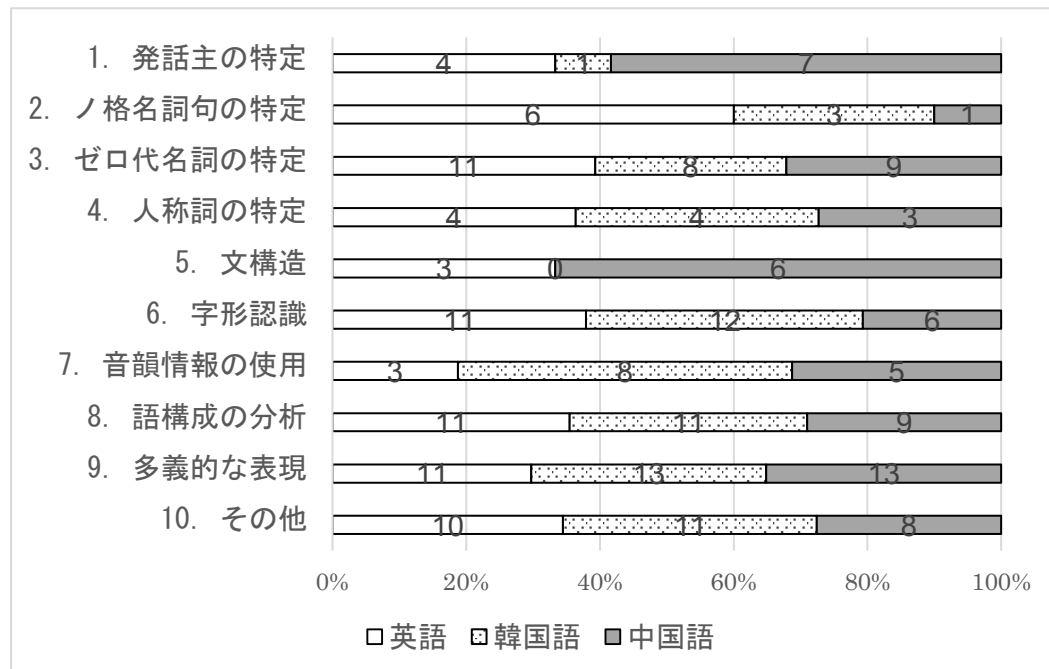


図 12-2 母語別に見た誤読人数(異なり)

12.3.1. 文法の誤読

文法の誤読について、頻度の高い順に協力者全体(全)と母語別(英語・韓国語・中国語)に分けて示す。ここでは全体像を示すにとどめ、詳細な議論は第 13 章以降で行う。なお、該当部分の前後の文脈については、表 12-2(p.148)などを参照されたい。

表 12-6 文法の誤読(協力者全体)

テキスト	全	英	韓	中
【φ誰が】煙に巻いて逃げる気だ。(彼 24)	15	7	2	6
だからこそ教えてやりたかった。【φ誰に】(彼 43)	12	4	3	5
【φ誰の】顔が熱くなった。(彼 17)	10	6	3	1
ほんとに電話するの? 【φ誰に】(彼 47)	9	1	4	4
だからこそ教えてやりたかった。【φ誰が】(彼 43)	7	4	0	3
だからこそ教えてやりたかった。【φ何を】(彼 43)	7	2	1	4
「【君】の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。(彼女 20)	7	2	0	5
【おまえ】は人の言葉を鵜呑みにしすぎる。(彼 18)	6	1	3	2
私は【花嫁の手にしていたブーケ】の色に似たミモザを見下ろしながら呟いた(彼女 34)	6	3	0	3

表 12-7 文法の誤読(英語)

テキスト	全	英	韓	中
【φ誰が】煙に巻いて逃げる気だ。(彼 24)	15	7	2	6
【φ誰の】顔が熱くなった。(彼 17)	10	6	3	1
だからこそ教えてやりたかった。【φ誰に】(彼 43)	12	4	3	5
だからこそ教えてやりたかった。【φ誰が】(彼 43)	7	4	0	3
私は【花嫁の手にしていたブーケ】の色に似たミモザを見下ろしながら呟いた(彼女 34)	6	3	0	3

表 12-8 文法の誤読(韓国語)

テキスト	全	英	韓	中
ほんとに電話するの? 【φ誰に】(彼 47)	9	1	4	4
【φ誰の】顔が熱くなった。(彼 17)	10	6	3	1
だからこそ教えてやりたかった。【φ誰に】(彼 43)	12	4	3	5
【おまえ】は人の言葉を鵜呑みにしすぎる。(彼 18)	6	1	3	2

表 12-9 文法の誤読(中国語)

テキスト	全	英	韓	中
【φ誰が】煙に巻いて逃げる気だ。(彼 24)	15	7	2	6
だからこそ教えてやりたかった。【φ誰に】(彼 43)	12	4	3	5
「【君】の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。(彼女 20)	7	2	0	5
ほんとに電話するの？【φ誰に】(彼 47)	9	1	4	4
だからこそ教えてやりたかった。【φ何を】(彼 43)	7	2	1	4
だからこそ教えてやりたかった。【φ誰が】(彼 43)	7	4	0	3
私は【花嫁の手にしていたブーケ】の色に似たミモザを見下ろしながら呟いた(彼女 34)	6	3	0	3

12.3.2. 語義の誤読

語義の誤読について、頻度の高い順に協力者全体と母語別に分けて示す。ここでは全体像を示すにとどめ、詳細な議論は第 13 章以降で行う。

表 12-10 語義の誤読(協力者全体)

テキスト	全	英	韓	中
私は花嫁の手にしていたブーケの色に似た【ミモザ】を見下ろしながら呟いた(彼女 34)	22	2	9	11
【ミモザ】に一滴の涙が沈んでいた(彼女 39)	21	1	9	11
キザな【文句】(彼女 9)	17	8	3	6
つまらないプライドの【塊】みたいになって(彼女 30)	11	4	6	1
人の言葉を【鵜呑みにしすぎる】(彼 18)	10	0	7	3
別の女と晴れやかに笑っていた【新郎】が私の恋人だった 2 年前(彼女 12)	9	5	4	0
それともただの【世話好き】か(彼女 48)	9	2	5	2
【眉】のラインも美しい(彼 34)	8	5	3	0
式の【間中】(彼女 30)	8	0	4	4
お節介にも【新郎】の電話番号を訪ねていた(彼 37)	8	4	4	0
【舞いあがって】シャワーのように降りそそぐ(彼 40)	8	3	3	2
【つまらない】意地の張り合いから(彼女 14)	8	4	3	1
【たった一つきり】だから(彼女 30)	8	5	2	1

表 12-11 語義の誤読(英語)

テキスト	全	英	韓	中
キザな【文句】(彼女 9)	17	8	3	6
別の女と晴れやかに笑っていた【新郎】が私の恋人だった2年前(彼女 12)	9	5	4	0
【眉】のラインも美しい(彼 34)	8	5	3	0
【たった一つきり】だから(彼女 30)	8	5	2	1
つまらないプライドの【塊】みたいになって、(彼女 30)	11	4	6	1
お節介にも【新郎】の電話番号を訪ねていた(彼 37)	8	4	4	0
【つまらない】意地の張り合いから(彼女 14)	8	4	3	1
【得意先】の係長に教わった(彼 13)	7	4	2	1

表 12-12 語義の誤読(韓国語)

テキスト	全	英	韓	中
私は花嫁の手にしていたブーケの色に似た【ミモザ】を見下ろしながら呟いた(彼女 34)	22	2	9	11
【ミモザ】に一滴の涙が沈んでいた(彼女 39)	21	1	9	11
人の言葉を【鵜呑みにしすぎる】(彼 18)	10	0	7	3
つまらないプライドの【塊】みたいになって(彼女 30)	11	4	6	1
つまらない【意地】の張り合いから(彼女 14)	6	0	6	0
それともただの【世話好き】か(彼女 48)	9	2	5	2
「今は後悔の【塊】。(彼女 33)	7	2	5	0
別の女と晴れやかに笑っていた【新郎】が私の恋人だった2年前(彼女 12)	9	5	4	0
お節介にも【新郎】の電話番号を訪ねていた(彼 37)	8	4	4	0
式の【間中】(彼女 30)	8	0	4	4

表 12-13 語義の誤読(中国語)

テキスト	全	英	韓	中
私は花嫁の手にしていたブーケの色に似た【ミモザ】を見下ろしながら呟いた(彼女 34)	22	2	9	11
【ミモザ】に一滴の涙が沈んでいた(彼女 39)	21	1	9	11
キザな【文句】(彼女 9)	17	8	3	6
式の【間中】(彼女 30)	8	0	4	4
【コースター】に自分自身の電話番号を記した(彼女 51)	6	0	2	4

人の言葉を【鵜呑みにしすぎる】(彼 18)	10	0	7	3
おめでとうの【重み】を(彼 44)	4	0	1	3
「なんて？」(彼女 36)	3	0	0	3

第13章 誤った語義の解釈と文脈との整合性

本章では、日本語学習者の読解で見られた誤読のうち、語義の解釈に焦点をあてる。具体的には、誤った語義の解釈と文脈との整合性について論じる。学習者は様々な要因から誤った語義の解釈をする。漢字の字形認識の誤り、音韻情報の使用による誤り、語の構成要素の分析による誤り、多義的な表現の解釈における誤りである。これには母語別の特徴も見られた。誤った語義の解釈について、文脈との整合性を見てみると、ほとんどがすべての文脈、または部分的に文脈と整合性を持つことがわかった。

13.1. はじめに

文章理解で重要なのは、文章を構成する語の意味がわかることである。我々の実際の文章理解、つまり読解活動を顧みると、単独で提示された語を読むことは少なく、前後に文脈を伴う形で語を理解する場合がほとんどであり(久野 2009)、文脈における語の認知であると言える。「文脈」という用語は言語学やその関連分野で柔軟に使われているが、ここでその用語を定義しておく。山梨(1988)によると、文脈は言語的な脈絡としての前後関係の意味で用いられる「言語的な文脈」と、問題の言語表現や発話の場面・状況の意味で使われる「言語外的な文脈」に区別される。前者は、すでに言及されている話題やテーマ、先行する文や発話によって規定される情報から構成され、後者は、問題の表現や発話の背景、その即物的な場にかかわる具体的な事物や対象によって規定される情報から構成される。以下、本稿で言う文脈とは「言語的な文脈」を指す。

近年、読解過程についての実証的な研究が増えている。語義解釈と文脈の関係を扱う研究に蒙(2018)がある。蒙(2018)は日本語学習者と日本語母語話者が固有名詞を理解する際に、文脈の手がかりをどのように用いるかを明らかにした。しかし、同研究は一文レベルの語義解釈を扱ったものである。文脈における語義解釈の実態を明らかにするためには、複数の文にまたがる文脈における調査が必要である。文脈には、今まさに読んでいる当該文の文脈だけでなく、当該文の直前直後の文脈もある。さらに物語文の場合には、その物語(ストーリー)をまとめたような集合的な文脈もある。本稿では、このようなものを広く文脈として扱う。

本稿は、日本語が上級レベルの大学生が約 100 文からなる小説を読むときの語義解釈に注目する。語義解釈にはテキストの文脈や文法から妥当と考えられる正しい解釈もあれば、そうではない誤った解釈もある。そのうち本稿は、誤った語義解釈がつけられる要因を考察する。その際、語義解釈と文脈との整合性も検討する。第二言語(以下、L2)で読む学習者にとって、誤った語義解釈はしばしば起こり得るものであり、それがどのような要因でつけられるかを知ることが、読解教育を考える上で有用

である。

13.2. 調査の概要

13.2.1. 調査対象者

調査対象者は、日本の大学や研究機関に在籍する 20 代の中国語母語話者(以下、中)8 名、韓国語母語話者(以下、韓)8 名、英語母語話者(以下、英)8 名である。中国語母語話者は全員 N1 取得、韓国語母語話者は N1 または N2 取得者であり、N2 取得者も日本留学試験の日本語科目で 266 点以上を取得している。英語母語話者のうち 6 名は N1 または N2 取得者であり、英語母語話者全員の SPOT90 は 70~88 点である。以上から調査対象者の日本語能力はほぼ上級と言える。調査は 2016 年 4 月から 2018 年 10 月に行った。

13.2.2. 調査方法

調査で用いた小説は森絵都氏の「彼女の彼の特別な日」「彼の彼女の特別な日」である(第 9 章参照)。調査では、読み手の読解過程を可視化するために、小説を読みながら口頭で母語に翻訳してもらう。その際、読み手の読解中に、調査者は、適宜、解釈の詳細を明らかにするための質問をする。具体的には次の手順である。(i) 辞書の使用を認める。小説を黙読し、一文ずつ口頭で翻訳してもらう。調査協力者は読みながら、理解できない点や推測したこと、また、解釈の変更についても話す。これらをすべて調査対象者の母語で行う。調査の前に、別の小説を使い、この発話方法に慣れるために練習する。(ii) 語義解釈の困難点となりそうな箇所について、調査対象者にその内容理解を確認する質問を行う。その際、なぜそのように解釈したかがわかるように適宜質問を重ねる。(iii) 調査対象者と調査者とのやりとりについては、調査対象者の母語の通訳者が同席し、同時通訳に近い形で通訳する。それらを IC レコーダーで録音し、調査後に文字化する。

13.3. 誤った語義解釈と文脈との整合性

本章における「誤った語義解釈」とは次の(1)または(2)とする。

- (1)ある語を見て想起した意味が、辞書的な意味として誤っている語義解釈
- (2)文脈と意味的に整合性がとれないことがある語義解釈

ここで文脈についてももう少し詳しく説明しておく。本稿の言う文脈とは、13.1.で述べた「言語的な文脈」を指す。石黒(2008)は、文章理解は「先行文脈との関係の把握」「当該文の理解」「後続文脈の予測」という三つのプロセスを経るものとしている。本章では石黒(2008)を援用し、本章で扱う言語的な文脈を次の a.~c.のように定

義する。

- a. 先行文脈：a-1. 先行直前文脈，a-2. 先行集合文脈(ストーリー文脈)
- b. 当該文(当該文脈)
- c. 後続文脈(直後文脈)

まず，a.先行文脈は，a-1.先行直前文脈と a-2.先行集合文脈からなる。先行直前文脈とは当該文の直前の文が規定する情報である。一方，先行集合文脈とは，当該文に至るまでに得られた情報の集合体であり，ストーリーとして理解されているものである。次に b.当該文(当該文脈)であるが，これは今，まさに読んでいる文が規定する情報である。蒙(2018)が分析の対象とした 1 文レベルと同義である。そして，c.後続文脈とは当該文の直後の文が規定する情報である。本稿が扱う文脈を a.～c.としたのは，本稿の読解観は文章の冒頭から結末まで 1 文 1 文順に読んでいき，その展開をたどっていくという「たどり読み」(時枝 1951)を基本とするが，それに加え「振り返り」も考慮するためである。我々の読解活動を顧みると，当該文を解釈する際，そのヒントを得るために直後の文にも一旦視線を走らせてから，再び当該文に「返ってくる」ことは自然であると考えられる。実際，本調査での学習者の発話からもその様子がうかがわれた。また，文章として明示されていないが，文章から推測可能な命題も文脈として用いられる。

調査で見られた誤った語義解釈が，先行文脈，当該文脈，後続文脈とどのような関係にあるかを調べるために表 1 のように検討した。語義解釈の正誤の妥当性と文脈との整合性については，日本語教育関係の修士号を持つ，筆者を含めた 3 名で協議し，判定した。以下に誤った語義解釈と文脈との整合性について具体例を示して説明する。次の(a)から(c)では，整合性の度合いを高い順に○，△，×で示し，()内に誤読した学習者の母語と人数をのせる。

(a) 語義解釈がすべての文脈と整合性がある例

当該文：朝からバタバタと慌ただしくて，緊張して，**舞いあがって**，シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって，あぐらをかいていたはず。(「彼」³⁴p.36)

「舞いあがって」を「舞台に上がって」と解釈する(中 2・韓 1・英 1)が，これは辞書的な意味としては誤りである。この語義解釈と文脈との整合性を見ると，(3)に示すような「新郎は結婚式に出ていて，その式場には舞台(ひな壇)があり，新郎はそこ

³⁴ 「彼の彼女の特別な日」

に上がる」という先行文脈(先行集合文脈)と意味的に食い違いがなく、整合性がとれている(○)。このような場合を以下(○)と記す。当該文脈においても、「(新郎は)結婚式では緊張して、結婚式の舞台にあがっている」という解釈は妥当性がある(○)。さらに、(4)に示す後続文脈とも整合性はとれている(○)。よって、意味的に食い違う文脈はなく、すべての文脈と整合性があると言える。

(3)先行文脈：新郎は結婚式に出ている(結婚式には舞台がある)。

(4)後続文脈：そして今頃は二次会か。(「彼」 p.36)

(b) 語義解釈が部分的には文脈と整合するが、別の文脈では食い違う例

当該文：キザな**文句**。(「彼女」³⁵p.28)

「文句」は「文言」と「不満」という2つの意味がある多義語である。当該文では「文言」の意味であるが、学習者は「不満」と誤って解釈する(中3・韓2・英4)。この語義解釈と文脈との整合性を見ると、当該文脈や後続文脈とは意味的に食い違いがなく、整合性があると言える(○)。しかし、別の文脈に目を向けると、(5)に示すような「男はバーで初対面の彼女の気をひくため「互いに願いを叶え合いませんか」「僕は君の電話番号を知りたい」と切り出した」という先行文脈とは意味的に食い違いが見られ、整合性をもたせるには特別な状況が必要となる(△)。このような場合を以下(△)と記す。

(5)先行文脈：バーで隣に座った男に声をかけられ、「互いに願いを叶え合いませんか」「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」と言われた。

(6)後続文脈：私は失笑して言った。(「彼女」 p.28)

(c) 語義解釈が文脈と大きく食い違っている例

当該文：お願いだから**放っておいて**ほしい。(「彼女」 p.28)

「放っておいて」を字形の類似から「訪問して」と解釈する(韓1)が、これは辞書的な意味として誤っている。この語義解釈と文脈との整合性を見ると、「訪問してほしい」という解釈は当該文脈とは食い違いがないが(○)，(7)に示すような「胸のざわめきを一人で鎮めたかった」という先行文脈と、(8)に示すような「(一人になりたく

³⁵ 「彼女の彼の特別な日」

て)席を立ちかけた」という後続文脈とは反対の意味となり、大きく食い違い、整合性がとれない(×)。このような場合を以下(×)と記す。

(7)先行文脈：胸のざわめきを一人で鎮めたかったのに、隣席の男から質問攻めにあっていた。

(8)後続文脈：(一人になりたいくて)私が席を立ちかけた瞬間、男は言った。(「彼女」p.28)

表 13-1 誤った語義解釈と文脈との整合性の検討(抜粋)

先行文脈(上段：先行直前文脈 下段：“先行集合文脈”)	当該文脈 誤った語義解釈	後続文脈	文脈との整合性
【彼女3】なのに隣席から声をかけられ、気がつくとき星座がどうの血液型がどうのと質問攻めにあっていた。 “元恋人が結婚して、胸のざわめきを鎮めたかったのに、隣席の男から質問攻めにあっていた。”	【彼女4】お願いだから <u>訪問</u> しておいてほしい。 訪問して(韓1)	【彼女5】私が席を立ちかけた瞬間、男は言った。	先× 当○ 後× ×(一人になりたいので、訪問してほしくない。)
【彼女48】それともただの世話好きか。 “それまでその男に興味がなかったが、興味を湧いてきて、初めて男を正面から見た。”	【彼女49】 <u>妙</u> に胸を騒がせる疑念は、久々に芽生えた好奇心だった。 一秒毎に(韓1)	【彼女50】この人のことをもう少し知ってみたい気がする一。	先○ 当○ 後○ ○(最初)に興味はなかったが、次第に興味を持ち始めた。)
【彼女47】この人はキザなのかお人良しなのか。 “見ず知らずの男がシーで話しかけてきて、女を質問攻めをしている。”	【彼女48】それともただの <u>世話好き</u> か。 世の中の話好き(韓3・英1)	【彼女49】 <u>妙</u> に胸を騒がせる疑念は、久々に芽生えた好奇心でもあった。	先○ 当○ 後○
【彼39】なんせ自分の結婚式だ。 “新郎は結婚式に出ている。結婚式の会場には舞台がある。”	【彼40】朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、 <u>舞いあがって</u> 、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、あぐらをかいてははず。 舞台上がって(中2・韓1・英1)	【彼41】そして今頃は二次会か。	先○ 当○ 後○ ○(結婚式には舞台(ひな段)があり、新郎はそこにあがる。)
【彼女43】けれど男は驚くほど誠実な困惑顔を保ったまま、胸のポケットに挿していたペンに手を延ばした。 “2人は初対面で、互いの名前を知らない。”	【彼女44-1】「 <u>降参</u> です。 「降参」という男性名(中1)	【彼女44-2】時を戻せない僕にはあなたの願いを叶えることができない」	先○ 当○ 後○ ○(初対面なので自分の名前を言う。)
【彼女33-5】「もしも二時間前に戻れたら……」 “彼女は結婚式に出席していた。花嫁はブーケを持っている。”	【彼女34】私は <u>花嫁</u> の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。 花屋(韓1)	【彼女35】「どんなにつらくても、彼こちやんと伝えたい」	先△(物語の流れの中で、花屋が登場するのは不自然。) 当○ 後○
【彼女44-4】「でも、もしもその新郎の電話番号を教えてくれたら、あなたの伝えたかった言葉を代わりにお伝えすることはできますが……」 “男は新郎に電話をかけて彼女のかわりに彼女の祝福の言葉を伝えようとしている。”	【彼女45】私は初めて男を <u>正面</u> から捉えた。 正義感のある人だと思った。(中1)	【彼女46】思ったよりも丸顔の三枚目風だった。	先○ 当○ 後○ ○(中国語で「正面」は積極的、正義感のあるというポジティブな意味がある。)

【彼女33-5】「もしも二時間前に戻れたら……」 “彼女はバーに立ち寄り胸のざわめきを鎮めたかった。バーはお酒を飲む場所。”	【彼女34】私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。 花(中 6・韓 7)	【彼女35】「どんなにつらくても、彼ちゃんと伝えたい」 (【彼女36-39】無理をして微笑んだが、ミモザに涙が沈んでいた。酔っている。)	先△ 当○ 後△ ○(花:ブーケの色に似ている。)
【彼女8】「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」 “互いに願いを叶えあいませんか」と男が切り出した。”	【彼女9】キザな文句。 不満(中 3・韓 2・英 4)	【彼女10】私は失笑して言った。	先△ 当△ 後△
【彼39】なんせ自分の結婚式。 “新郎は結婚式に出席している。日本式の結婚式では新郎はあぐらをかいて座る習慣がある。”	【彼40】朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、あぐらをかいてはいけず。 足を組んで座る(字義通りの意味)(中 1・英 1)	【彼41】そして今頃は二次会か。	先○(日本式の結婚式では新郎はあぐらをかいて座る。) 当△ 後○

【彼女】【彼】:材料文。番号は稿末資料の文番号。先:先行文脈 当:当該文脈 後:後続文脈

上述のように、誤った語義解釈と文脈との関係を1つ1つ検討した。すべての文脈と整合性があると考えられるものを○,部分的には文脈と整合するが別の文脈とは整合性がないものを△,文脈と大きく食い違いがあるものを×として表13-2にまとめた。表の一番左には次の13.4.で述べる語の特性も示す。

表13-2より、誤った語義解釈は全部で42例あり、うち33例がすべての文脈または部分的に文脈と整合性を持つことがわかる。

表13-2 誤った語義解釈と文脈との整合性

	小説中の用例	誤った語義解釈	文脈
漢字の字形認識	今は後悔の <u>魂</u> 。彼との別れを後悔している。【彼女33】	鬼(韓4・英2), 魂(英1)	○
	元同僚として当然よ、なんて <u>突っぱねて</u> ね。【彼女30】	笑ってね(英3)	○
	よく見ると昔の祖母よりも歯並びが良く、 <u>肩</u> のラインも美しい。【彼34】	肩(韓1・英1)	○
	お願いだから <u>放って</u> おいてほしい。【彼女4】	訪問して(韓1)	×
	<u>妙に</u> 胸を騒がせる疑念は、久々に芽生えた好奇心だった。【彼女49】	一秒毎に(韓1), 少し(韓1)	○
	無理をして <u>微笑んだ</u> 。【彼女38】	特徴のある笑いをした(韓1)	○
	男は <u>瞳</u> を強ばらせ、とても素朴な困惑顔をしてみせた。【彼女28】	唾(韓1)	○

音韻	罨の前では平静を装っていたものの [略] 【彼 2】	階段(韓 1)	○
	シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって [略] 【彼 40】	隣り(英 1)	×
	つまらない意地の張り合いから彼を失ってしまう以前の自分 [略] 【彼女 14】	意志(韓 4)	△
	「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」 【彼女 8】	(人)を指して(韓 1)	△
語の構成要素の分析	元同僚として当然よ、なんて突っぱねてね 【彼女 30】	突然言っ(中 4・韓 2)	○
	この人はキザなのかお人良しなのか。それともただの世話好きか。 【彼女 47-48】	世の中の話が好き(韓 3・英 1)	○
	別の女と晴れやかに笑っていた新郎がまだ私の恋人だった二年前。 【彼女 12】	元恋人の男性名(韓 3・英 1)(うち、「シントロウ」 2)	○
	だって式の間中、私が考えていたのはたった一つきりだから。 【彼女 30】	真ん中(中 1・韓 3)	○
	朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、 [略] 【彼女 40】	舞台上に上がって(中 2・韓 1・英 1)、踊って(韓 1・英 2)	○ ○
	降参です。時を戻せない僕にはあなたの願いを叶えることができない。 【彼女 44】	「降参」という男性名(中 1) 降りて参加する(韓 1) 参加したのに帰る(韓 1)	○ × ×
	元恋人の結婚式の帰りに、初めて1人でバーへ立ち寄った。 【彼女 1】	立った(中 1) 近づいた(英 1)	○ ○
	思ったよりも丸顔の三枚目風だった。 【彼女 46】	目の形の一つ(中 1) 三次元の顔(英 1)	○ ○
	キザな文句。私は失笑して言った。 【彼女 9-10】	笑いを失う(韓 1)	○
	私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを [略] 【彼女 34】	花屋(韓 1)	△
	つまらない意地の張り合いから彼を失ってしまう以前の自分 [略] 【彼女 14】	頑張りあい(韓 1)	△
	私は言葉に詰まった。 【彼女 11】	問い詰めた(韓 1)	×
	僕は以前、得意先の係長に教わった「とっておきの殺し文句」 [略] 【彼 13】	前の(英 1)	×
	年中そうこぼしていた祖母の渋面が脳裏をかすめていく。 【彼 19】	年の中ごろ(中 1)	○
	私は初めて男を正面から捉えた。 【彼女 45】	正義感のある人(中 1) 外見で誘惑した(英 1)	○ ○
	祖母の魂が今日を限りに昇天してしまうことを思うと、おばあちゃんっ子の僕には並々ならない喪失感があった。 【彼 2】	おばあちゃんの子ども(中 1・韓 5)	×
多義的な表現	私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。 【彼女 34】	花(中 6・韓 7) ドレス、(韓 1)	△ △
	つまらない意地の張り合いから彼を失ってしまう以前の自分 [略] 【彼女 14】	boring (韓 6・英 4)	△
	「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」 キザな文句。 【彼女 8-9】	不満(中 3・韓 2・英 4)	△
	シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、あぐらをかいていたはず。 【彼 40】	足を組んで座る(字義通りの意味)(中 1・英 1)	△

	この人のことを <u>もつ</u> 少し知ってみたい気がするー。【彼女 50】	すでに(韓 1)	△
	せめて 2 時間前くらいに <u>負けて</u> もらえませんか。【彼女 21】	(誘惑に)負ける(英 1)	△

【彼女】【彼】：材料文。番号は稿末資料の文番号。

ここまで誤った語義解釈と文脈との関係を見てきたが、次の 13.4. では、誤った語義解釈のもとになった要因について、語が持つ特性に焦点をあてて分析する。

13.4. 誤った語義解釈をつくる要因

この節では語が持つ特性に注目し、誤った語義解釈をもたらす要因について考察する。誤った語義解釈はその要因から表 13-3 のように分類される。表 13-3 の「箇所」は小説で誤った語義解釈が見られた箇所、異なり数である。「人数」は誤読した人数、「総数」は誤読総数で、誤読が見られた各箇所で誤読した人数を累計した。()の数字は学習者 24 名中何名が誤読したかを示す。表の最下部に辞書をひいた語句数の平均値を載せる。誤った語義解釈には 4 類型がある。以下、類型毎に例をあげて説明を加える。

表 13-3 誤った語義解釈

誤った語義解釈の要因	中国 (N=8)			韓国 (N=8)			英語母語話者語 (N=8)		
	箇所	人数	総数	箇所	人数	総数	箇所	人数	総数
漢字の字形認識における誤り 例：今は後悔の <u>塊</u> →【誤】鬼(6), 魂(2) 例：妙に胸を騒がせる→【誤】一秒ごとに(1), 少し(1)	0	0	0	7	7	12	5	5	9
音韻情報の使用における誤り 例：つまらない意地の張り合いから[...]→【誤】韓国語にない漢字語である「意地」의지(ういじ)を、同じ発音で韓国語にある「意志」의지(ういじ)と解釈(4)。 例：「さしあたり君の電話番号を知りたい」→【誤】人を指して(1)	0	0	0	2	5	5	0	0	0
語の構成要素の分析における誤り 例：元同僚として当然よ、なんて突っぱねてね→【誤】突然言って(6) 例：世話好き→【誤】世の中の話が好き(4)	9	6	13	11	8	24	7	6	9
多義的な表現の解釈における誤り 例：私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた→【誤】花・ドレス(14)	3	8	10	4	8	16	5	5	10
辞書をひいた語句数の平均* *平均=総語句数/人数	109			134			261		

13.5. 漢字の字形認識における誤り

韓国語母語話者・英語母語話者は漢字の字形認識を誤ることで、誤った語義解釈をすることがある。(9)で 6 名が「塊(かたまり)」を「鬼(おに)」と捉えた。うち、1 名

は「今は後悔して鬼のように恐れ存在である」と自ら説明も加えた。その解釈はすべての文脈と食い違いがなく、整合性があるため、誤りに気づかない。

- (9)「今は後悔の塊。彼との別れを後悔している。意地ばかり張っていた日々を後悔してる。」(「彼女」 p.30)(韓 4・英 2)

他にも、(10)で「妙に」を「一秒ごとに」(韓 1)や「少し」(韓 1)と解釈した。その解釈も他の文脈と食い違いがないと考えられる。

- (10)妙に胸を騒がせる疑念は、久々に芽生えた好奇心でもあった。(「彼女」p.31)(韓 2)

13.6. 音韻情報の使用における誤り

「意地」は韓国語に存在しない漢字語である。次の(11)で、韓国語母語話者 4 名はこの漢字を 1 字ずつ音韻化し、「의(うい)」と「지(じ)」の音をあて「의지(ういじ)」と発音したところ、韓国語に存在する漢字語の「意志(의지)」と同じ音のため、「意地」を「意志」だと解釈する。この解釈は先行文脈・後続文脈と整合性がある。しかし、当該文脈とは食い違い、整合性を持たせるには特別な状況が必要となる。

- (11)つまらない意地の張り合いから彼を失ってしまう以前の自分に、戻れるものなら今すぐに戻してほしい。(「彼女」 p.28)(韓 4)

「意地」を「意志」だと解釈した 4 名の発話データには「意志(의지)」の直前にポーズや言い淀みの迷った形跡がない。つまり「意地」を未知語とは考えず、その報告もない。このように、韓国語母語話者は日本語漢字語の語義を解釈する際、日韓同形語の知識とともに韓国語の音韻情報を使うことで誤ると考えられる。

また、(12)では「さしあたり」をその音韻情報を使用して、「人を指して」と解釈した。これはひらがなの音韻情報を使っていると考えられる。

- (12)「さしあたり君の電話番号を知りたい」(「彼女」 p.28)(韓 1)

13.7. 語の構成要素の分析における誤り

中国語母語話者・韓国語母語話者・英語母語話者は未知語に遭遇した際、語の構成要素を分析して意味を推測するが、次の(i)と(ii)のような要因で誤ることがある。
(i)読み手の持っている L2 漢字知識からの推測、(ii)語の組み合わせからの推測、

である。

「読み手の持っている L2 漢字知識からの推測による誤り」は次のようなものである。(13)において中国語母語話者 4 名と韓国語母語話者 2 名が、「突っぱねて」の意味を、自分が知っている「突」の意味から推測して「突然言う」と誤った。この解釈はすべての文脈と整合性がとれている。ちなみに、英語母語話者 2 名は「笑ってね」と解釈するが、英語母語話者の場合は漢字の字形認識の誤りとなる。

(13)元同僚として当然よ、なんて突っぱねてね。(「彼女」p.30)(中4・韓2)

一方、「語の組み合わせからの推測による誤り」は、「おばあちゃんっ子」を「おばあちゃんに可愛がられた子」ではなく、字義通り「おばあちゃんの子ども」と解釈する(中1・韓5)ものである。その解釈は文脈と大きく食い違いがあり、整合性がとれないが、学習者は気にしない。

13.8. 多義的な表現の解釈における誤り

「ミモザ」は多義語で、花の名前でもあり、この花に似た色のカクテルの名前でもある。(14)では主人公の彼女がバーで飲んでいる「カクテル」を指す。しかし、中国語母語話者・韓国語母語話者全員にとってミモザは未知語であったため、辞書で調べたり語義を推測したりするが、中国語母語話者 6 名と韓国語母語話者 7 名は「花」と誤った。この解釈は「ミモザに一滴の涙が沈んでいた」「酔っている」という後続文脈と食い違いがあるが、その手がかりを軽視してなされているようである。一方、英語母語話者は全員「ミモザ」が「カクテル」であることを知っており、正しく解釈した。

(14)私は花嫁の手に使っていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた(4文挟む)ミモザに一滴の涙が沈んでいた。酔っている。(「彼女」p.30)(中6・韓7)

また、(15)の「あぐらをかく」は字義通りの「足を組んで座る」の意味と、「その地位に甘んじて、努力をしない」という 2 つの意味がある。ここでは後者の意味であるが、学習者は「日本式の結婚式では新郎はあぐらをかいて座っている」と考え、字義通りの意味で解釈した。

(15)朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、あぐらをかいていたはず。(「彼」p.36)(中1・

13.9. まとめ

本章は、上級学習者が小説を読むときにつくられた誤った語義解釈について、文脈との整合性と、誤った語義解釈がつけられる要因を明らかにした。文脈との整合性を見ると、直前文脈だけでなく、ストーリーとして理解している先行集合文脈を使って語義解釈をする(例：舞いあがって→舞台に上がって)ことがわかった。また、その整合性の度合いは、(a)すべての文脈と整合性がとれる解釈、(b)部分的には整合性があるが、別の文脈を考えると食い違いがある解釈、(c)文脈と大きく食い違いがある解釈、まで幅があることがわかった。この点は従来議論されていない。

一方、誤った語義解釈をもたらす要因について母語別に見ると、漢字の字形認識の誤りは韓国語母語話者・英語母語話者に、音韻情報の使用の誤りは韓国語母語話者だけに見られた。語の構成要素の分析における誤りは中国語母語話者・韓国語母語話者で多い一方、非漢字圏の英語母語話者では誤りが少ない。これは、中国語母語話者・韓国語母語話者は辞書を引かずに語の構成要素から語義を推測する一方、英語母語話者は辞書を高頻度で使用し、辞書を引いた語句数の平均が 26.1 と、韓国語母語話者の 13、中国語母語話者の 10.9 に比べ高いということに要因がありそうである。本調査では自然な読みの姿を重視し、辞書の使用も学習者に任せた。中国人の場合、読解では漢字がかなりの手助けとなるため、辞書を使わないというのも自然な読みの姿である。

また、多義的な表現の解釈は母語に関係なく難しいようである。従来も中国人を対象とした研究で、カタカナやひらがな表記の語をその表記の類似から別の語と混同する(野田・花田・藤原 2017)という指摘はあったが、本稿で示されたように、韓国語母語話者と英語母語話者が高頻度で漢字の字形認識を誤ることや、韓国語母語話者が音韻情報の使用により誤ることはきちんと議論されてこなかった。

L2 読解における語義解釈は、文脈との整合性でも、また、字形認識や語構成の分析などでも処理がゆるく、詰め甘い甘さがある。会話や作文では誤りがあっても聞き手や読み手からフィードバックが得られやすいが、理解活動である読解ではそう行かないからこそ、より正確な文章理解が必要となる。読解の教授の際には、本章で述べたような要因によって誤った語義解釈がつけられることに留意したい。本章は語義解釈から読解過程の一端を明らかにした。今後も実証的な研究知見を積み重ねることが、読解教育を前進させると考える。

第14章 登場人物を指示する要素の読み誤り

ここまでは主に語義の解釈について述べてきた。本章では、日本語学習者の文脈理解に焦点をあてる。具体的には、小説テキストの読解において文脈理解の指標となる登場人物を指示する要素について、日本語学習者が適切に理解しているかどうかを調査した。本章では文脈理解の指標として、文中に明示されている人称詞をはじめ、文中に非明示となっている発話主、ゼロ代名詞、ノ格名詞句を分析の対象とした。これらは結束性をもたらす言語形式である。母語別にみると、韓国語母語話者は英語母語話者や中国語母語話者に比べて、誤読が少ない傾向があったが、これは日本語と韓国語の言語の類似性が背景にあることが示唆された。

14.1. はじめに

これまでの先行研究を見ると、読解中に見られる語義や未知語の解釈を分析対象とした研究の知見は蓄積されてきた一方で、小説の文章理解で重要とされる文脈理解について言及した研究は管見の限り見当たらない。本章では日本語学習者の文脈理解について明らかにする。

14.1.1. 文章理解における文脈と指示の関係

文脈について心理学と言語学の両分野から整理しておく。心理学の分野において、Graesser, A.C. & Clark, L.F. (1985) は、物語の理解で重要なのは登場人物の意図を理解することであり、この意図の具体的内容の表現である行為の「計画」と「目標」を理解することであるとしている。これは言わば文脈の理解である。

一方、言語学の分野から、小説読解と文脈の関係は日本語記述文法研究会によると次のように整理される。小説は書き言葉による談話である。談話としてまとまりを持たせる言語的な手段のうち小説で重要な役割を担うものに指示がある。指示とは、談話に登場する人や事物、抽象的な概念などを言語表現で指し示すことである。談話はその展開とともに、話題に関係する指示対象が指示されていく。たとえば、指示の人称代名詞「彼」が談話中の誰を指しているかを確定するためには文脈が必要となる。読み手は必要に応じて文脈を参照しつつ談話の理解を進めているとされる。

以下に、「田中さん」とされた人物が様々な呼称(人称詞)で指示されている例を示す。最後の B の発話では指示する表現を非明示にすることで、それまでと同じ人物が指示されている。

- A 「田中さん、もう来られました？」
- B 「一郎は、まだ。彼はいつも時間通りになんて来ないよ」
- C 「あいつは自由人だからね」
- A 「へえ。田中さんってそんな方だったんですか」

C「ほらほら、噂をすれば何とやら。大先生のお出ました」

B「うわあ、 ϕ (非明示)真っ赤なスカーフなんかしてる」

日本語の小説ではこのような指示の特性を利用して、登場人物が様々な表現で指示される。そこで本稿では、この点に注目し、登場人物の指示を文脈理解の指標とする。

14.1.2. 本章の目的

本章では、上級学習者が日本語の小説を読む場合、文脈理解の指標となる登場人物を指示する要素を適切に理解しているかどうかを明らかにする。語と文は連動した存在であるため、当該要素をとりまく文の環境が複雑になると誤読を誘発すると考えられる。よって、当該要素は文脈を構成する語や文を正しく理解しているか否かのチェックポイントとなる。もし、文脈を誤っていれば、当該要素で誤りが露呈することになる。

第二言語で読む学習者は、母語との言語構造的な違いなどが要因で指示対象を読み誤りやすいと予想される。その実態と要因を把握することは、学習者の読解教育を考える上で有用である。

14.2. 調査概要

14.2.1. 調査対象者

調査対象者は、日本の大学や研究機関に在籍する 20 代の英語母語話者(以下, E)13 名, 韓国語母語話者(以下, K)13 名, 中国語母語話者(以下, C)13 名である。E は JLPT の N1 取得が 5 名, N2 取得が 4 名, 未受験が 4 名である。K は N1 取得が 9 名, N2 取得が 3 名, 未受験が 1 名, C は全員 N1 取得である。対象者の SPOT90^{注2}は 69 ~88 で、母語別の平均点は E は 75.8, K は 81.2, C は 78.8 である。SPOT の点数や JLPT の取得状況から、E は K・C よりやや日本語能力が低い傾向を示すものの、全対象者の日本語能力はほぼ上級であり母語別の差も小さいと考えられた。調査は 2016 年 4 月から 2019 年 1 月に行った。

14.2.2. 調査方法

材料文は、森絵都氏による 2005 年発表の短編小説「彼女の彼の特別な日」「彼の彼女の特別な日」(103 文)である。日本語文章難易度判別システム(<http://jreadability.net/>)での文章難易度は中級前半・ふつう(リーダビリティ・スコア 4.0)と判定された。以下本章で「彼女の彼の特別な日」を引用する場合は、文番号の前に(彼女),「彼の彼女の特別な日」を引用する場合は(彼)と記す。文番号は冒頭からの順番で、カッコで括られた会話文は一文として数えた。テキスト分析の詳細は第 9 章で述べたとおりである。

調査では、読み手の読解過程を可視化するために、材料文を読みながら理解した内容を母語で口頭翻訳してもらった。その際、読み手の読解中に、調査者は適宜、解釈の詳細を明らかにするための質問をした。次の手順をとった。(i)調査の前に、別の小説を使い、後述の発話方法に慣れるために練習する。辞書の使用を認め、小説を黙読し、一文ずつ口頭で翻訳してもらう。調査対象者は読みながら、理解できない点や推測したこと、また、解釈の変更があればそれについて話す。これらをすべて調査対象者の母語で行う。(ii)小説の中の登場人物を指示する要素(14.3.3.参照)について、調査対象者にその理解を確認する質問を行う(例:このセリフは誰が話していますか)。(iii)調査対象者と調査者とのやりとりについては、調査対象者の母語の通訳者が同席し、同時通訳に近い形で通訳する。それを IC レコーダーで録音し、調査後に文字化する。なお、調査対象者の解釈は文章を読み進めたあとで修正されることもあったが、本稿では 1 文ずつたどり読みをして得られる線条の初発の理解に焦点をあてて分析した。

14.3. 日本語の小説の談話構成と指示

14.3.1. 日・英・中・韓の談話構成

日本語では事態の把握や言語化をする際、話し手は現場で自分の目が捉えたことを見えたまま文にし、観察者である「私」は言語表現上に現れない(姫野 2011)。観察者の視点が統一されることで、直示動詞(行く、もらう等)や敬語の意味から動作主や目的語は暗示され、明示されないことも多い。

日本語と英語、中国語、韓国語の文法と談話構成を比較してみる。まず、韓国語は、語順や文法構造だけではなく、「私」を言語化しないなど、ある要素を言語化するか否かについても日本語と共通点が多い(生越 2011)。一方、英語と中国語の語順や文法構造は日本語と大きく異なる。また、話者の談話構成は、話し手と聞き手という抽象化された役割に基づき、人称代名詞を用いて対話する(姫野 2011)。つまり、英語と中国では言語主体を逐一言語化する点でも日本語とは異なる。このように言語毎の特徴がある。

14.3.2. 日本語の指示と英・中・韓の指示の比較

小説読解で文脈理解の指標となる、登場人物を指示する要素には次のようなものがある。

- a. カッコで括られた会話文において非明示となっている発話主
- b. ゼロ代名詞(非明示である動作主や目的語)
- c. 非飽和名詞で非明示となっているノ格名詞句
- d. 人称詞

a.~d.の特性を日・英・中・韓で比較した(表 14-1)

表 14-1 日・英・中・韓の指示の比較

	日本語・韓国語	英語	中国語
a. 会話文における発話主	非明示が多い	明示が多い	明示が多い
b. ゼロ代名詞	非明示による指示	義務的に明示される	明示が多い
c. ノ格名詞句	非明示による指示	義務的に明示される	明示が多い
d. 人称詞	様々な言い方あり	限られる	様々な言い方あり

本材料文で会話文の発話主は 24 箇所中 22 箇所では非明示であった。一方、一般に会話文の発話主は英語と中国語では明示されることが多い。また、小説には「いつ」「どこで」「誰が」「どのように」話しているかという発話状況が指示対象に影響を与える直示表現が頻出する。たとえば、「行く、もらう」のような特定の方向性を持つ直示動詞では動作主や目的語は暗示され、非明示となりやすい(ゼロ代名詞)。一方、英語ではこれらは義務的に表示され、中国語では表示されることが多い。さらに、「ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった」という文にある「顔」は、「誰の」を特定する必要がある非飽和名詞である。日本語ではこのノ格名詞句は非明示になりやすい一方、英語では義務的であり、中国語では表示されることが多い。また、同じく直示表現である人称詞も文脈を使って指示対象を特定する必要がある。

このように日本語の指示は明示されるものだけではなく、非明示になることで指示の機能を持つものが多いが、言語によっては様相が異なる。そのような箇所では、言語構造の違い等から発生する誤読により、学習者は指示対象の特定を誤りやすいと予想される。このことは先行研究からも一部明らかになっている。第 10 章で述べたように、中国語母語話者は a.b.d.で誤読することが明らかにされた。また、ポクロフスカ(2015)はロシア語母語話者に随筆文を使った調査を行い、非明示の一人称主語の復元が中級学習者にとって困難であることを示した。そこで本稿では先行研究をふまえ、誤読が確認された a.b.d.に加え、日本語で非明示となりやすい c.(ノ格名詞句)を加えた 4 つを文脈理解の指標として用いる。従来これらの指標は小説読解で具体的に検討されておらず、E・C・K で比較した研究もない。

14.3.3. 指示の理解を確認する質問

上記 a.~d.を学習者がどのように理解したかについては、学習者の自発的な口頭翻訳からは確認できない。たとえば、「君の幸せを心から願っています」という文を、E は “I sincerely hope for your happiness” のように口頭翻訳した場合、「you(君)とは誰のことですか」と質問しなければテキスト中の誰を指しているかわからない。調

査では、a.~d.の要素をテキストの中から論文筆者が事前に選び、その理解について学習者に質問した。但し、テキストに出現するすべての要素について質問するのは、学習者の読解を阻害することになり現実的ではない。よって、質問は母語との違いで理解が難しいと考えられる箇所を中心に選んだ。日本語では非明示である要素が母語では義務的であったり、文構造が大きく異なったりする場合、読解が困難になることが予想される。その検討のために、材料文を英語、韓国語、中国語に翻訳し、質問箇所を選んだ。その詳細は第9章を参照されたい。ここでは簡潔に述べておく。たとえば、(1)の「だからこそ教えてやりたかった」という文では「誰が」「誰に」が非明示となっており、しかも、後続文が「何を」と照応する倒置になっている。韓国語では日本語と同じように「誰が」「誰に」は非明示であるが、英語では「誰が」「誰に」を義務的に明示しなければならず、中国語では「誰に」が義務的である。このような文はE・Cには理解が難しいと考えられ、「誰が、誰に、教えてやりかったですか」と質問をした。

- (1) だからこそ教えてやりたかった。この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。(彼 43,44)

그러니까 알려주고 싶었다. だからこそ 教えて やりたかった Especially because of that, 【I】 wanted to tell 【him】 . 正因为如此 想 告诉 【他】。 だからこそ たい 教えてやる 【彼に】	【 】内は義務的に表示する要素
--	-----------------

図 14-1 材料文の翻訳の例

調査では50箇所質問した。質問箇所を本章の最後に示す。以下にa.~d.の質問数と質問例を載せる。

a. カッコで括られた会話文で非明示となっている発話主の特定(24箇所)

- (2) 「おまえは嘘をつかない子だ。それだけが取り柄だが、それだけで十分だよ」祖母が残した言葉を思い出し、僕は潔く覚悟する。(彼 48,49)
質問：「 」は誰が話していますか。

b. ゼロ代名詞の特定(7箇所)

- (3) だからこそ教えてやりたかった。この薄暗いバーの片隅でたった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。(彼 43,44)
質問：誰が、誰に教えてやりかったですか。

c. 非飽和名詞で非明示となっているノ格名詞句の特定(3箇所)

(4) ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。(彼 17)

質問： 誰の顔が熱くなりましたか。

d. 人称詞の指示対象の特定(16箇所)

(5) いや、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。(彼女 20)

質問：「君」とは誰のことですか。

14.4. 結果と考察

14.4.1. 登場人物を指示する要素の誤読総数

登場人物を指示する要素の誤読総数とは、誤読が見られた各箇所で誤読した人数を累計したものである。図 14-2 は学習者の母語別に見た誤読総数である。グラフ中に誤読人数を N、総質問数(=質問箇所×調査対象者 13 名)を n で示す。誤読人数を見ると、E は 11、K は 9、C は 10 とほぼ同数である。しかし、誤読総数では、K が 18 と、E の 30 や C の 34 と比べて少ない傾向にある。また、誤読は特定の学習者に偏らない。以下、グラフ中に各誤読者の誤読数を区切って示す。

14.4.1 の内訳について 14.4.2~14.4.5 で詳細を述べていく。その際、テキストや母語の面からも説明を加える。

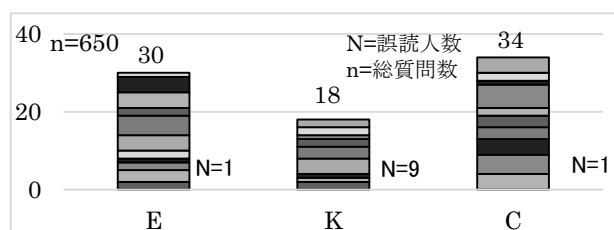


図 14-2 母語別に見た登場人物を指示する要素の誤読

14.4.2. 会話文で非明示となっている発話主の誤り

本材料文における会話文の発話主はほぼ非明示である。英語と中国語では一般に明示されることが多い。

図 14-3 にカッコで括られた会話文で非明示となっている発話主の特定において誤った数を示す。C が 10 であり、E の 4 と K の 1 より多い傾向にある。

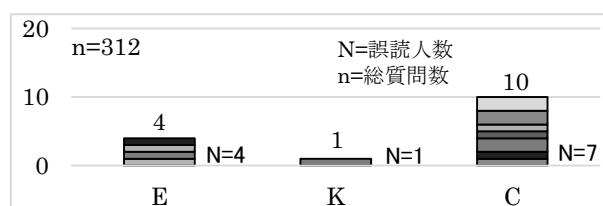


図 14-3 会話文で非明示となっている発話主の誤読

24 箇所中 5 箇所で見られた。最も多く誤ったのは、次の下線部の発話主である(E2・K0・C5:7名)。

- (6) 結婚なんてやめて私とやりなおして。なりふりかまわずにそう頼んだら、彼は迷ってくれたらどうか。いや、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。(彼女 18,19,20)

この「君の幸せを心から願っています」は彼(元恋人)が話した内容の引用句であり、「君」は「私(彼女)」を指す。しかし、学習者は「君」は「彼(元恋人)」を指し、「私(彼女)」が「彼(元恋人)の幸せを心から願っている」と彼(元恋人)に言ったと誤った。

誤読の要因として、発話が引用句となっていることに加え、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼、という長い連体修飾構造が捉えにくいこと、「添えてよこした」の動作の方向性を適切に理解していないことが考えられる。

また、(7)について、あるEは最終的に誤らなかったものの、「私は失笑して言った」(彼女 10)が指す内容が、1つめのカッコか、2つめのカッコかがわからず、誰の発話であるか迷うと話した。「英語なら誰が話し始めたかというルールがあるが、日本語の場合どちらが話しているかわからない」とコメントした。

- (7) 「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」キザな文句。私は失笑して言った。
「それなら、私は時間を二年前に戻したい」(彼女 8~11)

誤読した上記の箇所はいずれも、カッコで括られた発話と発話が隣接しておらず、語り手の心情を描写する地の文が挿入され離れている。この場合、文脈を正しく理解していなければ発話主の特定が難しい。EとCで誤りが多い理由として、14.3.1.で述べたように英語と中国語の談話構成では言語主体を逐一言語化する傾向が強いため、日本語では非明示となっている発話主の特定が困難になる可能性が考えられる。

14.4.3. ゼロ代名詞の指示対象の誤り

日本語のゼロ代名詞は、英語では義務的に表示され、また、中国語では表示されることのほうが多い。

図 14-4 にゼロ代名詞の特定で誤った数を示す。E は 16, C は 20 であり, K の 9 より多い傾向にあった。

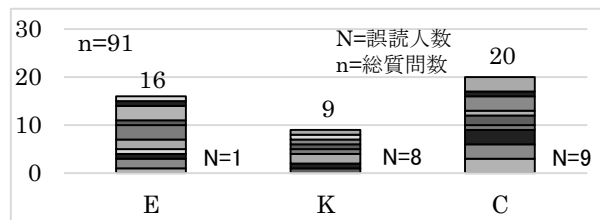


図 14-4 ゼロ代名詞の誤読

7 箇所中 6 箇所で誤りが見られた。最も誤りが多かったのは、(8)の「逃げる」の動作主(破線)である(E7・K2・C6: 15 名)。(8)で「逃げる」の動作主は非明示であるが、彼 21 の文の動作主である「彼女」が継続しているため、動作主は「彼女」である。しかし、学習者は直前に書いてある「僕」だと誤って解釈する。そして、当該文より前にある「僕は彼女に冷笑されて、恥ずかしくなり、顔が熱くなった」という先行文脈を用いて、(8)の意味を「恥ずかしくなった「僕」がその場から「逃げたい」気持ちだ」と誤って解釈した。

- (8) 彼女は完全に僕を軽蔑した様子で無理難題を突きつけてきた。二年前に戻りたい。二日前に戻りたい。こうして僕をからかい、煙に巻いて逃げる気だ。(彼 21~24)

(8)では、「逃げる」の動作主が非明示である。さらに、その指示対象である「彼女は」との間に「二年前に戻りたい。二日前に戻りたい」という彼女の発話の引用が挿入されている。このような文の環境では、文脈を正しく理解しなければ、ゼロ代名詞の特定は難しい。

また、次の(9)において、「教えてやりたかった」の「誰が」と「誰に」が非明示であり、その特定で誤った(「誰が」E4・K0・C3: 7 名、「誰に」E4・K3・C5: 12 名)。動作主(破線)の変化をわかりやすく見せるために、(9)で非明示のゼロ代名詞をφ()で示す。

- (9) その男(新郎)はきっと彼女が祝福の言葉を口にしなかったことなど気にしちやいないだろう。なんせφ(新郎は)自分の結婚式だ。φ(新郎は)朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、あぐらをかいていたはず。そしてφ(新郎は)今頃は二次会か。φ(新郎は)シャンパンをがぶ飲みし、二人のなれそめクイズかなんかで盛りあがり、「キッス、キッス」なんて煽られてニヤついているんだ。だからこそφ(僕は)φ(新郎に)教えてやりたかった。この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを(彼 38~44)

(9)では、彼 38 の文の動作主は「その男(新郎)」であり、後続する彼 39-42 の文でも継続しているが、非明示である。しかし、彼 43 の文「だからこそ教えてやりたかった」では、「誰が」「誰に」が非明示であると同時に、動作主(誰が)が前出の「新郎」ではなく「僕」に変化している。このように、一文にゼロ代名詞が 2 つあることに加え、動作主が変化することがこの文のゼロ代名詞の解釈を難しくさせていると考えられる。

E と C で誤りが多いのは、母語では動作主や目的語は義務的に明示されるため、日本語で非明示になっていると、その特定に困難を覚えるためと考えられる。

14.4.4. 非明示のノ格名詞句の誤り

日本語の非飽和名詞のノ格名詞句は、英語では義務的であり、中国語では表示されることのほうが多い。

図 4 に非明示となっているノ格名詞句の特定で誤った数を示す。3 箇所中 1 箇所では誤りが見られた。E は 6 であり、K の 3 や C の 1 より多い傾向にあった。

(10)「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。(彼 16,17)

(10)の「顔」という名詞は、「誰の」を示すノ格名詞句を特定する必要がある非飽和名詞である。(10)は小説の語り手が「僕」であることが読み手に了解されているとし、「僕の顔が熱くなった」の「僕の」の部分は非明示である。学習者は「彼女の顔が熱くなった」と誤り、この文の意味を「彼女は当初、バーの男に興味はなかったが、次第に興味を持ち始めた」と解釈した。

E で誤りが多いのは、英語では、“My face became hot at her sneer as she turned toward me.”となり、ノ格名詞句が義務的に明示されるため、日本語で非明示の場合、その特定が困難になること、また、日本語では連体修飾節で表現される「ふりむいた彼女」は英語では“as she turned toward me.”となり、両言語で文構造が大きく異なることが要因であると考えられる。

一方、C で誤りが少ないのは、「ふりむいた 彼女」(扭过头来的 她)は中国語でも語順が同じであるため、この文構造の理解は難しくなかった可能性がある。

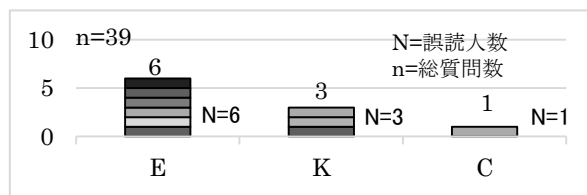


図 14-5 非明示のノ格名詞句の誤読

14.4.5. 人称詞の指示対象の誤り

最後に、文章中に明示される人称詞について検討する。図 14-6 に人称詞の指示対象で誤った数を示す。E は 4, K は 5, C は 3 と、母語による差は小さい。

16 箇所中 5 箇所で見られた。最も誤りが多かったのは、(11)の下線部の「おまえ」の指示対象である(E1・K3・C2: 6 名)。(11)はバーで彼女に話しかけた男が「おまえは人の言葉を鵜呑みにしすぎる」と祖母に言われたことを回想している場面である。よって、「おまえ」はこのバーの男を指す。しかし、学習者は「おまえ」の直前に出ている「彼女」と解釈し、バーの男が目の前の彼女に話していると誤った。その解釈は後続文に出てくる「祖母」と文脈的に繋がらないが、学習者はその点に注意を払っていないと考えられる。

(11) ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。おまえは人の言葉を鵜呑みにしすぎる。年中そうこぼしていた祖母の渋面が脳裏をかすめていく。(彼 17~19)

(11)で祖母の発話がカッコで括られずに地の文の中に埋め込まれ、発話主が非明示であるという文の環境が、「おまえ」の解釈を難しくさせた可能性がある。

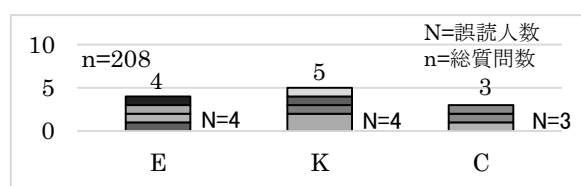


図 14-6 人称詞の指示対象の誤読

14.5. まとめ

本章では、日本語が上級レベルの大学生が日本語の短編小説を読む場合、文脈理解の指標となる登場人物を指示する要素を適切に理解しているかどうかを調査した。その結果、誤読が予想された以下の要素で誤りがあった。a. カッコで括られた会話文において非明示の発話主, b. ゼロ代名詞の指示対象, c. 非飽和名詞で非明示のノ格名詞句, d. 人称詞の指示対象である。上記の誤読の主な要因は日本語と母語との言語構造の相違であり、誤読は小説読解で前提とされる正しいテキストベース (Kintsch1994,1998)の構成を阻害することが示唆された。この点は従来議論されていない。また、登場人物を指示する要素の誤読の詳細が明らかにされた意義は大きい。

母語別に見ると、登場人物を指示する要素の誤読は、K は E と C に比べて少ない傾向にあった。これは日本語と韓国語が語順や文法構造、非明示となる要素でも共通点が多く、文章理解が困難ではないことが考えられた。なお、K の誤りは、指示に直

接関わる言語構造が同じであっても、文構造が複雑になるとボトムアップからの解釈が難しくなるためと考えられたが、今後詳細な調査が望まれる。

E と C の誤読の傾向が類似するのは、英語と中国語では言語主体を逐一言語化する傾向が強いことや、母語で義務的に明示される要素が日本語で明示されない場合、その特定が難しくなることが背景にあると考えられた。ただし、E は連体修飾節において日本語と語順の対立が顕著になることが読解をより困難にさせる可能性があり(例 10)、この点が C と異なる。

本章の結果から次のことが導かれる。語の意味は文の環境で決まり、語と文は連動した存在であると言える。小説読解において登場人物を指示する要素自体が難しいのではなく、これらの要素の解釈は文脈によって規定される性質を持つゆえ、要素をとりまく文の環境が複雑になると誤読を誘発すると考えられる。誤読を誘発する文の環境とは、前出の動作主が後続の文で非明示でありながらもピリオドを超えて継続すること(例 8)、非明示の動作主が文章の途中で変化していること(例 9)、長い連体修飾構造(例 6)、カッコで括られた発話と発話の間にある挿入句の存在(例 6,7)、があげられる。また、日本語では、感情・感覚・欲求・授受・受身を表す動詞等の使用に関する主語の人称制限など、様々な要因により主語が非明示となる。日本語の小説においてこれらの要因で主語が現れないメカニズムを考えると、作者の視点との関わりに言及せざるをえない。つまり、作者の視点が固定され、一貫していることで主語が現れないことの曖昧性を回避している(加藤 2018)。しかし、学習者の立場に立つと、どのような場合に主語や目的語が明示されたり、非明示になったりするかは明確にはわからない。そのため、非明示の要素を特定する際、述語を中心とした文構造を手がかりにボトムアップで解釈せずに、不完全な理解に基づいたトップダウンの推測にあてはめて誤読することがある。

ここから日本語教育への応用を提言する。学習者は日本語でどのような環境のときにゼロ代名詞が出現しやすいかを、人称制限や視点の観点から明示的に教わる機会は少ない。しかし、小説読解では要になるため明示的に指導したい。また、実際に小説のどのような要素で読み誤るかを体験し、意識化できる教材作成が望まれる。その際、本研究の知見が活用できる。理解活動である読解では他者からフィードバックが得られにくいからこそ正確な理解が求められる。たとえば、小説を趣味として楽しむのではなく、日本文学の研究者を目指すというような場合は特に重要となってくる。今後は語義解釈と文脈理解をあわせて分析することが課題である。

質問箇所 : a. 会話文で非明示の発話主 24 箇所 [全ての「」] , b. ゼロ代名詞 7 箇所 [誰が(彼女 14), 誰が(彼女 40), 誰が(彼 24), 誰が・誰に(彼 43), 誰が・誰に(彼 47)] , c. 非明示のノ格名詞句 3 箇所 [誰の(隣)(彼女 42), 誰の(胸)(彼女 43), 誰の(顔)(彼 17)] , d. 人称詞 16 箇所 [彼(彼女 19), 君・彼(彼女 20), 彼(彼女 30), 彼(彼女 33), この人(彼女 50), 彼(彼女 51), おまえ(彼 18), その男(彼 29), この人(彼 30),

男(彼 35), その男(彼 38), 自分(彼 39), 二人(彼 42), おまえ(彼 48), その男(彼 52)

「彼の彼女の特別な日」

1 元恋人の結婚式の帰りに、初めて一人でバーへ立ち寄った。 2 仄暗いカウンターの片隅で胸のざわめきを鎮めたかった。 3なのに隣席の男から声をかけられ、気がつくやうに星座がどうの血液型がどうのと質問攻めにあっていた。 4お願いだから放っておいてほしい。 5私が席を立ちかけた瞬間、男は言った。 6「互いに一つずつ願いを叶え合いませんか」。 7「願い?」。 8「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」。 9キザな文句。 10私は失笑して言った。 11「それなら、私は時間を二年前に戻したい」。 12今日、別の女と晴れやかに笑っていた新郎がまだ私の恋人だった二年前。 13いつも隣で笑っていたのは私のはずだった。 14つまらない意地の張り合いから彼を失ってしまう以前の自分に、(誰か)戻れるものなら今すぐに戻してほしい。 15「二年前か.....ちょっと難しいな」。 16「なら二日でもいいよ。二日前に戻して」。 17彼がまだ完全に別の女のものになっていなかった二日前。 18結婚なんてやめて私とやりなおして。 19なりふりかまわずにそう頼んだら、彼は迷ってくれただろうか。 20いや、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。 21「それも難しいな。せめて二時間前くらいに負けてもらえませんか」。 22私は言葉に詰まった。 23二時間前。 24なるほど、その程度なら今からでも取り返しがつきそう。 25そして私はその二時間前に、確かに一番大事な何かを置き忘れてきたような気がしていた。 26「わかったわ。二時間前で手を打ちましょう」と、私は言った。 27「じつは私、その頃、忘れられない人の結婚式にいたの」。 28男は瞳を強ばらせ、とても素朴な困惑顔をしてみせた。 29「すみません。つらいことを思い出させてしまったようで」。 30「ううん。つらくなんてなかった。だって式の間中、私が考えていたのはたった一つきりだから。自分はちゃんと微笑んでいるか。彼の選んだ花嫁よりも綺麗で幸せな女に見えるか。つまらないプライドの塊みたいになって、全力で平静を装ってた。来てくれてありがとうって彼が声をかけてきたときも、元同僚として当然よ、なんて突っばねてね」。 31見ず知らずの男に何を話しているんだか。 32そう思いながらも口が止まらない。 33「今は後悔の塊。彼との別れを後悔している。意地ばかり張っていた日々を後悔してる。そして何より、彼の特別な日に自分のことばかり考えていたことを後悔してる。もしも二時間前に戻れたら.....」。 34私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。 35「どんなにつらくても、彼にちゃんと伝えたい」。 36「なんて?」。 37「結婚おめでとう」。 38無理をして微笑んだ。 39はずが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。 40(誰か)酔っている。 41みつともない。 42(誰の)隣の男はさぞかし呆れているだろう。 43けれど男は驚くほど誠実な困惑顔を保ったまま、(誰の)胸のポケットに挿していたペンに手を延ばした。 44「降参です。時を戻せない僕にはあなたの願いを叶えることができない。よって、僕の願いであるあなたの電話番号も聞くわけにいかない。でも、もしもその新郎の番号を教えてくれたら、あなたの伝えたかった言葉を代わりにお伝えすることはできますが.....」。 45私は初めて男を正面から捉えた。 46思ったよりも丸顔の三枚目風だった。 47この人はキザなのかお人良しなのか。 48それともただの世話好きか。 49妙に胸を騒がせる疑念は、久々に芽生えた好奇心でもあった。 50この人のことをもう少し知ってみたい気がする。 51彼の差し出したペンを受けとり、私はコースターに自身の電話番号を記した。

「彼の彼女の特別な日」

① 祖母の四十九日、親戚一同との会食の帰りに、初めて一人でバーへ立ち寄った。② 皆の前では平静を装っていたものの、祖母の魂が今日を限りに昇天してしまうことを思うと、おばあちゃんっ子の僕には並々ならない喪失感があった。③ 行かないでくれ、おばあちゃん。④ そんな未練を引きずりながら酒を飲み、ふと横を見ると若き日の祖母の写真にそっくりの女性が一人で酒を飲んでいて。⑤ これはたぶん、いやきつと、祖母の魂が最後の力をふりしぼってセッティングしてくれた縁に違いない。⑥ 僕は勇気をふりしぼり、生まれて初めて女性に声をかけた。⑦ 「お一人ですか？」⑧ 高鳴る鼓動。⑨ 速まる脈拍。⑩ しかし、どうやら盛りあがっているのは僕だけで、彼女はこちらを見ようともしない。⑪ 以前、会社の同僚から「星座と血液型の話をすれば女はいちころだ」と教わったのを思い出して実践してみたものの、いちころどころかますます彼女を白けさせて終わった。⑫ こうなったら最後の手段。⑬ 僕は以前、得意先の係長に教わった「とっておきの殺し文句」で勝負に出た。⑭ 「互いに一つづつ願いを叶え合いませんか？」⑮ 「願い？」⑯ 「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい。」⑰ ふりむいた彼女の冷笑に(誰の)顔が熱くなった。⑱ おまえは人の言葉を鵜呑みにしすぎる。⑲ 年中そうこぼしていた祖母の渋面が脳裏をかすめていく。⑳ 「それなら、私の願いは……」㉑ 彼女は完全に僕を軽蔑した様子で無理難題を突きつけてきた。㉒ 二年前に戻りたい。㉓ 二日前に戻りたい。㉔ こうして僕をからかい、煙に巻いて(誰か)逃げる気だ。㉕ けれど二時間前の話になったところでふいに雲行きが変わった。㉖ 「私、忘れられない人の結婚式にいたの。」㉗ 彼女は雨に打たれた彫像みたいな顔で語り始めた。㉘ 唇に貼っていた人工的な笑みが痛ましく、寒々しい。㉙ 二時間前に別の女性と結ばれたその男のことを本気で思っていたのだろう。㉚ ああ、この人はやっぱおばあちゃんと違う。㉛ 当たり前だが、ふいにそう思った。㉜ 祖母の魂は今頃、まだどこかに新しく生まれ変わるための準備体操でもしているのだろうが、今、目の前にいる彼女の魂は僕と同じこの世界で苦しみ、さまよっている。㉝ 僕が初めて声をかけた女性。㉞ よく見ると昔の祖母よりも歯並びが良く、眉のラインも美しい。㉟ こんな女性を泣かせているのはどんな男だろう。㊱ 結婚おめでとう。㊲ そう伝えなかったことを悔やんでいると彼女が言ったとき、僕はわけのわからない衝動に駆り立てられて、お節兄にも新郎の電話番号を尋ねていた。㊳ その男はきっと彼女が祝福の言葉を口にしなかったことなど気にしちやいないだろう。㊴ なんせ自分の結婚式だ。㊵ 朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、あぐらをかいていたはず。㊶ そして今頃は二次会か。㊷ シャンパンをがぶ飲みし、二人のなれそめクイズかなんかで盛りあがり、「キッス、キッス」なんて煽られてニヤついているんだ。㊸ だからこそ(誰が)(誰に)(何を)教えてやりたかった。㊹ この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。㊺ とはいえ、彼女が本気でコースターに電話番号を書きだしたときはびっくりした。㊻ え、マジ？㊼ ほんとに(誰が)(誰に)電話するの？㊽ 「おまえは嘘をつかない子だ。それだけが取り柄だが、それだけで十分だよ。」㊾ 祖母が残した言葉を思い出し、僕は潔く覚悟する。㊿ よし、こうなったら心して新郎に電話をしよう。㊿ 彼女の「おめでとう」を全力で伝えよう。㊿ そして願わくば、その男から彼女の電話番号を聞きだしたい。

凡例：① 文番号 質問箇所：a. 会話文で非明示の発話主____、b. ゼロ代名詞____()、c. 非明示のノ格名詞句____()、d. 人称詞____

第15章 定量的な分析

本章では、調査で得られたデータを定量的に分析する。母語別の誤読の特徴や、文法に関する誤読と語義に関する誤読、SPOT90 で測定された協力者の日本語能力との関係を見ていく。また、読書習慣や辞書使用の回数の関係についても検討する

15.1. 母語別の誤読の特徴

誤読の種類は、第 12 章で述べたように、「文法」と「語義」に大きく二つに分けられた。誤読数について英語母語話者(13 人)、韓国語母語話者(13 人)、中国語母語話者(13 人)のグループにおける平均値の差を 1 要因分散分析(参加者間)により検討した結果、次のことが明らかになった(表 15-1)。

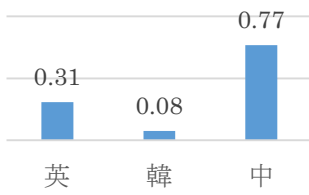
- ①「発話主の特定の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、中は韓より多く、その差は 5%水準で有意であった。
- ②「字形認識の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、韓は中より多く、その差は 5%水準で有意であった。
- ③「音韻情報の使用の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、韓は英より多く、その差は 5%水準で有意であった。
- ④「語義全体の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、韓は英、中より多く、その差は 5%水準で有意であった。

表 15-1 母語別の誤読

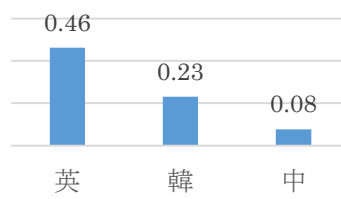
		英語		韓国語		中国語		1 要因分散分析	多重比較	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		Holm	HSD
文法	1. 発話主の特定	0.31	0.46	0.08	0.27	0.77	0.80	$F(2,36)=4.85, p<.05$	韓<中*	韓<中*
	2. ノ格名詞句の特定	0.46	0.50	0.23	0.50	0.08	0.27	$F(2,36)=2.71, ns$		
	3. ゼロ代名詞の特定	1.92	1.33	0.85	0.77	1.92	1.73	$F(2,36)=2.60, ns$		
	4. 人称詞の特定	0.31	0.46	0.38	0.62	0.23	0.42	$F(2,36)=0.27, ns$		
	5. 文構造の把握	0.31	0.61	0.00	0.00	0.46	0.50	$F(2,36)=3.23, ns$		
	1.-5. 文法全体	3.31	2.13	1.54	1.39	3.46	2.68	$F(2,36)=3.02, ns$		
語義	6. 字形認識	1.77	1.42	2.23	1.53	0.62	0.84	$F(2,36)=4.93, p<.05$	韓>中*	韓>中*
	7. 音韻情報の使用	0.23	0.42	1.00	0.96	0.46	0.63	$F(2,36)=3.73, p<.05$	英<韓*	英<韓*
	8. 語構成の分析	1.85	1.41	2.85	2.21	1.31	1.20	$F(2,36)=2.64, ns$		
	9. 多義的な表現	2.08	1.38	2.69	0.99	2.54	1.01	$F(2,36)=0.94, ns$		
	10. その他	1.23	0.89	2.31	1.81	1.31	1.26	$F(2,36)=2.29, ns$		
	6.-10. 語義全体	7.15	3.16	11.08	4.70	6.23	2.15	$F(2,36)=6.50, p<.01$	英<韓* 中<韓*	英<韓* 中<韓*
1.-10. 全体		10.46	4.83	12.62	5.50	9.69	4.01	$F(2,36)=1.19, ns$		
辞書の使用回数		26.31	14.90	16.54	16.07	15.85	14.38	$F(2,36)=1.79, ns$		

* $p<.05$

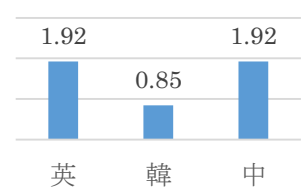
1. 発話主



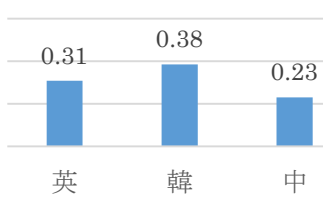
2. ノ格名詞句



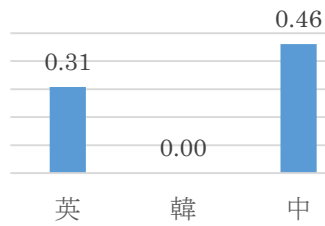
3. ゼロ代名詞



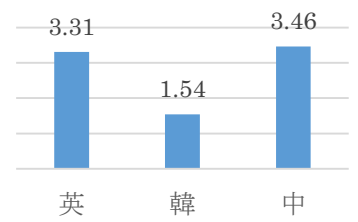
4. 人称詞



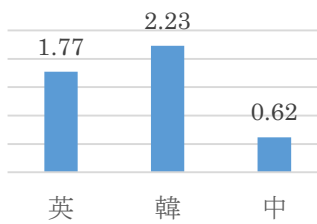
5. 文構造



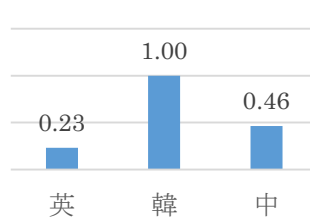
1.-5.文法全体



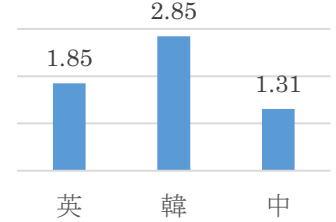
6. 字形認識



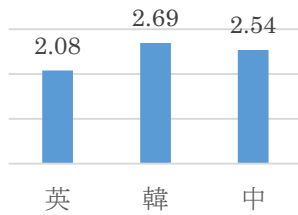
7. 音韻情報



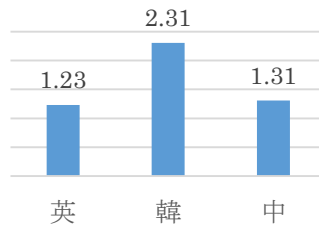
8. 語構成



9. 多義的な表現



10. その他



6.-10. 語義全体

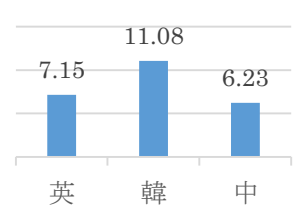


図 15-1 誤読数の平均値

15.2. 結末の理解と誤読数の関係

結末を正しく理解した協力者の群の誤読数(グラフ白抜き)と、誤って理解した協力者の群の誤読数(グラフ灰色)を比較した。その結果、結末を正しく理解した群の誤読数の平均値は 9.85 であり、一方、誤って理解した群の誤読数の平均値は 13.17 であった。正しく理解した群の誤読数の平均値のほうが低かった。

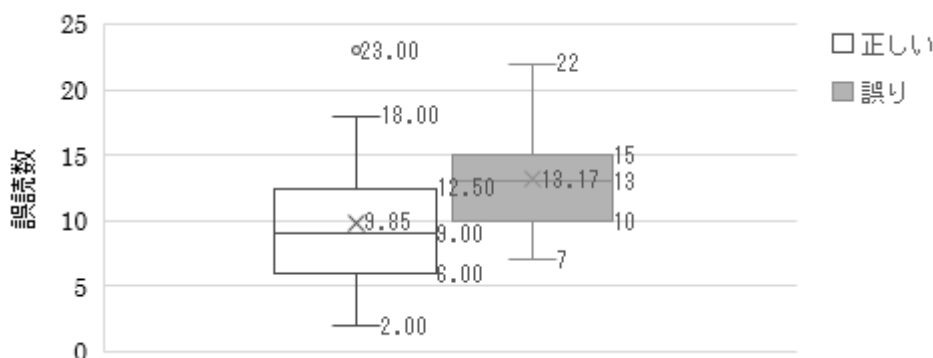


図 15-2 結末の理解と誤読数の関係

母語別にみると、結末を正しく理解したのは、英語母語話者は 11 人、韓国語、中国語母語話者はともに 7 人であり、英語母語話者が最も多かった。

15.3. 文法の誤読数と語義の誤読数

文法の誤読数と語義の誤読数の関係を散布図に示したところ、文法の誤読数が増えるにつれて語義の誤読数も増える弱い傾向が見られた。近似曲線を求めたところ、最も R^2 決定係数が大きかった英語母語話者では $R^2 = 0.432$ であった(図 15-3)。

誤読数と SPOT90 の点数の関係を散布図に示したところ、SPOT90 の点数が上がるにつれて誤読数が減る弱い傾向が見られた。近似曲線を求めたところ、最も R^2 決定係数が大きかった韓国語母語話者では $R^2 = 0.3938$ であった(図 15-7)。

また、誤読を文法の誤読と語義の誤読に分けて、SPOT90 の点数との関係を調べた。その結果、SPOT90 の点数が上がるにつれて文法の誤読数が減る弱い傾向が見られた。近似曲線を求めたところ、最も R^2 決定係数が大きかった中国語母語話者では $R^2 = 0.4093$ であった(図 15-11)。語義の誤読数も同様の傾向を示し、最も R^2 決定係数が大きかった韓国語母語話者では $R^2 = 0.43$ であった(図 15-13)。

このことから、次のことが示唆される。

- ①文法の誤読数と語義の誤読数が比例関係にあることから、日本語能力を構成する、文法力と語彙力も比例関係にある可能性がある。
- ②文法の誤読数と SPOT90 の関係が 3 言語のうち最も明瞭に出たのが中国語母語

話者であった。ここから、中国語母語話者の日本語能力を左右するのは語彙力よりも文法力のほうが強い可能性があると考えられる。

- ③語義の誤読数と SPOT90 の関係が 3 言語のうち最も明瞭に出たのが韓国語母語話者であった。ここから、韓国語母語話者の日本語能力を左右するのは文法力よりも語彙力のほうが強い可能性があると考えられる。

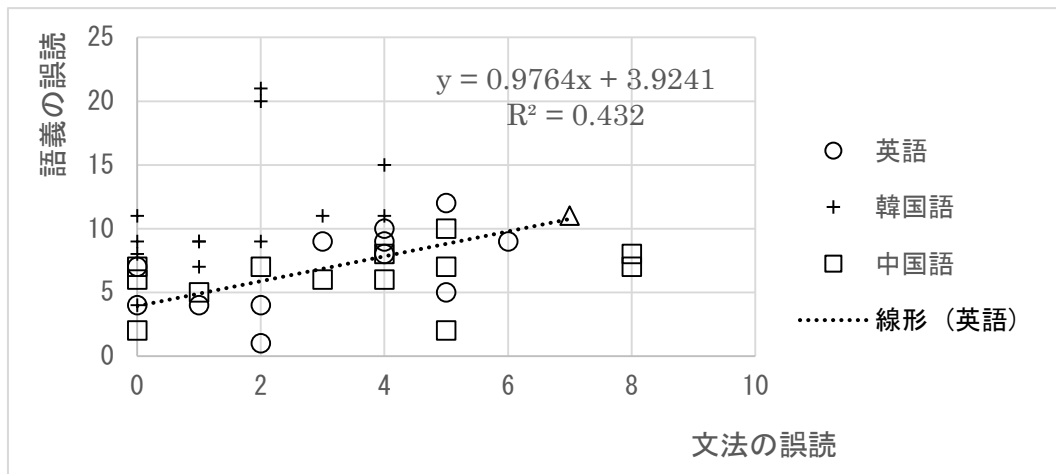


図 15-3 文法と語義の誤読数の関係(英語母語話者線形)

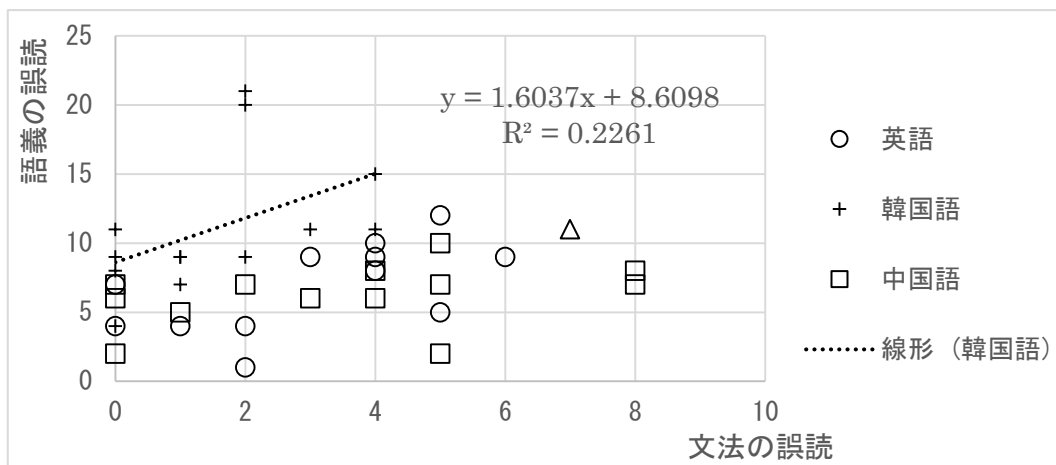


図 15-4 文法と語義の誤読数の関係(韓国語母語話者線形)

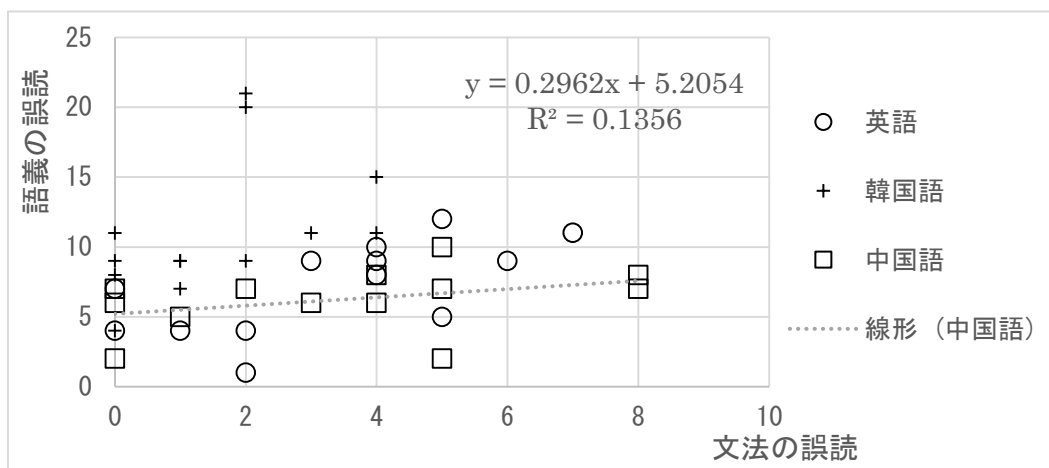


図 15-5 文法と語義の誤読数の関係(中国語母語話者線形)

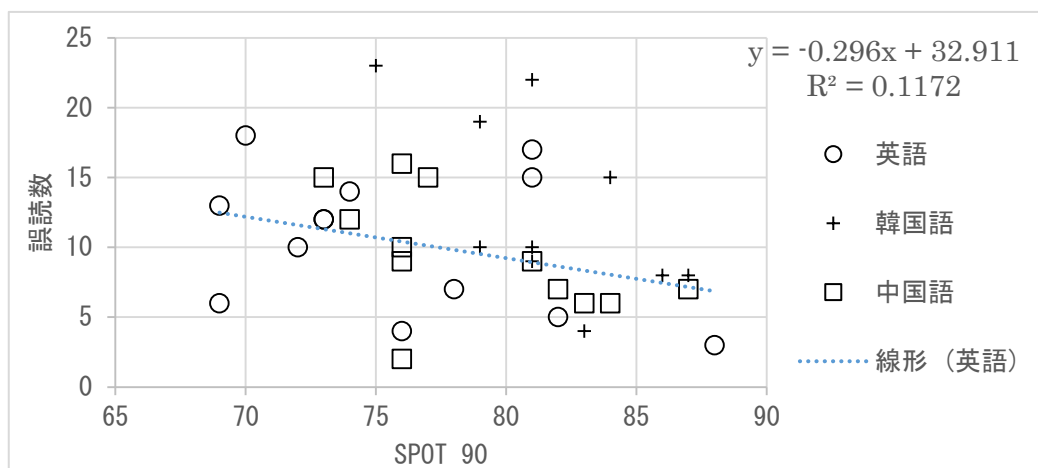


図 15-6 誤読数と SPOT90 の関係 (英語母語話者線形)

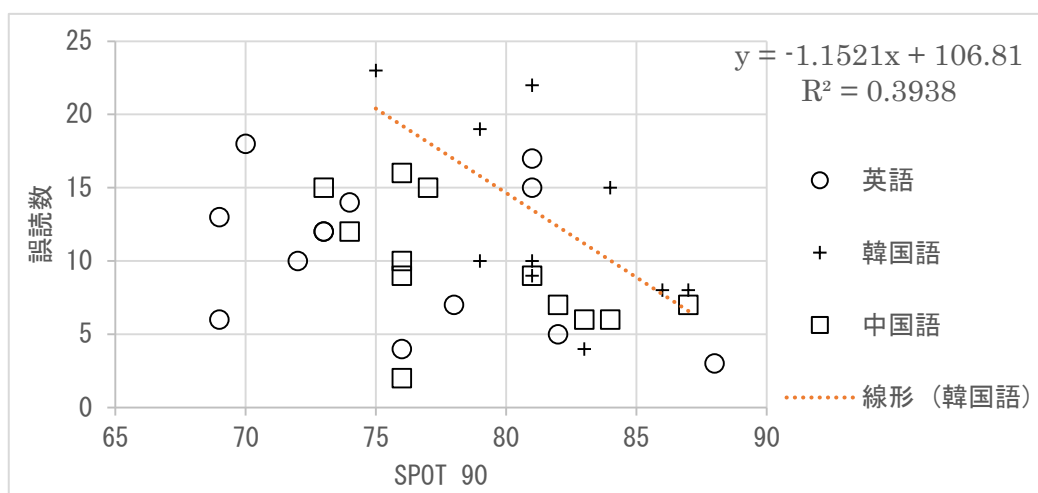


図 15-7 誤読数と SPOT90 の関係 (韓国語母語話者線形)

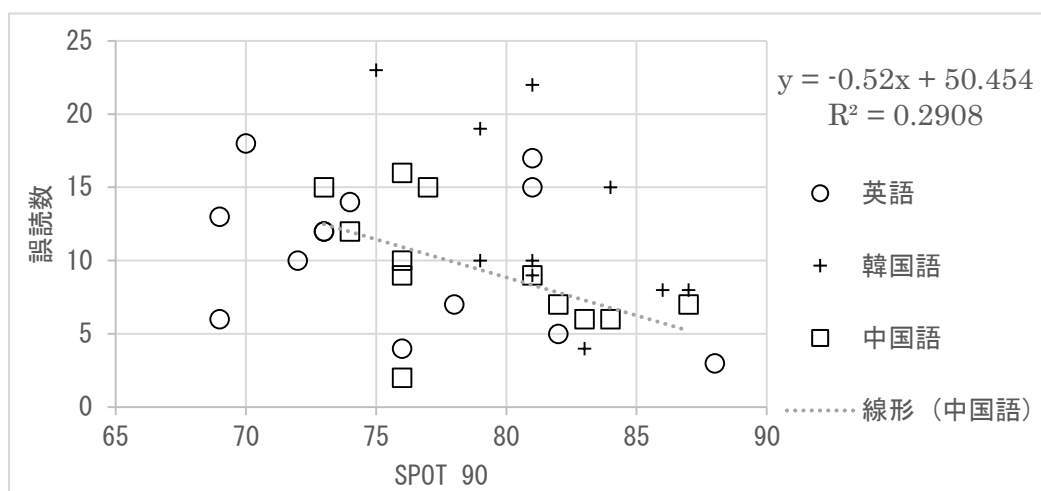


図 15-8 誤読数と SPOT90 の関係 (中国語母語話者線形)

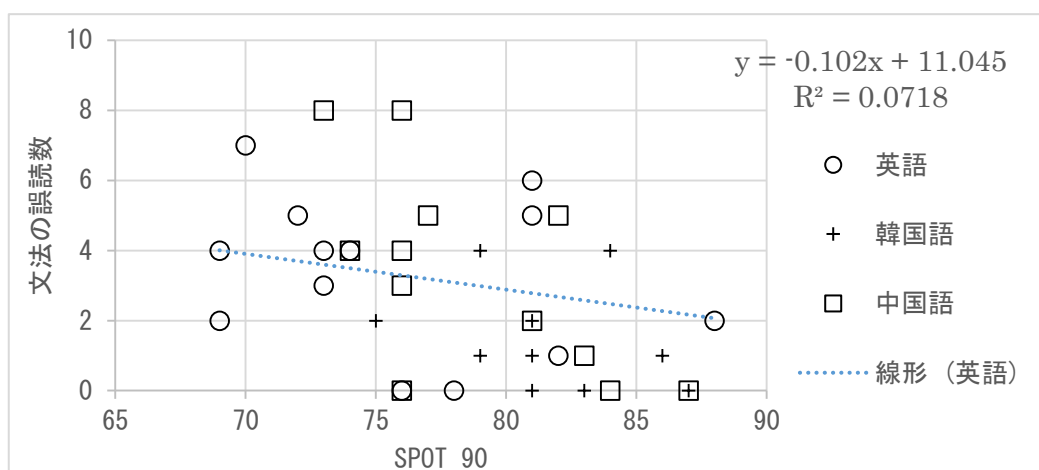


図 15-9 文法の誤読数と SPOT90 の関係(英語母語話者線形)

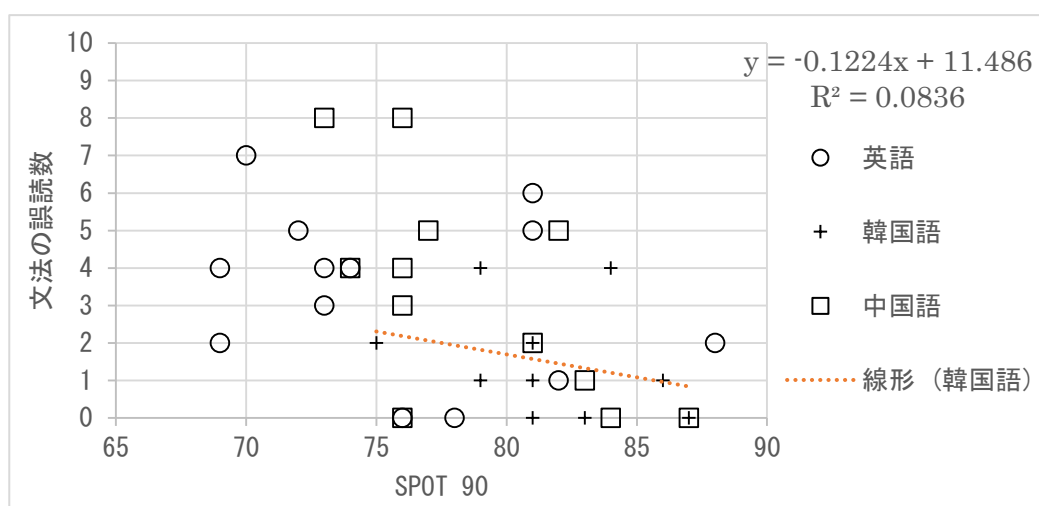


図 15-10 文法の誤読数と SPOT90 の関係(韓国語母語話者線形)

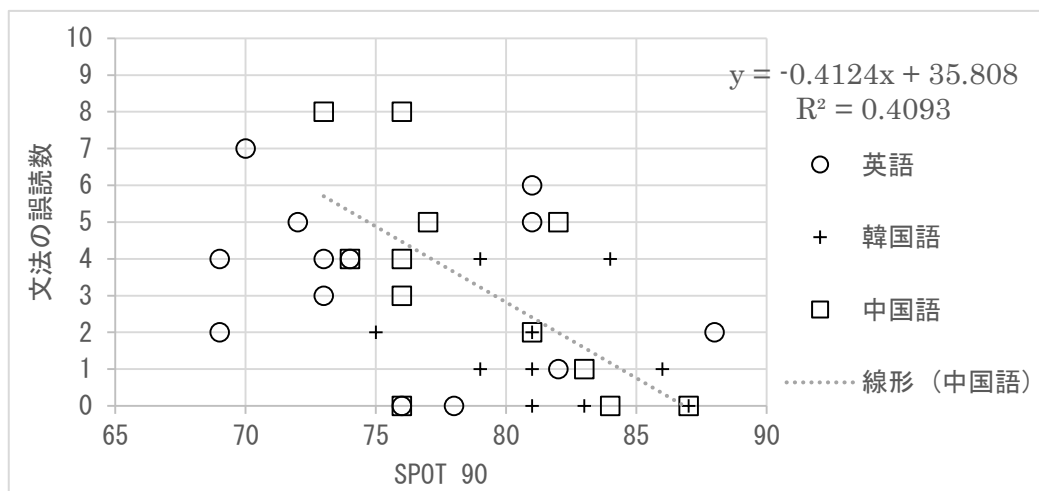


図 15-11 文法の誤読数と SPOT90 の関係(中国語母語話者線形)

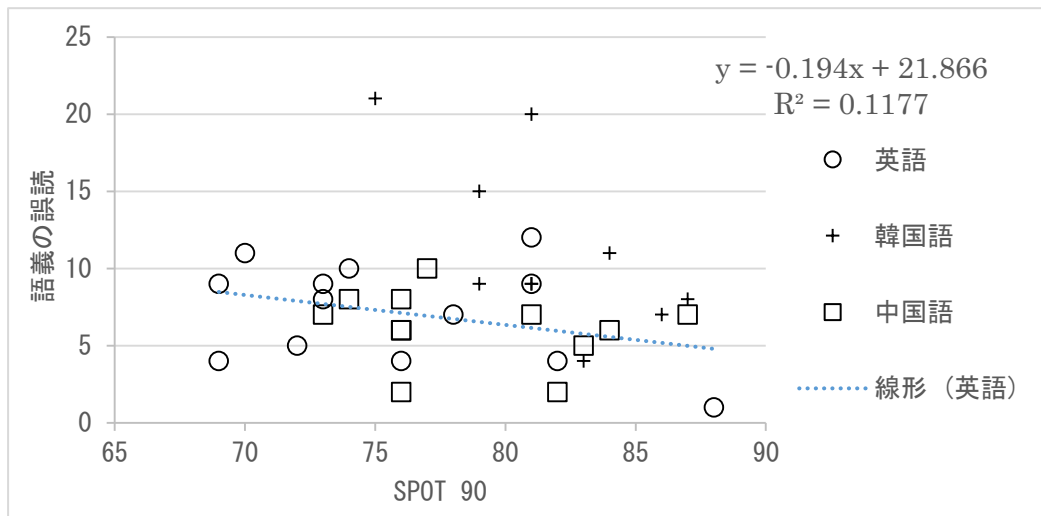


図 15-12 語義の誤読数と SPOT90 の関係(英語母語話者線形)

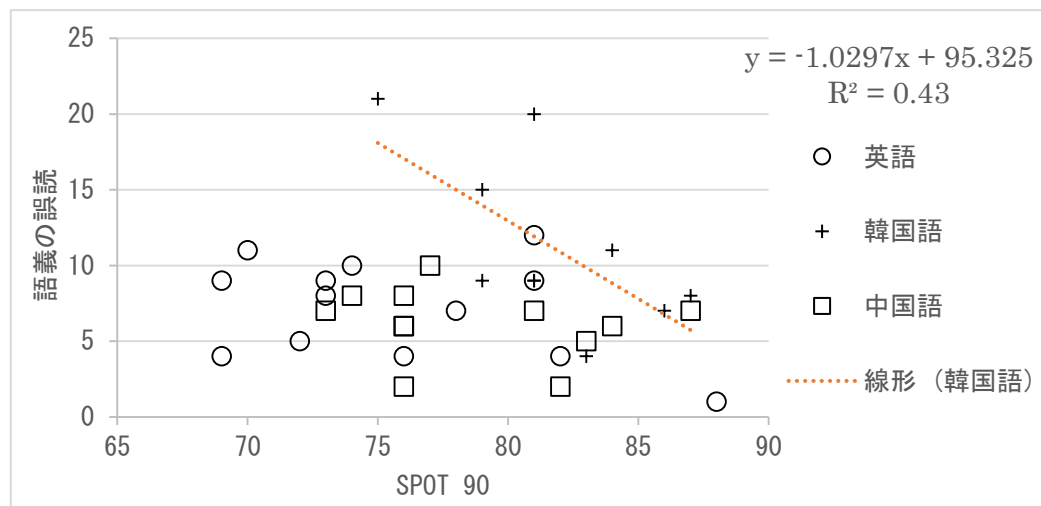


図 15-13 語義の誤読数と SPOT90 の関係(韓国語母語話者線形)

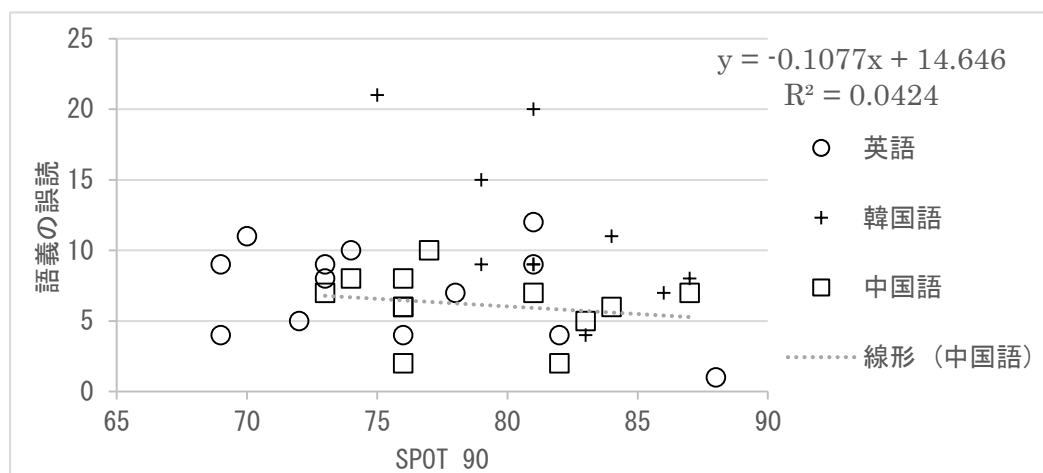


図 15-14 語義の誤読数と SPOT90 の関係(中国語母語話者線形)

15.4. 小説の読書習慣と辞書使用回数の関係

母語および日本語における小説の読書習慣(4 よく読む、3 時々読む、2 あまり読まない、1 全然読まない、の4件法)と、調査中に辞書を使った回数の関係について検討した。その結果、辞書の使用には個人差が大きく、ばらつきの幅が大きかったが、弱い傾向が見られた。まず、母語でよく小説を読む人ほど辞書を引く回数は少ない傾向にあった(図 15-15)。また、日本語での小説の読書習慣については、よく読む人が最も辞書を引く回数が少なかったが、それ以外に明確な傾向は認められなかった(図 15-16)。なお、母語別に辞書使用回数の平均値の差を1 要因分散分析(参加者間)により検討した結果、有意差が見られなかった。また、辞書を引く回数を見ると、英語母語話者が韓国語、中国語母語話者に比べて多いことがわかる。

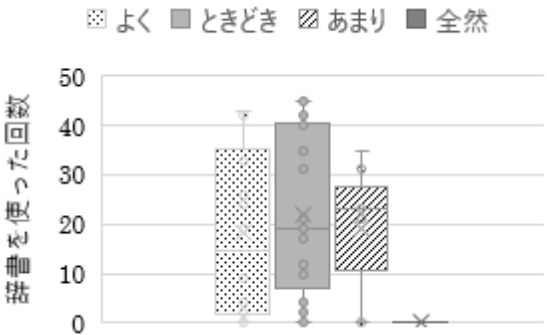


図 15-15 母語での小説の読書習慣

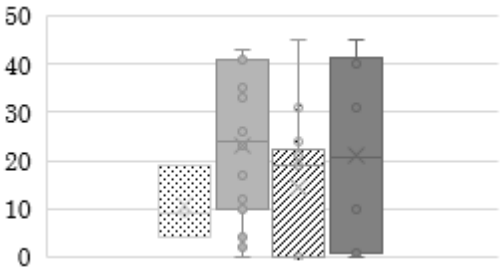


図 15-16 日本語での小説の読書習慣

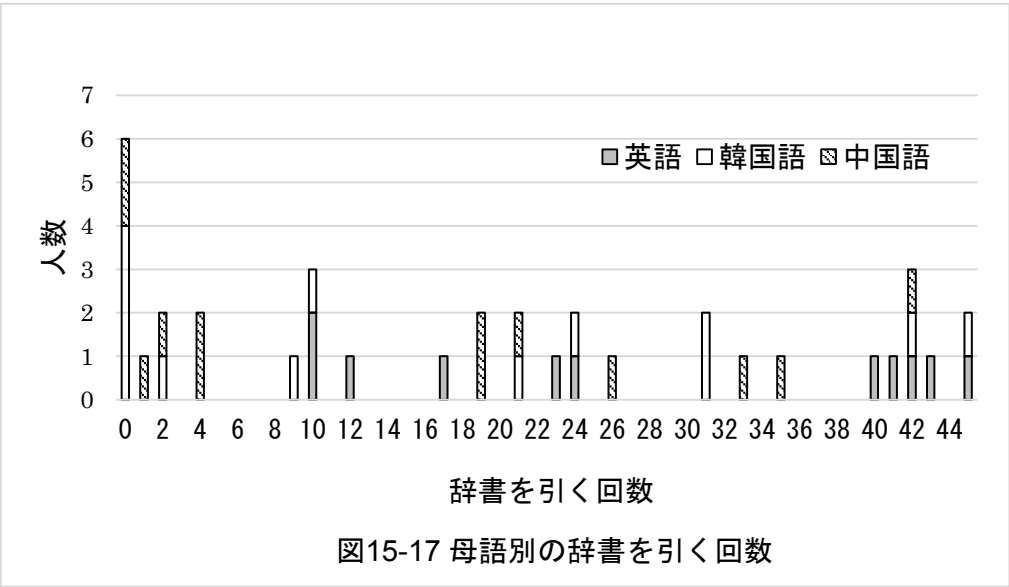


図15-17 母語別の辞書を引く回数

表 15-2 母語別の辞書を引く回数

	英語母語話者	韓国語母語話者	中国語母語話者
平均(回数)	26.3	16.5	15.8
標準偏差	14.9	16.1	14.4

第16章 日本語学習者の動的な読解過程

本章では、学習者が小説を読んだときの動的な読解過程について述べる。読み手はテキストを1文ずつたどり読みをして、互いの意味を論理的に関係づけながら、整合性のある表象を構築することを目指している。しかし、文字が紙に書かれているという媒体上の制約から読み手は情報を線条にしか得られない。そのため、つくられた解釈は固定的なものではなく、テキストを読み進めるにつれて修正されるのは自然な現象である。また、テキストのある部分の解釈が困難であった場合には、その箇所の解釈については一旦保留したまま先を読み進め、その後、再びその部分に戻ってきて当該箇所の解釈が決定されるようなこともある。さらに、ある文の解釈を誤ったことで、別の文の解釈も誤るような誤読の連鎖もある。このように解釈が確定する過程は、行きつ戻りつする動的なものである。本章では、この動的な営みに焦点をあてる。同時に、解釈の修正をもたらしたきっかけについても明らかにする。

16.1. 小説の読み始めから終わりまでの読解過程

学習者が小説を読んだときの、読み始めから読み終わりまでの読解過程を時間の流れに沿ってまとめた。本研究ではそれを読解過程のタイムラインと呼ぶことにする。各言語2名ずつ、言語毎の特徴がよく現れていると考えられた協力者を選び、タイムラインの図を作成した。なお、図にのせた誤読の例はすべてを載せたわけではない。読み進めて解釈の修正が見られたもの、ある誤読が別の誤読を誘発したというような誤読の連鎖と考えられるもの、ある言語で特徴的に見られる誤りなど、興味深い現象を抜粋した。

16.1.1. 英語母語話者2名の読解過程のタイムライン

E11 の読解過程

E11 の読解過程のタイムラインを示す。



図 16-1 E11 のタイムライン

E11 の読解過程は次のとおりである。

① 1 編目を読み始めてすぐの「お願いだから放っておいてほしい」(彼女 4)の「放って」の意味がわからず、辞書で調べると、「have a shot(実現する可能性がある), let off a fart(放屁する)」とあり、E11 は「何か男性が女性に性的な要求をしている」と考えた。

② 語り手が男性か女性かで迷っている状態で、「今日、【別の女】と晴れやかに笑っていた新郎がまだ私の恋人だった二年前。」(彼女 12)という文を読み、「誰の話かわからなくなってきた」と混乱した。

③ 「つまらないプライドの【塊】みたいになって、全力で平静を装ってた」(彼女 30-5)を読み、【塊】(かたまり)を「魂」(たましい)と認識した。この 3 文後に出てきた、「今は後悔の【塊】。」(彼女 33-1)を読んでも、「魂」という解釈は変わらず、「文の意味が通るから、さっきの漢字(塊)は「魂」で正しかった」とコメントした。

④ 「【降参】です。」(彼女 44-1)をバーの男性の名前であると解釈した。

⑤ 2 編目を読み始めてすぐに「バーの男性の視点から書かれていますね」とコメントした。「以前、会社の【同僚】から「星座と血液型の話をすれば女はいちころだ」と教わったのを思い出して実践してみたものの、いちころどころかますます彼女を白けさせて終わった。」(彼 11)を読み、漢字の字形の類似から【同僚】を「洞察」と認識し、「パーティーに行って、人々がどのように交流するかというのを観察した結果」という意味だとコメントした。

⑥ 「【得意先】の係長」(彼 13)を語構成から「扱い方が上手な係長」と解釈した。ここを読んでいるあたりで、1 編目の冒頭にあった「お願いだから放っておいてほしい」(彼女 4)の「放って」が性的な意味ではなく、「放っておいてほしい」だとわかる。その理由として、「2 編目のやりとりでは男性から女性に大胆なお願いは出てこないから」とコメントした。

⑦ 「ふりむいた彼女の冷笑に【顔】が熱くなった」(彼 17)について、「彼女の顔が生き生きとしてきた。」と登場人物の心情や行動を大きく読み誤った。さらに、「こうして僕をからかい、煙に巻いて【逃げる】気だ。」(彼 24)では、「バーの男が逃げる。」と動作主体を読み誤った。

⑧ 「こんな女性を泣かせているのはどんな【男】だろう。」(彼 35)では、「男」とは

バーの男が自分自身を指し、「こんな女性を悲しませてしまった自分を恥ずかしく思い始める。」という解釈を述べた。また、「【おまえ】は嘘をつかない子だ。(彼 48-1)で人称詞の指示対象を誤った。

⑨結末は正しく理解できた。フォローアップインタビューでは、「読んでいる途中で変だと思っても、読み進めるとあとで意味がわかる。話の筋は完全に理解できた。最初のところだけ(「放っておいてほしい」を性的な意味に解釈)大胆な勘違いをしてしまって、すみません」とコメントした。

E11 の読解過程の特徴は次のようにまとめられる。

(i)漢字の字形認識の誤り(塊→魂、会社の同僚→洞察する)や辞書で正しい語釈にたどりつけないことによる誤読(放って→性的な意味)がある。

(ii)人称詞の指示対象の誤読がある。「別の女」という表現を見て、登場人物が男性か女性か、または、誰の話かわからず混乱する。また、「男」「おまえ」が小説中の誰を指すか誤る。

(iii)小説の冒頭の「放って」の解釈で混乱したことが、登場人物の性別で迷うことにつながり、誰の話かわからなくなった。誤読の影響が広範囲に及んでいることがわかる。

E07 の読解過程

E07 の読解過程のタイムラインを示す。

「彼女の彼の特別な日」 E07

今日、別の女と晴れやかに笑っていた新郎がまだ私の恋人だった二年前。(彼女12)

別の女が晴れやかに笑っている、それが私の恋人だった。(文構造の誤り)

いつも隣で笑っていたのは【私】のはずだった。(彼女13)

〔初発の解釈〕【私】は男性。彼女の結婚式で苦い思いをしている。

〔後発の解釈〕【私】は女性。新郎が彼女の元彼氏だから。

新郎(彼女12)

辞書で語釈を確認。

いや、「【君】の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。(彼女20)

〔初発の解釈〕彼が彼女にメールを送った。【君】は彼女。

〔後発の解釈〕彼からもらったメールの返事に、彼女が彼にメールを送った。【君】は彼。

私は花嫁の手をしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(彼女34)

結婚式のときに、私は花嫁にブーケを渡した。そのブーケを見ていたときに言った。(文構造の誤り)

降参です(彼女44)

〔初発の解釈〕元恋人の名前

〔後発の解釈〕辞書で語釈を確認し、「あきらめます」と解釈。

「彼の彼女の特別な日」

これは男性の視点から書かれていると思うが、元彼かパーの男の視点かはまだわからない。

僕は以前、【得意先の係長】に教わった「とっておきの殺し文句」で勝負に出た。(彼13)

私の上司は女性に話しかけるのがすごく得意だった。(誤り)

ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。(彼17)

彼女は以前冷たい笑いをしていたが、会話が面白くなってきて顔が熱くなった。(誤り)

こうして僕をからかい、煙に巻いて【逃げる】気だ。(彼24)

パーの男が逃げる。彼女はパーの男をいじめて、男は煙に包まれているような気がして、もう逃げたい。(誤り)

こんな女性を泣かせているのはどんな【男】だろう。(彼35)

〔初発の解釈〕元彼

二通りに解釈できる

〔2番目の解釈〕パーの男自身。男がつらい話題を彼女に投げかけて、つらいことを思い出させてしまったから彼女は泣いている。

〔3番目の解釈〕元彼(正しい)

朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、【あぐらをかいていた】はず。(彼40)

足を交差させて座っている。(誤り)

え、マジ？ほんとに電話するの？(彼46-47)

パーの男が彼女に電話する。(誤り)

「【おまえ】は嘘をつかない子だ。(彼48-1)

祖母がパーの男に言っている。

1編目の「彼の差し出したペンを受けとり、私はコースターに自分自身の電話番号を記した。(彼女51)」を確認した。

結末: 正しく理解

フォローアップインタビュー

ちょっとよくわからない。彼女の電話番号を彼が聞いた。元彼の電話番号を彼女に聞いたのですが、彼女は元彼ではなく自分の電話番号を書いた。彼は元彼の電話番号が書いてあると思ったので、元彼に電話して、おめでとと伝えようと思った。その電話をしたときに、元彼に彼女の電話番号を聞き出そうと。でも、ここに書いてあったのは彼女の電話番号なので、彼が彼女に電話することになって、彼女と話しをすることになる。

図 16-2 E07 のタイムライン

E07 の読解過程は次のとおりである。

① 1 編目の「別の女と晴れやかに笑っていた新郎がまだ私の恋人だった二年前。」(彼女 12)を読み、「別の女が晴れやかに笑っている、それが私の恋人だった。」と文構造で誤る。これに続く文、「いつも隣で笑っていたのは【私】のはずだった。」(彼 13)を読み、「【私】は男性。彼女の結婚式で苦い思いをしている。」と、登場人物の性別を誤って解釈するが、「新郎」の意味を辞書で調べて確認したことで、「【私】は女性。新郎が彼女の元彼氏だから。」と正しく解釈できた。

② 「いや、「【君】の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。」(彼 20)について、「元彼が彼女にメールを送った。【君】は彼女。」と当初は正しく解釈したものの、考え直して「彼からもらったメールの返事に、彼女が彼にメールを送った。【君】は彼。」であると誤った。

③ 「私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。」(彼 34)では、「結婚式のときに、私は花嫁にブーケを渡した。そのブーケを見ていたときに言った」と文構造で再び誤った。

④ 「降参です」(彼 44-1)を当初、元恋人の名前だと考えるが、辞書で意味を確認し、正しく解釈できた。

⑤ 2 編目を読み始めてすぐに「これは男性の視点から書かれていると思うが、男性は元恋人かバーの男かはまだわからない」とコメントした。

⑥ 「【得意先】の係長」(彼 13)を語構成から推測して「私の上司は女性に話しかけるのがとても得意だった」と解釈した。

⑦ 「ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。」(彼 17)について、「彼女は以前冷たい笑いをしていたが、会話が面白くなってきて顔が熱くなった」と登場人物の心情や行動を大きく読み誤った。さらに、「こうして僕をからかい、煙に巻いて【逃げる】気だ。」(彼 24)では、「バーの男が逃げる。彼女はバーの男をいじめていて、男は煙に包まれているような気がして、もう逃げたい。」と動作主体を読み誤った。

⑧ 「こんな女性を泣かせているのはどんな【男】だろう。」(彼 35)では、当初「男」は「元彼」を指すと言った。その後、「バーの男が自分自身を指している」という解釈も可能だと話し、「バーの男自身。男がつらい話題を彼女に投げかけて、つらいことを思い出させてしまったから彼女は泣いている。」と、二通りに解釈できるとコメ

ントした。しかし、最終的には「元彼」であると正しい解釈に至った。

⑨「え、マジ？ほんとに電話するの？」(彼 46-47)では、「バーの男が彼女に電話する。」と解釈し、その際に1編目の最後の文「彼の差しだしたペンを受けとり、私はコースターに自分自身の電話番号を記した。」(彼女 51)の部分を確認した。

⑩「【おまえ】は嘘をつかない子だ。」(彼 48-1)において「「おまえ」は彼女のこと」と人称詞の指示対象を誤る。

⑪結末は正しく理解できた。フォローアップインタビューでは、「結末はちょっとよくわからない」とコメントした。その理由として、「バーの男が元彼の電話番号を彼女に聞いたが、彼女は元彼ではなく自分の電話番号を書いた。バーの男は元彼の電話番号が書いてあると思ったので、元彼に電話して、おめでとうと伝えようと思った。その電話をしたときに、元彼に彼女の電話番号を聞き出そうと。でも、ここに書いてあったのは彼女の電話番号なので、バーの男が彼女に電話することになって、彼女と話をすることになる」とコメントした。このことから、「え、マジ？ほんとに電話するの？」(彼 46-47)の解釈で、バーの男の視点では本来は知りえない、彼女が自分の電話番号を書いたという情報を使っていることが、結末の理解の混乱をまねいたと考えられる。

E07 の読解過程の特徴は次のようにまとめられる。

(i) 文構造の把握の弱さが散見する。

(ii) 人称詞の指示対象で誤る。

(iii) ゼロ代名詞の指示対象の特定で誤ることが結末の理解の混乱を誘発する。

(iv) ノ格名詞句とゼロ代名詞の特定を誤ることで、登場人物の心情や行動を大きく読み誤る。

16.1.2. 韓国語母語話者 2 名の読解過程のタイムライン

K01 の読解過程

K01 の読解過程のタイムラインを示す。

「彼女の彼の特別な日」 K01

元恋人の結婚式の帰りに、初めて一人で【バーへ】立ち寄った。(彼女1)

「バーへ (bahe)」はよくわからないが、カタカナなので固有名詞だと思う。

今日、別の女と晴れやかに笑っていた【新郎】がまだ私の恋人だった二年前。(彼女12)

「新郎」は「シンタロウ」という男の名前。(誤り)

彼の選んだ【花嫁】よりも綺麗で幸せな女に見えるか。(彼女30-4)

「花嫁」の前の漢字は「花」で次の漢字はよくわからないが、彼が選んでくれたアクセサリ。(誤り)

そして何より、彼の特別な【日】に自分のことばかり考えていたことを後悔してる。(彼女33-3)

彼の特別な目に映ったのは私だけだったことを後悔している。彼の特別な目とは、彼女が元彼に愛されていることを意味している。(誤り)

今、結婚式の話をしているので、彼女は彼が選んでくれたアクセサリをしてきた。

解釈の修正

私は【花嫁】の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(彼女34)

さっき、この漢字はアクセサリといったが、それは間違いで、「ブーケ」のような気がする。

「ブーケの色に似た」ミモザはわからないが固有名詞

「花嫁」はブーケ(花束)ではなくて、付き人みたいな気がする。

「手に持っていたブーケ」なので、新婦かもしれない。

この文の意味は私は人が持っていたブーケの色と似ているミモザというものをみながら呟いた。

でも、もしもその【新郎】の番号を教えてくれたら、あなたの伝えなかった言葉を代わりにお伝えすることはできませんが.....(彼女44-4)

「新郎」は「シンタロウ」という男の名前。(修正されない)(誤り)

「彼の彼女の特別な日」

祖母の四十九日、親戚一同との会食の帰りに、初めて一人で【バーへ】立ち寄った。(彼1)

「バーへ (bahe)」は何か場所を意味する。(2回目でもbarとはわからない)

「バーへ (bahe)」は何か場所だといいましたが、お酒を飲む店だと思う。お店の名前が種類だと思う。

そんな未練を引きずりながら酒を飲み、ふと横を見ると若き日の祖母の写真にそっくりの女性が一人で酒を飲んでいた。(彼4)

「酒を飲んでいた」とある

解釈修正

だからこそ教えてやりたかった。(「彼」文番号43)

バーの男が、彼女に教えてやりたかった。「何を」はわからない。

解釈修正

この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。(彼44)

たった一人で、無理をしている彼女が呟いた「おめでとう」という言葉が重かった。(誤り)

一番最初に出てきた「バーへ」は「bahe」じゃなくて、「barに言った」という意味だと思う。

誤読が誤読をひきおこす

朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、【あぐらをかいていた】はず。(彼40)

足を交差させて座っている。(誤り)

え、マジ？ほんとに電話するの？(彼46-47)

バーの男が彼女の元彼に電話する。

結末: 正しく理解

フォローアップインタビュー

漢字みたいにわからないことが出たとき、前後の文脈からもわからないときにはちょっと迷った。「緊張して舞いあがって」「丸顔の三枚目風」。男自体がちょっと変。初めてみた女の人に声をかけたりとか、それで願いを叶えるとか、自分もできないことを話したから変だと。はじめこの男は神様とかそんな感じがしたけど、後で彼の話を見て、「えー」と。ファンタジーみたいな話かと最初は思いました。はじめはほんとに時間が戻ってそんな話になるのかなと思いましたが、結局、おとこが女の電話番号をもらいたいというストーリーだって。

図 16-3 K01 のタイムライン

K01 の読解過程の読解過程は次のとおりである。

- ① 1 編目の冒頭の文「元恋人の結婚式の帰りに、初めて一人で【バーへ】立ち寄った。」(彼女 1)を読み、「バーへ(bahe と発音する)」はよくわからないが、カタカナなので固有名詞だと思うとコメントした。
- ② 「今日、別の女と晴れやかに笑っていた【新郎】がまだ私の恋人だった二年前。」(彼 12)において、「新郎」は「シンタロウ」という男の名前だと解釈した。結局最後まで辞書で調べることなく、最後までこの解釈は修正されなかった。
- ③ 「彼の選んだ【花嫁】よりも綺麗で幸せな女に見えるか。」(彼 30-4)において、「花嫁」の 1 番目の漢字は「花」で 2 番目の漢字はよくわからないが、「今、結婚式の話をしているので、彼女は彼が選んでくれたアクセサリーをしてきた。」と解釈した。
- ④ しかし、4 文後の文「私は【花嫁】の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。」(彼女 34)を読んだところ、「さっき、この漢字(花嫁)のことをアクセサリーといったが、それは間違いで、「ブーケ」のような気がする。「花嫁」はブーケ(花束)ではなくて、付き人みたいな気がする。」とコメントした。最終的にこの文の意味を「私は付き人が持っていたブーケの色と似ているミモザというものを見ながら呟いた」であると解釈した。
- ⑤ 2 編目の冒頭の文「祖母の四十九日、親戚一同との会食の帰りに、初めて一人で【バーへ】立ち寄った。」(彼 1)において、「バー」が再度出てきた。「バーへ(bahe と発音する)」はどこかの場所であるとはかわからなかったが、その後、読み進めて「お酒を飲んでいて」(彼 4)にという一文を読んだところ、「バーへ(bahe と発音する)」はお酒を飲む店だと思う。お店の名前か種類だと思う」と修正した。しかし、「bar」であるとはまだわからない。その後、さらに先の「この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。」(彼 44)で「バーの」の形で出てきたことで、ようやく「bar」であることがわかった。
- ⑥ また、(彼 44)の意味を、「たった一人で、無理をしている彼女が呟いた「おめでとう」という言葉が重なった」(彼 44)と解釈したことがきっかけで、その直前の文「だからこそ教えてやりたかった」(彼 43)におけるゼロ代名詞を「バーの男が、彼女に教えてやりたかった。「何を」はわからない。」とコメントした。ここからある誤読が別の誤読をもたらしていることがわかる。

⑦結末は正しく理解できた。フォローアップインタビューでは、「漢字みたいにわからないことが出たとき、前後の文脈からもわからないときにはちょっと迷った。(中略)男自体がちょっと変。初めてみた女の人に声をかけたりとか、それで願いを叶えろとか、自分もできないことを話したから変だ。はじめ(1 編目では)この男は神様とかそんな気がしたが、後(2 編目)で彼の話を見て、「えー」と。ファンタジーみたいな話かと最初は思った。はじめはほんとに時間が戻ってそんな話になるのかなと思ったが、結局、男が女の電話番号をもらいたいというストーリーだった」とコメントした。

K01 の読解過程の特徴は次のようにまとめられる。

(i)漢字の字形認識の誤りが頻繁に起こる。

(ii)ひらがなとカタカナの組み合わせである「バーへ」を、「bahe」と発音する1つの語であると考え、「バー(bar)」という語で区切れないなど、字形認識のゆるさがある。

(iii)「重みを」を「重なった」と理解したことが原因で、「重みを」が前の文の目的語になっていることがわからなくなり、その結果、前の文の「ゼロ代名詞」が指しているものがわからなかった。

K06 の読解過程

K06 の読解過程のタイムラインを示す。

「彼女の彼の特別な日」K06

「それも難しいな。せめて二時間前くらいに【負けて】もらえませんか」(彼女21)

この「負ける」は勝負に負けるという意味ではない。「二時間前に戻ること」をあらためたほうがいいですよ」とバーの男が女性にすすめている。

つまらないプライドの【塊】みたいになって、全力で平静を装った。(彼30-5)

プライドの「鬼(おに)」にみたくになっている。(語学認識の誤り)

文脈と韻語がないので修正されない
33-1)

後悔の「鬼(おに)」。自分自身を鬼にたとえたのは、自分自身が過去にした行動をバカにしたり、後悔したり、否定的なイメージを持っているから。〔誤り〕

「モザ」がカクテル(お酒)だと考えないため、お酒に「酔っている」とは考えない。

【酔っている。】みっともない。(彼女40-41)

涙を流してその思い出に浸っている感じ。これは酒に酔っているのではなく、過去と新郎との思い出にふけっている。〔誤り〕

皆の前では平静を装っていたものの、祖母の【魂】が今日を限りに昇天してしまうことを思うと、おばあちゃん子の僕には並々ならない喪失感があった。(彼2)

漢字を間違っているような気がします。(前に出てきた漢字は)「鬼」じゃないような気がします。(「魂」「塊」と混同している)

【おまえ】は【人の言葉を鵜呑みにしすぎる】。年中そう
こぼしていた祖母の洪音が脳裏をかすめていく。(彼
18)

「鵜呑みにしすぎる」の意味はよくわからないが、「人が話したことを無視してしまふ」という意味。〔誤〕

「おまえはバーの女性のこと。あなたは人が言っている言葉を無視したり軽視したりする傾向がある」とバーの男は思っている。

バーの男は勇気を出して彼女に声をかけたのに、彼女は全く意気が

次の文が誰が話して

なくて、人を無視して、初めて会う人に無礼な感じがするから。

だからこぞ教えてやりたかった。(彼43)

パーの男が、彼女に教えてやりたかった。「おめでとう」の重みを

この薄暗いカーの片隅で、たがひ入で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。(彼44)

私は花嫁の手にしていたブーケの色に似た【ミモザ】を見下ろしながら呟いた。(彼女34)

ブーケは花で、花は白が多いので、「ミモザ」は体に関する単語のようである。〔誤り〕

ブーケの色に似ていて、今すぐ見られるのは自分の体の近くにあるものだから、体の一部であるような気がする。

はずが、【ミモザ】に一滴の涙が沈んでいた。(彼女 39)

「ミモザ」は何か目に関わる単語のような気がする。(誤り)

「ミモザに一滴の涙が沈んだ」とあるので、目の周りじゃないかと思う。
「落ちる」ではなく、「沈む」とあるので、目の辺にたまっているような気がする。

「彼の彼女の特別な日」

以前、会社の同僚から「星座と血液型の話をすれば女はいちころだ」と教わったのを思い出して実践してみたものの、いちころどころかますます【彼女を白けさせて終わった。】(彼11)

実践してみたものの、彼女は拒んでそれで終わってしまった。

年中そう【こぼしていた】祖母の渋面が脳裏をかすめていく。(彼19)

「こぼしていた」はわからない。

え、マジ？ほんとに電話するの？（彼46-47）

バーの男が彼女に電話する。〔誤り〕

結末：誤った理解
バーの男の願いはまだ叶っていない。

フロアアップインタビュー

漢字が難しい。それから縦書き。文法も日本語で見るとある程度理解できてるが、それを韓国語でもう一度変えるのが難しい。ストーリー自体は90%理解できた。漢字だけでなく意味がわかるが、ひらがなが途中に入っていると、(例:舞いあがって)ちよと意味がわからなくなる場合がある。韓国語にはない漢字(例:理に巻いて)はちよと難しい。漢字の音読みしかないから。

図 16-4 K06 のタイムライン

K06 の読解過程は次のとおりである。

① 1 編目の「つまらないプライドの【塊】みたいになって、全力で平静を装ってた。」(彼女 30-5)で、「プライドの「鬼(おに)」にみたいになっている。」と解釈し、語の形態認識の誤りが見られた。その 3 文後の「今は後悔の【塊】。彼との別れを後悔してる。」(彼女 33-1)を読み、「後悔の鬼」と解釈するが、これは「自分自身を鬼にたとえたのは、自分自身が過去にした行動をバカにしたり、後悔したり、否定的なイメージを持っているから。」という意味であると考えた。この解釈は文脈と齟齬がないため、初発の解釈である「鬼(おに)」は修正されないままであった。

②「私は花嫁の手にしていたブーケの色に似た【ミモザ】を見下ろしながら呟いた。」(彼女 34)の「ミモザ」は、「ブーケの色に似ていて、今すぐ見られるのは自分の体の近くにあるものだから、体の一部であるような気がする。」と言った。そして、その 5 文後の「はずが、【ミモザ】に一滴の涙が沈んでいた。」(彼女 39)を読み、「「ミモザに一滴の涙が沈んだ」とあるので、目の周りじゃないかと思う。」とコメントした。

③「ミモザ」がカクテル(お酒)であることがわからないため、その次の文に出てくる「【酔っている。】みっともない。」(彼女 40-41)を読んだときに、「酔っている」というのは、「涙を流してその思い出に浸っている感じ。これは酒に酔っているのではなく、過去の新郎との思い出にふけている。」と解釈した。

④ 2 編目の「皆の前では平静を装っていたものの、祖母の【魂】が今日を限りに昇天してしまうことを思うと、おばあちゃんっ子の僕には並々ならない喪失感があった。」(彼 2)を読んだところで、「漢字を間違っているような気がします。(前に出てきた漢字は)「鬼」じゃないような気がします。」とコメントし、「魂」と「塊」を混同している様子が見られた。

⑤「【おまえ】は【人の言葉を鵜呑みにしすぎる】。年中そうこぼしていた祖母の渋面が脳裏をかすめていく。」(彼 18)において、「鵜呑みにしすぎる」の意味はよくわからないが、「人が話したことを無視してしまふ」という意味だとコメントする。「鵜呑みにしすぎる」という未知語の解釈に、「バーの男は彼女の気をひくためにいろいろしているが彼女が白けている」という直前の文脈を使った。その結果、「おまえ」はバーの女性のことでありと誤読し、バーの男が「おまえ(彼女)は人が言っている言葉を見下したり軽視したりする傾向がある」と思っていると解釈した。ここでは、「年中そう【こぼしていた】祖母の渋面が脳裏をかすめていく。」(彼 19)の「こぼしていた」がわからないことも誤読に影響したと考えられる。

⑥「だからこそ教えてやりたかった。」(彼 43)において、「バーの男が、彼女に教えてやりたかった。彼女の言った「おめでとう」の重みを。」と誤読する。「え、マジ？ほんとに電話するの？」(彼 46-47)では、「バーの男が彼女に電話する。」と誤読する。

⑦結末について、「バーの男の願いはまだ叶っていない」と誤った理解をした。フォローアップインタビューでは、「漢字や縦書きが難しい。文法も日本語で見るとある程度解釈できるが、それを韓国語に変えてもう一度表現するるのが難しい。ストーリー自体は 90%理解できた。漢字だけなら意味がわかるが、ひらがなが途中に入っていると、(例：舞いあがって)ちょっと意味がわからなくなる場合がある。韓国語にはない漢字(例：煙に巻いて)はちょっと難しい。漢字の音読みしかないから。」と漢字についての言及が多かった。

K06 の読解過程の特徴は次のようにまとめられる。

(i)漢字の字形認識の誤り(塊→魂)が起こるが、文脈との齟齬がない場合には解釈の修正が起こらない。読み進めて文脈と齟齬が生じた場合に修正し始める。

(ii)「ミモザ」がカクテル(お酒)だとわからないことで、その後に出てくる「酔っている」がお酒に酔っているのではなく、自分自身の気持ちに酔っていると誤るような、誤読の連鎖が見られた。

(iii)未知語である「鵜呑みにする」を先行文脈から「無視する」と誤読したことで、「おまえ」を「彼女」だと誤って解釈する。

(iv)「え、マジ？ほんとに電話するの？」(彼 46-47)を誤読することで、結末の解釈でも誤るというような誤読の連鎖が見られた。

16.1.3. 中国語母語話者 2 名の読解過程のタイムライン

C08 の読解過程

C08 の読解過程のタイムラインを示す。

「彼女の彼の特別な日」 C08

元恋人の結婚式の帰りに、初めて一人で【バーへ】立ち寄った。(彼女1)

バーへ(baheと発音)の意味はわかりませんが、たぶん場所だと思う。

いや、【君】の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。(彼女20)

「君」は元彼。「心から彼の幸せを願っています」と彼女は彼の結婚報告のメールにそう書いた。彼を困らせたくない。(誤り)

だって式の間中、私が考えていたのはたった【一つきり】だから。(彼女30-2)

「つぎり」の意味がわからない(語を正しく区切れない。原本は縦書きで、「一」で行が終わり、その次の行に「つぎり」がきていて視覚的に間違えやすい)。

私は花嫁の手にしていたブーケの色に似た【ミモザ】を見下ろしながら呟いた。(彼女34)

辞書を引き、「植物」とであると解釈。

私は花嫁の手にしていたブーケのような色の植物を見ながらひとこと言った。

はずが、【ミモザ】に一滴の涙が沈んでいた。(彼女39)

「ミモザ」は「植物」のまま修正されない。

「彼の彼女の特別な日」

祖母の四十九日、親戚一同との会食の帰りに、初めて一人で【バーへ】立ち寄った。(彼1)

(バーへを「bahe」と初出と同じように発音する。)(「bahe」の意味はわからないが、さっき女性がいたところと同じ場所。

こうして僕をからかい、煙に巻いて逃げる気だ。(彼24)

こういうことを聞いて、バーの男は逃げたい。(誤り)

その男はきっと彼女が祝福の言葉を口にしなかったことなど気にしちやいないだろう。(彼38)

その男はきっと彼女の祝福の言葉を聞きたくないだろう。(文構造の誤り)

だからこそ教えてやりたかった。(彼3)

誰が=「バーの男」が、誰に=「彼女」、何を=「新郎の電話番号」を、教えて欲しいと思っている。(誰に、何を、動詞の方向性で誤る)

この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の【重み】を。(彼44)

「重み」の解釈で誤ったため、「何を」で誤る。

この薄暗いバーの片隅で、女性が「おめでとう」を繰り返している(「重み」を(かさみ)と発音した)。独り言をずっと言っている。(誤り)

え、マジ？ほんとに電話するの？(彼46-47)

バーの男が新郎に電話する(正しい)

そして願わくば、その男から彼女の電話番号を聞きだしたい。(彼52)

もし願いが叶えば、新郎も彼女の電話番号を聞けだろう。(文構造の誤り)

バーの男が新郎に電話をしたら、新郎もバーの男に彼女の電話番号を聞けだろう。

結末: 誤った理解
バーの男の願いはまだ叶っていない。

フォローアップインタビュー

バーの男が新郎に電話したら、新郎は周りの人の祝福を受け取るようにバーの男の祝福も受け取った。新郎は彼女の電話番号を聞けなかった。バーの男の願いは、新郎に彼女の電話番号を聞いてほしいこと。バーの男は新郎に彼女の願いを伝えない、それは叶わなかった。彼女はコースターに新郎の電話番号を書いた。バーの男は新郎に電話をする。
→藤原が、電話したら誰が出るかと質問して、女の人かだと解釈を修正。理由はバーの男が新郎に電話するのは現実的ではないから、と、また、あらずしを説明してもらった段階で、やと「バーへ」(Bar)と気づいた。

図 16-5 C08 のタイムライン

C08 の読解過程は次のとおりである。

- ① 1 編目の「元恋人の結婚式の帰りに、初めて一人で【バーへ】立ち寄った。」(彼女 1)において、「バーへ(bahe と発音する)の意味はわからないが、たぶん場所だと思う。」とコメントした。
- ② 「いや、「【君】の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。」(彼女 20)で、「【君】は元彼のこと。「心から彼の幸せを願っています」と彼女は彼の結婚報告のメールにそう書いた。彼を困らせたくない。」と誤読した。
- ③ 「だって式の間中、私が考えていたのはたった【一つきり】だから。」(彼女 30-2)において、「【一つきり】の意味がわからない。」と言い、語を正しく区切れていないことがわかる。これは、材料文の原本は縦書きであり、上記の文が「一」のところで改行されており、その次の行の冒頭に「一つきり」が来ていて視覚的に間違いやすいためと考えられる。
- ④ 「私は花嫁の手にしていたブーケの色に似た【ミモザ】を見下ろしながら呟いた。」(彼女 34)の「ミモザ」を辞書で調べて、「花」だと解釈し、その後も「ミモザに一滴の涙が沈んでいた。」(彼女 39)を読んでも「花」という解釈は修正されなかった。これは、1 編目の冒頭の(彼女 1)で「バーへ」を「bahe」という語だと認識し、登場人物が話している場面が「bar」であることがわからないため、ミモザがカクテル(お酒)であることがわからなかったためと考えられる。「バーへ」を誤読することで、ミモザがお酒であることがわからないという誤読を起こした可能性がある。
- ⑤ 2 編目の「祖母の四十九日、親戚一同との会食の帰りに、初めて一人で【バーへ】立ち寄った。」(彼 1)を読んでも、「バーへ」を「bahe」と初出と同じように発音し、「意味はわからないが、さっき女性がいたところと同じ場所。」とコメントした。
- ⑥ 「こうして僕をからかい、煙に巻いて逃げる気だ。」(彼 24)では「こういうことを聞いて、バーの男は逃げたい。」と動作主を誤読した。
- ⑦ 「その男はきっと彼女が祝福の言葉を口にしなかったことなど気にしちゃいないだろう。」(彼 38)を「その男はきっと彼女の祝福の言葉を聞きたくないだろう。」と文構造で誤読した。
- ⑧ 「だからこそ教えてやりたかった。」(彼 43)において、「誰が＝「バーの男」が、

誰に＝「彼女」に、何を＝「新郎の電話番号」を、教えて欲しいと思っている。」と誤読した。ここでは「誰に」「何を」「動詞の方向性」で誤った。

⑨次の文の「この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の【重み】を。」(彼 44)を読み、「この薄暗いバーの片隅で、女性が「おめでとう」を繰り返している。独り言をずっと言っている。」という意味だと考えた。これは「重み」を漢字の意味から「繰り返す」と解釈したためであると考えられる。彼 44 の「重みを」を誤読したが、彼 43 の「何を」の解釈を誤らせるという誤読の連鎖が見られた。

⑩「そして願わくば、その男から彼女の電話番号を聞きだしたい。」(彼 52)を「もし願いが叶えば、新郎も彼女の電話番号を聞くだらう。」と文構造で誤読した。

⑪結末について、「バーの男の願いはまだ叶っていない」と誤った。フォローアップインタビューでは、「彼女はコースターに新郎の電話番号を書いた。バーの男は新郎に電話をする。バーの男が新郎に電話したら、新郎は周りの人の祝福を受け取るようにバーの男の祝福も受け取った。バーの男の願いは、新郎に彼女の電話番号を聞いてほしいことだったが、新郎は彼女の電話番号を聞かず、それは叶わなかった。」とコメントした。しかし、バーの男が電話をしたら誰が出るかと確認したところ、「女の人が出る」と解釈を修正した。その理由は「バーの男が新郎に電話するというのは現実的ではないから」とコメントした。このように、結末の解釈が確定しておらず、調査者からの質問によって解釈が変わるというように流動的であった。また、あらすじを説明してもらった段階で、「バーへ」が「to bar」であるとようやく気づいた。

C08 の読解過程の特徴は次のようにまとめられる。

(i) ひらがなとカタカナの組み合わせ「バーへ」を「bahe」と発音する 1 つの語であると考え、「バー(bar)」が文中から切り出せない。また、「だって式の間中、私が考えていたのはたった【一つきり】だから。」(彼女 30-2)においても、「「一つきり」の意味がわからない。」とコメントし、文中から語を正しく区切れていないことがわかる。

(ii) 「重みを」を中国語の漢字の意味から「繰り返した」と解釈したことで、「重みを」が直前の目的語になっていることがわからなくなり、その結果、直前の文のゼロ代名詞の指示対象を誤読した。このような誤読の連鎖が見られた。ちなみに、これと同様の例が中国語母語話者 4 名にも見られたことは特筆すべきである。

(iii)「ミモザ」がカクテル(お酒)だとわからないが、これは、1 編目の冒頭の(彼女 1)で「バーへ」を「bahe」という語だと認識し、登場人物が話している場面が「bar」であることがわからないため、ミモザがカクテル(お酒)であることがわからなかったと考えられる。「バーへ」を誤読することで、ミモザがアルコールであることがわからないという誤読の連鎖の可能性がある。

(iv)「その男はきっと彼女が祝福の言葉を口にしなかったことなど気にしちゃいないだろう。」(彼 38)と「そして願わくば、その男から彼女の電話番号を聞きだしたい。」(彼 52)の文構造で誤読した。

C10 の読解過程

C10 の読解過程のタイムラインを示す。



図 16-6 C10 のタイムライン

C10 の読解過程は次のとおりである。

①1 編目の「私は花嫁の手にしていたブーケの色に似た【ミモザ】を見下ろしながら呟いた。」(彼女 34)において、辞書で「ブーケ」を調べて「花束」，「ミモザ」を調べて「植物」と理解し、この文の意味を「私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザのように見下ろされていた」と解釈し、文構造で誤った。

②「皆の前では平静を装っていたものの、祖母の魂が今日を限りに昇天してしまうことを思うと，【おばあちゃんっ子】の僕には並々ならない喪失感があった。(彼 2)」で「おばあちゃんの子ども」と解釈し、語構成からの推測で誤った。

③「【おまえ】は人の言葉を鵜呑みにしすぎる。年中そうこぼしていた祖母の渋面が脳裏をかすめていく」(彼 18)において、「祖母が言った話でも、カッコがついていないので，「おまえ」は誰のことを言っているか迷う」とコメントした。「この文は祖母がバーの男のことを言っているか，または，バーの男が彼女について言っているか，はっきりわからない」と悩みつつ，最終的には「「おまえ」はバーの男を指していると思う」と正しい解釈に至った。

④「その男はきっと彼女が祝福の言葉を口にしなかったことなど【気にしちやいない】だろう」(彼 38)の意味を「その男がきっと彼女に祝福の言葉を言わないだろうと，私(バーの男)は気にしている」と解釈し，文構造で誤読した。

⑤「だからこそ教えてやりたかった。」(彼 43)において，誰が＝得意先の係長が，誰に＝バーの男に，何を＝「互いに一つの願いを叶えましょう」というクイズ，とすべてのゼロ代名詞の指示対象で誤読した。

⑥次の文の「この薄暗いバーの片隅で，たった一人で，うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の【重み】を。」(彼 44)を読み，「重み」を漢字の意味から「繰り返す」と解釈し，「(バーの男が)1人で，無理した彼女の言葉を繰り返している」という意味だと考えた。彼 44 の「重みを」を誤読したことが，彼 43 の「何を」の解釈を誤らせるという誤読の連鎖が見られた。

⑦「え，マジ？ほんとに電話するの？(彼 46-47)」を「バーの男が彼女に電話する。」と誤読した。

⑧結末については，「結末は迷っている。彼女が誰の電話番号を書いたかちょっとあいまい。男の願いは完全に叶ったわけではない」と誤った。フォローアップインタビュー

ユーでは、「質問攻めにあっていた」(彼女 3)の「「にや」は辞書になかったので推測しなければならなかった。「質問攻め・にあっていた」という接続がわからない。」とコメントし、文から語句を正しく切り出すのに苦心した。さらに、「「にあって」の「っ」がわからないので調べたいとき、辞書形が何かわからない。自分は活用をちゃんと勉強しなかったのもコメントした。「日本語はわかり、心の中でわかっているが、今のように訳すとふさわしい中国語が思い出せない。自分の感覚だと(調査では)ずっと辞書を調べていた。「力をふりしぼって」のような「を～」のような言葉(連語)が多くてわからない。たぶん1人で読むとき、ずっと辞書で調べると読みたくなる。たぶん飽きてしまう。だいたいの意味がわかればいいという感じ。」ともコメントした。

C10 の読解過程の特徴は次のようにまとめられる。

(i) 文構造の誤りが散見された。「私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。」(彼女 34)の意味を、「私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザのように見下ろされていた。」と文構造で誤った解釈をした。また、「その男はきっと彼女が祝福の言葉を口にしなかったことなど気にしちやいないだろう。」(彼 38)の意味を、「その男がきっと彼女に祝福の言葉を言わないだろうと、私は気にしている。」と文構造で誤った解釈をした。文構造を誤るということは、誰が、誰に、何をしたという動作主や動作の方向性を誤ることであり、これは登場人物の行動やその意図を誤ることになり、ひいては小説の本来の内容から逸脱することになる。

(ii) 「重みを」を中国語の漢字の意味から「繰り返した」と解釈したことで、「重みを」が直前の目的語になっていることがわからなくなり、その結果、直前の文のゼロ代名詞の指示対象を誤読した。このような誤読の連鎖が見られた。先述したように、これと同様の例が中国語母語話者 4 名にも見られたことは特筆すべきである。

(iii) 読み終わり近くの文「え、マジ？ほんとに電話するの？(彼 46-47)」を「バーの男が彼女に電話する。」と誤読した結果、結末の理解でも迷ってしまう。

16.2. 解釈の修正

先の節で述べたように、読解過程の全体を見た場合、テキストを読み進めるにつれて解釈が修正されるのは自然な現象であった。また、テキストのある部分の解釈が困難な場合には、その箇所解釈について一旦保留したまま先を読み進め、その後、再びその部分に戻ってきて当該箇所の解釈が決定されるようなこともある。この節では、一旦決まった解釈が何をきっかけにして修正されたかについて注目する。なお、

修正後の解釈が正しい理解に至ることもあれば、誤った理解のままで終わることもあった。正しい理解に至った場合に、何が修正のきっかけとなったかがわかれば、その知見を読解教育に生かせると考える。

16.2.1. 解釈の修正をもたらしたきっかけ

表 16-1 に、読解中に解釈の修正が見られた例について、修正のきっかけとなった現象を網羅するように、代表的なものを抜粋した。表 16-1 には、解釈の修正が見られた「テキスト」、「修正前」の解釈、「修正のきっかけ」、そして「修正後」の解釈をまとめた。同じテキスト箇所について、解釈の修正があったものとなかったものの両方の例がある場合、比較のために、その両方を載せた。「修正のきっかけ」については、その現象を抽象化した表現でまとめたラベルを【 】で示した。

分析の結果、修正のきっかけは全部で 14 種類見られた。修正のきっかけは、その性質から大きく 2 つに分けられる。1 つは、テキストの言語形式に直接かかわるものであり、たとえば「助詞に注目する」といったものである。以下の①～⑥がこれに相当する。もう 1 つは、自分が文章を理解しているかどうか、また、どのぐらい理解しているかをモニターするメタ認知に関するものである。たとえば、「解釈が文脈に合わない場合、別の可能性を考える」といったものである。以下の⑦～⑭がこれに相当する。下記の修正のきっかけ①～⑭の()内の数字は、それに該当する表中の具体例である。

テキストの言語形式に関するもの

- ①助詞に注目する。(1,2,3)
- ②談話構成と視点を表す表現に注目する。(4)
- ③「おまえ」の使用制限に気づく。(5)
- ④文体の使われ方に注目する。(6)
- ⑤キーワードの理解から周辺の意味を帰納的に解釈する。(7)
- ⑥(語を文から切り出すとき)語の区切りのパターンを複数試す。(9)

メタ認知に関するもの

- ⑦(未知語や多義語との)2 回目の遭遇が語義の再検討を促す。(10,11,12,13,14,15)
- ⑧(語義の解釈で)迷ったら辞書をひく。(16,17,18)
- ⑨(辞書に語釈が複数書いてある場合、)当該文の前後にある記述のギャップに気づき、辞書の語釈を最後まで読む。(19)
- ⑩(解釈が)文脈に合わない場合、別の可能性を考える。(20)
- ⑪(解釈が)曖昧な場合、読み直す。(21,22)
- ⑫(自分の解釈に)自信がない場合、保留し、先を読んでから再検討する。(23)

⑬(内容の)矛盾に気づき、全体の(文章)構成を検討する。(24,25)

⑭(内容の)矛盾に気づき、全体を読み直す。(26,27)

表 16-1 解釈の修正

正：正しい解釈 誤：誤読 不：不確定

テキスト	修正前	修正のきっかけ	修正後	協力者 ³⁶
1 だからこそ教えてやりたかった。(彼 43)	彼は彼女に教えて欲しかった。	誤 「おめでとう」と言うのは彼女。「重みを」に「を」があるから、主語が違うことに気づいた。 【助詞に注目する】	彼は新郎に教えてやりたかった。	正 C04
	彼は彼女に教えて欲しかった。なぜ、暗いバーで1人で飲んでいるか(授受表現で誤読)。	誤 *修正なし		誤 C02
2 この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。(彼 44)	言葉を「繰り返した」	誤 「おめでとうの重み」と「の」があるので、「重み」は動詞ではない。 「を」がある。 【助詞に注目する】	重み	正 C03
	言葉を「繰り返した」	誤 *修正なし		誤 C10
3 ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。(彼 17)	彼女の顔	誤 「に」は原因を表す 【助詞に注目する】	バーの男の顔	正 C03
4 こんな女性を泣かせているのはどんな男だろう。(彼 35)	女性を泣かせるなんて自分(バーの男)はなんという男だ、と思っている。←1編目では「男」は「バーの男」を指していた。	誤 「どんな男だろう」という表現は彼はその男がどんな人か知らない時に使うもの。2編目の視点では、彼は1人称を使うはずなので、このような表現にならない。 【談話構成と視点を表す表現に注目する】	「男」は「結婚した男性」	正 E05
5 ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。おまえは人の言葉を囁呑みにしすぎる。(彼 17-18)	「おまえ」は「彼女」のこと。直前に「彼女」という人称詞があるため。	誤 おまえは人の言葉を囁呑みにしすぎる。(彼18)にカッコがないから迷う。 「おまえ」は目上の人が目下にする表現。その後に、祖母の話がある。 【「おまえ」の使用制限に気づく】	「おまえ」は「バーの男」	正 C10
6 「それも難しいな。せめて二時間前くらいに負けてもらえませんか」(彼女 21)	発話主は彼女。次の文に「私は言葉に詰まった」とあるから。	誤 この小説では、男が話すときにはいつも「です、ます体」を使っている。 【文体の使われ方に注目】	発話主はバーの男	正 C11
7 「互いに一つずつ願いを叶え合いませんか」(彼女 6) 「願い？」(彼女 7)	男が男に話しかけられている。	誤 今日、別の女と晴れやかに笑っていた新郎がまだ私の恋人だった二年前。(彼女12)→「新郎」の意味を辞書で調べ、そこから周辺の人称詞が誰を指しているか帰納的に推測した。 【キーワードの理解から周辺の意味を帰納的に解釈】	女が男に話しかけられている。	正 E07

³⁶ 該当するすべての協力者を載せたわけではない。

8	今日、別の女と晴れやかに笑っていた新郎がまだ私の恋人だった二年前。(彼女12)	「シンタロウ」という名前	誤	*修正なし		誤	E01 E04 E09 E10 E11 K01 K02 K10 K13
9	「ううん、つらくなんてなかった。だって式の間中、私が考えていたのはたった一つきりだから。〔略〕」(彼女30)	「一つきり」の意味はわからない 「一つきり」はわからない。 一瞬でそう思った。 彼とは終わった。 One ending(1つの節目)	不 不 誤 誤 誤	「一つ」「きり」で区切って辞書で調べる 【語の区切りのパターンを複数試す】 *修正なし *修正なし *修正なし *修正なし	一つきり	正	C07 C08 C04 C01 E06
10	つまらないプライドの塊みたいになって、全力で平静を装ってた(彼女30)	プライドの魂(たましい)。全身がプライドになっているという意味。	誤	「今は後悔の塊。彼との別れを後悔してる」(彼女33)→後悔の魂(たましい)。さっきの理解は正しかった。 【2回目の遭遇が語義の再検討を促す】	魂	誤	E11
11	つまらない意地の張り合いから彼を失ってしまう以前の自分に、戻れるものなら今すぐに戻してほしい。(彼女14)	あまり面白くない意志の張り合い? 「張り合い」だけを辞書で調べる。「対立からその男を失ってしまった以前の私に、戻って来られるものなら、今すぐ戻したい」と解釈。 意志 意志	誤 不 誤	「意地ばかり張っていた日々を後悔してる。」(彼女33)→「いし(意志)?」ちょっと待って。[辞書で「意地」を調べる]あー、間違えていました。 【2回目の遭遇が語義の再検討と辞書ひきを促す】 「意地ばかり張っていた日々を後悔してる。」(彼女33)→「意志」ではなく「意地」「プライド」の意味 *修正なし	意地 意地	正	K11 K03 K04 K08 K13
12	キザな文句。(彼女9)	いらっとする話。「文句」を「不満」と解釈。	誤	この人はキザなのかお人良しなのか。(彼女47)→「お人良し」と比較して、「変な人」という意味で使われている。 【2回目の遭遇が語義の再検討を促す】	変な	誤	K09
13	彼の選んだ花嫁よりも綺麗で幸せな女に見えるか。〔略〕」(彼女30)	「花」の次の漢字はわからないが、彼が選んでくれたアクセサリ(自分が身に着けている)のこと。	誤	私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(彼女34)→さっき「アクセサリ」と言ったが、「ブーケ」(花束)だと思う。はっきりしないが見たことがある。 【2回目の遭遇が語義の再検討を促す】	ブーケ ³⁷	誤	K01
14	私は花嫁の手にしてたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(彼女34)	花	誤	ミモザに一滴の涙が沈んでいた。酔っている。(彼女39-40)→「沈んでいた」「酔っている」とあるから「お酒」 【2回目の遭遇が語義の再検討を促す】	お酒	正	C01
15	結婚なんてやめて私とやりなお	「彼」は「バーの男」。彼女は1人でいたか	誤	いや、「君の幸せを心から願っています」と、結	「彼」は「元恋人」	正	C01

³⁷文構造は矛盾するが、語義を優先して解釈している。

	して。なりふりかまわずにそう頼んだら、彼は迷ってくれただろうか。(彼女 18-19)	ったので、話しかけてくる隣の男を追い出したいと考えていた。彼女が男に頼んで、男が迷ったら、彼女はここを離れられると思った。		婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。(彼女20)→「彼」は元恋人。だから、この前の文の「彼」も元恋人。 【2 回目の遭遇が指示対象の再検討を促す】			
16	降参です。(彼女 44)	名前か知らない言葉。「降る」と「参る」だが文章から意味を推測できない。	不	辞書で調べて「give up」という語釈を見る。 【迷ったら辞書をひく】	降参する。	正	E02 E03
		名前	誤	*修正なし		誤	E11
		何かから降りて、何かに参加する。	誤	*修正なし		誤	K13
		「降参」という名前。	誤	*修正なし		誤	C14
17	元恋人の結婚式の帰りに、初めて一人でバーへ立ち寄った。(彼女 1)	元彼の結婚式の帰りに、初めて1人でお酒に酔った。「バーへ」はわからず辞書で調べたが、意味が出てこない。	誤	「寄った」を辞書で調べて、「立ち寄った」と理解。 【迷ったら辞書をひく】	立ち寄った。(「バーへ」はわからない)	正	K08
18	それともただの世話好きか。(彼女 48)	「世話話が好き」(彼が彼女に話しかけているという、前に読んだ部分を先行文脈として使用)。または「世話をするのが好き」のどちらか迷う。	不	「世話好き」を辞書で調べて語釈を確認。 【迷ったら辞書をひく】	世話好き。	正	C03
19	朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、あぐらをかいていたはず。(彼 40)	辞書で調べると「あぐらをかく」は「足を組んで座る」とある。	誤	ここまでの文章では主人公の気持ちがずっと書かれているのに、ここだけ急に「足を組んで座る」という動作の説明があるか不思議。辞書の語釈を読み進め、「何もしないのに叶えたいことは全部叶った」という語釈を見る。 【当該文の前後にある記述のギャップに気づき、辞書の語釈を最後まで読む】	「あぐらをかく」を慣用句的な意味として解釈した。	正	C06
		日本式の結婚式では足を組んで座る。	誤	*修正なし		誤	E06
20	「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」キザな文句。(彼女 8-9)	苦情	誤	文脈に合わない。中国語で「文句」は「文」の意味。 【文脈に合わない場合、別の可能性を考える】	言葉	正	C04 C06
21	いや、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。(彼女 20)	「君」は「新婦」。「結婚」という言葉や、元彼が肯定的な文章を送る相手は新婦であると推測した。	誤	「結婚報告のメールに添えてよこした」とあるので、「君」は「彼女」のこと。 【曖昧な場合、読み直す】	「君」は「彼女」	正	K08
		「君」は「新婦」。	誤	*修正なし		誤	C04
22	こうして僕をからかい、煙に巻いて逃げる気だ。(彼 24)	ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。(彼17)とあるので、「彼」が逃げたい。理由はよくわからない	誤	再度読み直す。彼女は完全に僕を軽蔑した様子で無理難題を突きつけてきた。(彼21)から動作主はずっと「彼女」であることに気づく。「からかい」「逃げる」も同じ彼女。 【曖昧な場合、読み直す】	彼女	正	C11
23	おまえは人の言葉を鵜呑みにしすぎる。(彼 18)	「鵜呑み」を辞書で調べ、「人の言葉を疑いなく受け入れる」と理解。バーの男が彼女に「おまえ」と言	誤	「先を読んで考える」とコメントする。年中そうこぼしていた祖母の渋面が脳裏をかすめていく。(彼19)	「おまえ」は「バーの男」	正	E09

		っている。		→祖母が知ったらどう いう反応をするか書いて あるので、「おまえ」 は彼自身。 【自信がない場合、保留 し、先を読んでから再検 討する】			
2 4	お願いだから放 っておいてほし い。(彼女 4)	辞書で「一発放つ(性的 な定義を見る), h ave a shot(見込み がある), let off a fart(放屁する)」と いう語釈を見る。女 性に聞くようなこと じゃないので混乱し ている。	誤	僕は以前、得意先の係長 に教わった「とっておき の殺し文句」で勝負に出 た。(彼13) →彼女は彼に対して興 味を示してないのに、彼 女が彼に大胆なお願い をするのはおかしい。2 編目で当該部分になっ てもそれらしいセリフ が出てこない。 【矛盾に気づき、全体の 構成の検討】	放っておい てほしい。	正	E11
		訪問してほしい。	誤	*修正なし		誤	K18 38
2 5	ほんとに電話す るの?(彼 47)	彼が彼女に	誤	1編目で彼女は自分の 電話番号を書いたとあ ったが、2編目には彼女 はそう言ったと書いて いない。彼は驚いた口調 でもある。 【矛盾に気づき、全体の 構成の検討】	彼が結婚し た男に	正	E11
2 6	ほんとに電話す るの?(彼 47)	彼は本当に自分(彼 女)に電話をかけて くれるの?	誤	よし、こうなったら心し て新郎に電話をしよう。 (彼女50)→バーの男が欲 しいのは新郎の電話番 号なのに、なぜ彼女は自 分の電話番号をあげた のか理解できない。可能 性は2つある「バーの男 が彼女に電話する」「バ ーの男が新郎に電話す る」 【矛盾に気づき、全体を 読み直す】	結局よくわ からない。	不	C04
		女性がバーの男に電 話する(本当に電話 がかかるかどうか)。	誤	*修正なし		誤	C02
2 7	元恋人の結婚式 の帰りに、初め て一人でバーへ 立ち寄った。(彼 女 1)	はじめの1人が立っ ていた。「バーへ」は わからない。	誤	仄暗いカウンターの片 隅で胸のざわめきを鎮 めたかった。(彼女2) →ドキドキ感を鎮めた かった。「バーへ」の「へ」 は場所を表すことがわ かった。「立ち寄った」 も「立っている」ではな く「寄った」とわかった。 最初は部分的に切って 読んだため全体がわか らなかった。 【矛盾に気づき、全体を 読み直す】	1人でバーへ 寄った。	正	K10

16.2.2. 読解教育への活用

熟達した読み手として、正しい理解に至るために、前述したような解釈を修正する
きっかけをうまく活用する必要がある。この読解研究の知見は読解教育に活用で

³⁸ N2 取得者。総合的に判定して上級レベルに達しているとは言えないと結論づけた。

きる。初発の解釈を修正することで、正しい理解に至った場合に、何が修正のきっかけとなったかがわかれば、その知見を具体的なレベルに落とし込んでトレーニングするような読解教育が実践できる。

きっかけの種類のうち、テキストの言語形式に関するもの(①～⑥)はいずれも具体的であり、明示的に指導もしやすい。読解教材を作成する際は、このきっかけを実際に使って解くような問題作成も難しくはないだろう。

一方、メタ認知に関するきっかけについてはどうだろうか。⑦は「未知語や多義語との 2 回目の遭遇が語義の再検討を促す」というものであるが、これは、特に意識せずとも、初発の解釈を確認できる機会となるため、修正が起こりやすいといえる。

⑧と⑨は辞書の使用に関するものである。ここでわかるのは、語義の解釈で迷った場合、辞書を引くことが有効であり、その際、注意すべきは辞書の語釈を最後まで読むということである。しかし、読解中に辞書を引いたり、その語釈を最後まで読むというのは、読解の行為自体を一時的に中断することになるため、読み手にとって負担が大きいとも考えられている。よって、読解中にどのような行動にどの程度認知資源を配分するかというバランスが問題になってくる。

⑩は「解釈が文脈に合わない場合、別の可能性を考える」というものである。一つの解釈にとらわれなくて、柔軟に別の可能性を考える習慣をつけることが重要であることがわかる。また、⑪と⑫はいずれも初発の解釈に自信がない場合である。ここでは、読み直しや、解釈を確定せずに一旦保留して先を読み進めることが有効である。読み進めながら、ある部分については解釈を決めなくて頭の片隅に保留しておくというのも、先に述べた読解中に辞書を引くことと同様に、読み手に負担がかかる行為である。

最後の⑬と⑭は、内容の矛盾に気づき、全体の文章構成を検討したり、全体を読み直すものである。しかし、「内容に矛盾がないかどうか気をつけながら読む」というような、具体的な手がかりを提示しない暗示的な指導は、「気をつけて読め」というように、ともすれば精神論になりがちである。このようにメタ認知に関するきっかけの暗示的な指導は、①～⑥のような明示的な指導と異なり、実用化には難しい面があるのは確かである。しかし、読解時に必要とされるストラテジーであるため、学習者が身につけられるように工夫した指導が望まれる。

熟達した読み手であるために、解釈の柔軟性や読み直しが重要であることは、日本語母語話者の文章理解研究を論じた内田(1995)も指摘する通りである。内田は文章理解とは一種の問題解決の過程であり、その際に行われる読み直しについて次のように述べている。「読み直し」とは、前出の文に書かれていることを確認したり、当該の文について構成した解釈について、前出の文の解釈を確認したり、後から構成された解釈との関係から前出の文の解釈をつくりなおすものである。また、今読んでいる単語の意味を文脈との関係で捉えようとすることも含まれる。そして、この「読み

直し」は読解活動の中心的なプロセスであると結論づけている。

以上のことから、熟達した読み手であるために、解釈を修正するきっかけをうまく活用できることが望まれる。

16.3. 正しい理解に修正される過程

これまで見てきたように、文章理解において解釈が確定する過程は、行きつ戻りつする動的なものであることがわかった。また、正しい理解に至るために、解釈を修正するきっかけをうまく活用する必要があることもわかった。この節では、一旦つくられた誤った解釈が正しい理解に修正される過程を詳細に見ていく。

16.3.1. 主張

この節では、上級レベルの中国語母語話者が小説を読んだときに、初めは理解が困難だったり、解釈を誤ったりしていたが、その後正しい理解に修正される過程について述べる。解釈が何をきっかけにして修正され、どのようにして正しい理解に至ったかについて具体例をあげながら示す。

この節で論じる動的な読解過程についての主張は(1)から(3)である。

(1) 文章中に明示されている要素の動的な解釈過程

読解は文章に書かれている語句や文がどのような意味かを解釈することである。文章に明示的に書かれている語句や文について、学習者はその意味やそれが指す内容を当初誤って解釈する場合がある。このような場合の例として、次の4つの場面で動的な解釈過程が見られた。(i)語句の区切り方、(ii)漢字語の解釈、(iii)多義的な表現の解釈、(iv)人称詞の指示対象の解釈である。

(2) 文章中に明示されていない要素の動的な解釈過程

文章には、明示的に書かれている語句のほかに、明示的に書かれず、文章の表層には出ていないものがある。たとえば、省略された主語や目的語である。このような文章中に明示されていない要素について、学習者は読みながらそれを特定しなければならない。その特定を当初誤って解釈する場合がある。このような場合の例として、次の4つの場面で動的な解釈過程が見られた。(i)動作主の特定、(ii)主語と目的語の特定、(iii)会話文の発話主の特定、(iv)ノ格名詞句の特定である。

(3) 解釈を修正するきっかけ

学習者は、初めは理解が困難だったり、解釈を誤ったりしていたが、次の

(i)から(vii)がきっかけとなって、解釈を修正し、正しい理解に至った。(i) 未知語の語句の区切り方が間違っていることに気づく。(ii) 解釈した意味が前後の文脈と合っていないことに気づく。(iii) 語に複数の意味があることに気づく。(iv) 「おまえ」のような待遇性のある表現の使用制限に気づく。(v) 前の文に出てきた主語が、後続する文で明示されていなくても、文を超えて継続していることに気づく。(vi) 文中の助詞を再度読み直すことで、文の正しい構造に気づく。(vii) 登場人物の会話で、文体が使い分けられていることに気づく。

この節の構成は次のようになっている。最初に 16.3.2. でこの論文で扱うデータについて説明する。そのあと中国語を母語とする上級日本語学習者が小説を読むときの動的な読解過程について例を挙げながら見ていく。具体的には、16.3.3 で文章中に明示されている要素の動的な解釈過程について述べたあと、16.3.4. で文章中に明示されていない要素の動的な解釈過程について述べる。最後に 16.3.5. で動的な解釈過程について整理したうえで、どのようなことが解釈を修正するきっかけとなったかについてまとめる。

16.3.2. 調査概要

調査協力者は、中国語を母語とする上級日本語学習者 16 名である。全員日本の大学で学ぶ 20 代の留学生で、日本語能力試験の N1 を取得している。

読解過程のデータの収集方法は第 9 章、第 13 章に書いてある内容と同じである。調査は 2016 年 4 月から 2019 年 1 月にかけて実施した。

16.3.3. 文章中に明示されている要素の動的な解釈過程

語句の区切り方の解釈

学習者は未知語が文章中に出てきたとき、辞書で意味を調べることがある。その際、辞書の項目に合うように未知語をうまく区切ることができないと、辞書で適切な意味が出てこないため、語句の区切り方の可能性を何通りも試すことがある。

次の(4)の「一つきり」は「一つ」と「きり」からなる句で、「一つだけ」という意味であり、後続の 2 文の内容を指している。

- (4) 「[省略]だって式の間中、私が考えていたのはたった一つきりだから。自分はちゃんと微笑んでいるか。彼の選んだ花嫁よりも綺麗で幸せな女に見えるか。[省略]」

(森絵都「彼女の彼の特別な日」 p.29)

学習者は当初「一つきり」の意味がわからなかったが、辞書を使って最終的に正しい理解に至った。そのときのコメントが(5)である。

- (5) 「ひとつきり」[と言いながら辞書で調べる]。辞書にはこの言葉がない。文の切り方が間違っているかな。では、「つきり」だけ調べる。[辞書で調べる] あら、これもない。あー、わかった。「一つ」と「きり」ですね。「一つだけ」の意味だ。

当初、「一つきり」という語をそのまま辞書に入力しても意味が出てこなかった。それで、語句の切り方が違うのではないかと気がついたことがきっかけで、何通りかの区切り方を試したところ、「きり」が「だけ」という意味だとわかり、最終的に正しい理解に至った。このように、文字列の区切り方の可能性をいくつか考えながら、辞書を引いて文脈に合う意味をあてはめようとする動的な解釈過程が見られた。読解中にこの 2 つの行動を同時に行うことは、学習者にとって負担が重いと考えられるが、この学習者はそれに対応できた。

次の(6)は「一つきり」が未知語だったが、辞書で調べなくても正しい理解に至った事例である。別の学習者は(6)のようにコメントした。

- (6) 「一つきり」の「きり」はわからないが、その部分は無視して、「一つ」と理解した。指している内容は後ろの文。

学習者は「一つきり」という語句を正しく区切ることができ、その上で、「きり」という未知語の部分を見捨てることで、その意味にひっぱられずに正しい理解に至った。このように、語句の意味を推測する際、未知語の部分を見捨てる方法が常に成功するとは限らないものの、場合によっては有効であると言える。

漢字語の解釈

学習者は未知の漢字語が出てきたとき、その漢字語を自分の持っている漢字の知識や、語の組みあわせを手がかりにして意味を解釈する。

次の(7)の「世話好き」は「人の世話をすることが好き」という意味である。学習者はその語を構成する漢字 1 つずつの意味を足し合わせて、「世間の話をするのが好き」という意味に捉えたものの、解釈を決めかねている。そのときの学習者のコメントは(8)のとおりである。

- (7) この人はキザなのかお人良しなのか。それともただの世話好きか。(森 絵都「彼女の彼の特別な日」 p.31)

- (8) 「世話好き」は、「世間の話をするのが好き」という意味なのか、または、「世話をするのが好き」という意味なのか、どちらだろうか。

学習者が「世間の話をするのが好き」と考えた理由として、その前に読んだ部分の文脈情報も影響していると考えられる。(7)の「世話好き」が出てくる前に、バーで初めて会った彼が彼女に星座や血液型などいろいろと質問し、「互いに願いを叶え合いませんか」と持ちかける場面が描かれている。それで学習者はその文脈情報を使い、「世話好き」を「世間の話、つまり、他人の話を聞くのが好き」と解釈した。しかし、学習者はその解釈に確信が持てず、「世話好き」の意味を辞書で調べ、その語釈を参照し、「人を助けるのが好きな人」と正しい理解に至った。このように、未知の漢字語が出てきた際、自分の持っている漢字の知識や、語の組みあわせを手がかりにして意味を解釈しようとする動的な解釈過程が見られた。

もう1つ事例を示す。(9)の「重み」は「重要性」という意味である。しかし、学習者は、自分の持っている中国語の「重」という漢字の知識を使って、(10)のように「繰り返す」という動詞であると誤って解釈した。

- (9) 彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。

(森絵都「彼の彼女の特別な日」 p.36)

- (10) 彼女の呟いた「おめでとう」という言葉を繰り返した。

しかし、学習者は文中の助詞を見直し、「重み」の前に「の」という助詞があることで、「重み」が動詞ではないことに気がついた。それがきっかけとなり、(11)のように解釈を修正し、正しい理解に至った。

- (11) さっき言ったことはちょっと違う。「繰り返した」ではなく、「重み、つまり、心の中で感じた重さ」のこと。

学習者が当初「繰り返した」と解釈した理由として、中国語の「重」には(12)のように複数の品詞と意味が対応していることがあげられる。

(12) 重

- a. [動詞] 重ねる。繰り返す。重んじる。
- b. [副詞] 重ねて。もう一度。
- c. [形容詞] 重い。
- d. [名詞] 重さ。

(白水社『白水社 中国語辞典』)

中国語を母語とする上級学習者が「重み」のような漢字表記の和語の意味を推測する際、漢字の意味を手がかりにすると、複数の品詞と意味の候補が考えられる。そのため、そこから意味を1つ特定するのは困難なことがあると考えられる。

多義的な表現の解釈

語はしばしば複数の意味があり、多義的な性質を持つ。そのため、学習者は読解中に、複数ある意味の中から、読解している文脈ではどの意味が適切であるかを考える必要がある。

たとえば、(13)の「文句」という語には「語句」と「苦情」の二つの意味があるが、(13)では「語句」の意味である。しかし、学習者は迷いながらも「苦情」と解釈した。そのとき(14)のようにコメントした。

(13) 私が席を立ちかけた瞬間、男は言った。

「互いに一つずつ願いを叶え合いませんか」

「願い？」

「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」

キザな文句。

(森絵都「彼女の彼の特別な日」 p.28)

(14) 日本語での読み方は「もんく」で、意味はたぶん「苦情」みたいな感じ。でもここだと「苦情」の意味にはならないかな。

学習者は当初「文句」を「苦情」と考えたが、文脈に合わないことに気がついた。それがきっかけとなり、別の解釈の可能性を考え始めた。その際、中国語の日中同形語の知識を使って、「文や句」と解釈し、正しい理解に至った。そのときのコメントは(15)のとおりである。

(15) 「文句」は中国語から見ると「文」の意味。そうすると、ここでは「文」とか「一句」という意味だと思う。

学習者は語の持つ多義的な性質を理解しており、文脈に合ういくつかの可能性を検討したのちに、1つの意味を選んでいる。このように柔軟に語の解釈を変える動的な解釈過程が見られる。

動的な解釈過程が見られた要因を語彙の面から考えてみる。日本語と中国語はともに漢字を使い、漢字表記が同じである「日中同形語」が多い。「文句」もその1つである。しかし、日本語では「語句」と「苦情」の2つの意味がある一方、中国語には「語句」の意味しかない。よって、「文句」は日中同形語であるが、意味の上では、日本語のほうが中国語よりも意味が広い語と言える。このような語と意味の対応関

係を考えると、中国語を母語とする上級学習者の場合、日中同形語の解釈の修正は高頻度で行われていると考えられる。

(16)はカタカナ表記の多義的な表現において動的な解釈過程が見られる事例である。「ミモザ」という語には「ミモザ(*mimosa*)という黄色の小さい花」の名前とその花の色に似た「カクテル」の名前の2つの意味がある。(16)では、バーで女性が飲んでいる「カクテル」の意味である。学習者は(17)のようにコメントし、当初、ミモザを「花」か「お酒」のどちらかだろうと解釈した。「ミモザ」は(16)で2回出てくるが、最初に出てきた時点ではどちらの意味であるか決められなかった。

(16) 私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。

「どんなにつらくても、彼にちゃんと伝えたい」

「なんて？」

「結婚おめでとう」

無理をして微笑んだ。はずが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。酔っている。

(森絵都「彼女の彼の特別な日」 p.30)

(17) 彼女はバーにいる。「ミモザ」はバーにあるものだから花かお酒だと思う。

しかし、文を読み進めて、2度目の「ミモザ」が出てきたことがきっかけとなり、「花」と「お酒」の2つの意味のうちどちらがより文脈に合うか考えなおし、(18)のように解釈を修正し、正しい理解に至った。

(18) 「ミモザに涙が沈んでいた」「酔っている」とあるから「お酒」の意味かもしれない。

また、多義的な表現となるものの一つに「あぐらをかく」のような連語や慣用句がある。國廣哲弥(1985)は、連語はそれを構成している個々の語の意味がわかっているならば解釈できるもの、一方、慣用句は結合が完全に固定していて、全体の意味はその構成語個々の意味からは出てこないものとしている。たとえば、「あぐらをかく」を辞書でひくと、(19)のように説明されている。a.は連語として字義通りの意味、b.は慣用句としての意味である。

(19) あぐらをかく

a. 足を組んで楽な姿勢で座る。

b. 自分は何の努力もせず、あるものに頼ってゆうゆうと構えている。ずうずうしく構える。

(三省堂『大辞林 第三版』)

(20)では「あぐらをかく」は慣用句としての意味で使われている。

- (20) その男はきっと彼女が祝福の言葉を口にできなかったことなど気にしちやいないだろう。なんせ自分の結婚式だ。朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、あぐらをかいていたはず。

(森絵都「彼の彼女の特別な日」 p.36)

(20)について、学習者は辞書で「あぐらをかく」の意味を調べたあと(21)のようにコメントした。

- (21) 「あぐら」を辞書で調べると、「あぐらをかく」があり、その意味は「足を組んで座る」と説明されている。ここまでの文章では主人公の気持ちがずっと説明されていたのに、なぜ、ここで急に「足を組んで座る」という動作の説明があるか不思議。

このコメントから、学習者は「あぐらをかく」を慣用句としての意味ではなく、足を組んでいるという字義通りの意味に解釈していることがわかる。しかし、辞書の語釈を読み進め、(22)のようにコメントした。

- (22) 辞書ではその意味の下にもう 1 つ「何もしないのに叶えたいことは全部叶った」とある。比喩的だがここではこの意味だ。

学習者は辞書を引いて「あぐらをかく」の意味を解釈する際、字義通りの意味と慣用句の意味の両方の可能性の中から、どちらが文脈に合うか検討している。辞書を引きながら文脈に合う意味をあてはめようとする処理は負担が重いと考えられるが、この学習者は、辞書の語釈の 1 番目に書いてある意味にとどまらず、2 番目に書いてある意味も検討することで正しい理解に至った。

宮地裕(1982:6-7)によると、中国語には慣用句の意味をあらわす「あぐらをかく」に相当する表現がない。このことが当初「あぐらをかく」が慣用句としての意味を持っていることに気づきにくい要因になった可能性も考えられる。

人称詞の指示対象の解釈

文章を理解するためには、「彼」や「彼女」などの人称詞が、文章中の誰を指しているかを特定しなければならない。たとえば、(23)に 2 回出てくる「彼」は彼女の「元恋人」のことである。

- (23) 結婚なんてやめて私とやりなおして。なりふりかまわずにそう頼んだら、彼は迷ってくれたらどうか。いや、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。(森絵都「彼女の特別な日」 p.29)

学習者は、(23)の「彼」が誰を指しているかについて(24)のように誤った解釈をした。その解釈の理由としてそれまでに読んできた文脈を参照して、(25)のようにコメントした。

- (24) 「彼」は「バーで彼女に話しかけてきた男」のこと。
(25) 彼女は一人でいたかったので、いろいろ話しかけてくる隣の男を追い出したいと考えていた。もし、彼女が頼んで、この男が迷ったら、彼女はここから離れられると思った。

しかし、(23)の3文目に再度「彼」が出てきたため、誰を指すかを考え直したところ、「元恋人」であると正しい理解に至った。その際、解釈を修正したきっかけについて(26)のようにコメントした。

- (26) 「結婚報告のメールに添えてよこした彼」とあるので、「彼」というのは結婚した「元恋人」のことだとわかった。

学習者は後の文に出てきた「彼」が「元恋人」を指していることを確定してから、そこから前の文にさかのぼって、1つめの「彼」も「元恋人」であると正しく理解できた。このように「彼」のように同じ語が文章中で近い位置に何度か出てきた場合、一度つくった解釈を見直すきっかけとなり、正しい理解に至ると考えられる。

(27)は学習者が「おまえ」という人称詞の指示対象を誤る事例である。

- (27) 振り向いた彼女の冷笑に顔が熱くなった。おまえは人の言葉を^{うの}鵜呑みにしすぎる。年中そうこぼしていた祖母の渋面が脳裏をかすめていく。(森 絵 都「彼の彼女の特別な日」 p.35)

(27)はバーの男が「おまえは人の言葉を鵜呑みにしすぎる」と祖母に言われたことを回想している場面である。よって、「おまえ」はバーで彼女に話しかけた男を指す。

しかし、(28)のように、学習者は「おまえ」の直前に出てきた「彼女」を指すと誤って解釈した。

(28) 「おまえは」は「彼女」のこと。

その後、学習者は「おまえは人の言葉を鵜呑みにしすぎる」の文にカッコがないことを指摘し、(29)のように誰が話した内容か迷ってしまうとコメントした。

(29) 「おまえ」の文は誰が話したかはっきりわからないが、たぶん祖母だと思う。
ただ、祖母が言った話でも、カッコがついていないから迷う。

学習者が「おまえ」が誰を指し、「おまえ」の文を誰が発話したか迷った要因として次の2つが考えられる。1つめは、(29)のコメントにあるように、登場人物が話した内容にカッコがついていないことが挙げられる。小説では登場人物が話した内容がカッコつきで示される場合と、(27)のようにカッコがつかずに地の文に書かれている場合がある。(27)の「おまえは人の言葉を鵜呑みにしすぎる」という文にカッコがついていないため、祖母が話した内容であるとわかりにくい。そのため、バーの男が心の中で彼女に向かって「おまえ」と語りかけているように読み取れる。2つめは、「おまえは人の言葉を鵜呑みにしすぎる」という発話の後に、その発話主である祖母が登場する順番になっていることが挙げられる。

しかし、その後、学習者は「おまえ」という表現が目上の者が目下の者に使う言葉だと気づいたことがきっかけとなり、解釈を修正し、正しい理解に至った。そのときのコメントが(30)である。

(30) 「おまえ」の文のあとは、祖母の話をしている。そして、「おまえ」は上の人が下の人に使う言葉なので、祖母が言った話だ。だから、「おまえ」は男の人を指している。

このように「おまえ」のような人称詞は発話主との関係で指示対象が特定されるため、両者の関係性を正しく読み解く必要がある。学習者は、「おまえ」という表現は目上の者が目下の者に使うというような待遇性と、「おまえ」の使用制限に気づいた。それが、当初つくった解釈を見直すきっかけとなり、正しい理解に至ることになった。

16.3.4. 文章中に明示されていない要素の動的な解釈過程

動作主の解釈

日本語では動作主が明示されないことが多い。そのため、文章の意味を解釈するために、明示されていない動作主を文脈に合うように特定する必要がある。たとえば、次の(31)で「煙に巻いて逃げる」のは「彼女」であるが、学習者は当初「僕」だと誤って解釈する。

- (31) 彼女は完全に僕を軽蔑した様子で無理難題を突きつけてきた。二年前に戻りたい。二日前に戻りたい。こうして僕をからかい、煙に巻いて逃げる気だ。
(森絵都「彼の彼女の特別な日」 p.35)

学習者は、(31)の文で「逃げる」のは誰かについて(32)のように解釈した。

- (32) この文の前に、「僕は彼女に冷笑されて、顔が熱くなった」と書いてあり、つまり、恥ずかしくなった「僕」がその場から「逃げたい」ということ。だけど、よくわからない。

このように、学習者は前に出てきた文脈情報を使って、明示されていない動作主を推測している。しかし、本当にそれでいいのかと再度読み直し、次のように解釈を修正した。

- (33) ここでは、「彼女は」の文が続いているので、「からかう」のも「逃げる」のも全部同じ「彼女」を指している。

学習者は文を読み直した結果、「彼女は」がずっと続いていることに気がついたことがきっかけとなり、「誰が逃げるか」を正しく理解できた。つまり、前の文に出てきた動作主が、後続する文で明示されていなくても、文を超えて継続していることに気づくことで正しい理解に至ることができたと言える。

主語と目的語の同時の解釈

授受表現は述語の方向性が決まっていることで「誰が」のような主語と「誰に」のような目的語が暗示されるため、それらが非明示になりやすい。ときには主語と目的語の両方が非明示となり、その特定は学習者にとって困難な場合がある。

次の(34)では、「～テヤル」のような授受表現を含む「だからこそ教えてやりたかった」という文の「誰が」「誰に」は明示されていない。

- (34) その男はきっと彼女が祝福の言葉を口にしなかったことなど気にしちやいないだろう。なんせ自分の結婚式だ。朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、あぐらをかいていたはず。[省略] だからこそ教えてやりたかった。この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。
(森絵都「彼の彼女の特別な日」 p.36)

実線部では「誰が」「誰に」「何を」を特定する必要がある。主語が非明示となっているが、主語は僕(彼)であり、僕(彼)は、その男に、「彼女の呟いた「おめでとう」の重みを、教えてやりたかった」が正しい。しかし、当初学習者は(35)のように誤った解釈をした。

- (35) 彼は彼女に教えてほしかった。

学習者はその解釈を一旦保留し、文章を読み進めた。そして、(36)のように解釈を修正した。その理由として(37)のようにコメントした。

- (36) 前は間違って訳した。彼はこのことを新郎に伝えたい。この女性がたった一人で薄暗いバーの片隅で呟いた「おめでとう」という言葉を。
(37) 「だからこそ教えてやりたかった」の文には主語がなかった。それでその後の文を見ると、「おめでとう」と言う人はこの女性のほうだとわかった。そして、「重みを」の「を」を見て、初めて主語が違ったことに気づいた。だから、「彼はその男に教えてやりたかった」という意味。

このように、「おめでとう」と言う人物が誰であるかを読み直し、「を」があることに気がついたことがきっかけとなり、解釈を修正し、正しい理解に至った。

授受表現の文の解釈を難しくさせるのは、次のような要因が重なっているためと考えられる。まず、明示されない主語と目的語を同時に特定しなければならない。その上、「何を」の部分が授受表現の文とは別の文になっている。さらにその「何を」の部分を見ると、「この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた」が「おめでとう」にかかる長い修飾構造になっており、かつ、その「おめでとう」の重みを、と文が途中で終わっているためである。

(38)でも、学習者は「え、マジ? ほんとに電話するの?」という文の明示されていない「誰が」「誰に」の特定で困難を感じ、解釈の修正をした。

- (38) とはいえ、彼女が本気でコースターに電話番号を書きだしたときはびっくり

した。え、マジ? ほんとに電話するの?

(森絵都「彼の彼女の特別な日」 p.37)

(38)も主語が非明示であるが、主語は僕(彼)である。よって、主語と目的語を明示すると、「僕は新郎にほんとに電話するの?」となる。しかし、学習者は(39)のように前に読んだ部分を再度読み直したあと、(40)のようにコメントした。そして、(41)のように誤った解釈をした。

(39) この[コースターに書いた]電話番号は彼女のものだったはず。ちょっと前に戻って確認します[前に読んだ箇所を黙読する]。

(40) 確かに、女性は自分の電話番号を書いた。つまり、「彼はほんとに自分に電話をかけてくれるの?」という意味。

(41) バーの男性がバーの女性に電話をかける。

その後学習者はこの2文先にある「よし、こうなったら新郎に電話しよう」まで読み進めたところで、前の解釈を修正し、(42)のようにコメントした。

(42) んーなんかこの前の「電話する」というのは間違っただけみたい。ちょっとよく理解できなかったのは、バーの男が欲しがっていたのは新郎の電話番号なのに、なぜ女性は自分の電話番号をあげたのか。だから、「ほんとに電話するの?」を見ると可能性が2つあります。別の可能性は「バーの男が新郎に電話する」。

学習者は正しい理解に至ったものの、登場人物の行動の意図を理解できておらず、(43)のように自分の解釈に自信がないとコメントする。

(43) でも、彼女が書いたのは自分の電話番号だから、結局、この電話、バーの男が誰にするのかわからなくなってしまう。

文中で主語を逐一言語化する言語を母語とする学習者にとって、主語が明示されない「だからこそ教えてやりたかった」「ほんとに電話するの?」のような日本語の文の解釈には困難が伴う。

会話文の発話主の解釈

小説は地の文とカッコで括られた会話文からなる。日本語の小説では、会話文は誰が発話したか明示されていないことが多いため、発話主を特定しなければならない。

(44)の「それも難しいな」の発話主は「バーの男」であるが、学習者は当初「彼女」とであると解釈した。そう解釈した理由を(45)のようにコメントした。

- (44) 結婚なんてやめて私とやりなおして。なりふりかまわずにそう頼んだら、彼は迷ってくれたらどうか。いや、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。「それも難しいな。せめて二時間前くらいに負けてもらえませんか」私は言葉に詰まった。

(森絵都「彼女の彼の特別な日」 p.37)

- (45) 「それも難しいな」の次の文に「私は言葉に詰まった」とあるから、発話主は「彼女」である。

しかし、文章をもう一度読み直し、地の文と会話文の繋がりを確認したところ、「バーの男」だと解釈を修正する。解釈を修正するきっかけとなったのは(46)のコメントにあるように「会話文」の文体であった。

- (46) バーの男が話すときにはいつも「です、ます体」で話している。だから、「それも難しいな。せめて二時間前くらいに負けてもらえませんか」はバーの男が話している。

当初学習者は、地の文とカッコで括られた会話文の繋がりが正しく読み取れず解釈を誤ったが、「です、ます体」のような会話文の文体に注目したことで、正しい理解に至った。

ノ格名詞句の解釈

日本語で明示されない要素の1つにノ格名詞句がある。(47)の「顔」という名詞は、「誰の」を示すノ格名詞句を特定する必要がある。(47)は小説の語り手が「僕」であることが読み手に了解されているとし、「僕の顔が熱くなった」の「僕の」の部分は明示されていない。この文で当初学習者は「彼女の顔が熱くなった」と誤った解釈をした。

- (47) 「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」
ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。

(森絵都「彼の彼女の特別な日」 p.35)

学習者は「彼女が冷笑して、彼女の顔が熱くなった」と誤って解釈したが、助詞の「に」の機能に気がつき、(48)のようにコメントした。

(48) ちがうちがう, (彼女の冷笑)「に」は原因を表すと思う。

このように「に」の機能に気がついたことがきっかけとなり, (49)のように解釈を修正し, 正しい理解に至った。

(49) だから, 「彼女が冷笑したことに僕の顔が赤くなった」という意味。つまり, このバーの男はとっておきの殺し文句を使って, 彼女と親しくなりたかったが, 彼女が冷笑したことで, この男の計画が全部だめになったということ。

文章中で明示されない要素にはいくつかの種類があるが, それらの特定は上級学習者でも困難を伴う。

16.3.5. まとめ

この節では, 中国語を母語とする上級学習者が日本語の小説を読むときの動的な読解過程を明らかにした。具体的には, 上級レベルの中国語母語話者が日本語で書かれた小説を読んだときに, 初めは理解が困難だったり, 解釈を誤ったりしていたが, その読解が何をきっかけにして修正され, どのようにして正しい理解に至ったかについて示した。その内容は(50)と(51)のようになる。

(50) 文章中に明示されている要素の動的な解釈過程

文章中に明示的に書かれている語句や文について, 学習者はそれが指す内容を当初誤って解釈する場合がある。このような場合の例として, 次の4つの場面で動的な解釈過程が見られた。(i)語句の区切り方, (ii)漢字語の解釈, (iii)多義的な表現の解釈, (iv)人称詞の指示対象の解釈である。

(i)では, 「一つきり」という語をそのまま辞書に入力しても意味が出てなかった。それで, 語句の切り方が違っていることに気づき, 何通りかの区切り方を試したところ, 最終的に正しい理解に至った。

(ii)では, 「重み」という語の意味を, 中国語の「重」という漢字の知識を使って, 「繰り返す」という動詞であると誤って解釈した。しかし, 文中の助詞を見直し, 「重み」の前に「の」という助詞があることに気づき, 正しい理解に至った。

(iii)では, 「文句」という語には「語句」と「苦情」の二つの意味があり, どちらの意味であるか特定するのに困難を覚えた。当初「苦情」と解釈したが, 文脈に合わないことに気づき, 別の解釈の可能性を考え, 最終的に正し

い理解に至った。

(iv)では、「おまえ」という人称詞が、文章中の誰を指しているかを特定する必要がある。当初直前に出てくる「彼女」を指すと考えたが、「おまえ」という表現が目上の者が目下の者に使う言葉だと気づき、解釈を修正し、正しい理解に至った。

(51) 文章中に明示されていない要素の動的な解釈過程

文章中に明示的に書かれていない語句について、学習者は特定する必要がある。しかし、その特定を当初誤って解釈する場合がある。このような場合に、次の4つの場面で動的な解釈過程が見られた。(i)動作主の特定、(ii)主語と目的語の特定、(iii)会話文の発話主の特定、(iv)ノ格名詞句の特定である。

(i)では、「僕をからかい、煙に巻いて逃げる気だ」という文で、「逃げる」の明示されていない動作主を「僕」と当初誤って解釈した。しかし、文を読み直し、前の文に出てきた動作主である「彼女」が、文を超えても継続していることに気づき、正しい理解に至った。

(ii)では、「だからこそ教えてやりかった」という文で、明示されていない「誰が」「誰に」を特定するのが困難だった。しかし、後続する文の助詞を読み直すことで、文の正しい構造に気づき、正しい理解に至った。

(iii)では、会話文において明示されていない発話主の特定で誤った。しかし、「です、ます体」のような会話文の文体の使い分けに気づき、登場人物の話すスタイルを手がかりにすることで、正しい理解に至った。

(iv)では、「ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった」という文で「僕の顔が熱くなった」の「僕の」の部分が明示されていないため、「彼女の顔が熱くなった」と誤って解釈した。しかし、文中の助詞を読み直し、助詞の「に」の機能に気がついたことがきっかけで、正しい理解に至った。

(50)も(51)も中国語を母語とする上級学習者が小説を読む上で困難となる事例を捉えたものである。学習者は、初めは理解が困難だったり、解釈を誤ったりしていたが、(52)から(58)のようなことがきっかけとなって、解釈を修正し、正しい理解に至った。

(52) 未知語の語句の区切り方が間違っていることに気づく。

(53) 解釈した意味が前後の文脈と合っていないことに気づく。

(54) 語に複数の意味があることに気づく。

(55) 「おまえ」のような待遇性のある表現の使用制限に気づく。

- (56) 前の文に出てきた主語が、後続する文で明示されていなくても、文を超えて継続していることに気づく。
- (57) 文中の助詞を再度読み直すことで、文の正しい構造に気づく。
- (58) 登場人物の会話で、文体が使い分けられていることに気づく。

解釈を修正するきっかけとなった(52)から(58)のような知見は、読解がうまくできない学習者に何を指導したらよいか考えるためのヒントとなる。本章で示したきっかけの事例は一部にすぎず、実際はさらに多くのきっかけが存在するはずである。今後の課題はそのきっかけの事例をより多く収集することである。

最後に、調査で見られた上級学習者らしい上手な読解についてまとめる。それは、語句の意味を辞書で調べながら文脈に合う意味を順番に検討し、あてはめようとする処理を上手に行うこと、解釈を一旦保留したり、柔軟に修正したりすること、また、解釈が文脈に合わない場合には文を丁寧に読み直すことである。このような学習者の行動の事例を収集することも読解研究を進める上で大切である。

16.4. 誤読の連鎖

16.1 で見てきたように、小説の読み始めから読み終わりまでの読解過程を時間の流れに沿って観察すると、16.2 や 16.3 で説明したような解釈の修正に加えて、ある誤読が別の誤読を誘発したような「誤読の連鎖」の現象が見られた。この節では、日本語学習者の動的な読解過程のうち、誤読の連鎖について述べる。

16.4.1. 「誤読の連鎖」の定義

本章における「誤読の連鎖」とは、「ある語句や文の解釈を誤ったことがきっかけとなり、別の文の解釈も誤ること」と定義する。このとき一つの文の中で主語の意味を誤ったため、動詞の意味も誤るといような、一文内で完結するものは対象としない。なぜなら、一文内の解釈では常に語は文の意味と連動するのが自然であるからである。本稿でいう誤読の連鎖とは、テキスト全体を「。」で区切られた文単位で見た場合に、ある文の誤読が別の文に影響を与えているものを指す。

誤読の連鎖〔定義〕

ある語句や文の解釈を誤ったことがきっかけとなり、別の文の解釈も誤ること。このとき一つの文の中で主語の意味を誤ったため、動詞の意味も誤るといような、一文内で完結するものは対象としない。

16.4.2. 「誤読の連鎖」に関する先行研究

誤読の連鎖についての記述は、萌芽的な視点を感じるものはあるが(野田(他)2017),

その過程を詳細に読み解いたものは、ポクロフスカ(2016), POKROVSKA(2017), ポクロフスカ(2019)しか見当たらない。なお、データを見る限り、POKROVSKA(2017)とポクロフスカ(2019)はポクロフスカ(2016)のデータをそのまま紹介している。上記の研究はキーワードの一つの誤読がきっかけで、「断捨離」「ミニマリズム」についての文章が「記憶テクニック」の文章として解釈された例を紹介している。

ポクロフスカ(2019)は誤読の連鎖について、「誤読の難しさの一つは、一つの誤読がさらなる誤読を生み出し、場合によっては誤読の連鎖を引き起こすところにあります。学習者はときに書かれもしない内容を読み取り、教師を哑然とさせることがあります。これは多くの場合、誤読の連鎖によるものです」と述べている。

最新の著書であるポクロフスカ(2019)では、上記の誤読の連鎖を一般の読者向けにわかりやすく解説を加えている。ポクロフスカ(2016)は、12名のウクライナ人日本語学習者(初中級, 中級レベル)を対象に、「面倒くさいから モノを捨てる」というタイトルの意見文を読んでもらう読解調査を行った。そして、対象者の語彙に対する認識をまとめた後、誤りが多く見られた一つのキーワード「モノ」に注目し、その要因について整理した。対象者12名のうち8名が「モノ」を「メモ(覚書)」と誤読したというものである。何らかの形で正しく修正されることがほとんどだったが、ただ1名(U09)は「メモ」と読み違えただけでなく、その意味を「メモリー(記憶)」と取り違える「二重の読み誤り」を見せ、読み誤りが文章全体の理解に及んだ。この読み誤りの影響が特に顕著だった1名(U09)の読解過程のデータを詳細に分析したものである。

以下に、ポクロフスカ(2016)で紹介されている誤読の連鎖を抜粋しながら示す。

U09は読み進めるにつれて「何かがおかしい」と感じながらも途中まで読みを修正できず、代わりに他の語彙の意味を「モノ」の誤読に合わせようとしていたという。以下で〔カッコの部分〕は対象者(U09)が日本語を発話する部分で、それ以外の部分は対象者のコメントを日本語に翻訳したものである。

(1) あー、まずはタイトル。〔メモ〕は「記憶」ということかな。〔メモを捨てる〕は「捨てる」という意味だから、〔メモを捨てる〕は「忘れる」。(中略)面倒くさいがために忘れる。(文1 面倒くさいから モノを捨てる)

(1)では、タイトルの段階から、「怠け者」(面倒)と「記憶」がキーワードであるという前提ができてしまう。

(2) 〔十〕は10, 〔分〕は時間の単位か部分。(中略)「10個の単語から」(中略)意味を理解していれば、一部の単語が覚えられる、ということだろうか。(文6 この点を十分に理解していないから、なんとなくモノをとっておくのです。)

(2)のように理解すると、かなり違和感が生じているはずであるが、誤読を修正することはできず、むしろ「記憶を捨てる＝忘れる」「記憶をとっておく＝覚える」と、動詞の意味も自分の誤読に合わせている。次に続く文7では、理解に困難を覚え、「わからない」と理解を放置した。

(3)〔名詞〕は「ビジネスカード」？(中略)カードを捨ててしまえば、本や雑誌が使える。(中略)単語を覚えるメソッドの話だろうか。持ち歩けるカードか(中略)(文8 これらは品物だけでなく、名刺も捨てるし、本や雑誌もどんどん処分します。)

(3)では、U09の背景知識が活性化され、さらなる誤った文脈が構築されているのがわかる。この材料文は全22文であるが、文17で本当に「メモ」という語が登場したため、ここでようやくカタカナの読み誤りに気がついたという。

このようにキーワードの一つの誤読がきっかけで、「断捨離」「ミニマリズム」についての文章が「記憶テクニック」の文章として解釈されてしまった。U09は、「部屋」から「メモリ・パレス(記憶の宮殿)術」を連想するなど、背景知識を豊かに活性化しているものの、ボトムアップ処理の段階での失敗を補うにはそれがむしろ害を与えていると結論づけている。

ボクロフスカ(2016)の研究は、誤読の連鎖を詳細にとらえており興味深い。ただ、母集団が12名と大きくないうえ、しかもその中のただ1人(U09)にしか誤読の連鎖は観察されず、あくまでも一つの例についての記述である。U09は日本語能力においても筆記再生においても成績が下位であったことも考慮すると、ボトムアップで正確なテキストベースが作れないために、トップダウンの背景知識に過度に頼った処理を見ているだけという可能性もある。そう考えると、誤読の連鎖はこの学習者の特性によってもたらされたものなのか、または、他の学習者にも共通して見られるものなのか判断がつかない。その意味でケーススタディの域を出ないと考えられる。

16.4.3. 誤読の連鎖の例

本研究の調査では誤読の連鎖が6例見られた。表16-2に、読解中に見られた誤読の連鎖の例をまとめた。表には、「誤読の発端」「連鎖の原因」「誤読の連鎖」を示した。また、「誤読の発端」となった文と「誤読の連鎖」が起こった文が何文離れているかを示す「距離」も併記した。また、「協力者」には誤読の連鎖が見られた者を載せた。「誤読の発端」の箇所と「誤読の連鎖」が見られたテキスト箇所は共通するものの、その箇所についての解釈は協力者によって違いが見られた。

表 16-2 誤読の連鎖

誤読の発端		連鎖の原因	誤読の連鎖		距離	協力者
①元恋人の結婚式の帰りに、初めて一人で <u>バー</u> へ立ち寄った。(彼女 1)		登場人物がバーにいることがわからない。	私は花嫁の手にしていたブーケの色に似た <u>ミモザ</u> を見下ろしながら呟いた。(彼女 34)		33文	K01 K08 C07 C08
[正しい] to a bar	[誤り] 「bahe」と発音する1語。意味は不明。		[正しい] ミモザというお酒	[誤り] ミモザという花		
②私は花嫁の手にしていたブーケの色に似た <u>ミモザ</u> を見下ろしながら呟いた。(彼女 34)		登場人物がお酒を飲んでいることがわからない。	はずが、 <u>ミモザ</u> に一滴の涙が沈んでいた。 <u>酔っている</u> 。(彼女 39-40)		6文	K06 K13
[正しい] ミモザというお酒	[誤り] ミモザという花		[正しい] お酒に酔っている。	[誤り] 過去の思い出に酔っている。(K06) [誤り 39] 誰が、何に酔っているかわからない。(K13)		
③お願いだから <u>放</u> っておいてほしい。(彼女 4)		「放つて」の辞書形を「はなつ」として辞書を引き、「have a shot」という語釈から性的な表現だと解釈。	私が席を立ちかけた瞬間、 <u>男は言った</u> 。(彼女 5) 「互いに一つずつ願いを叶えあいませんか」(彼女 6)		2文	E11
[正しい] 彼女が <u>思っている</u> 内容。	[誤り] バーの男が発話した内容(カッコがないのは読者を驚かそうとしてこういう書き方にしている)彼が彼女に「○○してほしい」と要求している。		[正しい] 男が言った内容は(彼女 6)の文。	[誤り] 男が言った内容は(彼女 4)ではなく、(彼女 6)の文かもしれない。混乱している。		
			今日、別の女と晴れやかに笑っていた新郎がまだ私の恋人だった二年前。(彼女 12)		8文	
			[正しい] 「別の女」とは元恋人の結婚相手	[誤り] 「別の女」とあるが、誰の話かわからなくなってきた。		
④この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の <u>重み</u> を。(彼 44)		「重み」を動詞として解釈したため、目的語だと認識しない。	だからこそ(Φ何を)教えてやりたかった。(彼 43) この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。(彼 44)		1文	K01 C08 C10
[正しい] 重み	[誤り] 繰り返す		[正しい] バーの男が、	[誤り] 係長が、バーの男に、		

³⁹ 「わからない」と回答しているので、正確には「誤り」とは言えないが、誤読の発端により、解釈が「わからなくなった」と考え、「誤り」と近似的に書いておいた。以下、「わからない」については同様である。

			新郎に、彼女の呟いた「おめでとう」の重みを	「互いに願いを叶え合いませんか」というクイズを(C10) [誤り] バーの男が、彼女に、新郎の電話番号を教えて欲しいと思っている。(C08) [誤り] バーの男が、彼女に教えてやりたい。何を「わからない」と回答(K01)		
⑤だからこそ <u>教えてやりたかった</u> 。(彼 43)		バーの男がこれからする行動を正しく理解していない。	<u>え、マジ？ほんとに電話するの？</u> (彼 46-47)		4文	E07 K06 C02 C10 C15
[正しい] バーの男は、新郎に、 <u>教えてやりたかった</u> 。「おめでとう」の重みを。	[誤り] バーの男が、彼女に、 <u>教えて欲しかった</u> 。なぜ、1人でお酒を飲んでいるのかを。(C02) [誤り] バーの男が、彼女に <u>教えてやりたかった</u> 。(K06) [誤り] 彼女が、元恋人に <u>教えてやりたかった</u> 。(E07) [誤り] 彼女が、バーの男に <u>教えてやりたかった</u> 。(C15) [誤り] 係長が、バーの男に <u>教えてやりたかった</u> 。(C10)		[正しい] バーの男が、新郎に電話する	[誤り] 彼女が、バーの男に、電話する(本当に電話がつながるかどうか確認するため)(C02) [誤り] バーの男が、彼女に電話する(E07,K06,C10,C15)		
⑥え、マジ？ほんとに <u>電話するの？</u> (彼 46-47)		登場人物の行動の目的が追えていない。	よし、こうなったら心して新郎に電話をしよう。彼女の「おめでとう」を全力で伝えよう。そして願わくば、その男から彼女の電話番号を聞きだしたい。(彼 50-52)(テキストの最後の文)[結末]		3文	K04 K06 K13 C02 C10 C15
[正しい] バーの男が新郎に電話する。	[誤り] バーの男が、 <u>彼女に電話する</u> 。(K04,K06,K13,C10,C15) [誤り] 彼女が、バーの男		[正しい] バーの男が電話をかけると出るのは彼女。彼女の電話	[誤り] バーの男が電話をかけるのは新郎(K04,K06,K13,C15) [誤り]		

	に電話する。(C02)		番号を知りたいというバーの男の願いは叶っている。	バーの男の願いが叶ったかどうかはまだわからない(C02) [誤り] 彼女が結局誰の電話番号を書いたか迷っている。(C10)		
--	-------------	--	--------------------------	---	--	--

以下、表 6-2 で示した誤読の連鎖①～⑥の過程について具体的に説明する。その際、学習者がなぜ誤読したのかについて、できる限り、1.1.で紹介したテキスト要因、読み手要因、L2 読解要因、読み方要因の情報を、誤読の連鎖を説明した図に付け加える。

誤読の連鎖①

[誤読の発端]

「バーへ」を「bahe」と発音する 1 語だと認識し、「to a bar」の意味だとわからない。それで、登場人物がいる場所がわからない。これは、ひらがな表記される助詞の「へ」をカタカナの「へ」と認識し、「バーへ」という 1 語だと認識したためであると考えられる。

[連鎖の原因]

登場人物がバーにいることがわからない。

[誤読の連鎖]

登場人物がバーにいるという場所に関する文脈が使えず、ブーケの色に似た「ミモザ」を「お酒」と解釈できず、「花」と誤読した。

この誤読の連鎖は韓国語母語話者 2 人、中国語母語話者 2 人に見られた。このように字形認識を誤ったことが誤読の発端となり、その後に誤読の連鎖が起こった。誤読の発端と誤読の連鎖は 33 文離れているが、影響が及んでいることが示唆された。

[誤読の連鎖の過程]

まず、カタカナの「へ」とひらがなの「へ」は視覚的に類似しており混同しやすいという語の認識の問題が起こった。文字情報をもとに語彙の意味を心的辞書(メンタルレキシコン)から検索することは「活性化」と言われるものだが、読み手は 20 代の学生であったため、バー(bar)という単語に馴染みが薄かったようで、想起されるまでにはいたらなかったと考えられる。さらに、冒頭 1 文目の文であったため、テキストを読んでおらず、使える文脈もなかった。それで、とにかくカタカナの音の情報をつなげて「bahe」という場所にいると解釈した。そのため、学習者は小説の登場人物がバー(bar)にいることはわかっていない。場面設定が物語の構成要素となる(Thorndyke 1977)ことから、小説読解において場面設定の理解は重要である。しかし、学習者は早い小説の読みはじめての早い時点でつまづいてしまう。

また、材料文は短編小説であったことも影響した。なぜなら、短編小説では字数が限られるため、一度述べられた情報は繰り返されにくいいため、読み手は一度情報を取り損ねると後になっても不足を補えない傾向があると考えられる。登場人物がいる場所がわからないまま進めた学習者は、「私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた」(彼女 34)を読んでも、「ミモザ」がカクテルの名前であることには気づかず、「花」などと解釈した。これは、「花」と解釈しても、「ブーケの色に似た花を見下ろしながら呟いた」という語結合でも整合性がとれること、もともと「ミモザ」が「花の名前」と「お酒の名前」の2つ意味がある多義語であること、また、学習者が20代の学生であり、飲酒経験が多くなかったためかミモザがカクテルの名前であることを知らなかったことが影響した。なお、ミモザが学習者にとって未知語だったか既知語だったかは必要に応じて読後のインタビューで確認した。

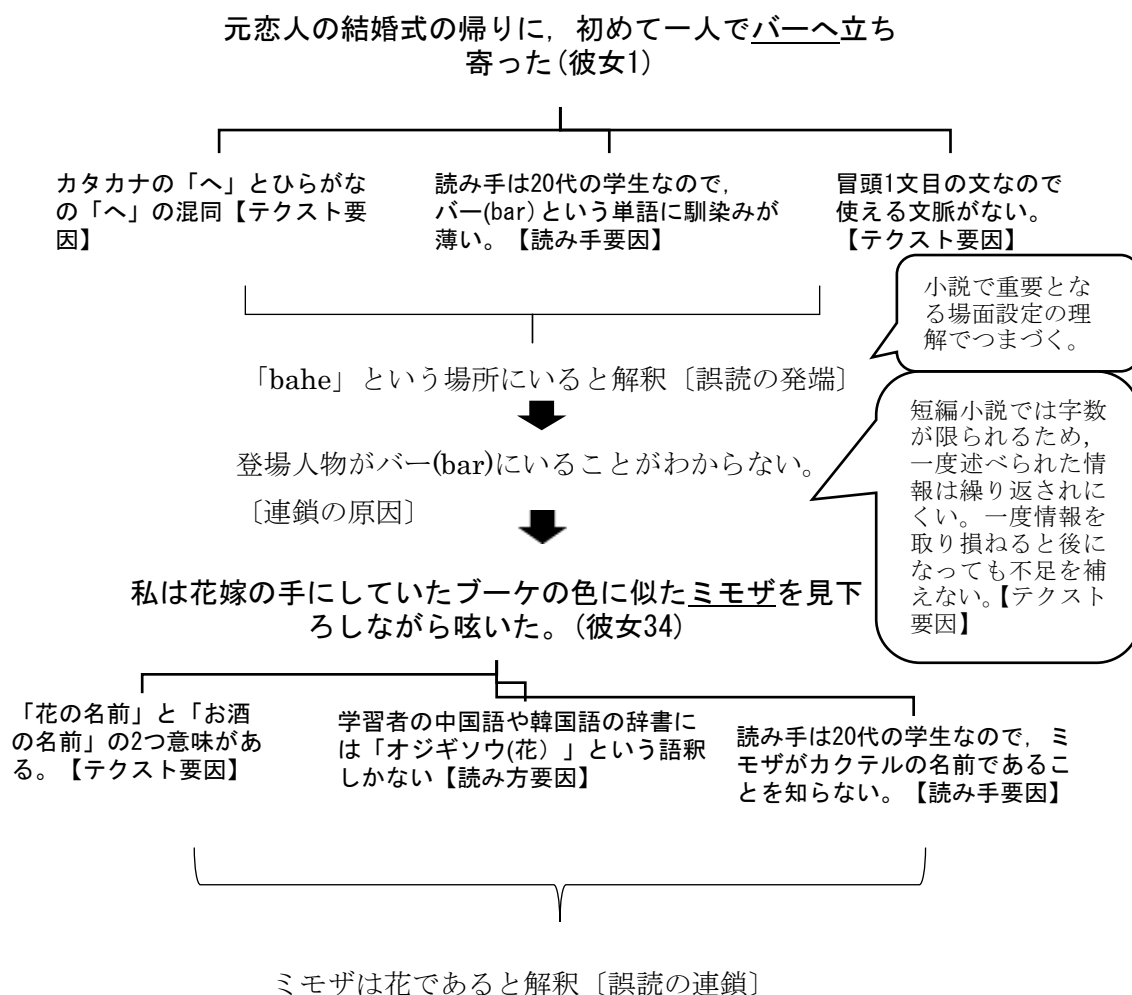


図 16-7 誤読の連鎖①

誤読の連鎖②

〔誤読の発端〕

「ミモザ」は花の名前とその花の色に似たカクテルの名前の意味がある多義語である。学習者は辞書で「ミモザ」を調べ、「花」と解釈した。ウェブサイト上にある韓国語辞書の「NAVER」で調べると、「花」という意味の語釈しか載っていなかった。

〔連鎖の原因〕

登場人物がお酒を飲んでいることがわからない。

〔誤読の連鎖〕 登場人物がお酒を飲んでいるとは思っていないため、「ミモザに一滴の涙が沈んでいた。酔っている」を読んだとき、「お酒に酔っている」と解釈できず、「元恋人との過去の思い出に酔っている」と比喩的な意味に誤読した。

もう一人の学習者も、同様に、登場人物がお酒を飲んでいることがわからないため、「誰が何に酔っているかわからない」とコメントした。

この誤読の連鎖は韓国語母語話者 2 人に見られた。

〔誤読の連鎖の過程〕

まず、もともと「ミモザ」が「花の名前」と「お酒の名前」の 2 つ意味がある多義語であること、また、学習者が 20 代の学生であり、飲酒経験が多くなかったためかミモザがカクテルの名前であることがわからなかった。よって、登場人物がお酒を飲んでいることがわからない。

また、「酔う」について辞書には次のような語釈がのっている。

酔う

- ①酒を飲んで通常の状態でなくなる。酔っ払う。酩酊する。
- ②乗り物に揺られて気分が悪くなる。また、刺激が強すぎたりして気分が悪くなる。
- ③物事や雰囲気などに引き込まれ、うっとりとした状態になる。

(大辞林 第三版)

登場人物がお酒を飲んでいることを理解しないまま進めた学習者は、「はすが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。酔っている。」(彼女 39・40)という文を読んだ際に、「酔っている」とは、お酒を飲んで酔っているのではなく、一人は「元恋人との過去の思い出に酔っている」と比喩的な意味に解釈をした。これはそのように解釈しても当該文だけを考えると整合性がとれる。しかし、彼女がバーに立ち寄ったという行動とそこから当然推測される「彼女はお酒を飲んでいる」という文脈は生かされていない。また、もう一人の学習者も同様に登場人物がお酒を飲んでいることがわからないため、「誰が、何に酔っているのかわからない」とコメントした。これは、登場人物が何をしているかわからない、なぜお酒を飲んでいるかもわからない、つまり、小説において因果関係を意識して

出来事を組立てるプロット⁴⁰を理解してないことになる。プロットの理解は前述の場面と同様に小説で重要となる(Thorndyke 1977)ものだが, 学習者は理解していないことがわかる。

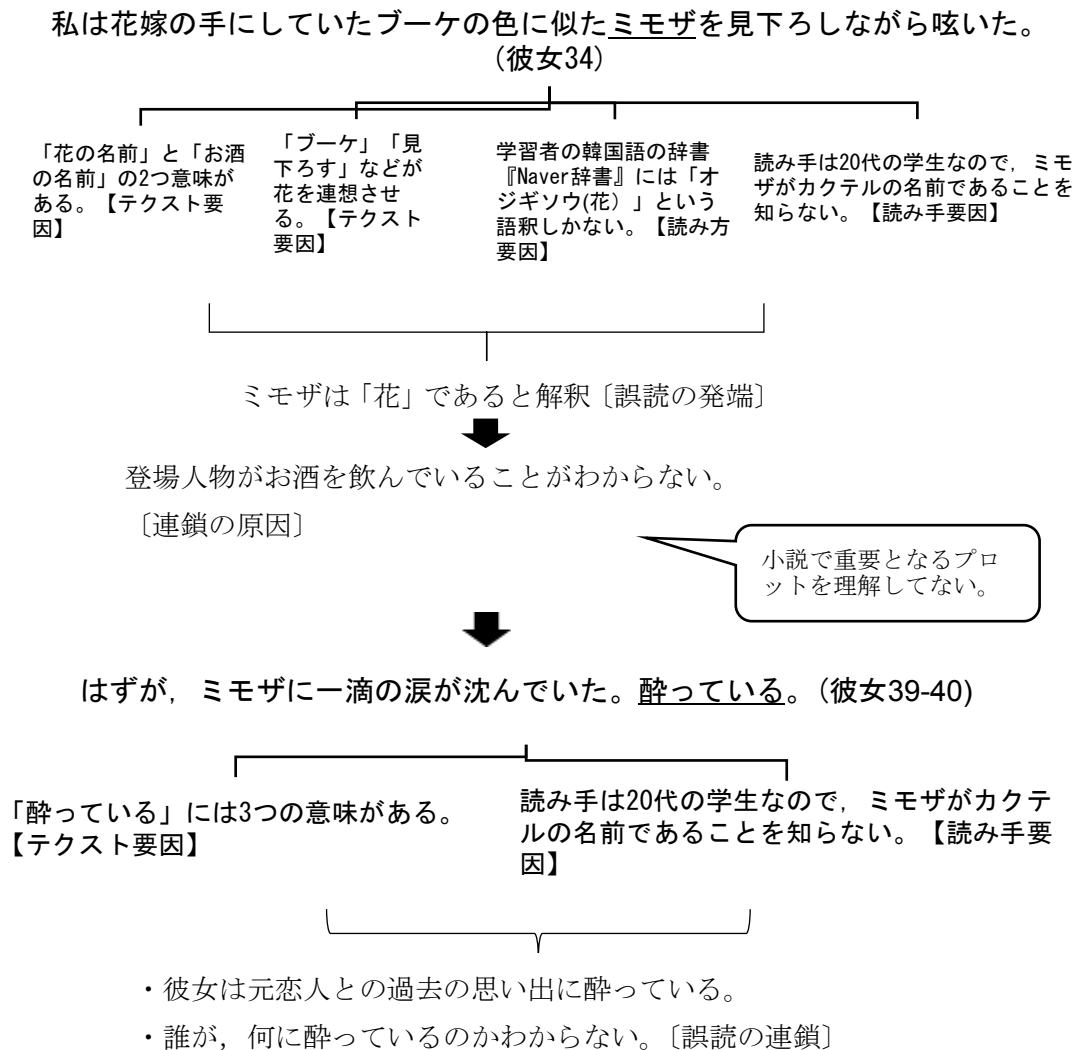


図 16-8 誤読の連鎖②

⁴⁰ 一般に、重要な出来事のまとまりを指し、原因と結果を表すとされている。

誤読の連鎖③

〔誤読の発端〕

「お願いだから放っておいてほしい。」(彼女 4)は語り手である彼女の心理描写であるが、動作主は非明示であるため、「バーの男が実際に発話した内容で、バーの男が彼女に何かお願いをしている。」と解釈した。

〔連鎖の原因〕

「放っておいてほしい」の意味を調べるため、学習者は「放って」の辞書形を「ほおる」ではなく、「はなつ」として辞書を引いたところ、「**have a shot**」という語釈から性的な表現だと解釈した。そして、これは「バーの男が彼女に「何かしてほしい」と要求している」という意味だと考えた。

〔誤読の連鎖〕

上記の「お願いだから放っておいてほしい」(彼女 4)に続く文の「男は言った」(彼女 5)が指している内容が、上記の箇所なのか、または、次に続く会話文「互いに一つずつ願いを叶えあいませんか」(彼女 6)なのか判断できず迷った。そのため、さらに 8 文先に出てくる「今日、別の女と晴れやかに笑っていた新郎がまだ私の恋人だった二年前」を読んだ際、誰の話をしているかわからなくなった。

〔誤読の連鎖の過程〕

この誤読の連鎖は英語母語話者 1 人に見られた。「放って」の辞書形を間違ったまま辞書で語釈を見たことがきっかけとなり、その後の会話文の動作主や、人称詞の特定にまで影響したといえる。誤読の発端となった「放っておいてほしい」は冒頭から 4 文目であり、これを読んでいる時点では、登場人物などの場面の設定をさぐっている段階であり、読み手にとっては文脈情報がまだ少なく、解釈を決める手掛かりに乏しいことも影響したと考えられる。彼女 4・6 の文連続では、男が言った内容がどの文を指しているかを判断するには、それまで読んだ文脈情報が十分に利用できていないと難しい。この学習者は「お願いだから放っておいてほしい」(彼女 4)の文をカギカッコがついていないが、バーの男が実際に発話した内容だと思い込んだため、その後に続く、「男は言った」(彼女 5)の発話内容がどれを指しているか迷い、さらにその先の「別の女」(彼女 12)とは誰を指しているかなど、登場人物の指示対象の理解に困難をきたした。小説においては登場人物の関係や、登場人物がそれぞれどのような行動をしたのかを理解することは重要であるが、誤読の連鎖により理解が困難になった。それを裏付けるものとして、この学習者は調査後のフォローアップインタビューにおいても、「冒頭の理解ほど苦しんだ箇所はない」と述べている。

お願いだから放っておいてほしい。(彼女4)

「放って」の辞書形をほおる」ではなく「はなつ」として辞書を引いたところ、「have a shot」という語釈を見た【読み方要因】

語り手の心理描写であるが、動作主は非明示である。【テキスト要因】

これはバーの男が実際に発話した内容で、バーの男が彼女に何かお願いをしている。〔誤読の発端〕



「放って」＝「have a shot」という語釈を見て、何か性的な表現だと考え、バーの男が彼女にこのことをお願いしていると解釈〔連鎖の原因〕

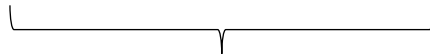


私が席を立ちかけた瞬間、男は言った。(彼女5)

「互いに一つずつ願いを叶えあいませんか」(彼女6)



会話と発話主が明示的に書かれていない【テキスト要因】



- ・ 男が言った内容は(彼女 4) か(彼女 6) か迷う。
 - ・ 「別の女」(彼女 12) とは誰か。誰の話をしているのかわからない。
- 〔誤読の連鎖〕

図 16-9 誤読の連鎖③

誤読の連鎖④

〔誤読の発端〕

「重みを」を中国語の「重」に「繰り返す」の意味があることから、「繰り返した」と解釈した。

〔連鎖の原因〕

「重みを」を動詞として解釈したため、「重み」＋「を」という形式の目的語だと理解しない。

〔誤読の連鎖〕

その結果、「重みを」(彼 44)が直前の文の「だからこそ(何を)教えてやりたかった。」(彼 43)の目的語になっていることがわからず、文全体の意味を「得意先の係長が、バーの男に、クイズを教えてやりたかった」というように、すべてのゼロ代名詞の特定で誤読した。

〔誤読の連鎖の過程〕

「重みを」を「繰り返す」と解釈したことが発端となり、その直前の文のゼロ代名詞の特定で誤読してしまう連鎖の例である。この誤読の連鎖は韓国語母語話者 1 人、中国語母語話者 2 人に見られた。また、その後の修正によって、誤読の連鎖にはいなかったものの、「重みを」の意味を「繰り返す」と解釈した中国語母語話者はさらに 1 人いた。つまり、3 人の中国語母語話者が初発の解釈では同じ誤読をしたことになる。その理由として、日本語と中国語には、漢字という共通の表意文字があり、漢字を母語とする中国語母語話者にとっては、漢字を見ただけで L1 知識が活性化される(蔡・松見 2009)こと、成人学習者は文法的な整合性よりも語義の処理を優先させる(Ellis 2010)ことが考えられた。

また、(彼 43)にはゼロ代名詞が 3 つある。それを同時に特定するのはそれまでの文脈を正確に理解していないと難しい。C10 が「係長が、バーの男に、クイズを教えてやりたかった」と誤って解釈したが、当該文より 30 文も前に出てくる人称詞である「係長」(彼 13)を参照している。

また、この④の誤読の連鎖は、文が連続し、テキストの近い位置にある次に述べる⑤と⑥(結末の解釈)にも影響していると考えられる。

この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた
「おめでとう」の重みを。(彼44)

中国語の「重」に「繰り返す」の
意味がある【L2読解要因】 (彼44) が直前の文(彼43)の目的語になっている倒置構造【テキスト要因】

「重みを」を「繰り返す」という意味の動詞として解釈。目的語であると認識しない。〔誤読の発端〕



だからこそ(φ誰が) (φ誰に) (φ何を) 教えてやりたかった。(彼43)

1文中にゼロ代名詞が複数あり、それを同時に特定する必要あり【テキスト要因】

「～テヤル」という動詞の方向性を正しく理解する必要あり。【テキスト要因】

- ・得意先の係長が、バーの男に、クイズを教えてやりたかった。(C10)
- ・バーの男が、彼女に、新郎の電話番号を教えて欲しいと思っている。(C08)
- ・バーの男が、彼女に。「何を」はわからない。(K01)〔誤読の連鎖〕

図 16-10 誤読の連鎖④

誤読の連鎖⑤

〔誤読の発端〕

たとえば、C02 は、「だからこそ教えてやりたかった。」(彼 43)を「バーの男は、彼女に、教えて欲しかった。なぜ、1 人でお酒を飲んでいるのかを」と解釈した。他の学習者(E07,K06, C10,C15)も、動作主や目的語をいろいろな組み合わせで誤って解釈した。これは「～テヤル」という動作の方向性や 3 つのゼロ代名詞を同時に解釈しなければならないことが、誤読の原因となった可能性がある。

〔連鎖の原因〕

学習者は上記のように解釈したため、これからバーの男が新郎に電話をして、彼女の言葉を伝えるという行動を正しく理解していない。

〔誤読の連鎖〕

そのため、「え、マジ？ほんとに電話するの？」(彼 46・47)は、バーの男は話の勢いで新郎に電話すると言ったものの、彼女がまさか本当に新郎の電話番号を教えてくれるとは思わなかったため、「ほんとうに僕は新郎に電話しなくてはならないのか？」と驚いている内容であるが、学習者はそれを読み取れない。そして、「彼女が、バーの男に、電話する」「バーの男が、彼女に電話する」というように、登場人物の行動を誤読した。

〔誤読の連鎖の過程〕

1 文中にゼロ代名詞が 3 つある文で、ゼロ代名詞をそれぞれ誤読したことが発端となり、それに続く登場人物の動作を誤読してしまう連鎖の例である。この誤読の連鎖は、英語母語話者 1 人、韓国語母語話者 1 人、中国語母語話者 3 人に見られた。この箇所でも誤読の連鎖が見られた K06,C02,C10,C15 の 4 人が、次に説明する⑥においても誤読の連鎖が見られた。よって、この誤読は次に説明する⑥にもつながっている可能性がある。

だからこそ(φ誰が)(φ誰に)(φ何を)教えてやりたかった。(彼43)

1文中にゼロ代名詞が複数あり、それを同時に特定する必要あり【テキスト要因】

「～テヤル」という動詞の方向性を正しく理解する必要あり。【テキスト要因】

「バーの男は、彼女に、教えて欲しかった。」
「なぜ、1人でお酒を飲んでいるのかを。」と解釈
(正しくは、バーの男が新郎に教えてやりたかった。彼女が言った言葉の重みを。)

バーの男がこれからする行動を理解していない。
〔連鎖の原因〕

小説で重要となるプロットを理解していない。

え、マジ？ほんとに電話するの？(彼46-47)

(バーの男は勢いで新郎に電話すると言ったものの、彼女がまさか本当に新郎の電話番号を教えてくれるとは思わなかったため、「ほんとうに僕は新郎に電話しなくてはならないのか？」と驚いている)

「電話する」というのは、日本語では基本的に自分自身(1人称の語り手、バーの男)を与格に取ることとはできないという動作の方向性の制限がある【テキスト要因】

1文中にゼロ代名詞が2つあり、それを同時に特定する必要あり【テキスト要因】

・彼女がバーの男に電話をする(本当に電話がつながるかどうかを確認するため)。(C02)

・バーの男が彼女に電話をする。(E07,K06,C10,C15) 〔誤読の連鎖〕

図 16-11 誤読の連鎖⑤

誤読の連鎖⑥

〔誤読の発端〕

「え、マジ？ほんとに電話するの？」(彼 46-47)は、バーの男は勢いで新郎に電話すると言ったものの、彼女がまさか本当に新郎の電話番号を教えてくれるとは思わなかったため、「ほんとうに僕は新郎に電話しなくてはならないのか？」と驚いている内容である。しかし、学習者はそれを読み取れず、「彼女が、バーの男に、電話する」「バーの男が、彼女に電話する」というように、登場人物の行動を誤読した。

〔連鎖の原因〕

上記のように解釈したということは、誤読の連鎖⑤と同様に、学習者はバーの男がこれからするであろう行動の目的を追えていないと言える。

〔誤読の連鎖〕

そのため、この物語の結末である「バーの男が電話をかけると、電話に出るのは新郎ではなく、今隣に座っている彼女」「彼女の電話番号を知りたいというバーの男の願いは実は叶っている」というオチが推測できない。

〔誤読の連鎖の過程〕

1 文中にゼロ代名詞が 2 つあり、また、「電話する」という動作の方向性で使用制限がある文で、ゼロ代名詞をそれぞれ誤読したことが発端となり、それに続く結末を誤読してしまう連鎖の例である。この誤読の連鎖は、韓国語母語話者 3 人、中国語母語話者 3 人に見られた。

誤読の連鎖④から⑥にかけては、文が連続していたり、お互いがテキストの近い位置にあるため、文の内容が互いに密接に関係し、結束性が強いことが考えられる。そのため、実際、C10 は誤読の連鎖④のあと、誤読の連鎖⑤と⑥でも誤読し続けた。また、K02,C02,C15 は誤読の連鎖⑤のあとその直後の⑥でも誤読した。誤読の連鎖④～⑥はこの小説の結末に近い部分で起こっていることから、結末の理解に大きく影響したと考えられる

え、マジ？ほんとに電話するの？(彼46-47)

(バーの男は勢いで新郎に電話すると言ったものの、彼女がまさか本当に新郎の電話番号を教えてくれるとは思わなかったため、「ほんとうに僕は新郎に電話しなくてはならないのか？」と驚いている)

「電話する」というのは、日本語では基本的に自分自身(1人称の語り手、バーの男)を与格に取ることはできないという動作の方向性の制限がある【テキスト要因】

1文中にゼロ代名詞が2つあり、それを同時に特定する必要あり【テキスト要因】

バーの男がこれからする行動を理解していない。〔連鎖の原因〕



よし、こうなったら心して新郎に電話をしよう。彼女の「おめでとう」を全力で伝えよう。そして願わくば、その男から彼女の電話番号を聞きだしたい。(彼50-52)



- ・ バーの男が電話をかけると電話に出るのは新郎(K04,K06, K13,C15)
- ・ バーの男の願いが叶ったかどうかまだわからない。(C02)
- ・ 彼女が結局誰の電話番号を書いたのか判断に迷う。(C10)〔誤読の連鎖〕

図 16-12 誤読の連鎖⑥

16.4.4. 誤読の連鎖についてのまとめ

誤読の連鎖は 6 例見られ、そのうち、5 例(①②④⑤⑥)についてはテキストの同じ箇所でも複数の人が同じように誤っていることがわかった。また、誤読の連鎖は韓国語・中国語母語話者には一定の頻度で見られた一方で、英語母語話者においてはその頻度は低かった。

その理由は、特にテキスト要因と読み手要因に求められる可能性がある。誤読の連鎖①と②で発端となっているのが、「バー」と「ミモザ」という語である。調査や調査後のフォローアップインタビューでは、これらの語は韓国語・中国語母語話者にとっては解釈が難しかった一方で、英語母語話者にとっては馴染みのある語で解釈に難しい点はなかったことがわかっている。また、誤読の連鎖④で発端となる「重み」は中国語の「繰り返す」という意味が干渉した可能性がある。さらに、誤読の連鎖④から⑥にかけては、文の内容が互いに密接に関連し、結束性が高いことがわかる。これらを勘案すると、本研究の材料文においては、韓国語・中国語母語話者に比べて英語母語話者にとっては誤読の連鎖が起こりにくかった可能性が示唆された。

本章でとらえられた誤読の連鎖は、テキストと人間の理解の関係性を考えた際に重要なヒントを与えるものである。それは、誤読の連鎖には共通性があるということを示したからである。ポクロフスカ(2016)の誤読の連鎖の研究は、ただ 1 人に見られる一つの例についての記述であった。そのため、誤読の連鎖が個別的なものなのか、または、他の学習者にも共通して見られるものなのか判断がつかなかった。本研究では、小説テキストの 5 つの同じ箇所について、複数の学習者が誤読の連鎖を起こしたことを示した。また、誤った解釈のパターンも共通していることが多かった。これは、誤読を誘発した要因として、テキスト要因と L2 読解要因が強く影響し、より個別性が反映される読み手要因よりも顕著であった可能性がある。言い換えると、L2 読解において誤読の連鎖という現象は決して偶発的なものではなく、テキスト要因や L2 読解要因から説明がつくものであることが明らかになった。

また、第 8 章の学術論文の調査では、「ソフト」「レコード」「レンタル」というカタカナ表記の外来語の解釈が誤ったまま維持された例を明らかにしたが、これは多義語である「ソフト」と「レコード」の語義を誤って解釈したことが発端となり、「何をレンタルするか」についての解釈を誤るという誤読の連鎖であった。これは一人の例にすぎないため一般化はできないが、小説だけでなく、学術論文においても誤読の連鎖が生じうることを示唆していると言えよう。

16.4.5. ローカルな誤読とグローバルな誤読

16.4.4. で見てきた「誤読の連鎖」という現象を考える場合、テキスト理解における誤読は、その特性に基づいてローカルな誤読とグローバルな誤読に分けることが可能である。ここで言うローカルな誤読とは、誤読が生じる当該文以外に影響を与えな

いものを指す。言い換えれば、誤読の連鎖を引き起こさないタイプの誤読である。
たとえば、次のようなものがローカルな誤読である。

(1) よく見ると昔の祖母よりも歯並びが良く、眉のラインも美しい。(彼 34)

この文で、英語・韓国語母語話者が「眉」を「肩」と誤読したが、それがほかの文の解釈に影響を与えるようなことは見られなかった。また、「眉」はテキスト中で(1)の文にしか現れない。つまり、ミクロなレベルのテキストベースの誤りにとどまり、状況モデルにまでは影響が及んでいない。本研究の調査ではこの種の誤読は頻繁に見られた。

一方、グローバルな誤読とは、先述した誤読の連鎖で見られたように、ある文で起こった誤読がきっかけとなり、別の文の誤読を生むものとする。たとえば、次の(2)で、「バーへ」を「bahe」と発音する1語だと認識し、「to bar」の意味だとわからず、登場人物がバーにいることがわからない。そのため、ブーケの色に似た「ミモザ」を「お酒」と解釈できず、「花」と誤読するようなものである。

(2) 元恋人の結婚式の帰りに、初めて一人でバーへ立ち寄った。(彼女 1)

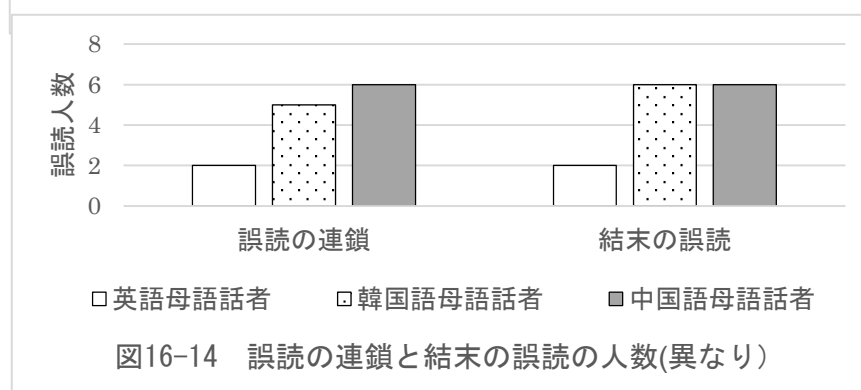
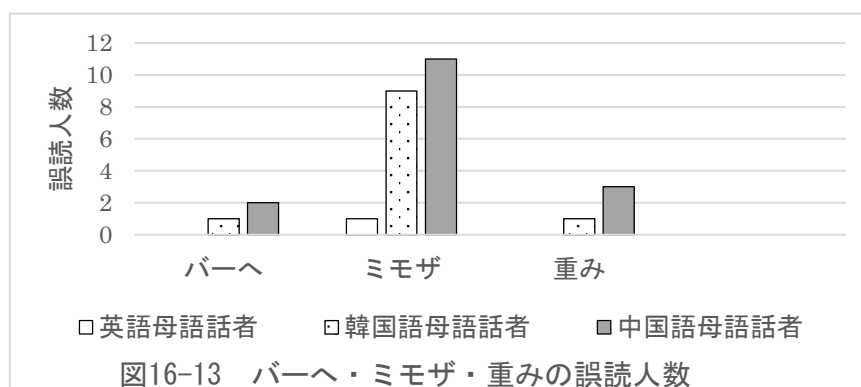
↓

私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。(彼女 34)

本章では、「バーへ」(彼女 1)、「放っておいてほしい」(彼女 4)、「ミモザ」(彼女 34,39)、「重み」(彼 44)、「電話するの？」(彼 47)がグローバルな誤読に相当する。とくに、「重み」(彼 44)は誤読の連鎖④、⑤、⑥で見てわかるように、(彼 43)から(彼 52)が互いに関連している。さらに、物語の終焉部分に該当するため、結末の理解に大きく影響する部分でもあった。「重み」の解釈で誤読した協力者のうち、結末で誤読したのは中国語母語話者 2 人(C08 と C10)であった。よって、これには母語の影響が考えられた。また、ポクロフスカ(2016)における「モノ」、第 8 章における「ソフト」「レコード」のようなテキスト中に何度も出てくるキーワードであることもグローバルな誤読を引き起こす要因となるのではないだろうか。

テキスト理解において、どのような語句がグローバルな誤読となるかは、テキストを分析するだけでは予想がつきにくい。なぜなら、テキスト理解を決定する要因には、テキストの特性だけでなく、読み手の特性も大きく影響すると考えられている(甲田 2008)からである。グローバルな誤読には、本章で言えば多くの日本語学習者が誤読した語として「ミモザ」や「バーへ」がある。しかし、この 2 つに関しては、英語母語話者にとって理解は難しくなかった。「重み」についても同様である(図 16-

13)。特に、結末の理解について、図 16-4 に示すように韓国語母語話者と中国語母語話者は 13 人中 6 人が誤読したのに対し、英語母語話者は 13 人中 2 人しか誤読していないことを考えると、この「重み」が結末近くにあったため、結末の理解にまで影響を及ぼした可能性もある。



グローバルな誤読を誘発する要因は次のようにまとめられる。

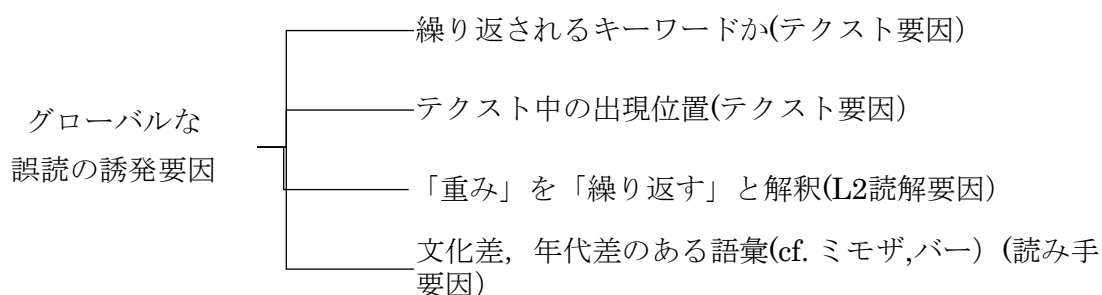


図 16-15 グローバルな誤読を誘発する要因

本章で誤読の連鎖として認定したものは、その現象がわかりやすいものに限られる。実際には、本研究で採用した調査方法では見えにくい形で、曖昧な形で誤読の連

鎖が起こっている可能性も否定できない。このことは今後の課題として考慮すべきである。しかし、本章では数は限られているものの、誤読が誤読を生むという現象と、それに関連してグローバルな誤読の存在を実証的に示したことに意義がある。

16.4.6. その他の興味深い事例

語義を誤読したが文としては正しい解釈に至った例

調査では、語義を誤読しているにも関わらず、文として正しい解釈に至った例もあった。

二人のなれそめクイズかなんかで盛り上がり、「キッス、キッス」なんて煽られてニヤついているんだ。(彼 44)

ある中国語母語話者(C12)は、「なれそめ」を辞書で調べて「きっかけ」と理解した。「クイズ」を「タイズ=ties 結び付ける」と誤読したものの、文の意味としては「二人を結びつけるきっかけ」「二人の恋が始まったきっかけのような話で」と解釈し、本来の文の意味にかなり近い解釈に落ち着いた。

語義を正しく解釈したが文としては誤読した例

調査では、語義を正しく解釈したにも関わらず、文として誤読した例もあった。

お前は人の言葉を鵜呑みにしすぎる。(彼 18)

ある韓国語母語話者(K12)は、「鵜呑みにする」を辞書で調べて「人の話を飲み込んでしまう」と理解した。しかし、その前にある「バーの男が彼女にいろいろ話しかけても、反応がうすく、彼女は彼を見ようとしなない。彼女を白けさせている」という文脈を使って、(彼 18)の文の意味を、「彼女はバーの男の話を聞かないで呑み込んでしまう。無視してしまう」と誤読した。これは本来とは逆の意味になる。また、「鵜呑みにする」を「無視する」と解釈したことで、「お前」を「バーの男」ではなく「彼女」であると誤読していることがわかる。

16.5. フォローアップインタビュー

調査直後のフォローアップインタビューで読解時の困難点を聞いたところ次のような特徴があった(表 16-3)。インタビューデータは付録資料に載せる。

①英語母語話者は、語義についてのコメントは少ない(1 人)一方、発話主(3 人)、ゼロ代

名詞(3 人)、物語の初期設定(2 人)が多かった。発話主やゼロ代名詞が特定できないことで、物語の初期設定の把握に困難を感じていることが窺える。

②韓国語母語話者は、漢字に言及した者が 13 人中 8 人と多い。単語の組み合わせ(2 人)など語義に関する言及が多かった。

③中国語母語話者は、ゼロ代名詞の特定(3 人)や未知語(6 人)など、文法と語義の両方のコメントがあった。

表 16-3 フォローアップインタビューで言及された読解時の困難点

母語別 グループ	談話内容															縦書き
	結末	話の矛盾	地の文(語り)	時列	系	物の期定	語初設	発主特	話の定	ゼ代詞特	口名の慣的表現	用な日語な現	本語的組合	のみ未知語	知漢字	
英語 (E)	1		1	1		2	3	3					1			
韓国 (K)		1									1		2		8	
中国 (C)		1								3		1	1	6	1	

第17章 総合考察

本章では、本研究の総合的な考察を行う。まず、本研究の結論をまとめる。その後、学習者の母語別に見た小説テキスト読解の特徴について論じる。最後に、本研究の意義と残された課題について述べる。

17.1. 本研究の結論

本研究は、上級日本語学習者の理解困難点に見られるテキスト解釈過程について明らかにすることを目的とした。研究で用いた材料文は学術論文と短編小説である。研究課題ごとに調査対象者は異なる。学術論文を使った調査では中国語母語話者 15 人であった。短編小説を使った調査では英語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者それぞれ 13 人、計 39 人と、日本人大学生 17 人の協力を得た。調査方法は、協力者に材料文を読みながら母語で口頭翻訳をしてもらい、理解した内容や困難点なども語ってもらった。また、調査者からの質問にもこたえてもらった。日本人大学生の場合には、口頭での翻訳がない以外は日本語学習者と同様である。

本研究で扱った課題は次のとおりである。

- (1) テキスト中の語義の解釈はどのようになされ、それがテキストや読み手の母語とどのような関係があるか。
- (2) 小説テキストの読解で見られる誤読にはどのようなものがあり、それがテキストや読み手の母語とどのような関係があるか。
- (3) 読み手特性と誤読の間に定量的な関係が見られるか。
- (4) 上級日本語学習者と日本語母語話者の読解過程を比較すると、共通の特徴や学習者独自の特徴があるか。また、うまく読める人と誤読する人の読み方に違いはあるか。

第 1 章から第 6 章では文章理解の理論や語義解釈と誤読に関する先行研究を概観し、テキストのジャンル特性と研究方法についてまとめた。第 7 章と第 8 章では学術論文の読解に関する研究として、名詞の意味の誤った理解と、一人の読みに注目した語義の解釈過程について論じた。第 9 章では小説テキストの材料文の分析を行い、第 10 章ではパイロット研究について述べた。第 11 章では日本語母語話者の調査結果について論じた。第 12 章では英語・韓国語・中国語母語話者 13 人を対象とした小説テキストの読解過程の概要を示した後、第 13 章では誤った語義の解釈と文脈との整合性について、第 14 章では登場人物を指示する要素の誤読を文脈理解と関係づけて論じた。第 15 章では定量的な分析を行い、母語別の誤読の特徴などを明らかにした。第 16 章では日本語学習者の動的な読解過程に注目し、解釈の修正や誤読の連鎖といった現象について論じた。

以下、本研究の課題ごとに明らかになったことをまとめる。

結論 1 学習者が学術論文を読むときに見られる、名詞の誤った理解には、①固有名詞を普通名詞と取り違える(例:「プラネット物流」という固有名詞を「地球全体が繋がるようなシステムを持つ物流」と解釈)、②複合名詞の全体の意味が合成できない(例:「キャリア・パス(career pass)」を「キャリアを目の前で見送る」と解釈)、③多義的なカタカナ語で文脈に合わない意味を選ぶ(例:「音楽ソフト」を「音楽 CD」ではなく、「パソコンのアプリケーションソフト」と解釈)、④音形の類似からカタカナ語を別の語と取り違える(例:「ホノルルマラソン」を「フルマラソン」と解釈)、⑤漢語の略語の意味を誤って解釈する(例:「民放」を「民間の人に向けた放送」と解釈)、⑥照応関係が把握できない(例:「パッケージ物流サービス」を先行文脈にある「この一貫したシステム」の言い換えではなく、「包装する物流サービス」と解釈)、があった。上記の考察から、読解教育では次のような指導が望まれる。⑦辞書や翻訳アプリなどのリソースの特性と使い方、⑧固有名詞か普通名詞かを判別する方法、⑨多義的なカタカナ語の意味を特定する方法(第 7 章)

中国語を母語とする上級学習者は①から⑥のような要因で名詞を誤読した。内容語である名詞を誤って理解することは、その単語を含む文の意味も誤ることになり、テキスト全体の解釈を別の方向に導いてしまう。現代日本語において新語は外来語、固有名詞、複合名詞の形で増え続けるが、これらはいずれも学習者が誤った理解をしたものである。しかし、これらの教育は従来重視されておらず、その習得は学習者に委ねられてきた。読解教育においては、読むときのリソースとなる辞書の使い方も学習者に任せっきりとなっている現状を改めなければならないという示唆を得た。

結論 2 学習者が学術論文を読むとき、語の認識や文の構造を正しく把握し、語の辞書的な意味を正しく理解しても、当該の文脈に合った、適切な語義の解釈ができずに誤読することがある。論文のキーワードで誤読が見られた学習者の理解過程に注目し、これらの語義がどのように解釈されるかを時系列的に追跡した。その結果、「距離」「遠い」は基本語で比喩的な解釈も可能であり、「レコード」「ソフト」は多義語であることが文の意味の不確実性を高め、誤読の要因となった。また、解釈に使うコンテキスト(想定)として専門知識が優先されたことも要因となった。(第 8 章)

論文のキーワードである「距離」「遠い」「レコード」「ソフト」で誤読が見られた 2 名の学習者の理解過程を質的に分析し、これらの語義がどのように解釈されるかを時系列的に追跡した。誤読の要因としてまず、語の意味的な特性があげられる。これは、「距離」「遠い」は基本語で意味が広いことに加え、定義が難しい語であり、辞書的な記述は難しいというものである。もう 1 つの要因は学習者の専門知識である。

これは、調査で読んだ論文は学習者の専門分野であったため、解釈の際に使うコンテキストとして専門分野に関する知識が学習者にとって接近していて使いやすかったというものである。本研究から、解釈に対する柔軟性を読解教育で意識的にトレーニングする必要性が示唆された。

結論 3 日本語母語話者でも誤読をする例を示した。日本人大学生の小説読解における三層構造(著者の意図、文章記述、読み手の認知)に見られる「ズレ」に焦点をあて、テキスト中の言語形式がどのような場合、読み手に著者の意図が伝わらず、多様な解釈を許すかについて明らかにした。その結果、「ミモザ」「三枚目」の意味、「たった一つきり」が指す内容の解釈でズレがあった。たとえ読み手の解釈が著者の意図や文章記述の意味と異なっているとしても、その解釈は語用論における関連性理論から説明が付き、妥当性があった。
(第 11 章)

たとえば、「ミモザ」が読み手にとって既知語であった場合、その意味が「カクテル」でも「花」でも、どちらの場合にも既有知識にアクセスしやすく処理コストが小さいため、初発の解釈が優先された。初発の解釈が文章記述に対して齟齬が生じなければ、解釈の修正は起こらず、最終的な解釈となる。また、「三枚目」が未知語であった場合、協力者は「二枚目」から推測した「カッコいいの真逆」というコンテキスト的想定よりも、「男が不細工なら物語の流れとしては崩れる」というステレオタイプの情報が接近していて扱いやすかった。「たった一つきり」の解釈については、後方照応と暗意の 2 つが可能であるため、処理コストが余計に必要であると考えられた。文章理解の入口で処理される語句の意味や言語の構造も、たいてい解釈の可能性が複数ある。そのため、それを文脈に応じて一義化したり、省略要素を補ったりする語用論的操作を経て、ようやく文章記述の言語情報が書き手の思考内容に近づく。このように文章理解の入口段階において語句や文の意味を解釈する際、関連性の原理に基づいた推論メカニズムが働き、解釈のズレは避けられない。本章では、同じテキストを読んで、どのあたりまでが日本語母語話者にとって共通理解とされ、また、どこからが誤読とみなされるかについての例を捉えた。

結論 4 学習者が小説を読む場合、誤った語義解釈であっても、その多くは部分的またはすべての文脈と整合性を持つようになされることがわかった。また、誤った語義解釈がつくられる要因には、(a)漢字の字形認識における誤り、(b)音韻情報の使用における誤り、(c)語の構成要素の分析における誤り、(d)多義的な表現の解釈における誤り、があることがわかった。(第 13 章)

文章理解で重要となる文脈の中での語の認知に注目し、日本語が上級レベルの大学・大学院生が約 100 文からなる日本語の小説を読むときの語義解釈を調査した。

中国語・韓国語・英語母語話者それぞれ8人ずつ、合計24人を調査対象者とし、小説を読みながら口頭で母語に翻訳する方法で調査した。その結果、誤った語義解釈について、文脈との整合性と、誤った語義解釈がつけられる要因を明らかにした。文脈との整合性を見ると、直前文脈だけでなく、ストーリーとして理解している先行集合文脈を使って語義解釈をする(例：舞いあがって→舞台に上がって)ことがわかった。また、その整合性の度合いは、(a)すべての文脈と整合性がとれる解釈、(b)部分的には整合性があるが、別の文脈を考えると食い違いがある解釈、(c)文脈と大きく食い違いがある解釈、まで幅があることがわかった。誤った語義解釈をもたらす要因について母語別に見ると、漢字の字形認識の誤りは韓国語・英語母語話者に高頻度で見られた。語の構成要素の分析における誤りは中国語・韓国語母語話者に多い一方、非漢字圏の英語母語話者には誤りが少ない。これは、中国語・韓国語母語話者は辞書を引かずに語の構成要素から語義を推測する一方、英語母語話者は辞書を高頻度で使用したことに要因が考えられた。第二言語の読解における語義解釈は、文脈との整合性でも、また、字形認識や語構成の分析などでも処理がゆるく、詰めの甘さがあることが明らかになった。これは第二言語の読解では認知資源の限界があることから説明がつく。

結論5 日本語学習者の文脈理解を明らかにした。日本語の小説では登場人物は様々な表現で指示され、その理解が文脈理解の指標となる。学習者が小説を読む場合、文脈理解の指標になる登場人物を指示する要素(a.会話文で非明示である発話主、b.ゼロ代名詞、c.非飽和名詞で非明示のノ格名詞句、d.人称詞)を適切に理解しているかどうかを調査した。指示には人称詞のように明示されるものの他に、非明示になることで指示の機能を持つものが多く、その特性ゆえに誤読が予想された。その結果、韓国語母語話者は英語・中国語母語話者に比べ誤読が少なかった。英語母語話者と中国語母語話者の誤読の傾向は類似するが、英語母語話者にとって連体修飾節が誤読の要因となりやすいと考えられた。指示の要素自体の解釈が難しいのではなく、要素をとりまく文の環境が誤読を誘発することが示唆された。(第14章)

日本語が上級レベルの大学・大学院生(英語・韓国語・中国語母語話者各13人、計39人)が小説を読むときの読解過程を調査した。小説読解において登場人物を指示する要素の解釈は文脈によって規定される性質を持つゆえ、要素をとりまく文の環境が複雑になると誤読を誘発すると考えられる。誤読を誘発する文の環境とは、前出の動作主が後続の文で非明示でありながらもピリオドを超えて継続すること、非明示の動作主が文章の途中で変化していること、長い連体修飾構造、カッコで括られた発話と発話の間にある挿入句の存在があげられた。また、日本語の小説では作者の視点が固定され、一貫していることで主語が現れないことの曖昧性を回避していると言

える。しかし、学習者にとっては、どのような場合に主語や目的語が明示されたり、非明示になったりするかは明確にはわからない。そのため、非明示の要素を特定する際、述語を中心とした文構造を手がかりにボトムアップで解釈せずに、不完全な理解に基づいたトップダウンの推測にあてはめて誤読する。ここから日本語教育への応用を提言できる。学習者は日本語でどのような環境のときにゼロ代名詞が出現しやすいかを、人称制限や視点の観点から明示的に教わる機会は少ないが、小説読解では要になるため明示的な指導が必要である。

結論 6 調査データの定量的な分析を行った。学習者の誤読の種類は「語義」と「文法」に大きく二つに分けられる。誤読数について、英語母語話者(13 人)、韓国語母語話者(13 人)、中国語母語話者(13 人)のグループにおける平均値の差を 1 要因分散分析(参加者間)により検討した結果、次のことが明らかになった。

- ①「発話主の特定の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、中は韓より多く、その差は 5%水準で有意であった。
- ②「字形認識の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、韓は中より多く、その差は 5%水準で有意であった。
- ③「音韻情報の使用の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、韓は英より多く、その差は 5%水準で有意であった。
- ④「語義全体の誤り」において、母語別の平均値の差が有意であり、多重比較の結果、韓は英、中より多く、その差は 5%水準で有意であった。

(第 15 章)

結論 7 文章理解における動的な読解過程を明らかにした。解釈の修正のきっかけは 14 種類見られ、これらはテキストの言語形式に直接かかわるもの(例：助詞に注目する)と、自分が文章を理解しているかどうかをモニターするメタ認知に関するもの(例：解釈が文脈に合わない場合、別の可能性を考える)に分けられた。また、誤読の連鎖については 6 例見られた。誤読の連鎖では、テキストの同じ箇所でも複数の人が同じように誤読することや、誤読の連鎖は韓国語・中国語母語話者には一定の頻度で見られた一方、英語母語話者においてはその頻度は低いことが示された。その理由として、誤読の連鎖の発端となった語(例：バー、ミモザ)が、韓国語・中国語母語話者にとっては未知語で解釈が難しかった一方で、英語母語話者にとっては既知語で解釈に難しい点はなかったことが要因として考えられた。さらに、誤読の連鎖という現象から、文章理解における誤読は、ローカルな誤読(誤読が生じる当該文以外に影響を与えないもの)とグローバルな誤読(誤読の連鎖

を引きおこすもの)に分けられた。(第 16 章)

熟達した読み手になるには、読解中に解釈を柔軟に修正できることが重要であることは先行研究でも指摘されている。本研究の調査においてもそれが示された。学習者は、解釈の修正のきっかけをうまく活用できることが、読解が上達する鍵となると考えられる。修正のきかけの種類のうち、テキストの言語形式に関するものは明示的に指導しやすい。一方、メタ認知に関するきっかけを暗示的に指導するのは難しい面があるのは確かだが、そこに切り込んだ指導方法が望まれる。また、誤読の連鎖に関連して、どのような語句がグローバルな誤読となるかは、テキスト分析だけでは予想が付きにくい。なぜなら、文章理解を決定する要因には、テキストの特性だけではなく、読み手の特性も大きく影響すると考えられている(甲田 2008)からである。

17.2. 学習者の母語別に見た小説テキスト読解の特徴

本研究で明らかになった、小説テキスト読解における母語別の特徴を表 17-1 にまとめる。詳細は次の 17.2.1.以降で述べていく。

表 17-1 学習者の母語別に見た読解の特徴

	英語母語話者	韓国語母語話者	中国語母語話者
文法の誤読	ゼロ代名詞、ノ格名詞句、文構造の誤りが散見する。	ゼロ代名詞、ノ格名詞句の誤り。総数は英・中より少ない。	発話主の誤りが多いのが特徴。ゼロ代名詞の誤りも散見する。
語義の誤読	「文句」「つまらない」「あぐらをかく」の多義語の解釈で誤読が多い。	字形認識の誤りが特徴的に多い。英・中に比べ語義全体の誤読が多い。	「重み」の解釈の誤読が特徴的に多い。ひらがなやカタカナの誤読が散見する。
誤読の連鎖	韓・中より少ない。	英より多い。	英より多い。
文化差の現れた語	「ミモザ」「バー」「コースター」は既知語で正しく解釈する。「歯並びがよい」という表現が唐突で違和感がある。	「ミモザ」は未知語で解釈も誤る。「バーへ」の誤読が散見する。	「ミモザ」は未知語で解釈も誤る。「バーへ」の誤読が散見する。「コースター」が未知語の協力者が多い。
辞書の使用	韓・中より多い。	英より少ない。	英より少ない。
読後のインタビューで語ら得れた困難点	発話主やゼロ代名詞の特定、物語冒頭の場合面設定の理解、文の語り手。	漢字に関するコメント。	ゼロ代名詞の特定

17.2.1. 英語母語話者の読解の特徴

英語母語話者の読解の特徴を述べる。文法の誤読では、ゼロ代名詞、ノ格名詞句、文構造の誤りが散見した。語義の誤読では、「文句」「つまらない」「あぐらをかく」

の多義語の解釈で誤読が多い。文法の誤読は韓国語母語話者より多いが、語義の誤読は韓国語母語話者より少なかった。

また、誤読の連鎖は韓国語・中国語母語話者より少なかった。これは、韓国語・中国語母語話者の誤読の連鎖の発端となった、「ミモザ」「バー」が既知語であったため正しく理解できたことに要因があると考えられた。「ミモザ」「バー」「コースター」は多くの英語母語話者にとって既知語であった半面、多くの韓国語・中国語母語話者にとっては未知語であった。上記の語は文化差の現われた語であると考えられる。「ミモザ」については、英語母語話者は1人しか誤読しなかった。また、「あぐらをかく」については、比喩的な意味ではなく、字義通りに解釈され、「欧米とは異なり、日本の結婚式ではあぐらをかくことがある」(E06)と解釈された。

また、英語母語話者2名が「歯並びがよい」という表現について、「突然「歯並び」が出てくるから比喩だと思ったが、文字通りの表現だった」(E05)、「ちょっと気持ち悪い。歯並びの話をするのは殺人鬼が最初に言うことみたい。そういうことを人に言わないから」(E06)と違和感を述べているのは興味深い。これは韓国語・中国語母語話者には見られない。

辞書の使用は、韓国語・中国語母語話者より多く、頻繁に使う傾向にあり、未知語に遭遇しても正しい語義の解釈にたどりつける場合が多かった。それを反映してか、読後のインタビューでも語義に関するコメントは少なく、代わりに語られた困難点として、発話主やゼロ代名詞の特定、物語冒頭の場面設定の理解があった。特に、場面設定についてのコメントは英語母語話者のみに見られたのが特徴的である。

17.2.2. 韓国語母語話者の読解の特徴

韓国語母語話者の読解の特徴を述べる。文法の誤読は、ゼロ代名詞やノ格名詞句などで見られたが、文法の誤読総数は英語・中国語母語話者より少なかった。一方、語義の誤読では、「塊」を「鬼」と理解するような字形認識の誤りが多いことが特徴で、語義全体でも英語・中国語母語話者に比べて誤読が多かった。韓国語にない漢字語の「意地」と韓国語にある「意志」は発音が同じため、両者を混同するような例が見られたが、これは母語が影響していると考えられた。「新郎」を「しんたろう」という名前だというように誤読する例は複数の学習者に見られた。材料文には「新郎」「塊」が何度も出てくるため、韓国語母語話者は語義解釈の誤読数が多くなった。

また、誤読の連鎖が散見された。これは、誤読の連鎖の発端となった、「バー」「ミモザ」が未知語や馴染みのない語であったためその解釈が難しかったことに要因があると考えられた。

辞書の使用は同じ非漢字圏の英語母語話者よりも少なかった。未知語に遭遇した場合、辞書を使わずに積極的に意味を推測する傾向があった。読後のインタビューで語られた困難点としては、語義、とくに漢字に関するコメントが多かった。

17.2.3. 中国語母語話者の読解の特徴

中国語母語話者の読解の特徴を述べる。文法の誤読では、発話主の誤りが多いのが特徴で、他にゼロ代名詞の誤りも散見した。文法の誤読総数は韓国語母語話者より多かった。一方、語義の誤読は、英語・韓国語母語話者よりも少なかった。特徴的なのは、「重み」の意味を「繰り返す」と誤って解釈する例が多かったことである。これは中国語の「重」の意味が影響していると考えられた。中国語母語話者は、読解では確かに語義解釈において有利ではあるが、漢字の解釈においては母語が活性化されて誤った解釈に至る可能性もある。また、「なんて」を「なんで(why)」と解釈するような、ひらがなやカタカナの誤読も散見した。

誤読の連鎖も散見した。これは、誤読の連鎖の発端となった、「バー」「ミモザ」が未知語または馴染みのない語であったためその解釈が難しかったことに要因があると考えられた。この点は韓国語母語話者と共通している。

辞書の使用は英語・韓国語母語話者よりも少なかった。読後のインタビューで語られた困難点としては、ゼロ代名詞に関するコメントが多かった。

17.2.4. 母語別の特徴のまとめ

以下に母語別の特徴について文法と語義の面から分けて述べていく。

文法の誤読

文法の誤読では、韓国語母語話者は英語・中国語母語話者よりも誤読が少なかった(第12章, 第15章)。その理由として、日本語と韓国語は語順や文構造(助詞や格関係など)が類似している一方、英語と中国語は日本語の語順や文構造と対立することが多いため、解釈に負担がかかることが考えられた。これはテキスト理解を決定する要因のうちの④L2読解要因が大きく影響していると考えられる。文構造の誤読は韓国語母語話者には見られなかったが、これは本研究で扱った小説に出現するような文の長さでは、文法を理解に困難は少なかった可能性がある。また、日本語で非明示となっている要素が母語では義務的に明示されることの多い英語母語話者と中国語母語話者にとって、その特定は読解困難になると予想された(第9章)。実際、フォローアップインタビューにおいても、英語・中国語母語話者はゼロ代名詞や、非明示となっている発話主の特定が難しいと言及することが多かった。一方、韓国語母語話者は、文法についてのコメントは少なく、漢字や語句の組み合わせに言及することが多かった。中国語母語話者は、発話主の誤読が多かったものの、フォローアップインタビューでは、それについての発言はなく、誤読したことに気づいていないことが窺える。

文法に関連して、英語母語話者に特徴的に見られたコメントについて述べる。読解

時やフォローアップインタビューでは、物語冒頭の場面設定の理解、具体的には会話の発話主や地の文の語り手を特定することの困難にしばしば言及した。たとえば次のようなコメントである。「この彼とあの彼の違いがわからない」(E02),「小説の始めが難しい。」(E02),「1 編目の会話で混乱した。背景が理解できなかった」(E03),「彼がまだ完全に別の女のものになっていなかった」の「彼」はバーの男？元彼？」(E05),「迷ったところは、語り手が自分自身に話をしている、対話じゃない部分」(E05),「新郎」という言葉がでてきて、やっと主人公は女性だとわかった」(E07),「2 編目。主人公が元彼かバーの男かはわからない」(E07),「発話内容がこの(当該文)の前を指すのか後を指すのか迷っている」(E08),「今は後悔の塊」これは誰が話しているか迷う。会話なのか、胸の中で自分に言っているのか」(E08)。日本語の小説では視点の統一によって、人称詞の使い分けや、ゼロ代名詞の使用が多くなるが、そのような要素を読み解くのが困難になっていることが推測される。これはテキスト理解を決定する要因のうちの①テキスト要因がとくに影響している可能性がある。

語義の誤読

韓国語母語話者は英語・中国語母語話者よりも語義の誤読が多かった(第 12 章)。定量的な分析においても、「字形認識の誤り」では中国語母語話者よりも、「語義全体の誤り」では英語、中国語母語話者よりも有意に多かった(第 15 章)。

一番語義の誤読が少ない中国語母語話者は、母語に漢字を持つため、漢字の字形の認識や意味の推測が容易であったと説明がつくのではないだろうか。第二言語の日本語の漢字語の語彙処理では、中国語母語話者に強い表記類似性効果がみられ、同じ期間日本語を学習した英語母語話者に比べて、漢字語の処理が極めて迅速である。また、韓国語母語話者には、表記類似性効果が見られない(玉岡 2017)という研究もある。では、ともに非漢字圏でありながら韓国語母語話者が英語母語話者より語義の誤読が多いのはなぜだろうか。これについて母語背景から考察してみる。韓国語は日本語の漢字語と音を共有するケースが多いため、そこから語を推測できるものもある(例: 以前, 完全)。「漢字語彙を処理する際に、書字から意味へ直接アクセスするか、または、L1 の音韻符号化を経て意味にアクセスする」(邱 2002)という研究結果もある。そのため、韓国語母語話者は普段から音韻情報や既知の漢字を手がかりにして積極的に未知語の推測を行う傾向にあるのではないだろうか。これは、意味表象へのアクセスは、視覚入力よりも聴覚入力は促進されやすい可能性がある(小森 2005)という指摘とも一致する。しかし、その反面、そのストラテジーに依存しすぎて、誤った解釈に至ることもあると考えられる。誤った解釈でも文脈に合えば、解釈の修整は起こらない(第 13 章)。また、韓国語母語話者は漢字の字形認識の誤りが多く、字形を曖昧に処理することが英語・中国語母語話者に比べて多かった。実際、フォローアップインタビューにおいても、漢字について困難点を述べるが多かった

一方、英語母語話者にとって、英語由来の外来語以外は、韓国語母語話者と違って日本語と語彙を共有しない。また、漢字は完全に学習言語であるため、解釈に自信が持てないことも多い。英語母語話者は、音韻情報に依存した単語認知処理をする(Chikamatsu 1996, Mori 1998)こと、漢字の画数が多いと処理が困難である(玉岡 1997)ことも指摘されている。そのような意識があるため、字形が認識できない語や意味のわからない語があれば、辞書で調べる回数が多くなった可能性がある。その1人当たりの平均値を見ると、英語母語話者は26.3、韓国語母語話者は16.5、中国語母語話者は15.8である。このように、英語母語話者は韓国語・中国語母語話者よりも辞書で調べる回数が平均で約10回も多い。英語母語話者にとって、辞書を頻繁に引くことが語義で誤読する頻度を少なくすることに繋がった可能性がある。ここから考えると、語義の誤読は辞書を使用することで解決できる場合が多いことが示唆される。読解中に辞書を引くことは認知負担が高いとも言われており、それを避ける学習者も多い。今回協力してくれた英語母語話者の読み手特性を考えると、普段から辞書を駆使して文章を読むことに慣れているという特徴があった。そのような読み手特性が反映した可能性もある。

また、英語母語話者には、音韻情報を使用した次のような誤読もあった。⁴¹「キザ(な文句)―きざむ(scrathch)」(E03)、「ふりむく―皮をむく」(E03)、「さしあたり―指でさして」(E09)といったものである。これも、音韻情報に依存した単語認知処理の表れを示唆している。さらに、英語母語話者には、韓国語母語話者と同様に字形認識の誤読もあった。「突っぱねて―笑ってね」(E06)(E07)、「呟いた―眩しい(ブーケの色をぼんやりと思い出している)」(E08)。「隆参です―彼の名前」のように人名だと誤読したが、英語であれば固有名詞は大文字で書き分けるという規則があるが、日本語ではそれがいないため、両言語の書字規則の違いが誤読の誘因となった可能性がある。また、「「なりふりかまわずにそう頼んだら」のようにひらがなが長いのは、いらいらする」(E06)というコメントは、分かち書きをしない日本語の書字規則がもたらす理解困難点である。これと類似した例として、英語母語話者には見られなかったものの、韓国語母語話者と中国語母語話者には「バーヘ」を「bahe」と読み誤る(K01)(K08)(C07)(C08)(第16章)場合があった。この誤読も、ひらがなの「へ」とカタカナの「ヘ」が同形であるという日本語の書字形式が原因であると考えられる。

中国語母語話者についても考察を加える。中国語母語話者にとって、漢字は見るだけでも活性化する。中国語は日本語と基本義が共通するとが多く、同形語の86%は基本義が共通する(松下・陳・王・陳 2017)ことから、読解における語義解釈には有利である。その反面、調査では「重み」を「繰り返す」と解釈するような母語の干渉による誤読も見られた。この種の誤読は、読解において母語の知識は既有知識として

⁴¹ 初発の解釈では誤読したが、即座に辞書で調べて正しい理解に至った例も載せた。

利用されるため、母語の干渉は自然には消えないことと、語彙が処理できると文法には注意が向きにくくなる(Ellis & Saggara 2010)という研究結果からも説明がつく。張麟声氏の主張する母語転移と対照研究について、読解研究の面からも研究を進める必要があることがわかる。また、日本語の「文句」は多義語で、「文言」と「不満」の意味がある。中国語にも「文言」の意味があるが、調査では誤った解釈である「不満」の意味が選択される場合が多かった。両者の単語親密度を見ると、「不満」が 6 で、「文言」が 3.4 となっており、「不満」のほうが親密度が高い(天野・小林 2008)。よって、「不満」が選択された理由として、本研究の協力者はかなりの程度日本語を学習している上級学習者であったため、日本語の単語の使用環境に馴染んでいたことが影響した可能性がある。

なお、調査では語義の解釈において「わからない」と「発話せず」という回答もあった。第二言語読解の場合、未知語を「無視・迂回する」ケースも非常に多いとされる(門田 2001:55)。「わからない」は漢字の字形認識ができないため「わからない」場合と、字形は正しく認識できるが、「意味がわからない」の 2 つを含む。「わからない」について、1 人当たりの平均頻度は、英語母語話者は 10.2、韓国語母語話者は 11.2、中国語母語話者は 6.3 であった。また、「発話せず」とは、口頭翻訳の際に翻訳をしなかったと考えられる語をカウントしたものである。調査中、原則としてすべての語に言及するように調査者からも確認したものの、1 語ずつの逐語訳ではなく複数の語をまとめて説明したり、また、翻訳しないまま終わってしまうこともあった。調査時間に制限を設けていないものの、協力者の集中力の限界もあることから、常識的な範囲での調査となった。この「発話せず」に含まれるものは、協力者が重要ではないと判断した語句に加え、わからないため回避した部分も含まれると考えられる。しかし、両者の区分はインタビューデータからは判断がつかないため、まとめて「発話せず」として処理した。「発話せず」についての 1 人当たりの平均頻度は、英語母語話者が 7.5、韓国語母語話者が 3.2、中国語母語話者が 5.2 であった。本研究の調査で、英語母語話者は韓国語母語話者より「わからない」がやや少なく、「発話せず」が多いのは、たとえわからなくても、わからないとは明言せず、発話しない傾向があることが考えられる。このように、母語背景の違いによる読解の負担と、第二言語で処理をする語に対する苦手意識が辞書を引く回数や「わからない」「発話せず」の回数に影響を与えていることも示唆される。このような母語別の学習者心理についてはさらに詳細な調査が求められる。

17.3. 本研究の意義

本研究の意義は次のとおりである。

第 1 に、学習者の発話データから得られる読解過程の情報とテキスト分析を統合するアプローチをとった点である。これまでの読解研究においても両者の分析は行われていたものの、言語学的な分析は十分とは言えず、テキスト分析の比重が軽かった。本研究では、語や文法について言語学、とくに、対照言語学の分析の視点を手厚くしたことで、学習者の母語別にみた、人間の文章理解の処理とテキストとの関係が明確になった。

第 2 に、文章理解の過程を統合的に分析したことである。これまで語句や文の意味の推測に焦点をあてた研究(山方 2008, Horiba1996), ストラテジーに着目した研究(舘岡 2001)などはあるが、これらは読解に関連する様々な要素のうち、ある 1 つの要素に焦点をあてて論じていた。そうすることである観点についての具体的な知見は得られたが、人間の文章理解は様々な要素がお互いに絡み合った総合的なものである。単に部分の集合が文章理解の全体を表しているとは考えにくい。本研究ではできるかぎり人間の読解の実態に近づけた調査方法で、その読解過程を可視化することを試みた。

第 3 に、英語、韓国語、中国語母語話者そして日本人に同じ材料文を読んでもらってその読解過程を比較した点である。中国語母語話者を対象にした野田(2014)や野田ほか(2017)では、調査対象者はそれぞれ別の材料文を読んでいるため、誤読が学習者に共通するものなのか、個別なものなのか判断がつかない。本研究では、同じ材料文を読んでもらうことで、共通した読解の困難点や誤読があるかどうかを明らかにすることができた。また、英語、韓国語、中国語母語話者そして日本人に調査をしたことで、母語別の読解の特徴が明らかになった。そこから、誤読をもたらしたものが、読み手特性によるものなのか、テキスト特性によるものなのか、または、両者の特性が合わさったものなのかを考察した。その上で、母語別の読解の特徴を対照言語学や第二言語習得の観点から論じることができた。これまで、同じ材料文で英語、韓国語、中国語母語話者の読解過程を調べた研究はない。

第 4 に、材料文として学術論文と小説を用いた点である。先行研究では、意見文や昔話などを材料にした研究はあったが、学術論文を対象にした調査は数が限られていた。特に、小説を扱った研究は管見の限りほとんど見当たらない。小説というテキストジャンルには、日本語の談話構成が色濃く反映されている。それは、視点の統一とそれを可能にする様々な言語形式の存在である。学習者にとって自身の母語と異なる談話構成を持つ日本語の小説テキストがどのように理解されるか明らかにした。

第 5 に、語句や文の意味に注目したミクロな文章理解に焦点をあて、テキストのどの箇所が読み手にとって困難点となり、また、誤読を生んだかを、テキストの言語形

式と具体的に対応させることができた点である。読解研究ではこれまでこの種の知見は限られており、そのことが読解能力を養うための具体的な指導に繋がっていなかったと考えられる。本研究で示したような、テキストのどのような箇所が読解困難になり、また、誤読するかという知見が蓄積すれば、日本語教育の読解支援に役立てることができる。ひいては、日本語教育の見直しに繋がると考える。

第 6 に、動的な読解過程について論じた点である。語義や文法形式がどのように解釈されるか、具体的に示せただけでなく、解釈の修正や、誤読の連鎖といった動的な読解過程が捉えられた。本研究では、協力者に材料文を読みながら母語で理解した内容や内省を語ってもらい、読解過程の豊富な情報を得ることで、それが可能となった。このように詳細に動的な読解過程について記述した研究はこれまで見られない。

17.4. 読解教育への示唆

本研究では学習者のテキスト解釈過程を明らかにしてきた。そこで得られた第二言語の読解教育への示唆をまとめる。

17.4.1. 正確に文章を理解することの重要性

小説は説明文とは異なり、比較的自由な解釈が許されるが、自由な解釈はテキストの正確な理解が前提となる。しかし、学習者が日本語で書かれた小説を読んで、どのようなテキストベースをつくるか、即ち、語や文の意味をどのように理解し、また、解釈を誤るかについての研究は従来行われてこなかった。第二言語で読む学習者は、母語との言語構造的な違いなどが要因で誤読が起りやすいことが予想される。その実態と要因を把握することは、小説を読むすべての学習に対して教育的な示唆を与える。

とりわけ、日本文化を専門とする学習者の読解教育を考える上で有用であると考ええる。その背景には、世界における日本への関心の高まりを受けて、日本語や日本文化、ポップカルチャーを研究する日本語学習者の存在は小さくないことがあげられる。文部科学省奨学金による「日本語・日本文化研究留学生プログラム」では 1979 年の設置以来多くの留学生が学び、2018 年度には受け入れ校が 73 校にまで広がった。アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでも、1963 年以来、日本研究の専門家を養成してきた。さらに、近年、首都圏を中心に、明治大学や東京外国語大学など、国際日本学部を設置が相次いでいる。このように日本文化を研究する学習者の中には日本語で書かれた小説を読むニーズが根強くあると考えられる。理解活動である読解では、聞き手や読み手がいる会話や作文などの産出活動と異なり、他者からフィードバックが得られにくいからこそ正確な理解が求められる。小説を趣味として楽しむのではなく、日本文学の研究者を目指すならなおさらである。これまでは、小説読解のための実践的な指導法や教材の開発に至っていなかった。本研究の知見は

それを可能にする一助となることが期待される。

17.4.2. 解釈の修正プロセスを重視した読解教育

卯城(2010:54)は読解が不得意な読み手ほど当初の解釈に固執することを示し、解釈を柔軟に修正できることが読解能力の高さに繋がると述べている。本研究においても、読解中に解釈を修正し、正しい理解に至った例が高い頻度で見られた。そして、第16章で論じたように、解釈を修正することとなったきっかけは、読解がうまくできない学習者に何を指導したらよいか考えるためのヒントとなると考えられた。卯城(2010:57)は解釈の修正プロセスを重視した読解教育として次のように提案する。1つは、読解過程での漸次的な内容確認の目的で、ペアを組ませて1文1文読ませながら、どのように理解が変化していくかを発話プロトコル法で口頭報告させる方法である。2つめは、教師の発問は学習者の読解プロセスを形成するという考えに基づき、**fact finding**, **inference**, **generalization** など読み手を育てる質問をバランスよく与える方法である。このように卯城が提案するようなトレーニングを経験できる教材をつくることが望まれる。なぜなら、解釈を修正するというスキルは、教師が学習者に明示的に指導することが難しいものであるため、実際に解釈の修正プロセスの経験を積むことでしか意識化されないと考えるからである。教材を使って実際にテキストのどのような要素で誤読するかを体験できるとよいだろう。

17.4.3. 小説を読むために必要な技術

日本語教育の分野では、そもそも小説のような文学の読み方について、語学的に論じられることは少ない。学習者が協働して読み進めるピア・リーディングなどで小説を用いた実践報告(館岡 2005, 岡本 1998)や文学作品の教材化についての考察(池田 2005)、学習者主体の「小説の宝さがし」の授業実践(大工原 2019)はあるが、その内容は、学習者が小説を読む場合、言語形式を具体的にどのように理解するかという視点からは語られていない。また、この分野の研究知見が不足していることは市販の日本語学習用教材からも見てとれる。どのような指導法をすればよいか提案した研究はいくつかあるが(cf. 石黒 2012)、実際に教材化され出版されたものとしては、石黒(編著)(2011)『留学生のための読解トレーニング 読む力がアップする 15 のポイント』の「第14課 ストーリーを上手に読みましょう」があるのみである。従来の教材の多くは、外国語として日本語の小説を読んで理解できるようになるための技術が具体的に提示されることなく、読後の内容理解の確認や語句の説明に終始し、日本語母語話者向けの国語教育と大差ない内容に見える。このことは、新聞記事や論説文などの実用文については読む技術が具体的に教えられ、教材化されていることと対照的である。小説を読む場合も、実用文同様に読むために必要な技術が意識的に教育されるべきではないだろうか。

以下、本研究で得られた知見を日本語教育に応用し、学習者が小説を読む場合に必要技術とその指導法について考察する。

テキストの結束性を読み取る技術

小説では明示されない動作主や発話主を読み解く必要があるが、調査ではその誤読が散見された。また、小説では同じ対象を指していても人称詞が次々と変化する。たとえば、本研究の材料文において主人公の女性の元恋人を指す人称詞は、「新郎、彼、その男、自分」と変化するが、それを語り手の視点に立って読み解かなければならない。この読み取りの意識を活性化するには、教師が学習者にテキストに明示されていない動作主や発話主を復元してもらったり、人称詞の指示対象を逐一確認したりすることが有効だろう。

視点を読み取る技術

小説のジャンルでは、登場人物などテキストの内部に視点を置く場合と、外側から全知の存在として視点を据える場合とがあり、さらに一つの作品内でこれらが混在することもある。このように視点の位置はジャンル特性の大きな特徴である(高崎・立川 2010:198)。その視点を示す具体的な言語表現として、指示語や授受表現、移動動詞の選択といった語彙レベルや、受動文と能動文の選択や引用の方法という文レベルなど様々に渡る。文章談話構成においても、どのような順序で出来事が語られるかという内容展開は視点に大きく影響する。上記のすべての要素が絡み合って視点が提示される。このように、日本語のテキスト読解においては、とりわけ視点の正しい読み取りが重要となることがわかる。学習者が視点の読み取りができるように、日本語の小説の談話構成と視点を示す言語表現との関係について解説することが有効である。学習者は日本語でどのような環境のときにゼロ代名詞が出現しやすいかを、人称制限や視点の観点から明示的に教わる機会は少ない。しかし、小説読解では要になるため明示的に指導したい。そして、実際に小説のどのような要素で誤読するかを体験し、意識化できる教材作成が望まれる。その際、本研究の知見が活用できる。

文脈に合うように単語の意味を解釈する技術

未知語や多義語など単語の意味を解釈する場合、複数の可能性の中から文脈に合うように意味を特定したり、別の可能性を考えたりする必要がある。そのストラテジーを身につけるにはどうしたらよいだろうか。これについて、日本語母語話者の文章理解を論じた内田(1995)が指摘する「読み直し」を援用する。内田は文章理解とは一種の問題解決の過程であり、その際に行われる読み直しには2つのレベルがあるという。1つは、文ごとの解釈を積み重ねていくミクロ・レベルの後戻りである。これは解釈を構成する途中で、前出の文に書かれたことを確認したり、当該の文について

構成した解釈で、前出の文の解釈を確認したり、後から構成された解釈との関係から前出の文の解釈をつくりなおすものである。もう 1 つは、文脈との照合を行うマクロ・レベルでの後戻りであり、今読んでいる単語の意味を文脈との関係で捉えようとするのだという。この読み直しは読解活動の中心的なプロセスだが、学習者がこの「読み直しのストラテジー」を活性化できない場合には、教師は学習者に「その解釈は前に出てきた文の意味と合っていますか」などと解釈の確認を何度も提示して活性化を促すことが有効だろう。

17.4.4. 学習者の母語別の誤読からみた読解教育

読解における母語別の特徴は、そのまま母語別の日本語教育に生かされるべきである。母語転移を積極的に肯定し、母語別に日本語教育を考える必要があるとする張 (2007,2011) の主張を支持する。ここではこれまで本論文で述べていなかった点を中心にまとめる。

韓国語母語話者は、語形の認識が甘く、音に依存して語義を解釈する傾向にあることがわかった。日本語と韓国語が語彙に漢語を共有しているという知識もあいまり、辞書を引かずに漢字語の意味を積極的に推測する傾向にある。推測が成功することもあるが、誤読することが多かった。語形認識が甘いことに注意を向けてもらうことが必要である。また、16.2.2 で述べたように、正しい解釈に至るためには、辞書を引くのは有効な手段である。それを意識してもらうことが有効だろう。

英語母語話者は、語順や文構造が日本語と対立し、理解を逆なでするものであるため、連体修飾構造のような複雑な文の読解が難しくなる。また、小説のような視点が重要となるテキストの書かれ方が異なること、英語では義務的に表示される要素が日本語では述語の意味などから推測が可能であることから非明示となることが多く、その読み取りが理解困難点となる。英語母語話者の場合、先に述べた「視点を読み取る技術」を特に意識して指導する必要がある。

中国語母語話者は、語彙の面では、日本語と同様に漢字を共有することから、語義解釈の面では有利な点が多かった。その一方で、英語母語話者には見られないような、漢字に過度に依存した誤った語義解釈も見られた。近年、日中同形語に関する研究も進み、それを教育実践に生かそうという流れもある。本研究で見られたような「重み」を「繰り返す」と誤読するような例を見ると、特に、漢字表記の和語の教育が有効であると考えられる。また、英語母語話者と同様に、日本語との語順や文法構造の違いから、連体修飾構造のような複雑な文の解釈が理解困難点となりやすい。中国語母語話者の場合、日本語のテキストを読む際に、漢字で表記された内容語から意味を抽出するために書記形態素処理に依存し、統語処理をあまり積極的に重視しない傾向がある(Horiba 2012)とされているが、この点をトレーニングできるような教材作成が望まれる。

17.5. 本研究の限界と今後の課題

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。

読み手の解釈を捉えることの難しさ：本研究では協力者に理解した内容や内省を母語で語ってもらった。発話内容である言語情報から協力者の解釈を読み取っていくことになるが、そこには言語表現に内在する曖昧性や、語用論的な推測が介在し、判断が難しい場合もあった。調査では、できるだけ適切に協力者の解釈を捉えようと質問を重ねたが、調査時間という物理的な制約や、協力者の感情にも配慮しながら調査を進める必要があったため、たとえ解釈の曖昧さが十分に解消できなくても、執拗に質問し続けることは躊躇された。その結果、曖昧性を排除しきれないこともあった。これは人を対象とした調査の難しさである。

調査方法：通常、読み手が自動化している部分については情報が得られないが、本研究では調査者からも質問をするという方法を使ったことで、読み手が解釈の際にどのような手がかりを使ったのか、また、語義や文をどのように解釈したのかほぼ網羅して確認できたなど、これまでの先行研究ではあまり言及されてこなかった貴重な情報が収集できた。その反面、調査者が介入することによる影響がまったくなかったとは言いきれない。従来の発話思考法では読み手の自然な内的プロセスを収集すべく、思考を妨げるような介入は行わない。本研究の調査を顧みると、影響があったかもしれないと思われる場面はあった。たとえば、フォローアップインタビューにおいて、韓国語母語話者(K04)は次のようにコメントしている。「聞かれると間違ってたって。そんな風に読んでいます。だから普通に読むときとちょっと違っていました。質問されるともう1回よむようになりました。質問されると、「なぜ、質問したのかな」と考える。知らない単語をあてずっぽうに推測したとき、ドキッと思いました。違うのかなって思いました。質問されると、違っているのかなと考えました。」

また、そもそも読み手の意識にのぼらないものを、調査者からの質問によって強制的に解釈を話してもらうことは、本来の読解過程を反映しているか疑わしいという考え方もあるかもしれない。しかし、日本語母語話者や日本語が熟達している学習者ほど読解処理で自動化されているものが多いため、意識に上らず、言語化されないことも従来から指摘されているとおりである。自動化されている処理の中にこそ、誤読の原因となることや、または、熟達した読み手が読解中に行っているヒントが隠されていると考えた。それで本研究では、ある意味強制的であることは認めつつ、読み手の意識にのぼらないものについても話してもらった。

調査時の対応：1回の調査時間は2~3時間に及び、第二言語で翻訳しつつ、内省を語り、しかも質問に答えるというのは実際に負担がかかる内容であった。調査時間や調査場所という物理的な制約のもとで、協力者にかかる負担を最低限にとどめ、自然な読解過程をしてもらえるように苦心した。人間を調査対象としている以上、調査時間を無制限にすることはできず、収集されるデータ量と質ににらみをきかせなが

ら、最善のバランスを考えて毎回調査をコントロールするしかなかった。事実、調査時間が足らず、調査の後半はやむ迫えず駆け足となり、前半よりも収集する情報が薄くなってしまったこともある。また、読解過程を詳細に話してもらうためには質問を重ねることが必要となるが、それが不十分に終わってしまったこともあった。協力者がテキストのある部分について解釈を述べなかったときに、それを言い直してもらう時間がないこともあった。現実的な調査方法と収集するデータの均質化が課題である。

質問項目の設定：調査で行った質問は大きく 2 つに分けられた。1 つは文法に関する質問で、もう 1 つは意味に関する質問である。文法に関する質問は、ゼロ代名詞や人称詞がテキスト中の何を指しているか確認するものである。質問項目の設定には事前に十分なテキスト分析が必要になる。研究開始当初にテキスト分析を行い、それを基にして質問項目を設定した。しかし、研究を進めるにつれて新たな知見が得られることで、それまで気が付かなかった分析の観点が現われ、さらに緻密に体系的に質問項目が設定できることがわかった。本研究の結論に影響を及ぼすとは考えられないが、緻密で体系的な質問項目で調査をすれば、より踏み込んだ議論ができたと考ええる。

もう 1 つの意味に関する質問について述べる。協力者に語義や文の解釈を話してもらったが、その際、「わからない」という回答も一定数あった。協力者によっては、「わからない」と思いつつも、推測をして何らかの解釈を積極的に話してくれる場合もあった。そして、それが「誤読」であった場合には、「誤読」としてカウントされた。「わからない」という回答と、「積極的に推測した結果、誤読する」という両者の本質的な違いが、捉えられていないように感じた。この点については今後検討を要する。

データの分析：誤読の分類やきっかけとなった手がかりの特定の難しさである。本研究では、協力者の発話データと、テキスト分析をもとに、ある意味帰納的に誤読の分類やきっかけを読み解いていく作業が中心であった。その判断は一人の人間である論文筆者が行っているものであり、たとえば読解の視点計測での滞留時間といった物理的な計測量などと異なり、客観性を欠いてしまう。分析結果に可能な限り信頼性を持たせるために、語義解釈の正誤の妥当性と文脈との整合性については、日本語教育関係の修士号を持つ、筆者を含めた 3 名で協議し、判定した。本研究のようにデータを探索的に見ていく研究においては客観性をどのように取り入れるか、言い換えれば、恣意性を排除するか課題となってくる。

材料文の検討：本研究の材料文は、文庫本サイズで 8 ページという内容であったが、非漢字圏の英語母語話者や中国語母語話者にとっては、漢字の処理の関係からやや負担が多いと感じられた場合もあった。ある英語母語話者は辞書を頻繁にひいて、調査時間が 4 時間近くになったこともあった。調査時間や協力者の負担を考えると、

分量の少ないテキストを検討する余地がある。

他の小説を使った本研究の再試：本研究では、森絵都氏の「彼女の彼の特別な日」「彼の彼女の特別な日」を材料文として読んだときの読解過程の詳細は明らかにできた。この材料文で見られた困難点や誤読が、他の小説においても確認できれば、本研究の知見がより説得力を増すと考えられる。

より詳細な定量的な分析：本研究では母語別の誤読の傾向を見るために、一要因の分散分析を行った。今後、調査データに主成分分析を行うことで、データの深層構造を明らかにできる可能性がある。

辞書を検索したときの読解過程の分析：調査では、協力者がどのような辞書を使い、どのような言葉を辞書に入力し、どのような語釈を確認したかというデータもできる範囲で収集した。このデータを分析することで、辞書を検索したときの困難点や、読解教育に生かせる知見が得られる可能性がある。本研究においては時間的な制約があり、この点は検討できなかった。

新たなデータ収集方法の検討：本研究のように読み始めから読み終わりまですべての内容を対面で語ってもらう方法は豊富な情報が得られる一方で、手間と時間がかかるのも事実である。そこで、質問項目をテキスト中のある文法や語義の解釈だけに限り、web上で回答可能な形式にすることで、大量のデータが少ない労力で収集できる。研究課題に合わせて、データの収集方法も工夫ができる。

正しい解釈に至った場合の読解過程を捉える必要性：本研究では困難点や誤読に注目したが、それは調査で取り出しやすいものである。正しい理解をした場合には、読解上の困難がないため、意識にのぼらず、発話データとして記録されない。その結果、表層にその解釈過程が表れにくくなる。熟達した読み手が、どのような読解過程をしているかを取り出すことができれば、読解が苦手な学習者に対してどのように具体的に指導すればよいか見えてくるはずである。表層に現れない理解過程を取り出す工夫が望まれる。

本論文のもとになった既発表論文

本論文の章立てと既発表論文の対応を以下に示しておく。なお、「書き下ろし」と記した章は、既発表の論文をとくに下地にせず書いた、本論文が初出の文章である。

第一部 概要と調査方法

第1章 序論

書き下ろし

第2章 文章理解

書き下ろし

第3章 語義の解釈と誤読に関する先行研究

書き下ろし

第4章 テクストのジャンル特性

書き下ろし

第5章 本研究で重要となる用語の定義

書き下ろし

第6章 研究方法

書き下ろし

第二部 学術論文の誤読に関する研究

第7章 名詞の意味の誤った理解

藤原未雪(2016)「中国語を母語とする上級日本語学習者が学術論文を読むときの
困難点—名詞の意味の誤った理解を中心に」『日本語／日本語教育研究』7,165-
180,ココ出版

第8章 1人の読みに注目した語義の解釈過程

藤原未雪(2017)「上級日本語学習者による学術論文の読解における語義の解釈過程」『一橋大学国際教育センター紀要』8,119-132

第三部 小説テキストの読解に関する研究

第9章 材料文の分析

書き下ろし

第10章 パイロット研究

藤原未雪(2017)「上級日本語学習者が小説を読むときに見られる誤読：中国語を
母語とする大学院生の事例から」『読書科学』59(2),43-57

第 11 章 日本語母語話者の小説テキストの読解

書き下ろし

第 12 章 日本語学習者の小説テキストの読解

書き下ろし

第 13 章 誤った語義の解釈と文脈との整合性

藤原未雪(2019)「上級日本語学習者の小説読解における誤った語義解釈—中国語・韓国語・英語母語話者の読解過程に関する一考察」『日本語／日本語教育研究』10,165-180,ココ出版

第 14 章 登場人物を指示する要素の読み誤り

藤原未雪(2019)「小説の文章理解における登場人物を指示する要素の読み誤り—英語・韓国語・中国語を母語とする大学生を対象にした調査—」『専門日本語教育研究』21,21-28

第 15 章 定量的な分析

書き下ろし

第 16 章 日本語学習者の動的な読解過程

書き下ろし

(16.3.のみは下記に基づく)

藤原未雪(2020)「漢字系上級学習者の動的な読解過程」野田尚史(編著)『日本語学習者の読解過程の解明』,143-162,ココ出版

第 17 章 総合考察

書き下ろし

参考文献

- 阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李光五(1994)『人間の言語情報処理 言語理解の認知科学』サイエンス社
- 天野成昭・小林哲生(2008)『基本語データベース 語義別単語親密度』NTTコミュニケーション科学基礎研究所
- 井伊菜穂子・宮内拓也(2020)「接続詞による文脈理解の方法」石黒圭(編著)『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究』ひつじ書房
- 庵功雄(1999)「テキスト言語学の観点から見た談話・テキスト研究概観」『言語文化』36, 3-19. 一橋大学語学研究室
- 庵功雄(2007)『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 庵功雄(2017)『一歩進んだ日本語文法の教え方 1』くろしお出版
- 市川孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 池上嘉彦(2011)「第 1 部 言語研究のおもしろさ」大津由紀雄, 窪菌晴夫, 西山佑司, 池上嘉彦 編著 『ことばワークショップー言語を再発見する』開拓社言語・文化選書
- 池田庸子(2005)「日本語教育における文学教材：国語教育における文学教材論を参考に」, 『茨城大学留学生センター紀要』3, 25-34.
- 石原千秋(2002)『大学受験のための小説講義』ちくま新書
- 石井正彦(2006)「複合語はなぜ字面以上の意味を表すのか」『國文學 解釈と教材の研究』51(4), 56-59.
- 石黒圭(1996)「予測の読み一連文論への一試論」『表現研究』64, 67-74.
- 石黒圭(2005)「理解過程と読解教育」松岡弘・五味政信編『開かれた日本語教育の扉』スリーエーネットワーク
- 石黒圭(2008)『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房
- 石黒圭(2011)『留学生のための読解トレーニング 読む力がアップする 15 のポイント』凡人社
- 石黒圭(2012)「読解とその教え方を考える」『国際交流基金バンコク日本文化センター 日本語教育紀要』9, 1-18.
- 石黒圭(2018)「文の理解における日本語学習者の多義語の意味把握の方法」『アジア文化』35, 69-81.
- 石黒圭(2020)「第 1 章 本調査の目的と背景」「第 2 章 本調査の枠組み」石黒圭(編著)『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究』ひつじ書房
- 井関龍太・川崎恵里子(2006)「物語文と説明文の状況モデルはどのように異なるか 5 つの状況的次元に基づく比較」『教育心理学研究』54-4.
- 今井邦彦(2001)『語用論への招待』大修館書店

- 犬塚美輪(2013)「読解方略の指導」『教育心理学年報』52,162-172.
- 内田伸子(1995)「談話過程」大津由紀雄編『認知心理学』東京大学出版会
- 卯城祐司(2009)『英語リーディングの科学—「読めたつもり」の謎を解く』研究社
- 卯城祐司(2010)「第4章 英文読解における読み手の理解修正プロセス」木村博是ほか(編著)『英語教育大系第10巻 リーディングとライティングの理論と実践—英語を主体的に「読む」・「書く」』大修館書店
- 烏日哲・Dang Thai Quynh Chi (2020)「和語動詞の語義把握の方法」石黒圭(編著)『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究』ひつじ書房
- 大隅敦子(2005)「第2言語学習者はテキストをどう読んでいるか—既有知識の活性化と一貫性の形成」『国際交流基金 日本語教育紀要』1, 37-51.
- 王鳳莉(2009)「主語省略における日中両言語の対照研究」平成21年度奈良女子大学博士論文
- 大村彰道(2001)「序章 文章理解：結束性と意味の創造」大村彰道 監修 秋田喜代美・久野雅樹編集『文章理解の心理学 認知発達，教育の広がりの中で』北大路書房
- 岡田聡宏(2011)「アドホック概念について」『言語・文化・社会』9, 25-45.
- 岡本佐智子(1998)「上級文章表現授業への試み：リーディング 一冊の長編小説を主教材として」『日本語と日本語教育』26, 55-72.
- 小川泰生 (1997)〈日汉翻译时的主語省略問題〉《汉语学习》第5期, 47-51.
- 生越直樹(2012)「コラム 6.4」池上嘉彦・守屋三千代編集『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて』ひつじ書房
- 生越まり子(1982)「朝鮮語の希望表現文—日本語と対照して」『日本語教育』48, 77-88.
- 赫楊(2020)「文章理解における連鎖する語彙の意味推測」石黒圭(編著)『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究』ひつじ書房
- 加藤晴子(2016)「日中対訳小説に見る受身形の使用状況と視点の関係」『東京外国語大学論集』92, 65-82.
- 加藤晴子(2018)「日中対訳の主語の有無にみる視点の動き」『東京外国語大学論集』96, 85-97.
- 門田修平(2001)「ワーキングメモリと第二言語の読解」門田修平 (編著)『英語リーディングの認知メカニズム』くろしお出版
- 樺島忠夫(2004)『日本語探検—過去から未来へ』角川書店
- 河原哲雄(2001)「第6章 文章理解のコンピューター・シミュレーション」大村彰道 監修 秋田喜代美・久野雅樹編集『文章理解の心理学 認知発達，教育の広がりの中で』北大路書房
- 茅本百合子(2000)「日本語を学習する中国語母語話者の漢字の認知」『教育心理学研究』48, 315-322.

- 岸学(1994)「文章理解力を図る」浅井邦二(編)『こころの測定法 心理学における測定法と課題』実務出版, 84-105.
- 岸学(2004)『説明文理解の心理学』北大路書房
- 岸学(2019)「3 ジャンルと読み」日本読書学会編『読書教育の未来』ひつじ書房
- 金慶珠(2001)「談話構成における母語話者と学習者の視点—日韓両言語における主語と動詞の用い方を中心に—」『日本語教育』109, 60-69.
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房, 192-195.
- 國廣哲弥(1985)「慣用句論」『日本語学』4(1), 4-14.
- 國廣哲弥(1997)『理想の国語辞典』大修館書店
- 久野暲(1978)『談話の文法』大修館書店
- 久野雅樹(2009)「単語の読みと心的辞書」大村彰道監修 秋田喜代美・久野雅樹編集『文章理解の心理学』北大路書房
- 邱學瑾(2002a)「台湾人日本語学習者における日本語漢字熟語の処理過程-日・中 2 言語間の同根語と非同根語の比較」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』51, 357-365.
- 邱學瑾(2002b)「漢字圏・非漢字圏日本語学習者における漢字熟語の処理過程:意味判断課題を用いた形態・音韻処理の検討」『教育心理学研究』50(4), 412-420.
- 邱學瑾 (2007)「台湾人日本語学習者における日本語単語の聴覚的認知—同根語・非同根語・ひらがな単語・カタカナ単語の比較—」『日本語教育』132, 108-117.
- 甲田直美(2001)『談話・テキストの展開のメカニズム—接続表現と談話標識の認知的考察—』風間書房
- 甲田直美(2008)「テキスト理解の規定因—読み手の受容スタイルと論証パターンから」児玉一宏・小山哲春編『言葉と認知のメカニズム—山梨正明教授還暦記念論文集』ひつじ研究叢書<言語編>第 70 巻, ひつじ書房
- 甲田直美(2009)『文章を理解するとは—認知の仕組みから読解教育への応用まで』スリーエーネットワーク
- 紅野謙介・清水良典(編)(2012)『高校生のための近現代文学ベーシック—ちくま小説入門』筑摩書房
- 国語学会編(1980)『国語学大辞典』東京堂出版
- 国際交流基金(2017)「海外の日本語教育の現状 2015 年—日本語教育機関調査より—集計表」国際交流基金
- 小森和子(2005)「第二言語としての日本語の文章理解における第一言語の単語認知処理方略の転移—視覚入力と聴覚入力の相違を中心に—」『横浜国立大学留学生センター・紀要』12, 17-39.

- 小森和子(2017)「日中同形語から見えること―似ているようで似ていない同形語の習得の難しさ―」『日本語学』36(11), 56-67. 明治書院
- 近藤安月子・小森和子(編)(2012)『研究社日本語教育事典』研究社
- 蔡鳳香・松見法男(2009)「中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程―同根語と非同根語を用いた言語間プライミング法による検討」『日本語教育』141, 4-24.
- 佐々木一隆(2011)「英語・日本語・中国語の関係節の比較に関する覚え書き」『外国文学』宇都宮大学紀要論文 60, 119-124.
- 澤田治美(1993)『視点と主観性―日英語助動詞の分析』ひつじ書房
- 篠崎祐介(2014)「教材としての「評論文」を定義する―「アブダクション」によって「ディスクルス」を志向する文章」『教育学研究ジャーナル』15, 31-40.
- 下地早智子(2004)「日中両語における文法事象としての視点の差異―移動動詞・受身の表現・テンスアスペクトの場合―」『外国学研究』58, 59-75.
- 柴崎秀子 (2006)『第二言語テキスト理解と読み手の知識』風間書房
- 徐一平(2009)「コラム 6.3」池上嘉彦・守屋三千代編集『自然な日本語を教えるために―認知言語学をふまえて』183-184. ひつじ書房
- 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波書店
- 泉子・K・メイナード(2019)『日本語本質論 翻訳テキスト分析が映し出す姿』明治書院
- 曹喜澈 (1994)「漢字系学習者のための漢字教育のあり方―韓国人の日本語学習者を中心に―」『日本語教育論集 世界の日本語教育』4, 61-73.
- 大工原勇人 (2019)「学習者主体型の土壌の教室活動」石黒圭 (編)『日本語教師のための実践・読解指導』くろしお出版
- 高崎みどり(1981)「小説の中の会話文について」『ことば』2, 86-97.
- 高崎みどり(1988)「文章展開における“指示語句”の機能」『国文学 言語と文芸』103, 67-88.
- 高崎みどり・立川和美(2010)『ガイドブック文章・談話』ひつじ書房高橋亜紀子(2014)「筆記再生課題に見られる日本語学習者の読みの特徴」『文化』78(12),47-71.
- 高橋秀明(1995)「3章 プロトコルからわかること, わからないこと」海保博之・原田悦子 (編)『プロトコル分析入門―発話データから何を読むか―』新曜社, 67-68.
- 田川麻央(2012)「中級日本語学習者の読解における要点と構造の気づき: 要点探索活動と構造探索活動の統合と順序の影響を考慮して」『日本語教育』151, 34-47.
- 田窪行則(1997)「日本語の人称表現」田窪行則(編)『視点と言語行動』くろしお出版
- 田近洵一(1984)「説明的文章の指導」『国語化の評価研究』教育出版, 42-56.
- 舘岡洋子(1996)「文章構造の違いが読解に及ぼす影響―英語母語話者による日本語評論文の読解―」『日本語教育』88, 74-90.
- 舘岡洋子(2001)「読解過程における自問自答と問題解決方略」『日本語教育』111, 66-75.

- 館岡洋子(2005)『ひとりで読むことからピア・リーディングへー日本語学習者の読解過程と対話的協働学習ー』東海大学出版会
- 田中啓行・宮内拓也(2020)「指示語による文脈理解の方法」石黒圭(編著)『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究』ひつじ書房
- 谷内美智子・小森和子(2009)「第二言語の未知語の意味推測における文脈の効果ー語彙的複合動詞を対象に」『日本語教育』142, 113-122.
- 谷口篤(1999)『文章の理解と記憶を促進する具体化情報』風間書房
- 谷口すみ子(1991)「思考過程を出し合う読解授業：学習者ストラテジーの観察」『日本語教育』75, 37-50.
- 玉岡賀津雄(1997)「中国語と英語を母語とする日本語学習者の漢字および仮名表記語彙の処理方略」『言語文化研究』17, 65-77.
- 玉岡賀津雄・宮岡弥生・松下達彦(2002)「日本語学習者の心的辞書(mental lexicon)の構造ー中国語を母語とする超上級日本語学習者の漢字熟語の処理を例にー」『平成14年度 日本語教育学会 第14回研究集会 予稿集』日本語教育学会中国地区研究集会委員会. 1-8.
- 玉岡賀津雄(2017)「実験的手法を用いた語彙習得研究」『第二言語としての日本語の習得研究』20, 44-62.
- 譚昕(2017)「結束性の視点からみる日中両言語におけるゼロ照応の相違：二つの小説を材料として」『日中言語対照研究論集』(19), 46-63.
- 崔娉(2017)「日本語読解における未知漢字語彙の意味推測：中国語を母語とする日本語学習者を対象に」『中国語話者のための日本語教育研究』8, 32-45.
- 鄭惠先(2001)「日本語と韓国語の人称詞に関する対照研究」『人間文化学研究集録』10, 33-45.
- 鄭惠先(2002)「日本語と韓国語の人称詞の使用頻度：対訳資料から見た頻度差とその要因」『日本語教育』114, 30-3.
- 張秀娟(2020)「複雑な連体修飾構造把握の方法」石黒圭(編著)『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究』ひつじ書房
- 張麟声(2007)『中国語話者のための日本語教育研究入門』OMUP ブックレット No.11 「堺・南大阪地域学」シリーズ5, 大阪公立大学共同出版会
- 張麟声(2011)『新版中国語話者のための日本教育研究入門』日中言語文化出版社
- ディアドリ・ウィルスン／ティム・ウォートン(2009)今井邦彦編『最新語用論入門12章』大修館書店
- 時枝誠記(1951)「文章論の一課題」『国語研究』8 愛媛国語研究会(山口仲美編(1979)『論集日本語研究8 文章・文体』有精堂所収)
- 徳田恵(2006)「読解における未知語の意味推測と語彙学習」『言語文化と日本語教育』11,

11-30.

外山滋比古(1969)『近代読者論』みすず書房

永野賢(1972)『文章論詳説』朝倉書店

中山恵利子(2008)「日本語教育における「カタカナ教育」の扱われ方」『日本語教育』138, 83-91.

西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫(2011)『岩波国語辞典第7版新版』岩波書店

西林克彦(2005)「わかったつもり 読解力につかない本当の原因」光文社新書

西本有逸(2001)「V-3 テキストの理解とは」門田修平(編著)『英語リーディングの認知メカニズム』くろしお出版

西山佑司(1990)「「カキ料理は広島が本場だ」構文について」『慶応大学言語文化研究所紀要』22, 慶応大学

日本語記述文法研究会(2012)『現代日本語文法7』くろしお出版

日本語教育学会(編)・水谷修(編)(2005)『新版 日本語教育事典』大修館書店

野田尚史・渋谷勝己・迫田久美子・小林典子(2001)『日本語学習者の文法習得』大修館書店

野田尚史(2014)「上級日本語学習者が学術論文を読むときの方法と課題」『専門日本語教育研究』16, 9-14.

野田尚史・花田敦子・藤原未雪(2017)「上級日本語学習者は学術論文をどのように読み誤るか—中国語を母語とする大学院生の調査から—」『日本語教育』167, 15-30.

朴善嫻・熊可欣・玉岡賀津雄(2014)「同形二字漢字語の品詞性に関する日韓中データベース」『ことばの科学』27, 3-23.

はんざわかんいち(2013)「感情の論理と表現に違和」『日本語学』32-4, 4-13.

姫野伴子(2012)「4. 日本語話者は<見え>のままに話す」池上嘉彦・守屋三千代編集『自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて』ひつじ書房

フォード丹羽順子(2013)「日本語学習者の読解における主語の把握に関する一考察—「は」の理解と助詞情報の読み—」『佐賀大学全学教育機構紀要』創刊号, 29-42.

深尾百合子(1994)「工学系の専門読解教育における日本語教育の役割」『日本語教育』82, 1-12.

深谷優子(2005)「包括的なテキストの一貫性と読解処理」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』53, 2, 163-173.

福田由紀(2012)『言語心理学入門 言語力を育てる』培風館

藤井貞和(1987)『物語・小説(日本文学講座)』大修館書店

藤原未雪(2016)「中国語を母語とする上級日本語学習者が学術論文を読むときの困難点—名詞の意味の誤った理解を中心に—」『日本語／日本語教育研究』7, 165-180. ココ出版

- 藤原未雪(2017)「上級日本語学習者が小説を読むときに見られる誤読—中国語を母語とする大学院生の事例から—」『読書科学』59(2), 43-57.
- 布施悠子・Dang Thai Quynh Chi (2020)「空間・数量を表す語の語義把握の方法」石黒圭(編著)『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究』ひつじ書房
- ポクロフスカ, オーリガ(2015)「日本語学習者は「語り手」をどう読み取るか—ウクライナ人中級学習者の一人称の省略復元プロセス—」『一橋大学国際教育センター紀要』6, 137-149.
- ポクロフスカ オーリガ(2016)「キーワードの読み誤りが文章理解に及ぼす影響—ウクライナ人初中級日本語学習者のケーススタディ—」『日本語／日本語教育研究』7, 148-163. ココ出版
- POKROVSKA, Olga(2017)「中級日本語学習者の文章理解に見られる読み誤りの諸相：ロシア語・ウクライナ語母語話者を対象に」一橋大学大学院博士学位論文
- ポクロフスカ オーリガ (2019)「誤読の読解指導」石黒圭(編)『日本語教師のための実践・読解指導』くろしお出版
- 堀場裕紀江(2000)「「テキスト理解」のより深い理解から」『英語教育』1月号, 8-11.
- 堀場裕紀江(2015)「第二言語における語彙の習得と運用」『日本語学』34(14), 40-54.
- 麻柄啓一(1994)「文学作品の読み誤りとその修正について」『読書科学』38, 5-12.
- 松井智子(2003)「関連性理論—認知語用論の射程—」『人工知能学会誌』18, 5, 592-602.
- 松下達彦・陳夢夏・王雪竹・陳林柯(2017)「日中対照漢字語データベースの開発と応用」2017 年度日本語教育学会秋季大会(予稿集)
- 松下達彦(2016)「第3章 コーパス出現頻度から見た語彙シラバス」森篤嗣編『ニーズを踏まえた語彙シラバス』くろしお出版, 53-77.
- 宮谷敦美(2005)「読むための日本語教育文法」野田尚史(編)『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 宮地裕(1982)『慣用句の意味と用法』明治書院
- 村木新次郎(2002)「第3章 意味の体系」北原保雄(監修)・斎藤倫明(編)『朝倉日本語講座 4 語彙・意味』朝倉書店
- 村田年(2000)「多変量解析による文章の所属ジャンルの判別—論理展開を支える接続句・助詞相当句を指標として—」『統計数理』48(2), 311-326.
- 村田夏子(2001)「文学を味わう」大村彰道監修 秋田喜代美・久野雅樹編集『文章理解の心理学』北大路書房
- 蒙韞(2018)「文章理解過程における日本語学習者の固有名詞の意味理解—文脈の手がかりに着目して—」『国立国語研究所論集』(14), 125-143.
- 蒙韞・Nguyen Thi Thanh Thuy (2020)「固有名詞の語義把握の方法」石黒圭(編著)『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究』ひつじ書房

- 森田良行(2002)『日本文法の発想』ひつじ書房
- 森雅子(2000)「母国語及び外国語としての日本語テキストの読解—Think-aloud 法による3つのケース・スタディー」『世界の日本語教育』10, 57-72.
- 文部科学省 2019 年度大使館推薦による国費外国人留学生の募集について,http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1411370.htm(最終閲覧日 2019 年 8 月 7 日)
- 山岡實(2001)『「語り」の記号論 日英比較物語文分析』松柏社
- 山方純子(2008)「日本語学習者のテキスト理解における未知語の意味推測—L2 知識と母語背景が及ぼす影響—」『日本語教育』139, 42-51.
- 山崎誠(2017)『テキストにおける語彙的結束性の計量的研究』和泉書院
- 山崎誠(2018)「小説会話文への話者情報付与とその問題点」テキストマイニング研究会発表資料 (2018 年 6 月 9 日同志社大学文化情報学部夢告館)
- 大和祐子・玉岡賀津雄 (2009)「中国人日本語学習者の日本語漢字語の処理における母語の影響」『ことばの科学』22, 117-135.
- 山下淳子(2011)「第 6 章 発話プロトコルを使った認知プロセスの研究」藤村逸子・滝沢直宏編『言語研究の技法—データの収集と分析』ひつじ書房
- 山梨正明(1988)「文脈理解への言語学的アプローチ」『人工知能学会誌』3(3), 301-311.
- 山本一枝(1995)「科学技術者のための専門文献読解指導」『日本語教育』86, 190-203.
- 劉金鳳・Nguyen Thi Thanh Thuy (2020)「外来語の語義把握の方法」石黒圭(編著)『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究』ひつじ書房
- 和氣圭子(2013)「中上級日本語学習者の読解における困難点 : think-aloud 法による事例研究」『言語科学研究』神田外語大学大学院紀要 19, 101-115.
- 渡邊亜子(1996).『中上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版

- Bereiter, C., & Scardamalia, M. (1987). *The Psychology of Written Composition*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Bereiter, C., & Scardamalia, M. (1989) Intentional learning as a goal of instruction. In L. B. Resnick (Ed.), *Knowing, learning, and instruction: Essays in honor of Robert Glaser*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc. 361-392.
- Block, E. (1992) See how they read: comprehension monitoring of L1 and L2 readers. *TESOL Quarterly*. Vol.26.2, 319-343.
- Block, E. (1986) The Comprehension strategies of second language readers. *TESOL Quarterly*. Vol.20.3, 463-494.
- Carrell, P.L. (1988) Interactive text processing : *Implications foe ESL/second language reading class rooms*. In Carrell, P., Devine., J. and Eskey, D. (eds.) 239-

- de Beaugrande, R., & Dressler, W. (1981) *Introduction to Text Linguistics*. London: Longman.
- de Bot, Paribakht & Wesche, M. (1997) Toward a lexical processing model for the study of second language vocabulary acquisition: Evidence from ESL reading, *Studies in Second Language Acquisition*, 19, 309-329.
- Ericsson, Anders K. and Herbert Simon, H. (1993) *Protocol analysis: Verbal report as a data*. (Revised ed.) Cambridge, MA: MIT Press.
- Fletcher, C.R. (1994) Levels of representation in memory for discourse. In M. A. Gernsbacher (Ed.) *Handbook of psycholinguistics*. Academic Press. 589-607.
- Geoffrey N. Leech (1983) *Principles of Pragmatics*. Longman
- Graesser, A.C. (1981) *Prose comprehension beyond the world*. New York: Springer-Verlag.
- Graesser, A.C. & Clark, L.F. (1985) *Structure and procedures of implicit knowledge*. Norwood, N.J.: Ablex.
- Graesser, A.C. & Goodman, S.M. (1985) Implicit knowledge, Question Answering, and the Representation of Expository text. In Britton, B.K. & Black, J.B. (Eds.), *Understanding Expository Text*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. 109-171.
- Graesser, A.C., Singer, M. & Trabasso, T. (1994) Construction inference during narrative text comprehension. *Psychological Review*, 101, 371-395.
- Halliday, M.A.K. & R. Hasan (1976) *Cohesion in English*. Longman. 安藤貞雄ほか訳 (1997) 『テキストはどのように構成されるか—言語の結束性—』 ひつじ書房
- Hayes, J. R., & Flower, L. (1980). Identifying the Organization of Writing Processes. In L. W. Gregg, & E. R. Steinberg (Eds.), *Cognitive Processes in Writing: An Interdisciplinary Approach* (pp. 3-30). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Horiba, Yukie. (1996) Comprehension processes in L2 reading: Language competence, textual coherence, and inferences. *Studies in Second Language Acquisition*, 18, 433-473.
- Horiba, Yukie. (2002) Comprehension processes in L2 reading: Language competence, textual coherence, and inferences. *Studies in Second Language Acquisition*, 18, 433-473.
- Horiba, Yukie. (2012) Word Knowledge and its relation to text comprehension: A comprehensive study of Chinese- and Korean-speaking L2 learners and L1 speakers of Japanese. *The Modern Language Journal*, 96(1), 108-121.

- Just, M.A., & Carpenter, P.A. (1992) A capacity theory of comprehension: Individual differences in working memory. *Psychological Review*, 99(1), 122–149.
- Keiko Koda (2005) *Insights Into Second Language Reading: A Cross-Linguistic Approach*, Cambridge University Press.
- Kintsch, W., and van Dijk, T. A. (1978). Toward a model of text comprehension and production. *Psychological Review*. 85. 363-394.
- Kintsch, W. (1994). Text comprehension, memory, and learning. *American Psychologist*. 49. 294-303.
- Kintsch, W. (1998) *Comprehension: A paradigm for cognition*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Koizumi, Rie, Hideki Sakai, Takahiro Ido, Hiroshi Ota, Megumi Hayama, Masatoshi Sato and Akiko Nemoto (2011) Toward validity argument for test interpretation and use based on scores of a diagnostic grammar test for Japanese learners of English. *Japanese Journal for Research on Testing* 7: 99-119.
- Kondo-Brown, K. (2006) How do English L1 learners of advanced Japanese infer unknown kanji words in authentic texts, *Language Learning*, 56, 109-153.
- Leow, Roald P. and Kara Morgan-Short (2004) To think aloud or not to think aloud: The issue of reactivity in SLA research methodology. *Studies in Second Language Acquisition* 26: 35-57.
- Matsunaga, S. (1999) The role of kanji knowledge transfer in acquisition of Japanese as a foreign language. 『世界の日本語教育』 9, 87-100.
- Mondria, J.-A. & Wit-de Boer, M. (1991) The effects of contextual richness on the guess ability and the retention of words in a foreign language, *Applied Linguistics* 12, 249-267.
- Mori, Y. (1998) Effects of first language and phonological accessibility on kanji recognition, *The Modern Language Journal*, 82(1), 69-82.
- Mori, Y. (2003) The role of context and word morphology in learning new kanji words, *The Modern Language Journal*, 87(3), 404-420.
- Mori, Y. & Nagy, W. E. (1999) Integration of information from context and word elements in interpreting novel kanji compounds, *Reading Research Quarterly*, 34, 80-101.
- Nassaji, H. (2003) L2 vocabulary learning from Context: Strategies, knowledge sources, and their relationship with success in L2 lexical inferencing, *TESOL Quarterly*, 37, 645-670.
- Nick C. Ellis and Nuria Sagarra (2010) The Bounds of Adult Language Acquisition:

- Blocking and Learned Attention, *Studies in Second Language Acquisition*, 32, 553-580.
- Nobuko Chikamatsu (1996) The effects of L1 orthography on L2 word recognition: A study of American and Chinese learners of Japanese, *Studies in Second Language Acquisition*, 18, 403-432.
- Pressley, M. & Afflerbach, P. (1995) *Verbal protocols of reading: The nature of constructively responsive reading*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Rod Ellis (1997) *Second Language Acquisition* (Oxford Introduction to Language Study Series) Oxford University Press.
- Scardamalia, M., & Bereiter, C. (1991) Literate expertise. In K. A. Ericsson & J. Smith (Eds.), *Toward a general theory of expertise: Prospects and limits*. Cambridge University Press. 172-194.
- Segalowitz, N. & M. Hébert (1990) Phonological recoding in the first and second language reading of skilled bilinguals, *Language Learning* 40, 503-538.
- Sperber, D. and Wilson, D. (1986,1995): *Relevance Theory: Communication and cognition*, Blackwell.
- Talmy Givón (1983) *Topic Continuity in Discourse: A Quantitative Cross-language Study*, John Benjamins Publishing.
- Thorndyke, P. W. (1977). Cognitive structure in comprehension and memory of narrative discourse, *Cognitive Psychology*, 9, 77-110.
- van den Broek, P. & Gustafson, M. (1999) Comprehension and memory for text: Three generations of reading research, In S. R. Goldman, A.C. Grasser, & P. van den Broek (Eds.) *Narrative, Comprehension, Causality, and Coherence*, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. 15-34.
- van Dijk, T. A. and Kintsch, W. (1983) *Strategies of discourse comprehension*. London: Academic Press, Inc.
- van Dijk, T.A. (1987) Episodic models in discourse processing. In R. Horowitz & S.J. Samuels (Eds.), *Comprehending oral and written language*. NY: Academic Press. 161-196.
- Yokosawa, K., & Umeda, M. (1988) Processes in human Kanji-word recognition. Proceedings of the 1988 IEEE international conference on systems, man, and cybernetics. 1988, Beijing and Shenyang, China. 377-380.
- Yoshida, M. (2000) Working memory capacity and the use of the inference in L2 reading. A Paper Presented at Annual Conference of American Association of Applied Linguistics. Vancouver, Canada.

参考資料

森絵都(2005)「彼女の彼の特別な日，彼の彼女の特別な日」『秘密。私と私のあいだの十二話』ダ・ヴィンチ編集部編 メディアファクトリー, 28-37.

付録資料

1. フォローアップインタビュー

小説をすべて読み終わった後に、フォローアップインタビューを行った。聞いた内容は、「難しかったところや迷ったところがありますか」「気になったところがありますか」「全体の理解度」である。

表1 フォローアップインタビュー

英語母語話者	
E01	1 編目の最初のほうのセリフで、 <u>誰がどこを話しているかわからなかった</u> 。ヒントは書いてあったが、全部書いてあるわけじゃないので難しかった。
E02	最初、セッティングがちょっとわからなかった。特に、 <u>主語はなく、主語と時間の解説が難しかった</u> 。ウェディングについての説明があってからわかった。最初はわかりにくかった。
E03	1 編目の最初の <u>会話ほど混乱した部分はなかった</u> 。この部分ではまだ背景が深く理解できていなくて、読み進めていろいろわかってきた。
E04	小説の構成は、一番面白いところは、何が起きるかいつも考えなければならない。読んでも何が起きるかわからない。そこが気になる。迷ったところはけっこうたくさんある。最初ははっきりしないが、次の文章に説明があて、読み切ったら全体の理解、全体の絵が出てくる。たとえば、「ミモザ」は最初ははっきりしなかったが、全体のコンテクストを読むとわかる。
E05	<u>語り手が何が起きているかを自身に話している書き方だったので、そこですごく混乱した。対話じゃないところ</u> です。
E06	(調査時間の関係でインタビューなし)
E07	ストーリーがファンタジーなのか、サイエンスフィクションなどかわからなかった。次の文章が彼女のことなのか、それとも今のことなのか、どういう場面かちょっとわからなかった。 <u>わからない言葉もあって。その言葉を飛ばしていいのか、重要なのかもわからなかった</u> 。ただ、そういう文学的な表現なのかどうかということもわからなかった。全体の理解度は70%ぐらい。「あ、そうなんですか」「誰が」と聞かれると、「間違ったかな」と感じた。
E08	<u>目的語のつながりがわからない</u> ところもあった。全体の理解は90%だが、細かいところも入れると50%。
E09	<u>結末がわからない</u> 。「彼女はコースターに新郎の電話番号を書いた」と書いてあるから。彼女は新郎の電話番号を書いたと推測するので、バーの男が電話をかけると新郎がでると思う。電話番号のところで迷った。最初は彼女は自分の電話番号を書いたとあるのに、2編めでは、「新郎に電話しよう」とある。意図がわからないのでとても混乱している。全体としては85%は理解できた。

E10	結末はとても重要だと思うが、「ほんとに電話するの」は <u>彼が誰について</u> いつているかはっきりわからなかった。誰に電話するのかの回答によって、趣旨ががらっとかわってしまいますので。だいたいわかったが、少し疑念が残る。また、意味のわからない表現もあった。個々の意味はわかっても、 <u>一緒になるとどんな意味になるのか</u> 。だから一つ一つの言葉を調べるのではなくて、その表現を調べなければならぬが、辞書にのっていないことが結構ある。「言葉に詰まった」とか、そういうのを調べるのは難しい。「とっておきの殺し文句」はか調べなかったんですが。
E11	「三枚目風」の意味はまだわからない。魅力的じゃない顔と先ほどは言ったが、「電話番号を渡した」ということは、魅力的に見えると思うので。読んでいる途中で変だと思っても、読み進めるとあとで意味がわかる。話の筋は完全に理解できた。最初のところだけ、大胆な勘違い(「放っていて」を「一発放って」などと性的な表現な解釈)をしてしまって、すみません。
E12	正確に意味がわからなかったところはたくさんあるが、今はちょっと思いつかない。
E13	だいたい文面から意味はわかる。ひとりで読むと、意味がわかればわざわざ止まって調べることはしない。今回も最初はそうしていたが、途中でうまく翻訳していないことに気づいて調べ始めた。日本語の言葉は英語に翻訳しようとする自然じゃない表現がある(どの言葉かはっきりは思い出せない)。たとえば、「 <u>三枚目</u> 」とか。全体に 90%は理解できた。正確な翻訳という点では 70%。
韓国語母語話者	
K01	<u>漢字みたいにわからないことが出たとき</u> 、前後の文脈からもわからないときにはちょっと迷った。「緊張して舞いあがって」「丸顔の三枚目風」。男自体がちょっと変。初めてみた女の人に声をかけたりとか、それで願いを叶えるとか、自分もできないことを話したから変だと。はじめこの男は神様とかそんな気がしたが、後で彼の話を見て、「えー」と。 <u>ファンタジーみたいな話か</u> と最初は思った。はじめはほんとに時間が戻ってそんな話になるのかなと思ったが、結局、男が女の電話番号をもらいたいというストーリーだとわかった。
K02	難しかったのは漢字。見慣れない表現が多かった。単語の組み合わせで迷った。たとえば「三枚目風」「準備体操」。検索しても出てこないのがあって、それが戸惑った。知らない単語はあっても、だいたい辞書を調べなくても理解できた。細かい表現とか見慣れない漢字まで全部理解するのだったら、時間がかかると思う。
K03	迷ったところは漢字。単語が2つ組み合わせたもの。「立ちかけた」とかイメージできるが、韓国語に訳すのが、正確な単語をあてるのが難しい。他はとくになし。この女の人「意地ばかりはって」とあったが、どれくらいつきあって別れたのか、今未練を持っているから、どれくらいつきあったのか気になる。なんて訳したらいいかわからないものがあってもやり過ごしていた。韓国語で表現しようと思ったら、その表現が難しい。単語にマッチする、対応する一番適切な韓国語が何かを考えるのが。

K04	普通どおりに読もうとしたが、<u>調査と言われると緊張して</u>。普通通りには読めない。韓国語であまり考えない。それで、韓国語で翻訳してくださいと言われると、速度も落ちてしまうし、いろいろ考えてしまう。「舞いあがって」も「服を着る」とあまり重要だと思ってないから。聞かれると間違っただけ。そんな風に読んでいた。<u>だから普通に読むときとちょっと違っていた。質問されるともう1回よむようになった。</u>質問されると、「なぜ、質問したのかな」と考える。誰のセリフかと聞かれたら、そういう質問だと思うけど、そうじゃないとき、質問はちょっと気になる。知らない単語をあてずっぽうに推測したとき、ドキッと思った。違うのかなって思った。質問されると、違っているのかなと考えた。最初読んだときには結果はこうだって自分なりに結論づけていた。当然、女の人には自分の電話番号を書いたと思った。1編目にそういう風に書いてあったような気がする。そう解釈しようと思って、男の視点の話を読んだが、そこで、新郎という言葉がでてきて、そうすると前読んだのも、あれも間違いなのかなって思った。コースターに自分の名前を書いたというところ。でも、自分の番号とは書いてなかったから(といって、再度、ページをめくって確認)「お、自分自身の電話番号」違う話かな。ここには自分の電話番号と書いてあるけど、ここはなぜ「新郎に電話する」？今わかった(結末を誤っていたが、フォローアップインタビューで話している間に気づいた)。女性は自分の電話番号を書いた。男の人はこの流れからすると、自分の要求したとおりに、新郎の電話番号だと思っている。実は女性の電話番号。でも、まだ電話していないから、この男はわかっていない。まだ新郎の番号だと思っている。そういうことね！美しい話でしたね。「新郎に電話しよう。その男から彼女の電話番号を聞き出したい」これは完全に新郎の電話番号だと思っているからですね。だから書いたのは新郎の電話番号だと思っていた。で、前は彼女の番号だと思っていたのが間違いだなんて、そのとき思いました。これは「反転の反転ですね」
K05	迷ったところは漢字。「唇に貼りついた」。「49日」は韓国でも聞いたことがあるが、日本にもあるとは思わなかった。「いちころ」「振り向く」「殺し文句」は韓国語でどう表現したらいいか難しい。また、最初、「ミモザ」を「ブーケ」と思っていたんです。ブーケをこの人(彼女)がもらって、バーでそのブーケを見ながら話していると思ったが、もう一度考えると、ブーケとミモザは違うものだとわかった。それがちょっと迷った。全体としては80%理解した。<u>残りは文学的な表現と、日本にだけある表現、漢字。</u>
K06	<u>難しかったのは慣用句的な表現、漢字、縦書き。</u>日本語で見て、ある程度解釈できるが、それを韓国語でもう一度言い換えて表現するのがむずかしい。
K07	<u>難しかったのは単語。</u>「ミモザ」顔の表現とかだいたいはわかるけど性格や行動を表す表現が難しかった。
K08	<u>日本語的な表現が難しかった。</u>たとえば、ひらがなだけの表現。形容詞みたいなひらがなだけで表現している言葉。それから、韓国であまり使わないカタカナの英語の表現「コースター」とか。あとは漢字で、日常であまり使われていない表現。
K09	「おまえは嘘をつかない子だ」「覚悟した」が<u>矛盾しているような気がする</u>。男の人は女の人に嘘をつかれた形になっているのに、この状況でおばあちゃんの言葉を思い出して覚悟したというのが理解できない。これを除いて全部理解できたと思う。
K10	「特になし」とコメント。
K11	文章を1つずつ翻訳しなければいけないから、韓国語で話さないといけないから、全体的な小説の内容があまりわからなかった。読むと集中しちゃって、全体的な内容が正直はっきりわからなくて。だから、さっき結末がどうだったかと聞かれたときには、ちょっと自信がなかった。<u>漢字が難しかった。</u>通訳する人がちょっと間違っていた。通訳の人がずっと時計みて急いでいた。自分はちょっとへたくそかなと。ちょっと自信がなかった。

K12	ちょっと難しかった。内容は想像できるところからは推測できましたが、やはり漢字を見たら、詳しくわかりたくて。その漢字が間違ったらどうなるかと。ストーリーが変わるかもしれないって不安があって。ほんとうにおもしろかった。
K13	韓国語にない表現を言葉にするのが難しい。今、翻訳の仕事をしているが、自分は本を読んでいないから、本を読んでいる方だと普通にわかる細かい表現が全然できない。形容詞とか。あまり使わないじゃないですか、普段は。たとえば、韓国だと「走る」は1つしか意味がないが、日本語だと、駆け足、とかいろいろある。韓国語にはそこまでの種類がない。
中国語母語話者	
C01	ミモザとかコースターとか、見たことのない言葉がでてきたのはわからなかったが、だいたいのはあらすじは大丈夫だと思う。
C02	「特になし」とコメント。(あらすじを言ってもらうと、「外見で人を判断してはいけないことがわかった」とユニークなまとめ方をした)
C03	37 ページの最後で、なぜ急におばあちゃんの言葉を思い出したのか理由が不明。理解は 80%。訳せることは訳せるけど、なぜそうなっているのか、主語が誰かと聞かれると、自分もわけがわからなくなる。意味がわからない単語がいくつかあった。そして、主語がない場合は自分の判断はなかなかできない。
C04	「電話するの」のところで、バーの男が欲しがっていたのは新郎の電話番号なのに、なぜ、女性は自分の電話番号をあげたのか、だから、誰が、誰に電話するか結局わからなくなる。矛盾している(とコメントしつつ、読み終わったあとには、オチがわかった様子)。1 編目の電話番号と 2 編目の電話番号は違う人の番号だった。
C05	ミモザは辞書に「オジギソウ」と書いてあったが、お酒かもしれないと思った。今の段階だと「お酒」。「酔っている」とあるから、お酒を連想した。もう一つは男性がこの女性を見た瞬間、女性が 1 人でお酒を飲んでいて(2 編め冒頭)とある。お酒の名前はいつも特別な名前がつけられるので、ミモザもその可能性が高い。思ったよりも丸顔の三枚目風、想像はできるが言葉にするのが難しい。また、日本語で読んだらわかるけど頭の中でも意味もわかるけど、中国語でなんといえいいかわからないことがある。だから理解度 70%。
C06	読んだ後にも「今からでも取返しがつきそうだ」の意味がわからない。この文は全体と関係がないから、読み終わってもどういう意味になるかわからない。また、人の様子を表すのに、なぜ「三枚目」というのか。
C07	わからない言葉はたくさんあった。「49 日」「いちころ」「こぼしていた」。よくわからないことがあるはずだが、全部読んだらなんとなくこのストーリーがわかるようになって、さっき迷っていたところも思い出せなくなった。ストーリーの理解は 70-80%。わからない言葉がけっこうあって、1 つ 1 つの意味は言えなくても全体を読んでほしい意味がわかる。辞書をひくのはめんどくさい。直接中国語に翻訳するのが難しい。言いながら翻訳すると、前のストーリーを忘れちゃう。何を言ったのか(何を書いてあったか)わからなくなる。
C08	わからなかった言葉はほとんど調べたので、今はわからない言葉はたぶんない。

C09	いくつかわからない言葉があって理解が難しかった。「ふいにそう思った」「高鳴る鼓動、早まる脈拍」「得意先」「歯並びがきれい」は言葉通りの意味ですか？ほかの意味があると思っていたが、今は歯並びのことを話していると思う。「お節介」「あぐらをかいていた」「二人のなれそめクイズ」「コースター」。(1編めを読み終わって、自ら「ちょっと難しい」とコメントした)。理解していることを話すのは難しかった。いろいろなことはわかっているけれど言葉で表せない。自分が理解していることを言うのはちょっと難しい。
C10	「にや」(質問攻めにあっていた)は辞書になかったので推測しなければならなかった。また、「質問せめ/にあっていた」という接続がわからない。「にあって」の「っ」がわからないので調べたいとき、辞書形が何かわからない。自分の変形(活用のこと)をちゃんと勉強しなかった。日本語はわかり、心の中でわかっているが、今のように訳すとふさふさしい中国語が思い出せない。自分の感覚だとずっと辞書を調べていた。「力をふりしぼって」のような「を～」のような言葉が多くて(連語という意味か)わからない。たぶん1人で読むとき、ずっと辞書で調べると読みたくなる。たぶん飽きてしまう。自分1人で読むと辞書で調べると、これ以上読めない。だいたいの意味がわかればいいという感じ。(今日は調査だからていねいに調べた?)そうですね。
C11	わからなかった言葉は「三枚目風」。(読後に調べると、「三昧(ざんまい)」と間違えて調べ、「まじめ」の意味だと誤って解釈)もう1つは、「煙に巻いて逃げる気だ」で、 <u>今でも男と女のどちらが逃げるのかまだよくわからない</u> 。全体の理解は95パーセント。迷ったところは本当はあまりない。何年も日本にいと日本語に慣れすぎて母国語を忘れる。特に漢字は、日本の漢字をそのまま中国語で言うようになる。新郎新婦を日本語読みしたりする。カタカナの言葉は英語の言葉を思い出しながら。全体にすごくストーリーがよかった。日本の小説はおもしろいなと思った。
C12	「丸顔の三枚目風」「得意先」がどんな意味かわからない。他は大丈夫。全体の理解は85%。翻訳が難しい。日本語を読んで中国語で話すとなかなかできない。びっくりした言葉を探すのが。日本語を読んで日本語で理解するのは一応できるが、中国語で表すと難しい。気持ちを表す言葉が難しい。微妙なニュアンス。小説ではそういう表現があるのでそれを理解するのがちょっと難しい。
C15	2編めを読みはじめて「ちょっと似てる、文章」とコメントする。また、読後のフォローアップインタビューで「ミモザ」「ブーケ」は何ですかと聞いてきた。

2. 学習者の読解調査の結果

協力者	小説の読書習慣 (4よく、3時々、 2あまり、1全然) 母語で 日本語で		辞書使 用回数	結末 (1:誤 0:正)	①発話 主の誤 り	②ノ格 名詞句 の誤り	③ゼロ 代名詞 の誤り	④人称 詞の誤 り	⑤文構 造の誤 り	①-⑤ 合計	⑥字形 認識の 誤り	⑦音韻 情報の 使用の 誤り	⑧語構 成の誤 り	⑨多義 語の誤 り	⑩その 他の誤 り	⑥-⑩ 合計	①-⑩ 合計
E01	2	3	23	0	0	1	1	1	1	4	5	0	2	2	0	9	13
E02	3	3	35	0	1	0	2	1	0	4	2	0	4	1	3	10	14
E03	4	3	24	1	0	0	3	0	1	4	1	0	3	3	1	8	12
E04	3	3	41	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	1	1	3
E05	3	1	40	0	0	1	1	0	0	2	1	0	1	2	0	4	6
E06	4	3	43	0	0	1	3	1	0	5	1	0	2	2	0	5	10
E07	4	3	10	0	1	1	3	0	2	7	3	0	2	4	2	11	18
E08	4	2	0	0	0	1	2	0	0	3	2	1	2	2	2	9	12
E09	3	2	45	1	1	0	5	0	0	6	1	1	0	5	2	9	15
E10	4	3	42	0	0	0	0	0	0	0	2	0	1	3	1	7	7
E11	3	3	12	0	1	1	2	1	0	5	4	1	5	1	1	12	17
E12	3	1	10	0	0	0	1	0	0	1	1	0	1	0	2	4	5
E13	3	3	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	4	4
K01	2	2	0	0	0	1	1	0	0	2	6	2	9	3	1	21	23
K02	2	2	24	0	0	1	0	0	0	1	2	0	3	3	1	9	10
K03	4	3	42	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3	3	0	9	9
K04	4	4	9	1	0	0	1	0	0	1	0	1	0	3	3	7	8
K05	3	1	45	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1	4	4
K06	4	3	2	1	0	0	2	2	0	4	4	0	2	5	4	15	19
K07	3	2	0	0	1	0	2	1	0	4	3	2	2	1	3	11	15
K08	2	1	31	1	0	0	1	1	0	2	2	3	5	3	7	20	22
K09	3	3	10	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	2	2	8	8
K10	4	3	0	1	0	0	1	0	0	1	1	1	3	1	3	9	10
K11	2	2	21	1	0	0	0	0	0	0	3	1	1	3	3	11	11
K12	3	2	31	0	0	0	1	1	0	2	1	0	3	3	2	9	11
K13	1	1	0	1	0	1	2	0	0	3	3	2	3	3	0	11	14
C01	3	3	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	2
C02	3	2	0	1	0	0	4	1	0	5	0	0	0	1	1	2	7
C03	2	3	35	1	1	0	5	1	1	8	0	0	0	5	2	7	15
C04	4	3	33	0	1	0	3	0	0	4	0	1	3	2	2	8	12
C05	4	3	26	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	3	0	6	6
C06	4	4	19	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	3	0	7	7
C07	4	1	1	1	2	0	1	0	1	4	1	0	0	1	4	6	10
C08	3	2	21	1	1	0	3	0	1	5	3	2	1	3	1	10	15
C09	3	4	4	0	1	0	1	0	0	2	0	0	2	3	2	7	9
C10	3	3	42	1	2	0	4	1	1	8	0	0	4	2	2	8	16
C11	4	3	4	0	0	0	1	0	0	1	0	1	1	3	0	5	6
C12	3	2	19	0	2	0	0	0	1	3	1	0	2	3	0	6	9
C15	2	2	0	1	0	1	3	0	1	5	1	0	1	2	3	7	12

3. 翻訳資料

第9章で示した材料文の分析の資料である。各言語につき2人の翻訳者に依頼した。翻訳の結果、共通する部分が多かったため、各言語につき1人分の翻訳を載せた。翻訳が異なっている箇所には、比較のために2人の翻訳を載せた。

文番号		予想される困難点と理由・調査する質問
1	元恋人の結婚式の帰りに、初めて一人でバーへ立ち寄った。	
	옛애인의 결혼식에서 돌아오는길에 처음으로 혼자서 바에 들렀다. 元恋人の 結婚式から 帰る道に、 初めて 一人で バーに 立ち寄った。	
	Going home from a former lover's wedding, it was the first time 【I】 had gone alone to a bar. 帰りに から 前の恋人の結婚式、はじめてだった 【私が】行った 一人で バーへ	
	从 前任的 婚礼 回来的路上, 【我】 第一次 一个人 顺路去了 酒吧。 から 元恋人の 結婚式 帰りに、 【私は】 初めて 一人で 立ち寄った バーへ	
2	仄暗いカウンターで胸のざわめきを鎮めたかった。	
	어두컴컴한 카운터의 한쪽구석에서 가슴의 소란스러움을 진정시키고 싶었다. うす暗い カウンターの 片隅で 胸の ざわつきを 鎮めたかった。	
	In a corner of the dimly-lit counter, 【I】 wanted to calm the uneasiness in my heart. 片隅で 仄暗いカウンターの, 【私が】 鎮めたかった 胸のざわめきを	
	想 在 昏暗的 吧台 一角 平复一下 内心的 嘈杂。 たい で 仄暗い カウンターの 片隅 鎮める 胸の ざわめきを	
3	なのに隣席の男から声をかけられ、気がつくとき星座がどうの血液型がどうのと質問攻めにあっていた。	
	그런데 옆자리의 남자【가 말을 걸어와】 정신차려보니 별자리가 어떻게 혈액형이 어떻게 하는 질문공세를 받고 있었다. なのに隣席の男【が話をかけてきて】, 気がつくとき 星座がどうの 血液型がどうのと 質問攻めにあっていた。 【受動態から能動態に変更】	
	However, 【I】 was spoken to by the man in the next seat, 【and】 when 【I】 noticed, 【I】 was bombarded 【with】 questions 【about】 【my】 zodiac sign and 【my】 blood type. なのに 【私が】 声を書かれた 男から 隣席のにいる、【と】 【のとき】 【私が】 気がつく、【私が】 攻めにあっていた質問【で】 【について】 【私の】 星座 と 【私の】 血液型	
	然而却 被 邻桌的 男人 搭话, 等意识到的时候, 正遭遇着 星座是什么, 血型是什么的 问题攻击。 なのに られる 隣席の 男から 声をかける、気がつくとき、 あっていた 星座がどうの血液型がどうの 質問攻めに	
4	お願いだから放っておいてほしい。	
	부탁이니까 내버려 두면 좋겠다. お願いだから 放っておくと良い。	

	Because 【I'm】 asking 【you】, 【I】 want 【you】 to set 【me】 free. から 【私が】 頼んでいます 【あなたに】, 【私が 】ほしい 【あなたが 】放っておいて 【私を】	
	拜托了, 希望 【你】 不要理 【我】。 お願い、ほしい 【あなたに】 放っておく 【私を】 *「だから」は中国語訳に入れられませんでした。	
5	私が席を立ちかけた瞬間、男は言った。	
	내가 자리에서 일어나려는 순간 남자는 말했다. 私が席から 立ちかけた瞬間 男は言った。	
	The moment 【I】 stood up from 【my】 seat, the man said, 瞬間 【私が】 立ちかけた から 【私の】席, 男は言った, 【続くは男が言ったことなので、英語ではピリオドではなく、コンマを付けます。下記の52列なども同じ。】”	
	在 我 快要从座位上站起来的时候, 男人 说话了。 私が 席を立ちかけた 瞬間、男は 言った。	
6	「互いに一つずつ願いを叶え合いませんか」	
	서로 한가지씩 소원을 들어주지 않을까요? 「互いに一つずつ願いを叶え合いませんか」	
	” 【Why】 don't 【we】 grant one wish each to each other?” 「【何故か】しない【私たちが】叶える一つ願いずつお互いに？」 【英語で「～しませんか」はよく”Why not…?”で訳されます。】”	
	“让 【我们】 互相 实现 一个 愿望 吧” 【私たち】 互いに 叶える 一つずつ 願いを ませんか	
7	「願い？」	
	소원? 「願い？」	
	” 【A】 wish?” 「願い？」	
	“愿望?” 「願い？」	
8	「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」	
	우선 나는 당신의 전화번호를 알고 싶어 「とりあえず、私はあなたの電話番号を知りたい」	
	”For the time being, I want to know your phone number” さしあたり 僕は 知りたい 君の 電話番号を	
	“现在 我 想 知道 你的 电话号码” 「さしあたり 僕は たい 知る 君の 電話番号を」	
9	キザな文句。	★「文句」は多義語(不満、文言)

	거만한 【말투】. 傲慢な【話しぶり】 【文句、不満ではなく文章の意味】	
	【A】 disagreeable phrase. 嫌 表現 【「な」は訳しません】	
	令人讨厌的 句子。 キザな 文句 【「不満」ではなく、「文・言葉」の意味】	
10	私は失笑して言った。	
	나는 실소하며 말했다. 私は 失笑して言った。	
	With a snigger I said, 失笑して 私は 言った	英語母語話者は、「言った」内容が文9と文11のどちらを指しているか迷うと発言
	我 不禁笑出声来 说道。 私は 失笑して 言った	
11	「それなら、私は時間を二年前に戻したい」	
	그렇다면 나는 시간을 2년전으로 돌리고 싶어' 「それなら、私は時間を二年前に戻したい」	
	"In that case, I want to go back in time to two years ago" 「それなら、私は戻したい時間を二年前に」	
	“那样的话，我 想 让时间 回到 两年前” 「それなら、私は たい 時間を 戻す 二年前に」	
12	今日、別の女と晴れやかに笑っていた新郎がまだ私の恋人だった二年前。	★名詞止の文。
	오늘 다른여자와 환하게 웃고있던 신랑이 아직 나의 애인이었던 2년전. 今日、別の女と晴れやかに笑っていた新郎がまだ私の恋人だった二年前。	
	Two years ago, when the groom 【who】 today smiled radiantly with another woman was still my lover. 二年前、のとき 新郎【関係代名詞】が今日笑っていた晴れやかに 別の女とだったまだ私の恋人	英語は「2年前」を副詞で表現。
	今天，和别的女人一起 明朗地 笑着的 新郎 还是 我的恋人的 两年前。 今日、別の女と 晴れやかに 笑っていた 新郎が まだ 私の恋人だった 二年前	
13	いつも隣で笑っていたのは私のはずだった。	
	언제나 옆에서 웃고있었던것은 나여야 했다. いつも隣で笑っていたのは私じゃなければならなかった。	
	【It】 should have been me always smiling beside him. 【それが】のはずだった 私の いつも 笑って 隣で 彼に	
	一直 在 【他】 身边 笑着的人 应当是 我。	

	いつも で 【彼の】 隣 笑っていたのは はずだった 私	
14	つまらない意地の張り合いから彼を失ってしまう以前の自分に、戻れるものなら今すぐに戻してほしい。	★「戻る」「戻す」が一文に出現。方向性のある動詞。
	하찮은 고집을 피워 그를 잃어버리게 되기 이전의 자신으로 되돌아갈수 있는 것이라면 지금 당장 【되돌아가고 싶다】. つまらない意地の張り合いのため彼を失ってしまう以前の自分に、戻れるものなら今すぐに【戻りたい】。	「戻してほしい」を「戻りたい」と訳す。
	If 【I】 could go back to the person 【I was】 before 【I】 lost him in a stupid battle of egos, 【I】 would. もし 【私が】 戻れる その人に 【私だった】 前に 【私が】 失った 彼を の中で つまらない戦い エゴの, 【私が】 するでしょう 【つまらない【「退屈」ではなく「ばか」の意味】”	
	因为 毫无意义的 互相固执已见 而失去 他 之前的 自己, 如果 能回去 的话 现在 即刻 就想 回去。 从 つまらない 意地の張り合い 失ってしまう 彼を 以前の 自分に、 戻れる ものなら 今 すぐ ほしい 戻す 【「価値がない」の意味】	
15	「二年前か……。ちょっと難しいな」	★この応答の隣接ペアが4文前、両者の間に地の文が3文挿入されていて繋がりやすい。
	2 년전인가…… 좀 어려운데’ 「二年前か……。ちょっと難しいな」	
	“Two years ago…? 【That’s】 a bit difficult, isn’t it?” 「二年前…? 【それが】 ちょっと難しい ではないか」 【か=?な=tag question】”	
	“两年前 呀……稍微有点 难 呀” 「二年前 か……ちょっと 難しい な」	
16	「なら二日でもいい。二日前に戻して」	
	그렇다면 이틀이라도 좋아. 이틀전으로 돌려줘’ 「なら二日でもいい。二日前に戻して」	
	“If 【it】 were two days, 【that】 would be fine. Go back two days” 「なら 【それが】 だった 二日、【それが】 でしょう いい。 戻して 後ろ 二日」	
	“那么 两天 也行。 回到 两天前” 「なら 二日 でもいい。戻して 二日前に」	
17	彼がまだ完全に別の女のものになっていなかった二日前。	★名詞止め「二日前」。
	그가 아직 완전히 다른여자의 것이 되지 않았던 이틀전. 彼がまだ 完全に別の女の ものになっていなかった二日前。	名詞で表現
	He did not yet belong completely to the other woman two days ago. 彼がではなかった まだ のものである 完全に 別の女に 二日前	英語は「二日前」を副詞で表現。
	他 还 没有 完全 成为 别的 女人的 东西的 两天前。 彼が まだ ない 完全に になっている 別の 女の ものに 二日前。	名詞で表現

18	結婚なんてやめて私とやりなおして。 결혼 따위는 그만두고 나와 다시 시작해. 結婚なんて やめて私と やりなおして。 Don't get married--try again with me. しないで 結婚 やってみる 再び 私と 别 结什么婚 了, 和 我 重新开始吧。 やめる 結婚なんて、 と 私 やり直して	
19	なりふりかまわずにそう頼んだら、彼は迷ってくれたらどうか。 앞뒤 안가리고 그렇게 부탁하면 그는 망설여 주었을까. あれこれ考えずにそう頼んだら、彼は迷ってくれたらどうか。 If 【you】 begged him not to, with no concern about how 【it】 looks, wouldn't he be charmed? もし 【あなたが】 頼んだ 彼に それをしないで、 と 無し 懸念 について どう 【それが】 見える、 しないでしょか 彼が 魅された 【迷ってくれた【「道を迷う・ためらう」ではなく「魅される」の意味】” 如果 不顾一切地 那样 拜托 的话, 他 会【为我】犹豫 吧。 なりふりかまわずに そう 頼む たら、彼は 【私に】迷ってくれる だろうか →【結婚することを】	★「そう」が指す内容。 (照応) ★「何を」(迷ったか) ゼロ代名詞 *「迷う」の訳は要検討。 比喩的か。
20	いや、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに添えてよこした彼が迷うわけがない。 아니, '당신의 행복을 진심으로 원합니다' 라고 결혼보고의 메일에 첨가하여 보내온 그가 망설일리가 없다. いや、「君の幸せを心から願っています」と、結婚報告のメールに 加えて送った 彼が 迷うはずがない。 No, 【he】 added, " 【I】 sincerely hope 【for】 your happiness" in the email inform 【ing】 【me】 【of】 the wedding. 【There's】 no reason 【to think】 he's confused. いいえ、【彼が】 添えてよこした 心から 願っています ために 君の幸せを メールに 報告【する】 【について】 結婚 【ある】 わけがない 【考える】 彼が迷う 不, “【我】 从 心底 祝 你 幸福”, 在 发来的 结婚汇报的 邮件 里 加上 【这一句的】 他 不可能 犹豫。 いや、「【私は】 から 心 願っている 君 幸せを」、に よこした 結婚報告の メール 添える 【この文を】 彼が わけがない 迷う *元の文が倒置文なので、中国語訳に【这一句】を追加しました。	★長い連体修飾、～てよこす、「」と、の引用。 「君」は誰か。 Q「君」は誰を指していますか。 ★英語では「一文」で表現できない。「添えてよこす」も「me」を明示 「私は」が明示 ★この応答の隣接ペアが4文前、両者の間に地の文が3文挿入されていて繋がりが難しい。
21	「それも難しいな。せめて二時間前くらいに負けてもらえませんか」 그것도 어렵군. 최소한 두 시간전 정도로 저주지 않겠습니까?	

	「それも難しいな。せめて二時間前くらいに負けてもらえませんか」	
	"That's difficult too, isn't it? Won't 【you】 at least bring it down to two hours ago?" それが 難しい も ですね くないでしょう 【あなたが】 せめて 下げる に 二時間前	
	“那 也 难 呀。尽量 大概 两小时之前 行吗” 「それ も 難しい な。せめて くらい 二時間前に 負けてもらえませんか」	
22	私は言葉に詰まった。	
	나는 말문이 막혔다. 私は言葉に詰まった。	
	I was at a loss for words. 私が 言葉に詰まった	
	我 说不出话了。 私は 言葉に詰まった	
23	二時間前。	
	두 시간전. 二時間前。	
	Two hours ago. 二時間前	
	两小时前。 二時間前	
24	なるほど、その程度なら今からでも取り返しがつきそうだ。	
	과연, 그 정도라면 지금부터라도 만회할수 있을것 같다. なるほど、その程度なら今からでも取り返しがつきそうだ。	
	Sure, if it's just that much, 【you】 can probably still undo it from the present. なるほど、なら ただ その程度 【あなたが】 できる そうだ もう 取り返しがつき それを から 今	
	原来如此, 那个 程度 的话, 即使 现在 开始 似乎 也 还能挽回。 なるほど、その 程度 なら、でも 今 から そう 取り返しがつく	
25	そして私はその二時間前に、確かに一番大事な何かを置き忘れてきたような気がしていた。	
	그리고 나는 그 두 시간전에 분명히 가장 중요한 무언가를 두고온것같은 느낌이 들었다. そして私はその二時間前に、確かに一番大事な何かを置き忘れてきたような気がした。	
	And then, I felt like two hours ago, 【you】 had definitely left behind the most important thing. そして 私は ような気がしていた その二時間前に、 【あなたが】 確かに 置き忘れてきた 一番大事な何かを	
	而 我 感觉到, 在那 两小时之前, 【我】 确实 把 最 重要的 什么东西 忘在那里了。 そして 私は 気がしていた、その 二時間前に、【私が】 確かに 一番 大事な 何かを 置き忘れてきた	

26	「わかったわ。二時間前で手を打ちましょう」と、私は言った。	
	알았어요. 두 시간전으로 타협합시다' 라고, 나는 말했다. 「わかったわ。二時間前で妥協しましょう」と、私は言った。	
	"【I】 understand. Let's close this deal at two hours ago," I said. 【私が】 わかったわ 手を打ちましょう この取引 二時間前で 私は言った。	
	“明白了。那就 两小时前 吧”，我 说道。 「わかった。手を打つ 二時間前で ましょう」、私は 言った	
27	「じつは私、その頃、忘れられない人の結婚式にいたの」	
	사실은 저, 그때, 잊을 수 없는 사람의 결혼식에 있었어요' 「じつは私、その時、忘れられない人の結婚式にいたの」	
	"Actually, at that time I was at the wedding of the person I can't forget." じつは その頃、私、いたの 結婚式に 人の 【私が】 忘れられない	
	“实际上 那个 时候, 我 在 【一个】 难以忘怀的 人的 婚礼上” 「実は その 頃、 私は いた 【一人の】 忘れられない 人の 結婚式に」	
28	男は瞳を強ばらせ、とても素朴な困惑顔をしてみせた。	
	남자는 눈동자를 굳히며 매우 소박한 곤혹스러운 얼굴을 해 보였다. 男は 瞳を 強ばらせ、とても素朴な困惑した顔をしてみせた。	
	The man fixed his eyes 【on me】. His face showed an expression of pure embarrassment. 男は 目をじっと見つめた 【私に】 【彼の】 顔【が】 みせた 【表現】 とても素朴な困惑の 【1.「強ばる」は「固くする」ですが、英語でhis eyes became hardは冷たく感じます。こういう場合に合わないと思います。(難しかったです)】 【2.このpureは「混ざりものではない」という意味です。】”	
	男人 瞪大了 眼睛, 露出 非常 质朴的 困惑的 表情。 男は 強ばらせる 瞳を、見せた とても 素朴な 困惑 顔を	
29	「すみません。つらいことを思い出させてしまったようで」	
	미안합니다. 괴로운 일을 생각나게 해 버린것 같아서' 「すみません。つらいことを思い出させてしまったようで」	
	"【I'm】 sorry. It looks like I've made you think of painful things" 【私が】 すみません それが ようだ 【私が】 させた 【あなたに】 思う つらいことに	
	“对不起, 好像 让 【你】 想起了 痛苦的 回忆” 「すみません、よう させる 【あなたに】 思い出す つらい ことを	
30 -1	「ううん、つらくなんてなかった。	
	아니. 괴롭다거나 하지 않았어. 「いいえ、つらくなんてなかった。	
	"Uh-uh, 【it】 wasn't really painful. ううん 【それが】 なかった 本当に つらい	
	“没有, 一点也不 痛苦”	

	「ううん、なかった つらい」	
30 -2	だって式の間中、私が考えていたのはたった一つきりだから。	★「一つ」とは何を指すか。 Q「たった一つきり」とは何を指していますか。
	왜냐면 【결혼】식 내내, 내가 생각하고 있던것은 오직 한가지 였으니까. なぜなら 【結婚】式の間中、私が考えていたのはたった一つきりだったから	
	But 【it's】 because, during the ceremony, 【I】 was thinking of just one thing. でも 【それが です】 から 間中 式 【私が】 だった 考えていた について たった 一つきり	
	因为 在仪式中, 我 考虑的事情 只有 一件。 から 式の間中、私が 考えていたのは たった 一つきり	
30 -3	自分はちゃんと微笑んでいるか。	
	나는 분명히 미소짓고 있는가. 私はちゃんと微笑んでいるのか。	
	Am 【I】 smiling properly? だ 【私が】 微笑む ちゃんと	
	自己 在 好好 微笑 吗? 自分は ている ちゃんと 微笑む か	
30 -4	彼の選んだ花嫁よりも綺麗で幸せな女に見えるか。	★「見える」のは「誰が」が非明示
	그가 선택한 신부보다도 예쁘고 행복한 여자로 보이는가. 彼が選んだ花嫁よりも 綺麗で幸せな女に見えるか。	
	Do 【I】 look like a 【more】 beautiful and happy woman than the bride he chose? だ 【私が】 ように見える 【もっと】 綺麗 と幸せ 女 よりも 花嫁 彼が 選んだ	
	比 他 选的 新娘 看起来 更 漂亮 幸福 吗? 彼の 選んだ 花嫁 見える より 綺麗で 幸せ か *「女」は中国語訳に入れられませんでした。	
30 -5	つまらないプライドの塊みたいになって、全力で平静を装った。	
	하찮은 자존심덩어리가 되어 힘껏 평상 【심】을 가장했다. つまらないプライドの塊になって、力いっぱい平常【心】を装った。	
	【I】 became like the personification of 【my】 stupid pride 【and】 tried with all my strength to look calm. 【私が】 なった 鬼みたい 【私の】 プライドの 【と】 やってみた 全力で 見える 平静	
	【我】 变成了 仿若是 毫无意义的 自尊心的 结合体, 用尽全力 假装 平静。 【私は】 なる みたいに つまらない プライドの 塊、 全力で 装っていた 平静を 【「価値がない」の意味】	

30 -6	来てくれてありがとうって彼が声をかけてきたときも、元同僚として当然よ、なんて突っぱねてね」	
	와줘서 고마워라고 그가 말을 걸어왔을때도, 전직장동료로서 당연하지, 라며 텅겼다. 来てくれてありがとうと彼が声をかけてき時も、前職場同僚として当然よ、と突っぱねた。	
	Even when he spoke 【to me】 thanking 【me】 for coming, 【I】 actually rejected 【him】 as 【I】 naturally 【would】 a former colleague” も とき 【彼が】 声をかけた 【私に】 感謝する 【私に】 のために 来てくれて 【私が】 実際に 突っぱねて 彼を と同様に 【私が】 当然 【しよう】 元同僚	
	谢谢你来， 当 他 【向我】 搭话 的时候，作为 前同事 应该的 啦，【我】 也 毫不客气地回嘴道。 来てくれてありがとう、 彼が 【私に】 声をかけてくる とき、 として 元同僚 当然だ よ、【私】 も 突っぱねる	
31	見ず知らずの男に何を話しているんだか。	
	생면부지인 남자에게 무슨말을 하고 있는걸까. 見ず知らずの男に何を話しているんだか。	
	What am 【I】 saying to a strange man? 何を です 【私が】 話している に 見ず知らずの男	
	【我】 在 跟 并不相识的 男人 说 什么 呢。 【私は】 ている に 見ず知らずの 男 話す 何を か	
32	そう思いながらも口が止まらない。	★非飽和名詞「口」。「誰の」口か。 ★「そう」は何を指しているか。
	생면부지인 남자에게 무슨말을 하고 있는걸까. 見ず知らずの男に何を話しているんだか。	
	While 【I'm】 thinking that, 【my】 mouth does not stop. ながら 【私が】 思い そう 【私の】 口が 止まらない	
	虽然 那样 想着, 却 停不了 嘴。 ながら そう 思う、 止まらない 口が	
33 -1	「今は後悔の塊。	
	지금은 후회덩어리. 「今は後悔の塊。	
	“Now 【I'm】 the personification of regret. 今は 【私が】 です 塊 後悔の	
	“现在 是 后悔的 结合体。 「今 は 後悔の 塊。	
33 -2	彼との別れを後悔してる。	
	그와의 이별을 후회하고 있다.	

	彼との別れを 後悔してる。	
	【I】 regret breaking up with him. 【私が】 後悔してる 別れ 彼と	
	后悔 和他 分手。 後悔している 彼と 別れを	
33 -3	意地ばかり張っていた日々を後悔してる。	
	고집만 피웠던 날들을 후회하고 있다. 意地ばかり張っていた日々を後悔している。	
	【I】 regret the days when 【I】 was just stubborn. 【私が】 後悔してる 日々 とき【私が】 ばかり 意地になった 意地【「こころ・意思」「プライド」ではなく「頑固」の意味】”	
	后悔 一直 固执己见的 每一天。 後悔している ばかり 意地を張っていた 日々を	
33 -4	そして何より、彼の特別な日に自分のことばかり考えていたことを後悔してる。	
	그리고 무엇보다, 그의 특별한 날에 자신의 일만을 생각했던 것을 후회하고 있다. そして何より、彼の特別な日に 自分のことばかり考えていたことを後悔している。	
	And more than anything, 【I】 regret that 【I】 thought only of myself on his special day. そして 何より 【私が】 後悔してる ことを 【私が】 考えていた ばかり 自分のこと 彼の特別な日に	
	然后 比什么都 后悔的是, 在 他特别的日子 里 只顾着 考虑 自己的事情。 そして 何より 後悔しているのは、 彼の特別な日 に ばかり 考えていた 自分のことを *語順を調整しました。	
33 -5	もしも二時間前に戻れたら……」	
	만약 두 시간전으로 돌아갈수 있다면….’ もしも二時間前に戻れることができたなら…」	
	If 【I】 could go back to two hours ago….” もしも 【私が】 戻れる 二時間前に	
	如果 可以回到 两小时前……” たら 戻れる 二時間前に…」	
34	私は花嫁の手にしていたブーケの色に似たミモザを見下ろしながら呟いた。	★長い連体修飾 ★花嫁「が」→「の」変換、 ★手にする(機能動詞)の 「する」の意味が曖昧。 「手にする」の連語の意 味をしらないと推測が難 しいか。

	나는 신부의 손에 들려있던 부케색깔과 닮은 【미모사】를 내려다 보면서 중얼거렸다. 私は 新婦の 手にしていた ブーケの色に似た 【ミモザ】を見下ろしながら呟いた。 【花ではなくカクテル】	
	【I】 grumbled while looking down at the mimosa 【that】 looked like the color of the bouquet in the bride's hands. 【私が】 呟いた ながら 見下ろし ミモザを 【関係代名詞】 似た ブーケの色に 花嫁の手にしていた	★日本語では「手にする」と動詞で表現するが、英語では「in the bride's hand」と名詞句で表現し、品詞が異なる。日英の語順だけでなく表現の仕方も大きく異なる文の1つ。
	我 一边 低头看着 和 新娘手里的 捧花 颜色 相近的 鸡尾酒, 一边 低声说道。 私は ながら 見下ろす に 花嫁の手にしていた ブーケの 色 似た ミモザを、 呟いた。	
35	「どんなにつらくても、彼にちゃんと伝えたい」	
	아무리 괴로워도 그에게 확실하게 전하고 싶어 「どんなにつらくても、彼にちゃんと伝えたい」	
	"No matter how hard it is, 【I】 want to tell him properly" どんなにつらい です 【私が】 伝えたい 彼に ちゃんと	
	“不管 多么 痛苦, 也 想 好好 告诉 他” 「ても どんなに つらい、 たい ちゃんと 伝える 彼に」	
36	「なんて？」	
	뭐라고? 「なんて？」	
	” What?” なんて	
	“什么?” 「なんて」	
37	「結婚おめでとう」	
	결혼 축하해 「結婚おめでとう」	
	"Congratulations 【on】 【your】 marriage" おめでとう 【に】 【あなたの】 結婚	
	“结婚快乐” 「結婚おめでとう」	
38	無理をして微笑んだ。	★ゼロ代名詞「誰が」(微笑んだか)は非明示。
	억지로 미소짓는다, 無理をして微笑んだ。	

	【I】 tried hard to smile. 【私が】 やってみた 強くて 微笑むために	
	【我】 勉強地 笑了。 【私は】 無理をして 微笑んだ	
39	はずが、ミモザに一滴の涙が沈んでいた。	★非飽和名詞「涙」。「誰の」涙が。
	그랬지만, 미모사에 한방울의 눈물이 가라앉는다. だが、ミモザに 一滴の 涙が 沈んむ。	
	【It was】 【to be expected】, but a tear sunk in the mimosa. 【それが】 【予期された】 が 【一つの】 涙が 沈んだ ミモザに	★英語では「1つの涙」と翻訳
	应该是这样的, 一滴眼泪 却 落入了 鸡尾酒中。 はずが、 一滴の涙が 沈んでいた ミモザに	
40	酔っている。	★ゼロ代名詞「誰が」(酔っているか) Q:「誰が酔っていますか」
	취했다. 酔っている。	
	【I】 was drunk. 【私が】 酔っている	
	【我】 酔了。 【私が】 酔っている	
41	みっともない。	
	불쌍사답다. みっともない。	
	【It】 【was】 inappropriate. 【それが】 【だった】 みっともない	
	太丢脸了。 みっともない	
42	隣の男はさぞかし呆れているだろう。	★非飽和名詞「隣」「誰の」隣か。
	옆 【자리】 의 남자는 오죽이나 어처구니없어 하고 있을까. 隣 【席】 の男は さぞかし 呆れているだろう。	
	The man next 【to me】 must have been shocked. 男 隣 【私に】 はず だった ショックされた	英語では「to me」が義務的
	旁边的男人 一定 惊呆了 吧。 隣の男は さぞかし 呆れている だろう	

43	けれど男は驚くほど誠実な困惑顔を保ったまま、胸のポケットに挿していたペンに手を延ばした。	★「誰の」ポケットか
	하지만 남자는 놀랄만큼 성실한 곤혹스러운 얼굴을 한 채, 윗주머니에 꽂아둔 펜에 손을 뻗었다. けれど男は 驚くほど 誠実な困惑した顔を保ったまま、上ポケットに挿していたペンに手を延ばした。	
	But as the man 【's】 face surprisingly maintained a sincerely bewildered 【expression】, 【he】 reached out his hand for the pen inserted 【in】 【his】 breast pocket. けれど まま 男【の】 顔【が】 驚くほど 保った 誠実 困惑 【表現】 【彼が】 延ばした 【彼の】 手を 【に対して】 ペン 挿した 【中に】 【彼の】 胸のポケット	
	然而 男人 【让】 【我】 颇感吃惊的 保持着 诚实的 困惑的 表情, 朝 插在 胸前 口袋里的 笔 伸出手去。 けれど 男は 【させる】 【私を】 驚くほど 保ったまま 誠実な 困惑 顔を、に 挿していた 胸の ポケットに ペン 手を延ばした	
44 -1	「降参です。	
	항복입니다. 「降参です。	
	“【I】 give up. 【私が】 降参します	「私は」は義務的
	“【我】 输了。 「【私は】 降参です。」	「私は」は義務的
44 -2	時を戻せない僕にはあなたの願いを叶えることができない。	
	시간을 되돌릴수 없는 【나는】 당신의 소원을 들어줄 수가 없어요. 時間に戻せない 【僕は】 あなたの願いを 叶えることができない。	
	For me, 【who】 is not able to reverse time, 【it】 【is not possible】 to grant your wish. 僕には 【関係代名詞】 できない 戻せる 時間 【それが】 【可能でない】 叶える あなたの 願い	
	不能 让时间倒流的 我 没有办法 实现 你的心愿。 できない 時間に戻す 私には できない 叶える あなたの願いを	
44 -3	よって、僕の願いであるあなたの電話番号も聞くわけにいかない。	
	따라서, 나의 소원인 당신의 전화번호도 물어볼 수가 없네요. よって、僕の願いであるあなたの電話番号も聞くわけにいかない。	
	Therefore, 【I】 cannot ask for your phone number, 【which】 was my wish. よって 【僕が】 できない 聞く あなたの電話番号【を】 【関係代名詞】 だった 僕の 願い	
	因此, 作为 我的心愿的 你的 电话号码 也 不能 问了。 よって、 である 僕の願い あなたの 電話番号 も わけにいかない 聞く	
44 -4	でも、もしもその新郎の番号を教えてくれたら、あなたの伝えたかった言葉を代わりにお伝えすることはできますが……」	
	하지만, 혹시 그 신랑의 【전화】 번호를 가르쳐준다면, 당신【이】 전하고 싶었던 말을 대신 전달할수는 있지만…' でも、もしもその新郎の番号を教えてくれたら、 あなた【が】伝えたかった言葉を 代わりに伝えることはできますが…」	

	【追加】	【変更】	
	But if 【you】 tell 【me】 the groom's number, 【I】 can tell him the words you wanted to tell him instead, but…” でも もしもくれたら 【あなたが】 教えて 【僕に】 その新郎の番号を 【僕が】 できます お伝えすることは 言葉を あなたの伝えなかった 彼に 代わりに が		
	不过, 如果 告诉 【我】 那位 新郎的 号码 的话, 【我】 可以 代替 传达 你 没能说出口的话……” でも、もしも 教えてくれる 【私に】 その 新郎の 電話番号を たら、【私は】 できる 代わりに お伝えする あなたの 伝えなかった 言葉… …」		
45	私は初めて男を正面から捉えた。		
	나는 처음으로 남자를 정면에서 【바라보았다】. 私は初めて男を正面から【見つめた】。		
	For the first time, I saw the man from the front. 初めて 私は 見ました 男を から 正面		
	我 第一次 从 正面 看了 男人 一眼。 私は 初めて から 正面 捉えた 男を		
46	思ったよりも丸顔の三枚目風だった。		★「三枚目風」という日本独自の表現
	생각보다도 둥근얼굴의 【친숙해 보이는】 【느낌이 들었다】. 思ったよりも丸顔の 【親しみやすい】 【感じがした】。 【韓国語にない表現】 【変更】		
	More than 【I】 had thought, 【he】 had the air of a comic actor with a round face. よりも 【私が】 思った 【彼が】 持っていた 風 三枚目 と 丸顔		
	比想象的还 脸圆, 很滑稽。 思ったよりも 丸顔 三枚目風		
47	この人はキザなのかお人良しなのか。		
	이 사람은 거만한것인가 사람이 좋은건가. この人は 傲慢なのか お人良しなのか。		
	Was this person pretentious 【or】 good-natured? だった この人は キザ 【又は】 お人良し		
	这个人是 虚张声势呢, 还是个老好人呢。 この人は キザなのか、お人良しなのか		
48	それともただの世話好きか。		
	아니면 그저 참견하기 좋아하는 사람인가. それとも ただの世話好きか。		
	Or just a caring 【person】? それとも ただの 世話好き 【な】 【人】		

	还是说 只是 好管闲事 呢。 それとも ただ 世話好き か	
49	妙に胸を騒がせる疑念は、久々に芽生えた好奇心でもあった。	★非飽和名詞「胸」
	묘하게 가슴을 두근거리게 하는 의구심은 오랫동안 싹튼 호기심이기도 했다. 妙に 胸を騒がせる 疑う気持ちは、久々に芽生えた好奇心でもあった。	
	Strangely, a doubt stirred in 【my】 heart, and for the first time in a long time 【I】 also had a curiosity budding 妙に 疑念は 騒ぐ 【私の】 胸に と 久々に 【私が】 でも あった 好奇心 芽生えている 妙に【「奇跡・コツ」ではなく「おかしい」の意味】、騒ぐ【「騒音を立つ・おもしろがっている・狼狽える・緊張する・興奮する」ではなく「立てられる」】”	
	莫名地 使心头骚动的 疑问, 也是 许久不曾 萌生的 好奇心。 妙に 胸を騒がせる 疑問は、 でもあった 久々に 芽生えた 好奇心	
50	この人のことをもう少し知りたい気がするー。	
	이 사람에 대해서 좀더 알고싶은 마음이 생긴다. この人について もう少し知りたい気がする。	
	【I】 felt that 【I】 wanted to try to learn a bit 【more】 【about】 this person. 【私が】 気がする こと 【私が】 みたかった もう少し 【もっと】 【について】 この人のことを	
	【我】 想 试着了解 更多 这个人的 事情。 【私は】 たい 知ってみる もう少し この人の ことを	
51	彼の差し出したペンを受けとり、私はコースターに自分自身の電話番号を記した。	
	그가 내민 펜을 받아, 나는 컵받침에 자신의 전화번호를 적었다. 彼が差し出したペンを受け取り、私はコースターに自分自身の電話番号を記した。	
	【I】 took the pen he offered and I wrote my own phone number on a coaster. 【私が】 受け取った ペン 彼【が】 差し出した と 私は 記した 自分自身の 電話番号 上に コースター	
	接过 他 递来的 笔, 我 在杯垫上 写下 自己的 电话号码。 受け取る 彼の 差し出した ペンを、 私は コースターに 記した 自分自身の 電話番号を	

文 番 号	「彼の彼女の特別な日」 ＜彼視点＞	予想される困難点と理由・ 調査する質問
1	祖母の四十九日、親戚一同との会食の帰りに、初めて一人でバーへ立ち寄った。	
	할머니의 【49 제】. 친척들과 식사를 【하고】 돌아가는 길에, 처음으로 혼자서 바에 들렀다. 祖母の 四十九日、親戚たちと食事を【して】 帰る道に、初めて 一人で バーへ 立ち寄った。 【四十九日は韓国でも同じ意味の風習がある】	
	Coming back 【from】 dining with 【my】 relatives 【on】 the 49th day after 【my】 grandmother 【's death】, it was the first time that 【I】 had gone alone to a bar. 帰りに 【から】 会食 【と】 一同 【僕の】 親戚 【に】 四十九日 後 【僕の】 祖母 【の死】 はじめてだった 【私が】 行った 一人で バーへ	
	【今天】 祖母的 四十九日祭, 在 和亲戚一起 吃完饭的 回来的路上, 【我】 第一次 一个人 顺路去了 酒吧。 【今日は】 祖母の 四十九日、 に 親戚一同と 会食の 帰り、 【私は】 初めて 一人で 立ち寄った バーへ	
2	皆の前では平静を装っていたものの、祖母の魂が今日を限りに昇天してしまうことを思うと、おばあちゃんっ子の僕には並々ならない喪失感があった。	
	모두의 앞에서는 아무렇지 않은듯 가장했지만, 할머니의 영혼이 오늘을 마지막으로 승천해 버린다는 것을 생각하니, 할머니를 잘 따랐던 나에게는 보통이상의 상실감이 있었다. 皆の前では 何ともないふりをしたものの、祖母の魂が 今日を限りに 昇天してしまうことを思うと、 おばあちゃんをよく慕っていた僕には普通以上の喪失感があった。	
	Although in front of everyone 【I】 pretended to be calm, when 【I】 thought that after today 【my】 grandmother's spirit would go up to heaven, 【I】, a child 【spoiled】 by my grandma, 【felt】 an extraordinary sense of loss. ものの 前で 皆の 【僕が】 装っていた いる 平静 のとき 【僕が】 思った こと 後で 今日 【僕の】 祖母の魂が 昇天してしまう 【僕が】 子ども 【甘やかされた】 おばあちゃんに 【感じた】 並々ならない喪失感	
	虽然 在大家的面前 伪装着 平静, 但想到 祖母的灵魂 今天就要 升天了, 从小在祖母身边长大的我 有种 非比寻常的 失落感。 ものの 皆の前で 装っていた 平静を、思うと 祖母の魂が 今日を限りに 昇天してしまう、おばあちゃんっ子の僕 には 並々ならない 喪失感 があった	
3	行かないでくれ、おばあちゃん。	
	가지 말아줘, 할머니. 行かないでくれ、おばあちゃん。	
	【Please】 don't go, grandma. 【お願いします】 行かないで おばあちゃん	
	不要走, 奶奶。 行かないでくれ、おばあちゃん	
4	そんな未練を引きずりながら酒を飲み、ふと横を見ると若き日の祖母の写真にそっくりの女性が一人で酒を飲んでいて。	
	그런 미련을 안은채 술을 마시다가, 문득 옆을 보니 젊을적 할머니의 사진과 꼭 닮은 여성이 혼자서 술을 마시고 있었다.	

	そんな未練を抱いたまま酒を飲んでいて、ふと横を見ると若き日の祖母の写真にそっくりの女性が一人で酒を飲んでいた。	
	Drinking while hanging on to that attachment, 【I】 suddenly looked to the side and a woman 【who】 was exactly like a photo of 【my】 grandmother in 【her】 younger days was drinking alcohol alone. 飲んでいる ながら 引きずる そんな未練 【僕が】 ふと 見た 横に と 女性 【関係代名詞】 だった そっくり 【僕の】 祖母の 中に 【彼女の】 若き日の 飲んでいた 酒 一人で	
	【我】 一边 怀着 那样的留恋 一边 喝酒, 不经意地 往旁边一看, 【发现】 【一位】 酷似 照片里 年轻时的祖母的 女士 在 一个人 喝酒。 【私は】 ながら 引きずる そんな未練を ながら お酒を飲む、ふと 横をみると、【気づいた】 【一人の】 そっくり 写真に 若き日の祖母の 女性が ていた 一人で お酒を飲む	
5	これはたぶん、いやきっと、祖母の魂が最後の力をふりしぼってセッティングしてくれた縁に違いない。	
	이것은 아마도, 아니 분명히, 할머니의 영혼이 최후의 힘을 짜내서 【마련】 해 준 인연임에 틀림없다. これはたぶん、いやきっと、祖母の魂が最後の力をふりしぼって 【用意】 してくれた縁に違いない。 【セッティング：一般的ではない表現】	
	Maybe, no, certainly, this must be destiny 【that】 【my】 grandmother's spirit had gathered all 【its】 【remaining】 strength and created this setting. たぶん いや きっと これは 違いない 【する】 縁 【こと】 【僕の】 祖母の 魂が ふりしぼって 【その】 【残っている】 力を と つく った このセッティング	
	这 也许 是, 不, 一定是 祖母的灵魂 用尽 最后的力气 【为我】 制造的 缘分。 これ たぶん は、いや、きっと 祖母の魂が ふりしぼる 最後の力を 【私に】 セッティングしてくれた 縁 に違いない	
6	僕は勇気をふりしぼり、生まれて初めて女性に声をかけた。	
	나는 용기를 짜내서 태어나서 처음으로 여성에게 말을 걸었다. 僕は勇気をふりしぼり、生まれて初めて女性に声をかけた。	
	【I】 gathered 【my】 courage and, for the first time 【since】 【I】 was born, spoke to 【a】 woman. 【僕が】 ふりしぼった 【僕の】 勇気 と 初めて 【から】 【僕が】 生まれた 声をかけた に 【ある】 女性	
	我 鼓足 勇气, 出生以来 第一次 向 女性 搭了话。 私は ふりしぼる 勇気を、生まれて 初めて に 女性 声をかけた	
7	「お一人ですか？」	
	혼자세요? 「お一人ですか？」	
	【Are】 【you】 alone? 【ですか】 【あなたが】 1人で	
	“【您】 一个人吗?” 「【あなたは】 お一人ですか」	
8	高鳴る鼓動。	
	두근거리는 고동 ドキドキする鼓動	
	Throbbing heartbeat.	

	高鳴る 鼓動	
	心跳频率 变高。 鼓動が 高鳴る 【語順を調整しました】	
9	速まる脈拍。	
	빨라지는 맥박. 速まる脈拍	
	Quickening pulse. 速まる 脈拍	
	脉搏跳动 变快。 脈拍が 速まる 【語順を調整しました】	
10	しかし、どうやら盛りあがっているのは僕だけで、彼女はこちらを見ようもしない。	
	하지만 아무래도 고조되고 있는 것은 나뿐이고, 그녀는 이쪽을 보려고도 하지 않는다. しかし、どうやら盛りあがっているのは僕だけで、彼女はこちらを見ようもしない。	
	However, apparently 【the】 only 【one】 excited 【was】 me, as she 【did not】 even look here. しかし どうやら だけ 【1人】 盛りあがっている 【だった】 僕 で 彼女は 【しなかった】 も 見る こちらを	
	然而，兴奋的 似乎 只有 我自己，她 看都没往这边看一眼。 しかし、盛りあがっているのは どうやら だけで 僕、 彼女は こちらを見ようもしない	
11	以前、会社の同僚から「星座と血液型の話をすれば女はいちころだ」と教わったのを思い出して実践してみたものの、いちころどころかますます彼女を白けさせて終わった。	
	전에 회사동료로부터 '별자리와 혈액형의 이야기를 하면 여자는 간단히 넘어온다'라고 배운것을 생각해내고 실천해 봤지만, 넘어오긴 커녕 점점 더 그녀를 시들하게하게 만든채 끝나버렸다. 以前、会社の同僚から「星座と 血液型の話をすれば 女はいちころだ」と 教わったのを思い出して実践してみたものの、いちころどころかますます彼女を白けさせて終わった。	
	【I】 remembered that, long ago, 【I】 had been taught "women are pushovers if 【you】 talk to 【them】 【about】 star signs and blood types", and although 【I】 tried to put it into practice, far from being a pushover, 【it】 ended up making her more and more subdued. 【僕が】 思い出した のを 以前 【僕が】 教わった 女は だ いちころ すれば 【あなたが】 話す 【彼女らに】 【について】 星座 と血液型 と ものの 【僕が】 みた 実践する どころか だ いちころ 【それが】 終わった する 彼女を ますます 白ける	
	【我】 想起 以前 跟 公司的同事 学的 “只要说 星座和血型的话题， 女人就会 被打倒”， 就试着 实践了一下，然而 别说 打倒了， 【我】 愈发 使她 興味索然。 【私は】 思い出す 以前 から 会社の同僚 教わったのを 「すれば 星座と血液型の話を、女は いちころだ」、みる 実践する、 ものの どころか いちころ、【私が】 ますます 彼女を 白けさせて終わった	
12	こうなったら最後の手段。	
	이렇게 되면 최후의 수단. こうなったら最後の手段。	

	If it's going like this, the last resort. こうなったら 最後の手段	
	这样的话 【只有】 最后的手段 【了】。 こうなったら 【しかない】 最後の手段	
13	僕は以前、得意先の係長に教わった「とっておきの殺し文句」で勝負に出た。	
	나는 예전에 거래처의 계장에게 배운 '비장의 필살' 【문장】'으로 승부를 걸었다. 僕は以前、得意先の係長に教わった「秘蔵の必殺【文句】」で 勝負をかけた。 【文句→文章、言葉の意味で使う】	
	【I】 【went】 【on the offensive】 with a clinching phrase, taught 【to me】 long ago by the chief clerk of a client, 【that】 【I】 had been saving. 【僕が】 【行った】 【攻勢に】 殺し文句と 教わった 【僕へ】 以前 係長に 得意先の 【関係代名詞】 【僕が】 とっておき	
	我 用 以前 跟 客户公司的主任 学的 “珍藏版的 必杀计” 来一决胜负。 僕は で 以前 に 得意先の係長 教わった 「おっとおきの 殺し文句」 勝負に出た	
14	「互いにつつづつ願いを叶え合いませんか」	
	서로 한가지씩 소원을 들어주지 않을까요? 「互いにつつづつ願いを叶え合いませんか」	
	“【Why】 don't 【we】 grant one wish each to each other?” 「【何故か】 しない【私たちが】 叶える一つ願いずつお互いに？」 【英語で「～しませんか」はよく“Why not…”で訳されます。】	
	“让 【我们】 互相 实现 一个 愿望 吧” 【私たち】 互いに 叶える 一つずつ 願いを ませんか	
15	「願い？」	
	소원? 「願い？」	
	“【A】 wish?” 願い？	
	“愿望？” 「願い？」	
16	「さしあたり僕は君の電話番号を知りたい」	
	우선 나는 당신의 전화번호를 알고 싶어 「とりあえず、私はあなたの電話番号を知りたい」	
	“For the time being, I want to know your phone number” さしあたり 僕は 知りたい 君の 電話番号を	
	“现在 我 想 知道 你的 电话号码” 「さしあたり 僕は たい 知る 君の 電話番号を」	
17	ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。	★非飽和名詞(一項名詞)

		「顔」。「誰の」(顔)が非明示。 Q「誰の顔ですか」
	돌아보는 그녀의 차가운 미소에 얼굴이 뜨거워졌다. ふりむいた彼女の冷笑に顔が熱くなった。	
	【My】 face became hot at her sneer as she turned toward 【me】. 【僕の】 顔が なった 熱く に 彼女の冷笑 まま 彼女が ふりむいた 【僕に】	★英語は「僕の」が義務的。 また、「僕のほうを」(振り向いた)も明示される。
	因为 扭过头来的 她的冷笑, 【我的】 脸 开始发烫。 に 振り向いた 彼女の冷笑、【私の】 顔が 熱くなった 【追加】 *この中国語の直訳はやや不自然です。自然な言い方は、例えば「她回头冷笑, 我的脸开始发烫」(彼女は振り向いて冷笑した。私の顔が熱くなった) (もう一人の訳) 【我】 【被】 她 的 甩头 冷笑 【弄得】 脸 【通红】 【私】 【される】 彼女 の 振り向く 冷笑 【される】 顔 赤い 【追加】 【解釈の置き換え】 【解釈の置き換え】 【解釈の置き換え】	★中国語では「僕の」を明示するか(前者例文)、主語で「僕(私)」を明示するか(後者例文)。
18	おまえは人の言葉を鵜呑みにしすぎる。	★祖母の言った言葉の引用。カッコなしで地の文。 祖母の発話だと理解できるか。 Q「おまえ」は誰を指しますか。
	너는 사람말을 너무 곧이곧대로 들어. おまえは人の言葉を鵜呑みにしすぎる。	
	You accept people's words too 【easily】. おまえは 鵜呑み 人の言葉を すざる 【手軽に】	
	你 太 囫圇吞枣 别人的话 了。 おまえは すざる 鵜呑みにする 人の言葉を	
19	年中そうこぼしていた祖母の渋面が脳裏をかすめていく。	
	항상 그렇게 푸념하던 할머니의 찌푸린 얼굴이 뇌리를 스친다. いつもそうこぼしていた祖母の渋面が脳裏をかすめていく	
	The scowling face of 【my】 grandmother, 【who】 complained like that all year round, flitted across my mind. の渋面 【僕の】 祖母 【関係代名詞】 こぼしていた そう 年中 が脳裏をかすめてい	
	脑子里 闪现出 一年中 那样 抱怨的 祖母的 苦澀的面庞。 脳裏を かすめていく 年中 そう こぼしていた 祖母の 渋面が	
20	「それなら、私の願いは……」	
	그렇다면, 나의 소원은… 「それなら、私の願いは…」	

	"In that case, my wish [is] ..." それなら 私の 願いは 【です】	
	“那样的话, 我的心愿 是……” 「それなら、私の願い は…」	
21	彼女は完全に僕を軽蔑した様子で無理難題を突きつけてきた。 그녀는 완전히 나를 경멸하는 듯이 '무리난제'를 들이밀었다. 彼女は完全に 僕を軽蔑した様子で無理難題を突きつけてきた。 With a look of complete disdain for me, she had thrust an impossible demand at me. 様子で 完全に 軽蔑した 僕を 彼女は 突きつけてきた 無理難題 【僕に】 她 摆出 完全 轻视 我 的样子 提出了 难题。 彼女は で 完全に 軽蔑する 僕を 様子 突きつける 無理難題を	
22	二年前に戻りたい。 【2】년전으로 돌아가고 싶어. 二年前に戻りたい。 【一般的に数字を使う】 【She】 wants to go back to two years ago. 【彼女が】 戻りたい 二年前に 想 回到 两年前。 たい 戻る 二年前に	
23	二日前に戻りたい。 【이틀】전으로 돌아가고 싶어. 二日前に戻りたい。 【一日、二日、三日、四日は、漢数字に当たる言葉がある】 【She】 wants to go back to two years ago. 【彼女が】 戻りたい 二年前に 想 回到 两天前。 たい 戻る 二日前	
24	こうして僕をからかい、煙に巻いて逃げる気だ。	★ゼロ代名詞・「逃げる」の主語が非明示。文 21 の主語「彼女は」がこの文まで継続され非明示。 Q「誰が逃げますか」
	이렇게 나를 놀리고 현혹시켜 도망갈 생각이다. こうして僕をからかい、惑わせて逃げる気だ。 Making fun of me like this, [I] felt that [she] was escaping by creating a smokescreen. からかい 僕を こうして 【僕が】 気だ 【彼女が】 逃げる で 煙に巻いて	英語は「誰が」が義務的

	就这样 嘲弄着 我, 一种 要卷烟逃走 的感觉。 こうして からかう 僕を、 煙に巻いて逃げる 気だ もう一人の訳 【她】 想 就这样 嘲讽 我, 然后 故弄玄虚的走掉。 【彼女】たい このように からかう 私 そして 煙に巻く 去る	中国語では「誰が」は非明示でも可(前者)。後者では「誰が」が明示。
25	けれど二時間前の話になったところでふいに雲行きが変わった。	
	하지만 두 시간전으로 이야기가 진행되자 갑자기 흐름이 바뀌었다. けれど 二時間前に 話が進むと ふいに 流れが変わった。 But when the talk turned to two hours ago, suddenly the situation changed. けれど ところ 話が になった 二時間前 ふいに 雲行きが 変わった 然而 当 变成 关于两小时前的话题 时, 形势 突然 变了。 けれど なった 二時間前の話に ところで、雲行きが ふいに 変わった	
26	「私、忘れられない人の結婚式にいたの」	
	나, 잊을 수 없는 사람의 결혼식에 있었어 「私、忘れられない人の結婚式にいたの」 "I was at the wedding of the person 【I】 can't forget." 私, いたの 結婚式に 人の 【私が】 忘れられない “我，曾在 【一个】 难以忘怀的人的 婚礼上” 「私、いた 【一人の】 忘れられない人の 結婚式に」	
27	彼女は雨に打たれた彫像みたいな顔で語り始めた。	
	그녀는 비에 젖은 조각같은 얼굴로 말하기 시작했다. 彼女は雨に濡れた彫刻みたいな顔で語り始めた She started to speak, with a face like a statue sprinkled with rain. 彼女は 始めた 語り で 顔 みたいな彫像 打たれた 雨に 她 用一张 仿佛 被雨打过的 雕塑 一般的 脸 开始说话。 彼女は で 雨に打たれた 彫像 みたいな 顔 語り始めた *用一张…的脸:…顔で、 仿佛…一般:…みたい	
28	唇に貼りついた人工的な笑みが痛ましく、寒々しい。	
	입가에 감도는 인공적인 미소가 차고 안쓰럽다. 口元に漂う 人工的な笑みが 冷たく不憫だ。 The artificial smile stuck to 【her】 lips was pitiful, desolate. 人工的な 笑み 貼りついた 【彼女の】 唇に だった 痛ましく 寒々しい 贴在 嘴唇上的 人工的 笑 令人心疼, 颇感寒意。 貼りついた 唇に 人工的な 笑みが 痛ましい、寒々しい	
29	二時間前に別の女性と結ばれたその男のことを本気で思っていたのだろう。	

	두 시간전에 다른여자와 맺어진 그 남자를 진정으로 잊어버리는 것이겠지. 二時間前に別の女と結ばれた その男のことを本心で忘れないのだろう。	
	【She】 was seriously thinking 【about】 that man 【who】 had been joined with another woman two hours ago. 【彼女が】 いた 本気で 思っ て 【について】 その男のことを 【関係代名詞】 結ばれた 別の女性と 二時間前	
	【她】 在 真心 想着 两小时前 和 别的女人 结婚的 那个 男人的事情 吧。 【彼女は】 ている 本気で 思う 二時間前に と 別の女性 結ばれた その 男のことを だろう	
30	ああ、この人はやっぱりおばあちゃんと違う。	
	아, 이 사람은 역시 할머니와 다르다. ああ、この人はやっぱりおばあちゃんと違う。	
	Aah, this person 【is】 definitely different from grandma. ああ この人は 【いる】 やっぱり 違う おばあちゃんと	
	啊, 这个人 果然 和 奶奶 不一样。 ああ、この人は やっぱり と おばあちゃん 違う	
31	当たり前だが、ふいにそう思った。	
	당연하지만 문득 그런 생각이 들었다. 当たり前だが、ふいにそんな気がした。	
	【It】's obvious, but suddenly 【that's】 【what】 【I】 thought. 【それが】 だ 当たり前 が ふいに 【それが】 【だった】 【ことだ】 【僕が】 思った	
	虽说是 理所应当的, 可 【我】 突然就 那么 想了。 が 当たり前だ、 【私は】 ふいに そう 思った	
32	祖母の魂は今頃、まだどこかに新しく生まれ変わるための準備体操でもしているのだろうが、今、目の前にいる彼女の魂は僕と同じこの世界で苦しみ、さまよっている。	
	할머니의 영혼은 지금쯤, 어디선가 새롭게 태어나기위해 준비체조라도 하고 있겠지. 지금 【내】 눈앞에 있는 그녀의 영혼은 나와 같은 이 세상에서 괴로워하고 헤메고 있다. 祖母の魂は 今頃、どこかに新しく生まれ変わるための準備体操でもしているのだろうが、今、【僕の】目の前にいる彼女の魂は僕と同じこの世界で苦しみ、さまよっている。	
	Around that time, 【my】 grandmother's spirit was probably still doing something like warm-up exercises somewhere to be newly reborn, but now, the spirit of the woman before my eyes was suffering, wandering in this world the same as me. 今頃 【僕の】 祖母の魂 だろう また でも 準備体操 どこかに ため 新しく生まれ変わる が 今 魂は 彼女の 目の前にいる 苦しんでいる さまよっている この世界で 同じ 僕と	
	祖母の灵魂 如今 在做着 为了 又 投生到 哪里的 准备运动 吧, 然而 现在, 面前的 她的灵魂 和 我 一样 在 这个世界 受苦, 彷徨。 祖母の魂は 今頃 している ため また 新しく生まれ変わる どこかに 準備体操を だろう、が 今、目の前にいる 彼女の魂は と 僕 同じ で この世界 苦しむ、さまよっている	
33	僕が初めて声をかけた女性。	
	내가 처음으로 말을 건 여성. 僕が初めて声をかけた女性。	

	The first woman I had spoken to. 初めて 女性 僕が 声をかけた	
	我 第一次 搭话的 女性。 僕が 初めて 声をかけた 女性	
34	よく見ると昔の祖母よりも歯並びが良く、眉のラインも美しい。	
	잘 보면 옛날의 할머니보다도 치열이 좋고 눈썹의 선도 굵다. よく見ると昔の祖母よりも 歯並びが良く、眉のラインも美しい。	
	【When】 【I】 looked 【carefully】 【her】 【teeth】 were 【more】 even than my grandmother 【's】 in the old days, 【and】 the line of her eyebrows 【was】 beautiful. 【とき】 【僕が】 見た 【丹念に】 【彼女の】 【歯が】 だった 【もっと】 並びが良く よりも 祖母【の】 昔は と ライン 眉の 【だった】 美しい	
	仔细 看 的话, 比 年轻时的 祖母 牙齿 整齐, 眉毛的 线条 也 很漂亮。 よく みる と、 より 昔の 祖母 歯並びが よく、眉の ライン も 美しい	
35	こんな女性を泣かせているのはどんな男だろう。	
	이런 여자를 울린남자는 【도대체】 어떤 사람일까. こんな女性を泣かせているのは【いったい】どんな男だろう。	
	What kind of man made such a woman cry? どんな男 させただろう こんな女性を 泣かせている	
	让 这样的 女性 哭泣 的人是 怎样的 男人 啊。 させる こんな 女性を 泣く のは どんな 男 だろう	
36	結婚おめでとう。	
	결혼 축하해. 結婚おめでとう。	
	Congratulations 【on】 【your】 marriage. おめでとう 【に】 【あなたの】 結婚	
	恭喜结婚。 結婚おめでとう	
37	そう伝えなかったことを悔やんでいると彼女が言ったとき、僕はわけのわからない衝動に駆り立てられて、お節介にも新郎の電話番号を尋ねていた。	
	그렇게 전하지 못했던 것을 후회하고 있다고 그녀가 말했을 때, 나는 알수 없는 충동에 휩싸여 참견같지만 신랑의 전화번호를 묻고 있었다. そう伝えなかったことを 悔やんでいると 彼女が言ったとき、僕はわけのわからない衝動に駆り立てられて、お節介にも新郎の電話番号を尋ねていた。	
	When she said that she regretted not telling 【him】 that, I was impelled by an impulse 【I】 didn't understand, although 【it】 was meddlesome, and asked for the groom's phone number. とき 彼女が 言った と 【彼女が】 なかった 悔やんでいる 伝え 【彼に】 そう 僕は 駆り立てられて 衝動に 【僕が】 わからなかった にも 【それが】 だった お節介 と 尋ねていた 新郎の電話番号を	
	当 她 说 后悔 没能 那样 说出口 时, 我 被 不明所以的 冲动 驱使, 即使是多管闲事 也 问了 新郎的电话号码。 彼女が 言った 悔やんでいる なかった そう 伝える とき、僕は られる わけのわからない 衝動に 駆り立てる、お節介に も 尋ねていた 新郎の電話番号を	

38	その男はきっと彼女が祝福の言葉を口にしなかったことなど気にしちゃいないだろう。	主語「その男」、 ★「口に」の意味
	그 남자는 틀림없이 그녀가 축하의 말을 하지 않은 것 따위는 신경쓰지도 않고 있을 것이다. その男はきっと 彼女が 祝賀の言葉を口にしなかったことなど気にしちゃいないだろう。	
	Certainly that man didn't care that she did not speak words of blessing or anything. きっと だろう その男は ちゃいない 気にし こと 彼女が 口にしなかった 祝福の言葉を など	
	那个 男人 一定 没有在意 她 没说出 祝福的话 吧。 その 男は きっと 気にしていない 彼女が 口にしなかった 祝福の言葉を だろう	
39	なんせ自分の結婚式だ。	自分＝その男(新郎)
	다름아닌 자신의 결혼식이다. なんせ 自分の 結婚式だ	
	After all, 【it】's his own wedding. なんせ 【それが】 だ 彼自身の 結婚式	
	不管怎么说 【这是】 自己的婚礼。 なんせ 【これは】 自分の結婚式	
40	朝からバタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝福に慣れきって、あぐらをかいていたはず。	★「舞いあがる」「あぐらをかく」は比喩的表現。「あぐらをかく」を字義通り、または比喩のどちらで理解しているか確認。 Q「舞いあがる」「あぐらをかく」はどんな意味ですか。
	아침부터 허둥지둥 경황없고, 긴장하고, 들떠서, 샤워처럼 쏟아지는 축하말에 익숙해져 으쓱거리고 있었음에 틀림없다. 朝から バタバタと慌ただしくて、緊張して、舞いあがって、シャワーのように降りそそぐ祝賀に慣れきって、気取っていたはず。	
	【He】 must have been rushing around in a hurry since morning, nervous, elated, used to blessings pouring down like a shower, resting on his laurels. 【彼が】 はず バタバタと慌ただしくて 朝から 緊張して 舞いあがって 慣れきって 祝福に 降りそそぐ シャワーのように あぐらをかいていた	
	从 早上 开始 应该就 手忙脚乱, 紧张兮兮, 得意洋洋, 习惯了 如淋浴般 从天而降的 祝福, 神情自若, 满不在乎。 朝 から はず バタバタと慌ただしい、緊張する、舞い上がる、慣れきる シャワーのように 降りそそぐ 祝福に、あぐらをかいている	
41	そして今頃は二次会か。	主語＝新郎
	그리고 지금쯤은 이차파티. そして今頃は二次会か。	
	And around now maybe the second party? そして 今頃は か 二次会	
	然后 现在 是 二次会 吧。 そして 今頃 は 二次会 か	
42	シャンパンをがぶ飲みし、二人のなれそめクイズかなんかで盛りあがり、「キッス、キッス」なんて煽られてニヤついているんだ。	主語＝新郎

	샴페인을 벌컥벌컥 마시고, 두 사람의 만남에 관한 퀴즈 따위로 달아올라, '키스, 키스' 라는 합창에 히죽거리고 있을 것이다. シャンパンをがぶ飲みし, 二人のなれそめに関するクイズかなんかで盛りあがり, 「キッス, キッス」という合唱にニヤついているだろう。	
	Guzzling champagne, getting into the swing of things with things like a quiz about the beginning of 【their】 relationship, being stirred up 【by】 people 【shouting】 "kiss, kiss", sticking together. がぶ飲みし シャンパンを 盛りあがり で なんか クイズ について 【彼らの】 なれそめ 煽られて 【で】 人々 【叫ぶ】 キッスキッス ニヤついているんだ	
	大口喝着 香槟酒, 因为 两个人的 恋爱契机的 问答题 什么的 而情绪高涨, 被 【周围人】 煽动着 “亲一个, 亲一个”, 嘴角堆笑。 がぶ飲みする シャンパンを、で 二人の なれそめ クイズ かなんか 盛り上がる、られる 【周りに】 煽る 「キッス、キッス」を、ニヤついている	
43	だからこそ教えてやりたかった。	★★主語が「新郎」から「僕」に変化 ★ゼロ代名詞が1文に2つ「誰が」「誰に」(教えてやりたい)が非明示。 ★先行文脈が追えていないとゼロ代名詞の特定は困難。 Q「誰が」「誰に」教えてやりたかったですか。
	그러니까 알려주고 싶었다. だからこそ教えてやりたかった。	韓国語では日本語同様に「誰が」「誰に」は非明示
	Especially because of that, 【I】 wanted to tell 【him】. こそ だから 【僕が】 やりたかった 教えて 【彼に】	英語では「誰が」「誰に」義務的
	正因为如此 想 告诉 【他】。 だからこそ たい 教えてやる 【彼に】	中国語では「誰に」が義務的。「誰が」は文脈からわかる場合は非明示。
44	この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、うんと無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。	文 43 の「何を」の部分。倒置文。
	이 어두컴컴한 바의 한구석에서 단 혼자서, 무리해서 그녀가 중얼거린 '축하해' 의 무게를. この薄暗いバーの片隅で、たった一人で、【うんと】無理をして彼女の呟いた「おめでとう」の重みを。 【省略】	
	In the corner of this dimly-lit bar, all alone, 【I】 【took on】 the very unreasonable weight of her muttered "Congratulations". 片隅で この薄暗いバーの たった一人で 【僕が】 【引き受けた】 うんと無理【の】 重みの 彼女の 呟いたおめでとう	
	在这个 昏暗的 酒吧 一角, 有一个人, 非常 勉强地 【想告诉】 【他】 她 低声说的 “恭喜”的 重量。 で この 薄暗い バーの 片隅、たった一人で、うんと 無理をして 【教えてやりたい】 【彼に】 彼女の 呟いた 「おめでとう」の 重みを	
45	とはいえ、彼女が本気でコースターに電話番号を書きだしたときはびっくりした。	主語＝僕
	그렇다고는 하지만 그녀가 정말로 컵받침에 전화번호를 쓰기 시작할때는 깜짝 놀랐다. とはいえ、彼女が 本気で コースターに電話番号を書きだしたときはびっくりした。	

	Nevertheless, I was surprised when she really wrote the phone number on the coaster. とはいえ 【僕が】 びっくりした とき 彼女が 本気で 書きだした 電話番号を コースターに	
	虽说如此, 当 她 认真地 在杯垫上 写下 电话号码 时 【我】 吃了一惊。 とはいえ、 彼女が 本気で コースターに 書き出した 電話番号を とき 【私は】 びっくりした	
46	え、マジ？	
	어, 정말로? え、マジで？	
	Huh? Really? え マジ	
	哎, 真的? え、マジ	
47	ほんとに電話するの？	主語＝僕 ★ゼロ代名詞 Q「誰が」「誰に」電話する か。
	정말 전화하는거야? 本当に電話するの？	
	【Am I】 really going to call 【him】 ? 【僕が】 ほんとに電話するの 【彼に】	英語は「誰が」「誰に」は義務的
	真的 要打电话？ ほんとに 電話する	中国語では文脈からわかれば「誰が」「誰に」は非明示
48	「おまえは嘘をつかない子だ。それだけが取り柄だが、それだけで十分だよ」 너는 거짓말을 못하는 애야. 그것만이 장점이지만 그것만으로 충분해 「おまえは嘘をつけない子だ。それだけが取り柄だが、それだけで十分だよ」 “You are a child 【who】 does not lie. Only that is your good point, but just that is enough” おまえは だ 子 【関係代名詞】 嘘をつかない だけ それが だ 取り柄 が それだけで だよ 十分 “你是个 不撒谎的 孩子。只有 那个 是 优点, 但 只有 那个就 足够了” 「おまえは 嘘をつかない 子だ。だけ それ が 取り柄、が だけ それで 十分だよ」	
49	祖母が残した言葉を思い出し、僕は潔く覚悟する。 할머니가 남기신 말을 떠올리며 나는 결연히 각오했다. 祖母が残した言葉を思い出し、僕は潔く覚悟する。 Remembering the words 【my】 grandmother had left, I resolutely braced myself. 思い出し 言葉を 【僕の】 祖母が 残した 僕は 潔く 覚悟する 我 想起了 祖母 留下的 话, 很快地 下定了决心。 私は 思い出す 祖母が 残した 言葉を、潔く 覚悟する *主語の位置を調整しました。	
50	よし、こうなったら心して新郎に電話をしよう。	

	그래, 이렇게 된 이상 성실하게 신랑에게 전화를 하자. よし、こうなったら 誠実に 新郎に電話をしよう。	
	OK, if it has come to this, 【I】 will carefully call the groom. よし こうなったら 【僕が】 しよう 心して 電話を 新郎に	
	管它呢, 既然 变成了 这样 的话 那就 用心 给 新郎 打电话 吧。 よし、なる こう たら 心して に 新郎 電話をする よう。 *既然…的话:…たら、那就…吧:…ましょう	
51	彼女の「おめでとう」を全力で伝えよう。 그녀의 '축하해' 를 진심으로 전달하자. 彼女の「おめでとう」を真摯に伝えよう。	
	【I】 will do my best to tell 【him】 her "congratulations". 【僕が】 よう 全力で 伝え 【彼に】 彼女の おめでとう	
	用尽全力 来 传达 她的 “恭喜” 吧。 全力で 伝える 彼女の 「おめでとう」を よう *来…吧:…ましょう。	
52	そして願わくば、その男から彼女の電話番号を聞きだしたい。 그리고 바라건데, 그 남자로부터 그녀의 전화번호를 얻어내자. そして願わくば、その男から 彼女の電話番号を聞きだしたい。	
	And then I hope, I want to ask for her phone number from that man. そして 【僕が】 【望む】 【僕が】 聞きしたい 【のため】 彼女の 電話番号 から その男	
	然后 只愿着, 想 从那个男人那里 问到 她的 电话号码。 そして 願わくば、たい その男から 聞き出す 彼女の 電話番号を	

4. 材料文

調査では、森絵都(2005)「彼女の彼の特別な日、彼の彼女の特別な日」『秘密。私と私のあいだの十二話』ダ・ヴィンチ編集部編 メディアファクトリー, 28-37 ページを配布した。博士論文の公開にあたり、著作権を考慮し、原本は掲載しない。

謝辞

本論文は、多くの方のお力添えを賜り、執筆を終えることができました。

一橋大学大学院言語社会研究科の石黒圭先生、庵功雄先生、山崎誠先生には、博士課程後期課程に入学した2017年から論文提出時の2020年まで、多くのご指導とご助言を賜りました。石黒先生には、先生のご所属先である国立国語研究所にある研究室だけでなく、一橋大学や早稲田大学の近くで、書きかけの原稿をはさんで食事をしながら、長時間ご相談にのっていただきました。研究が行き詰ったときは確かに苦しいのですが、そんなときにも、おいしい食事と、石黒先生独特の人生哲学が私を何度も元気づけてくれました。庵先生には、大学院入学以前からゼミに参加させていただいただけでなく、入学後は、授業や短い昼休みの合間を縫って、原稿を何度も見てくださいました。「読解をどう定義するの」など、常に、本質的な質問を投げかけてくださり、私はそれにこたえるのに必死でした。特に、毎年6月の富士山合宿は、研究に真摯に向き合え、何かが降りてくるのを実感できました。山崎先生は、私が思いもよらない角度から、はっとするようなアドバイスをくださり、研究室にご相談に行った帰りは、いつも明るい希望が持てました。

本研究の調査には、多くの調査協力者や通訳者、文字化作業をしてくださった方がいらっしゃいます。読み手の頭の中を見せてもらう調査は、とても刺激的でした。貴重なお時間をいただき、心より感謝いたします。

本研究は、人はテキストを読んで、どのような理解をするのだろうかという素朴な疑問から出発しました。とりわけ、小説を読んだときに、日本語学習者や日本語母語話者はどのようなストーリーを作り出すのか知りたいと思いました。そのようなときに、森絵都さんの「彼女の彼の特別な日、彼女の彼の特別な日」という、繊細で心温まる世界が手のひらサイズに、そつとのせられた魅力的な作品に遭遇しました。これは一番の幸運でした。森さんは、作品の使用をご快諾くださっただけでなく、私のぶしつけな質問にも快く答えてくださいました。そのお手紙を自宅のポストの中に見つけたときの喜びは忘れられません。本当にありがとうございました。

最後に、いつも応援してくれた夫と猫、そして、周りの方々に深く感謝します。ありがとうございました。